秋田県文化財調査報告書第297集

根下戸道下遺跡

－大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－

2000・3

秋田県教育委員会

根下戸道下遺跡

（ねげどみちしたいせき）

－大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－

2000・3

秋田県教育委員会

序

埋蔵文化財は、郷土の歴史と文化を築いてきた先人の足跡であり、新たな文化創造の基礎を成すものであります。私たちは、この埋蔵文化財を保護するとともに、過去の文化を学びとり、未来へ継承していくべきであります。

このたび、大館西道路建設事業に伴い、路線の一部が根下戸道下遺跡を通過することになり、秋田県教育委員会では道路建設工事に先立って、平成９年度に発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡、土坑などの遺構と、早期～晩期の遺物を検出しました。特に早期の竪穴住居跡と尖底土器は、県内において類例の少ない資料であります。

本報告書は、これらの調査記録をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史と文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました建設省能代工事事務所、大館市教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

秋田県教育委員会
教育長　小野寺　　清

例　言

1．本書は、大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の２冊目の報告書である。

2．本書は、平成９（1997）年度に調査した大館市に所在する根下戸道下遺跡の調査結果を収めたものである。

3．調査成果については、すでにその一部を埋蔵文化財センター年報などによって公表してきたが、本報告書の記載内容を正式なものとする。

4．本書に使用した空中写真は、株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したものである。

5．第５章「自然科学的分析」は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した報告であるが、遺構の名称など一部を補訂している。

6．遺跡基本層位と遺構土層中の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』1994年版によった。

7．本書に使用した地図は、国土地理院発効の５万分の１『大館』、２万５千分の１『大館』・『扇田』、建設省能代工事事務所提供の１千分の１地形図である。

8．本遺跡の報告書作成にあたり、以下の方々から御教示をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

（順不同、敬称略・所属は平成９年度のものである）

長尾正義（青森県三沢市教育委員会）　長谷部一弘（北海道函館市立函館博物館）　越田賢一郎・富永勝也（財団法人北海道埋蔵文化財センター）

9．本書の原稿執筆は栗澤光男、熊谷　誠が行い、編集は栗澤が行った。

凡　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＩ・・・竪穴住居跡　　ＳＫ・・・土坑　　ＳＫＴ・・・陥し穴

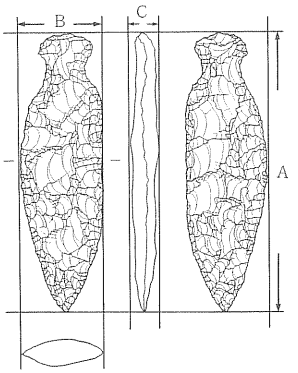
ＳＫＰ・・・柱穴様ピット　　ＳＤ・・・溝跡　　ＳＸ・・・その他の遺構

なお、遺構図面中に記したＰは竪穴住居跡に伴うピット、Ｓは礫を示している。

2．土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。

3．挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、土器・石器ごとに通し番号を付してあり、その番号は、図版中の遺物番号と対応する。

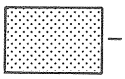
4．石器の計測部位は、下図のとおりである。また、計測値の単位は、長さ・幅・厚さが㎜、重さがｇである。



A 最大長（㎜）
B 最大幅（㎜）
C 最大厚（㎜）

5．挿図に使用した主なスクリーントーンは以下のとおりであり、このほかについては個々に挿図中に示した。

----地山


----磨面

----凹み

目　次

序
例言
凡例
第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 3
第２章　遺跡の環境 …… 4
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　発掘調査の概要 …… 9
　第１節　遺跡の概観 …… 9
　第２節　調査の方法 …… 13
　第３節　調査の経過 …… 13
第４章　調査の記録 …… 17
　第１節　検出遺構と遺構内出土遺物 …… 17
　　1　竪穴住居跡 …… 17
　　2　土坑 …… 23
　　3　陥し穴 …… 33
　　4　柱穴様ピット …… 37
　　5　溝跡 …… 39
　　6　その他の遺構 …… 39
　第２節　遺構外出土遺物 …… 49
　　1　土器 …… 49
　　2　石器 …… 71
第５章　自然科学的分析 …… 96
第６章　まとめ …… 103
図版

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

大館西道路は、大館市街地における交通渋滞や騒音の緩和と県内の高速交通ネットワークの形成など、地域の文化と経済の交流の活性化を目的として計画された路線で、大館市根下戸新町地内を起点とし、同市商人留地内を終点とする延長6.2km、幅員22ｍの自動車専用道路である。

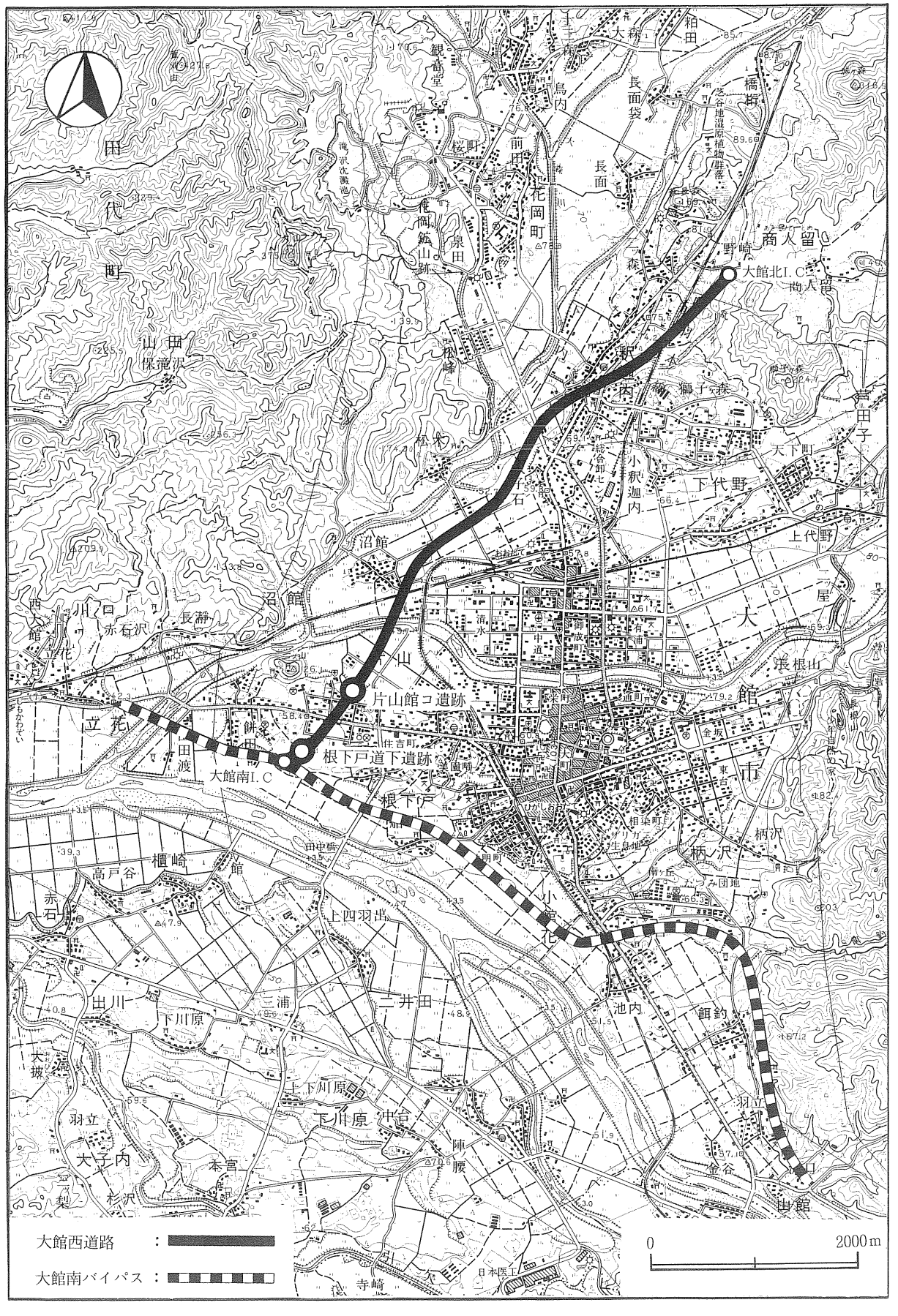
そのうち、根下戸新町地内から釈迦内地内の国道７号までの4.6kmが、平成10年12月５日に部分供用されており、将来は日本海沿岸東北自動車道の一部に組み込まれて、小坂町で東北縦貫自動車道に連結される予定になっている。

なお、計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って建設省東北地方建設局能代工事事務所より文化財保護法に基づいて、埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、計画路線内の分布調査を実施し、路線内に係る埋蔵文化財包蔵地および包蔵地と推測される地区については、今後範囲確認調査が必要であることと、範囲確認調査の結果記録保存の必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施すべきことを回答した。

1988(昭和63)年度には片山館コ遺跡の範囲確認調査を行い(註１)、遺跡の一部が計画路線に及んでいることが判明し、1989(平成元)年度に発掘調査を実施した(註２)。その後、1996(平成８)年には、根下戸道下遺跡、釈迦内中台Ⅰ遺跡、釈迦内中台Ⅱ遺跡の３遺跡が存在することを確認した。このうち根下戸道下遺跡については事業計画との関連から、同年度に範囲確認調査を行って(註３)、1997(平成９)年度に発掘調査を実施するに至った。

第２節　調査要項

遺　跡　名	根下戸道下遺跡（ねげどみちしたいせき）（遺跡略号　２ＮＧＤＭＳ）
遺跡所在地	秋田県大館市根下戸新町69-１外
調査期間	平成９年５月26日～11月６日
調査面積	11,400㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	栗澤　光男（秋田県埋蔵文化財センター調査課　文化財主査）
	五十嵐一治（秋田県埋蔵文化財センター調査課　学芸主事）
	高橋　　保（秋田県埋蔵文化財センター調査課　主事）
	（平成11年３月転出　現　県立大曲農業高等学校　主事）
	板橋　範芳（大館郷土博物館学芸係長）
	千葉　史宏（秋田県埋蔵文化財センター調査課　非常勤職員）
	熊谷　　誠（秋田県埋蔵文化財センター調査課　非常勤職員）



第１図　路線と遺跡

総務担当者　藤肥　良清（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査）
（平成10年３月転出　現　秋田県教育庁福利課　課長補佐）
須田　輝樹（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
（平成10年３月転出　現　秋田県立図書館　主事）
佐藤　幸嗣（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
（平成11年３月転出　現　秋田県教育庁福利課　主事）
菅原　　晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査）
佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

調査協力機関　建設省東北地方建設局能代工事事務所
大館市教育委員会

註１．秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第179集　1989(平成元)年
註２．秋田県教育委員会　『片山館コ遺跡発掘調査報告書－一般国道７号大館西道路建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第203集　1990(平成２)年
註３．秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年

第２章　遺跡の環境

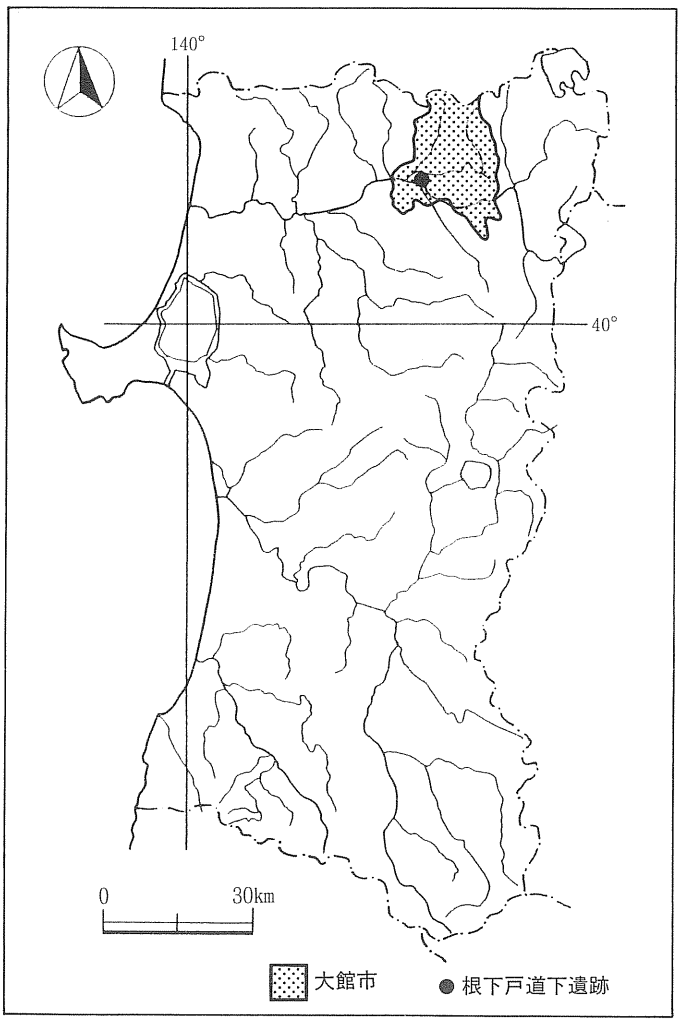
第１節　遺跡の位置と立地

根下戸道下遺跡の位置する大館市は、秋田県北東部、奥羽脊梁山脈の西側に位置する大館盆地にあり、北緯40°9′から26′、東経140°28′から44′の地域を占めている。大館盆地には、米代川とその支流群によって形成された段丘面が発達している。この段丘面は、小支谷によって開析されて台地群となっている。

大館市街地の中心部のある南半地域は、米代川とその支流長木川に挟まれた西向きの巨大な舌状台地上にあり、その台地南側斜面はいくつもの小さな支谷によって開析され、複雑な地形を呈している。

根下戸道下遺跡は、大館市の中心部からやや南西、ＪＲ花輪線東大館駅の西(約2.3km)にあり、西流する米代川の右岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡付近の段丘は、北側を南方向に下刻する沢により大きく開析されている。調査区の標高は50～55ｍで、沖積地との比高は10～15ｍである。

なお、本遺跡が立地する段丘地から北東約900ｍには、同様に大館西道路建設事業に係って、平成元年度にその一部を発掘調査した片山館(片山館コ遺跡)が所在する。



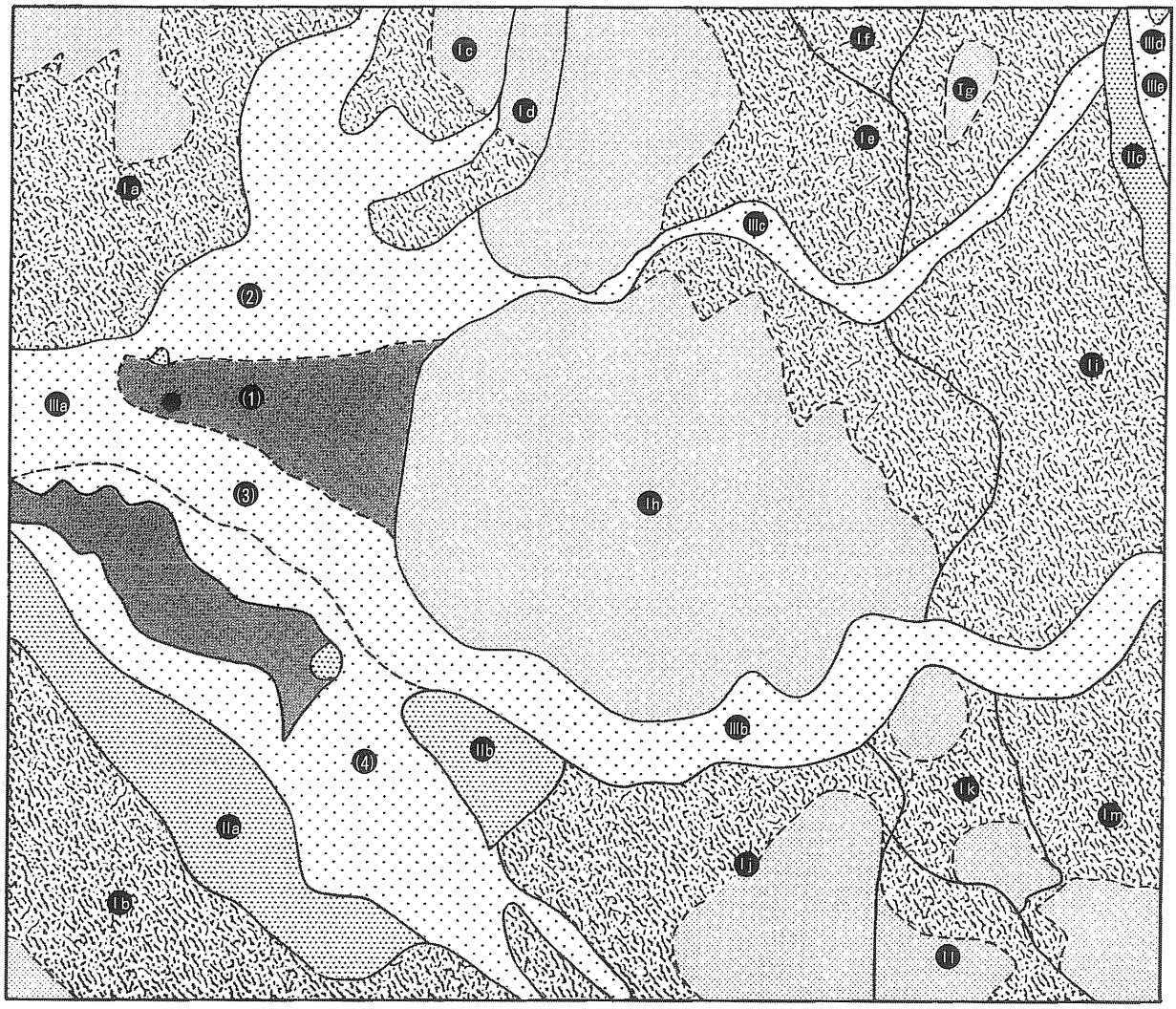
第２図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

根下戸道下遺跡は、縄文時代早期を主体とする遺跡である。このほか、縄文時代前期・後期・晩期の遺構と遺物も確認した。

大館盆地には、旧石器時代から近世までの遺跡が数多く知られているが、ここでは根下戸道下遺跡の周辺に位置する発掘調査された遺跡を中心に、歴史的な環境を概観する。

なお、遺跡名は、『秋田県大館市遺跡詳細分布報告書』と『秋田県遺跡地図（県北版)』掲載の遺跡名とし、文中の(　)内の数字は『秋田県遺跡地図(県北版)』での遺跡登録番号である。また、(　)内のアルファベットは、『秋田県大館市遺跡詳細分布報告書』と『秋田県遺跡地図（県北版)』の刊行後にその所在が確認され、発掘調査された



大山山地　（Ⅰａ）・比内山地　（Ⅰｂ）・城ケ森山地　（Ⅰｃ）・高森山地　（Ⅰｄ）
高倉山山地　（Ⅰｅ）・羽保屋山山地（Ⅰｆ）・高地山山地　（Ⅰｇ）・中央山地　（Ⅰｈ）
松森山地　（Ⅰｉ）・合窪山山地　（Ⅰｊ）・三哲山山地　（Ⅰｋ）・合津山地　（Ⅰｌ）
尾去沢山地　（Ⅰｍ）　― 山地

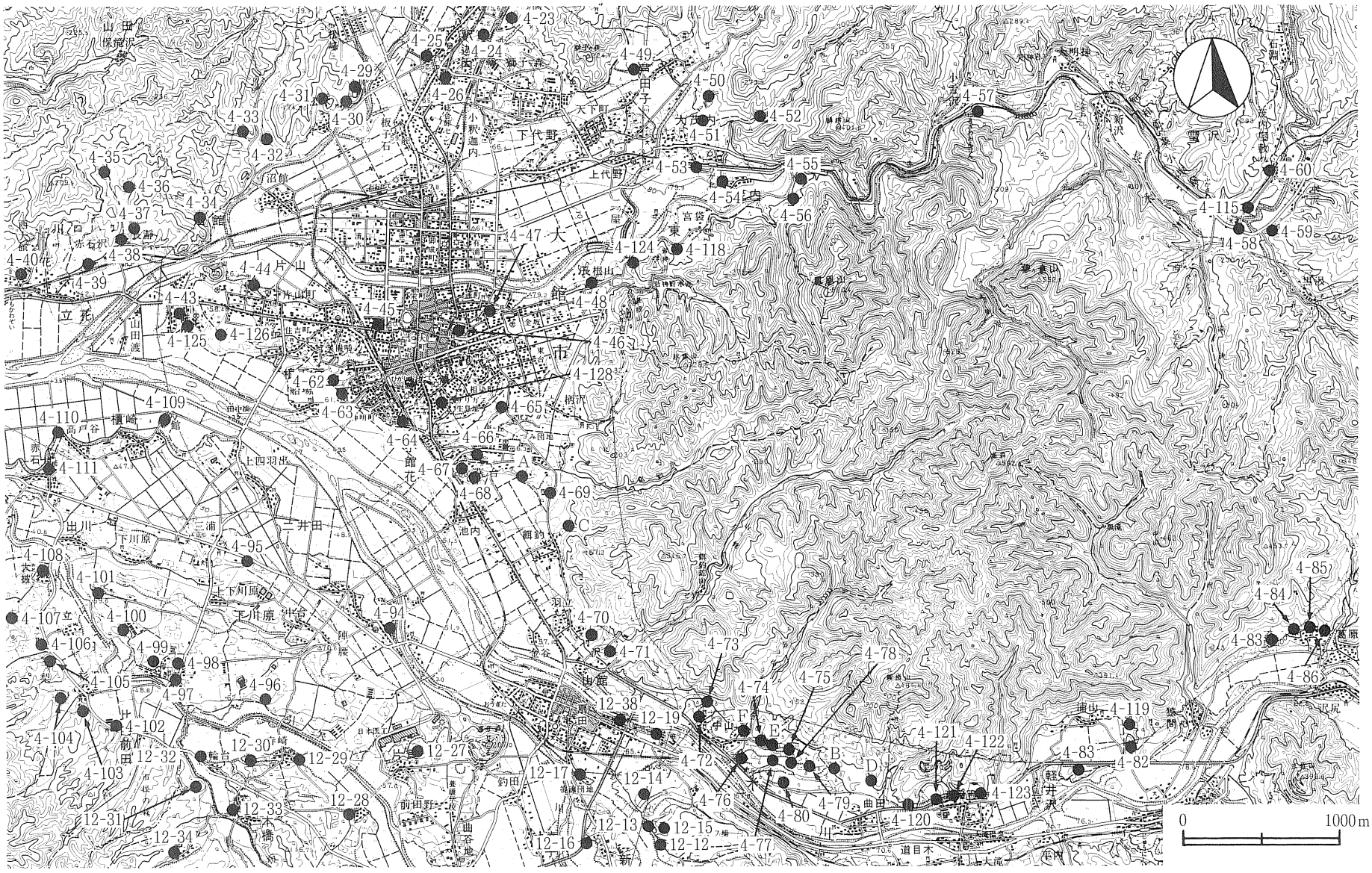
比内丘陵地　（Ⅱａ）・味噌内丘陵地（Ⅱｂ）・小坂丘陵地　（Ⅱｃ）　― 丘陵地

大館盆地　（Ⅲａ）― 大館段丘地（１）・長木川，下内川低地（２）
　　― 米代川低地（３）・犀川，引欠川低地（４）　― 台地

十二所先行低地（Ⅲｂ）・長木川渓谷低地（Ⅲｃ）・元山段丘地（Ⅲｄ）・小坂川谷低地（Ⅲｅ）　― 低地

● 根下戸道下遺跡

第３図　地形区分図



第４図　根下戸道下遺跡（4－126）と遺跡位置図

遺跡である。登録番号が付されていないため、本書ではアルファベットを付した。米代川流域は、縄文時代から北と南の「文化圏」の接触地帯であったと言われている。米代川の上・中流域に位置する大館地方(大館盆地)は、古くは「ひない」と呼ばれ、火内、比内、肥内と記述された地域である。

旧石器時代の遺跡としては、大型の石刃が発見された松木高館平(4－31)のみである。旧石器時代の遺跡・遺物の発見が少ない理由の一つとして、池内遺跡の地表下にも約4ｍの厚さで堆積し、トウヒ属により構成された森林を埋没させた十和田火山起源の火砕流をあげる研究者もいる。

縄文時代の主な遺跡としては、諏訪台(4－19)、松木(4－31)、長瀞Ⅰ(4－38)、餅田屋敷添(4－43)、塚ノ下(4－53)、茂内(4－54)、玉林寺跡(4－56)、太平山(4－63)、萩ノ台Ⅱ(4－67)、池内(4－68)、餌釣館(山王岱)(4－69)、山館上ノ山(4－71)、寒沢(4－74)、冷水山根(4－75)、野沢岱(4－79)、鳶ヶ長根Ⅳ(4－123)、芋掘沢(4－125)、袖ノ沢(12－12)、横沢(12－13)、本道端(12－19)、上野(Ａ)、上聖(Ｂ)、餌釣(Ｃ)、家ノ後(Ｄ)、寒沢Ⅱ(Ｅ)、中山(Ｆ)の各遺跡がある。このうち、これまでに発掘調査され、報告書等が刊行された遺跡は、諏訪台、餅田屋敷添、塚ノ下、玉林寺跡、萩ノ台Ⅱ、池内、餌釣館(山王岱)、山館上ノ山、冷水山根、野沢岱、芋掘沢、袖ノ沢、横沢、本道端、上野、上聖、餌釣、家ノ後、寒沢Ⅱ、寒沢、中山の21遺跡である。

縄文時代早期の遺跡としては、横沢、寒沢、寒沢Ⅱ、本道端、山館上ノ山、野沢岱のほか、鳶ヶ長根Ⅳ、野沢岱Ⅱがあげられる。横沢、寒沢、本道端、鳶ヶ長根Ⅳ、野沢岱Ⅱでは貝殻腹縁文・貝殻沈線文系の土器が出土しており、鳶ヶ長根Ⅳと寒沢では表裏縄文系の土器も出土している。山館上ノ山では、細い粘度紐を貼り付けた細隆起線による幾何学的な文様の施文された土器が出土している。

縄文時代前期の遺跡としては、松木、餅田屋敷添、塚ノ下、茂内、萩ノ台Ⅱ、池内、山館上ノ山、芋掘沢、本道端、寒沢Ⅱがあげられる。山館上ノ山では竪穴住居跡16軒と、台地斜面と谷状地形内に「捨て場」が調査され、大量の円筒下層式土器とともに大木式土器が出土した。また、２点の鋒型石器も出土している。萩ノ台Ⅱ、寒沢Ⅱ、でも台地斜面に「捨て場」があり、大量の遺物が出土しており、萩ノ台Ⅱでも大木式土器が出土した。芋掘沢では直立させた深鉢土器に偏平な河原石を被せた土器棺が出土している。萩ノ台Ⅱでは谷状地形の中に「捨て場」が確認され、所謂「茂屋下岱式土器群」から中期の円筒上層ｅ式土器まで堆積していた。池内では、縄文時代前期中葉～末葉の集落全域が調査された。萩ノ台Ⅱ、池内、山館上ノ山では岩偶が出土している。

縄文時代中期の遺跡としては、諏訪台、長瀞Ⅰ、塚ノ下、玉林寺跡、萩ノ台Ⅱ、餌釣館(山王岱)、餌釣、山館上ノ山、冷水山根、野沢岱、芋掘沢、横沢、本道端、上聖、家ノ後、寒沢Ⅱ、寒沢、中山の各遺跡がある。玉林寺跡では竪穴住居跡が１軒、餌釣館(山王岱)で竪穴住居跡が12軒、本道端では複式炉の付設された竪穴住居跡23軒と土坑６基が調査され、円筒上層式土器とともに大木式土器が出土した。冷水山根では台地の斜面に竪穴住居跡２軒とフラスコ状土坑１基、土坑５基を調査した。餌釣では竪穴住居跡１軒と焼土遺構１基、横沢では竪穴住居跡１軒、フラスコ状土坑25基、野沢岱では竪穴住居跡５軒、フラスコ状土坑１基と円筒上層ｃ～ｅ式土器、中の平Ⅰ式土器、大木８ａ・８ｂ式土器等を、また、寒沢Ⅱと萩ノ台では台地の斜面に「捨て場」があり、円筒上層ａ～ｅ式土器が出土した。中山では周堤の残る竪穴住居跡が調査された。

縄文時代後期の遺跡としては、諏訪台、長瀞Ⅰ、塚ノ下、萩ノ台Ⅱ、餌釣館(山王岱)、餌釣、山館上ノ山、寒沢、上聖、家ノ後、寒沢Ⅱ、中山のほか、萩峠などの遺跡がある。塚ノ下では目に天然ア

スファルトを埋め込んだ土偶などが出土している。諏訪台では竪穴住居跡2軒とフラスコ状土坑３基などを検出した。萩ノ台Ⅱでは台地の斜面に「捨て場」が検出され、十腰内Ⅰ式・Ⅱ式土器とともに翡翠の大珠３点が出土した。餌釣館(山王岱)と餌釣では竪穴住居跡が各１軒、山館上ノ山では竪穴住居跡とフラスコ状土坑などを、家ノ後では竪穴住居跡４軒と土坑のほか、台地の斜面下方に粘土採掘坑などを検出した。寒沢では竪穴住居跡７軒、土坑９基、フラスコ状土坑２基を検出し、萩峠では竪穴住居跡10軒と土坑20基を検出した。

縄文時代晩期の遺跡としては、諏訪台、長瀞Ⅰ、太平山、山館上ノ山、本道端、野沢岱、家ノ後の各遺跡がある。山館上ノ山と餌釣館(山王岱)では、竪穴住居跡とフラスコ状土坑などを、また、家ノ後では土坑と土壙墓などを検出している。

続縄文(弥生)時代の遺跡としては、諏訪台、片山館コの各遺跡がある。諏訪台では竪穴住居跡６軒が調査されいる。片山館コでは後北式土器が出土した。

古代(奈良・平安時代)の遺跡としては、諏訪台、塚ノ下、扇田道下、池内、餌釣館(山王岱)、山館上ノ山、袖ノ沢、横沢、上野、餌釣の各遺跡があげられるが、この時代の遺跡の特徴として、十和田火山起源の降下火山灰との関係があげられる。その火山灰の産状は、遺構の中に凹レンズ状に堆積、霜降り状に混入、火山灰のみの堆積などが確認されており、火山灰との時間的関係を示唆している。上野では谷に火山灰が堆積した後で竪穴住居跡が構築され、その竪穴住居跡のかまど周辺から土師器とともに擦文土器が出土している。扇田道下では竪穴住居跡群と掘立柱建物跡群が検出されている。横沢は細長い独立台地を空堀で２つに区画しており、その一区画から竪穴住居跡群が検出されている。

引用・参考文献

大館市史編さん委員会　『大館市史　第一巻』　1979(昭和54)年

秋田県　『土地分類基本調査　大館』　1986(昭和61)年

大館市教育委員会　『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』　1990(平成２)年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(県北版)』　1991(平成３)年

秋田県教育委員会　『池内遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書　－遺構篇』　秋田県文化財調査報告書第268集　1997(平成９)年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

根下戸道下遺跡は既述のごとく、米代川とその支流長木川に挟まれた大館丘陵地の西縁部に立地している。遺跡の標高は50～55ｍであり、ほぼ平坦な地形である。遺跡の範囲は東－西(長軸方向)815ｍ、南－北(短軸方向)290ｍと推定される。このうち工事区にかかり、調査対象区となった箇所は遺跡の北辺部(面積11,400㎡)である。

遺跡の北側は斜面で、東から西に向かって伸びる通称芋掘沢と呼ばれる小侵蝕谷に連なり、南・西側は斜面となって水田面に連なっている。

なお、今回の調査区は昭和32年代に造成されて、一時、牧草地として利用されたようであるが、現況はアカシヤなどの雑木林で、生活廃棄物などが散らばる荒れ地となっていた。また、調査区北東側を市道が通っている。

遺跡の基本土層は比較的一定で、ＫＫラインに設けた南北トレンチの西壁土層などから、以下のとおり観察できた（第６図)。

第Ⅰ層：黒色土(10YR2/1)～黒褐色土(10YR3/1)　表土及び耕作土。粘性あまりなくサラサラしている。やや硬くしまる。地山由来と思われる軽石粒（浮石、径１㎜）が霜降り状に多量に混入。微小礫(径５㎜前後)・軽石(径１～1.5㎝)をごくまばらに含む。

第Ⅱ層：黒色土(10YR2/1)　粘性ややありボソボソしている。しまり普通。地山由来と思われる軽石粒(径２㎜前後)と微小礫(径３㎜前後)をごくまばらに含む。また、遺物が散見され、本層の下位面～第Ⅲ層の上面においては遺物(早期)の集中面が認められ、当時の生活面の可能性がある。

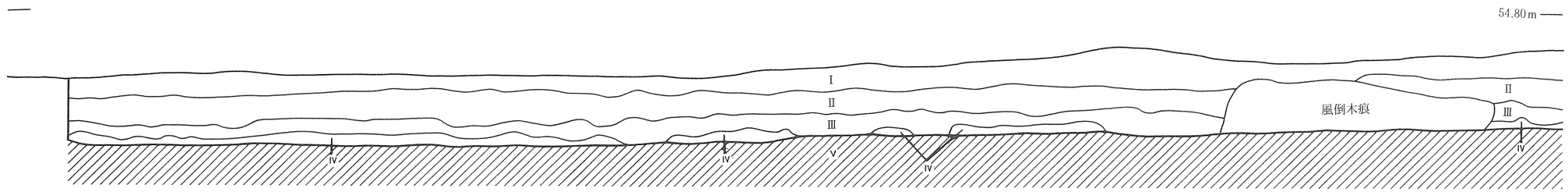
第Ⅲ層：黒褐色土(10YR3/2)～暗褐色土(10YR3/3)　やや粘性がある。しまりがある。混入物は第Ⅱ層と同じであるが、粘質化した地山土のブロックを斑状に若干含む。この層上面での遺物の出土が多い。第Ⅱ層との境界は漸移的である。

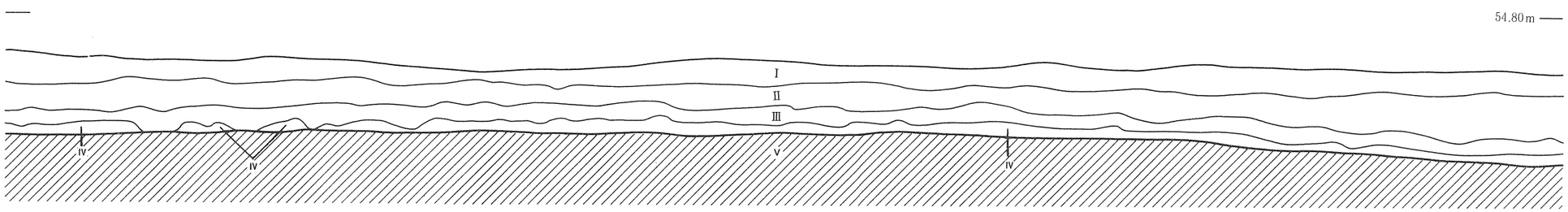
第Ⅳ層：明黄褐色土(10YR6/6)・にぶい黄褐色土(10YR5/4)　第Ⅴ層の漸移層である。粘性ややなくサラサラしている。硬くしまる。軽石粒。微小礫等を少量混入。一部層が途切れる箇所もある。また、暗褐色土(10YR3/3) が混合する箇所もある。

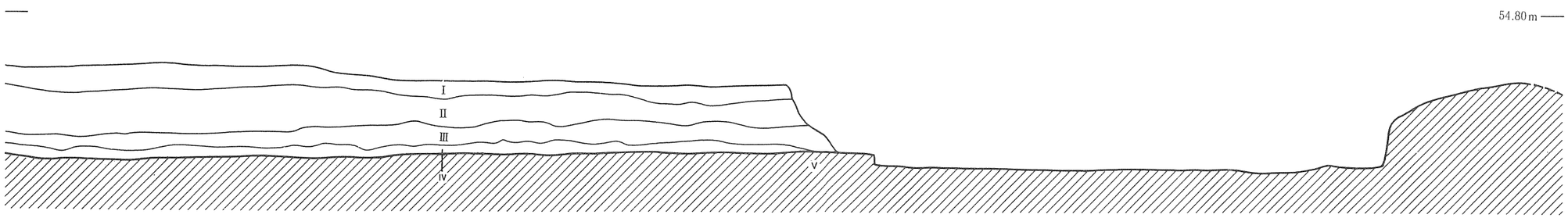
第Ⅴ層：黄褐色土(10YR5/6)～明黄褐色土(10YR6/6)　地山土(鳥越火砕流)でしまりの強い粘質土を主とするが、砂礫混じりの浅黄褐色土(10YR8/4)となっている部分もある。

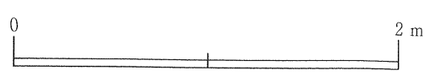
体育館
プール
NK
NF
NA
MP
MK
MF
MA
LP
LK
LF
LA
KP
KK
KF
KA
JP
JK
JF
JC
35
40
45
50
55
60
65
70
0
100m

第5図　グリッド設定図









第６図　調査区の基本層位

第２節　調査の方法

発掘調査にあたっては、調査区に設置されている大館西道路建設の道路中心杭（No.０）をグリッド原点ＭＡ50として、この杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。また、南北基線には２桁の算用数字、東西基線にはアルファベット２文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

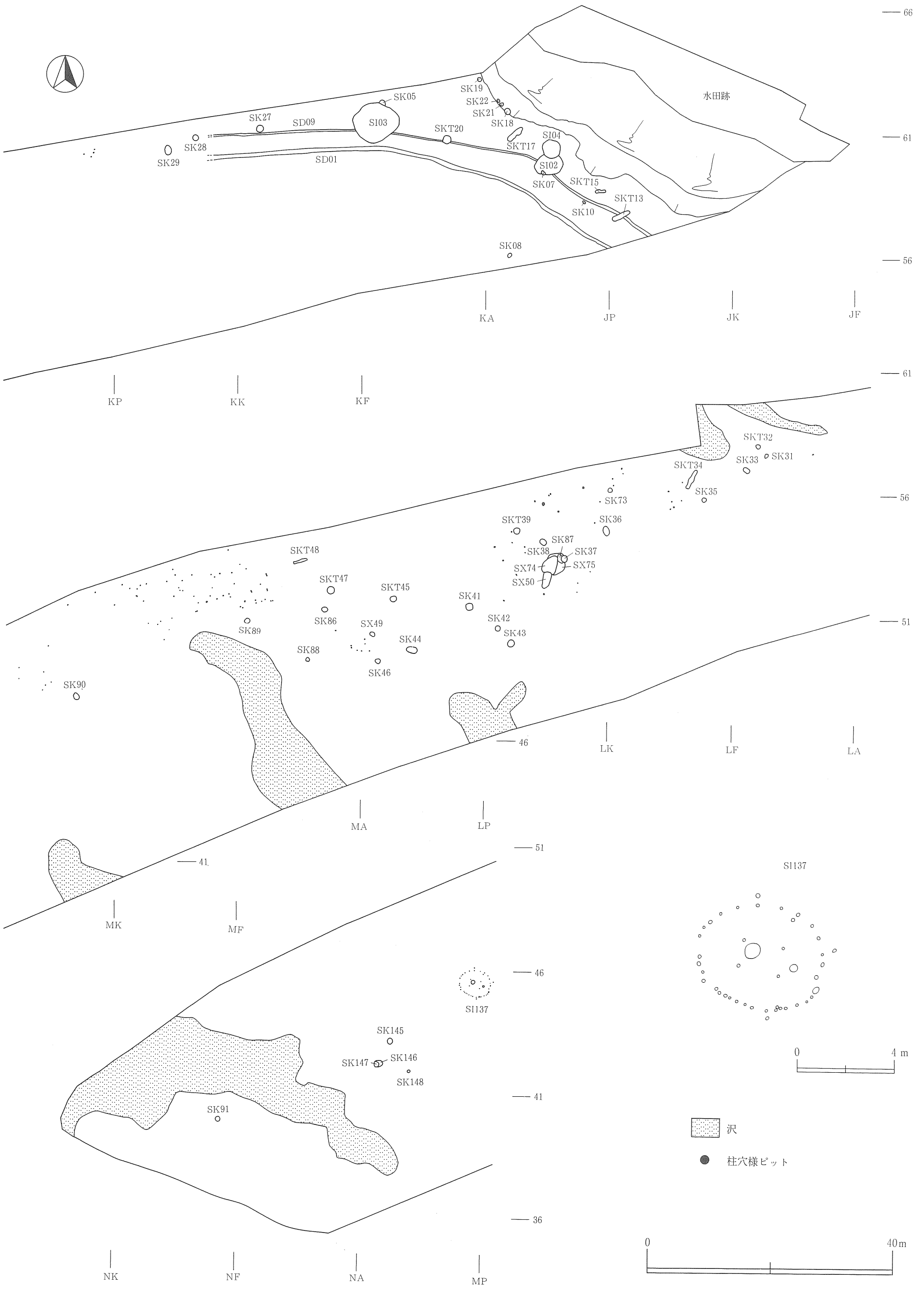
検出された遺構は、トータルステーションで平面図を作成すると共に、調査区内における位置を測定し、遺構配置図作成後に精査を行った。また、遺構の細部等の実測は、各グリッド杭を利用し、縮尺は原則として20分の１とした。

第３節　調査の経過

発掘調査は、平成９年５月26日から11月６日まで実施した。前半は、排土置き場が北東部にあったため、北東部～中央部を調査した。遺構は、竪穴住居跡・土坑・陥とし穴などが検出された。後半は、中央部～南西部を調査した。粗掘は表土が厚く、空き缶やビン・ガスボンベなど多量のゴミが埋まっていたため、バックホー・キャタトラを用いて行った。遺構は、土坑・陥とし穴などが検出された。調査は、予定していた終了日よりも３週間早く終了した。調査経過については、以下の表にまとめた。

平成９年	作　業　状　況	特　記　事　項
５月４週	機材搬入，環境整備，範確時の排土除去，調査区略図および範確時のトレンチ位置図作成，ベルコンを調査区北東部に設置	26～29日業者委託によるグリッド杭打設
６月１週	北東斜面下の旧水田部・平場の粗掘，遺構確認精査，検出遺構の調査，範確時で確認されていた、竪穴住居跡を検出	３～４日トータルステーションの搬入と操作の説明を受ける
２週	北東斜面下の旧水田部・北東斜面・平場の粗掘，遺構確認精査，検出遺構の調査，旧水田部は地山まで削平されていることが判明、同部分の発掘は終了	
３週	北東斜面・平場の粗掘，遺構確認，検出遺構の調査，北東斜面は範確時で土器捨て場と予想されていたが、土器捨て場は検出されなかったので、同部分の調査は終了	
４週	平場の粗掘，遺構確認，検出遺構の調査	
７月１週	平場の粗掘，遺構確認，検出遺構の調査	
２週	平場の粗掘，遺構確認，検出遺構の調査	大館市や鷹巣町で空き巣狙いの事件が発生しているため、事務所に防犯対策を施した
３週	平場の粗掘，遺構確認，検出遺構の調査，ＫＫラインに設けた遺跡基本土層の作図と基本土層ベルト除去	
４週	平場の粗掘，遺構確認，検出遺構の調査，範確時で確認された竪穴住居跡は、精査の結果、縄文時代早期の竪穴住居跡であることが分かった	28日午前：大館市及び周辺地域の風土文化等調査研究の一行見学，午後：建設省能代工事事務所研修生鷹巣農林高校生徒20人見学，31日大館新報社取材，８月１日北鹿新聞社取材

８月１週	平場の粗掘，遺構確認，検出遺構の調査，盆休み明け後、バックホー等を用いて表土除去等を行うための環境整備，調査区南西部の調査を進めるにあたって、範確時のトレンチが位置するグリッド及び周辺グリッドなどの粗掘と精査	
２週	盆休み	
３週	遺構確認，検出遺構の調査，バックホーでの表土除去	現場主担当の栗澤文化財主査が病気のため、18・19日船木調査課長が、20～22日桜田調査課長補佐が現場指揮を代行，18日バックホー・キャタトラ各１台オペレーター付きで借り上げ
４週	遺構確認，検出遺構の調査，バックホーでの表土除去，縄文時代早期の竪穴住居跡の精査が終了	現場主担当の栗澤文化財主査が病気のため25・28日五十嵐学芸主事、26・27・29日に桜田調査課長補佐が現場指揮を代行，29日教育庁文化課武藤学芸主事視察
９月１週	遺構確認，検出遺構の調査，バックホーでの表土除去が雨続きのため中止	３日現場主担当の栗澤文化財主査が通院加療のため、五十嵐学芸主事が現場指揮を代行
２週	遺構確認，検出遺構の調査，バックホーでの表土除去	10日現場主担当の栗澤文化財主査が通院加療のため、桜田調査課長補佐が現場指揮を代行，11日バックホー・キャタトラでの表土除去・運搬終了
３週	遺構確認，検出遺構の調査，ベルトコンベアーを調査区中央部に配置換え，ＭＡラインに設けた遺跡基本土層の作図	17日現場主担当の栗澤文化財主査が通院加療のため、五十嵐学芸主事が現場指揮を代行
４週	遺構確認，検出遺構の調査，ＭＡラインに設けた遺跡基本土層ベルト除去	24日現場主担当の栗澤文化財主査が通院加療のため、桜田調査課長補佐が現場指揮を代行，25日建設省東北地方建設局能代工事事務所武藤調査課調査第２係長、田村建設監督官と建設省東北地方建設局職員３名が来跡
10月１週	遺構確認，検出遺構の調査，調査区西端沢の埋土除去，ベルトコンベアー調査区西端に配置換え	９月30日より調査課第３科の高橋保主事が根下戸道下遺跡発掘調査に参加
２週	遺構確認，検出遺構の調査，調査区西端沢の埋土除去	
３週	遺構確認，検出遺構の調査，調査区西端沢の埋土除去	16日北鹿新聞社取材
４週	遺構確認，検出遺構の調査，調査区西端沢の埋土除去，航空写真撮影のための環境整備	22日調査区・遺跡全景などの航空写真撮影
５週	遺構確認，検出遺構の調査，調査区西端沢の土層図作成，調査区部分写真撮影，調査区西端沢の堆積土で確認された苫小牧火山灰層・十和田火山灰層の剥ぎ取りを行ったが、降雨のため中止	桜田調査課長補佐が、調査区西端沢の堆積土で確認された苫小牧火山灰層・十和田火山灰層の剥ぎ取りのため来跡
11月１週	桜田調査課長補佐が調査区西端沢に堆積土で確認された苫小牧火山灰層・十和田火山灰層の剥ぎ取りを行った。撤収作業，発掘機材等をセンターへ搬送，根下戸道下遺跡の発掘調査終了	６日根下戸道下遺跡の調査が終了したので、吉田所長・桜田調査課長補佐が大館市教委ほかへあいさつのため来跡，同日調査現場で建設省東北地方建設局能代工事事務所武藤調査課調査第２係長と女性職員１名立ち合いのもと、根下戸道下遺跡の発掘調査終了を報告し、同遺跡調査区を工事事務所側に引き渡した


水田跡
SK19
SK22
SK21
SK18
SK05
SI03
SK27
SD09
SK28
SK29
SD01
SKT20
SKT17
SI04
SI02
SK07
SKT15
SKT13
SK10
SK08
SKT32
SK33
SK31
SKT34
SK35
SK73
SKT39
SK36
SK87
SK38
SK37
SX74
SX75
SX50
SKT48
SKT47
SKT45
SK41
SK86
SK89
SX49
SK42
SK43
SK44
SK88
SK46
SK90
SI137
SK145
SK147
SK146
SK148
SK91
66
61
56
51
46
41
36
KA
JP
JK
JF
KP
KK
KF
LK
LF
LA
MA
LP
MK
MF
NK
NF
NA
MP
0
4 m
40m
沢
柱穴様ピット

第7図　遺構配置図

第４章　調査の記録

本調査で検出された遺構は、竪穴住居跡４軒、土坑33基、陥し穴10基、柱穴様ピット111基、溝跡２条、その他の遺構４基の計164遺構である。これらの遺構は、調査区南東部～北部～西部にかけて検出した。このうちＳＫ08は第Ⅲ層面で検出したが、そのほかの遺構は第Ⅴ層上面で検出した。遺物は第Ⅰ層～第Ⅳ層および遺構覆土中から縄文時代の土器と石器、剥片などが出土した。また、遺物の出土分布は、東部と北側中央からやや西よりの柱穴様ピット群が検出された地区に集中している。

第１節　検出遺構と遺構内出土遺物

１．竪穴住居跡

ＳＩ０３（第８図、図版３）

ＫＤ61・62、ＫＥ60・61・62、ＫＦ60・61・62グリッドで検出した。本遺構は、調査区の北西－南東に延びるＳＤ09に上部を切られ、北東側に位置するＳＫ05を切っている。

平面形は長軸(東－西)7.52ｍ×短軸(南－北)6.48ｍの楕円形を呈し、床面積は34㎡である。覆土は３層で、確認面から床面までの深さは７～21㎝である。壁はほぼ垂直に近く立ち上がり、壁溝はない。床面はほぼ平坦で堅く、36個のピットがあり、このうち主柱穴はＰ１～６の６個で、住居壁沿いのＰ16～28・31～34の17個は壁柱穴と判断した。主柱穴の規模は径15～30㎝、深さ17～45㎝で、壁柱穴の規模は径15～26㎝、深さ５～26㎝である。覆土の土色はＰ１・22・31・33・34が暗灰黄色、Ｐ17・27が黒褐色、Ｐ２～６・16・18～21・23～26・28・32が灰黄褐色を呈していた。なお、Ｐ２を切っているＰ10とＰ７・８・12・35の５個は、Ｐ１～６に後出する主柱穴と考えられ、本住居は建て替えが行われたと推察される。これらの規模は径14～25㎝、深さ８～16㎝で、覆土の土色はＰ７が灰黄褐色、Ｐ８・10・12・35が黒褐色を呈していた。そのほかのＰ９・13・14・15・36は支柱穴と思われるが、Ｐ11の用途は不明である。規模は径16～47㎝、深さ７～16㎝で、覆土の土色はすべて黒褐色を呈していた。

床面には住居の付帯施設と考えられる土坑が２つ掘り込まれていた。便宜上１号・２号土坑と呼称した。１号土坑は住居のほぼ中央に位置していた。平面形は長軸1.73ｍ×短軸1.35ｍの楕円形を呈し、床面からの深さは13㎝である。覆土は２層で、両層とも黒褐色を呈し非常に堅くしまっているが、１層(第８図：土層の５)は地山粒を多量、浮石粒を少量、炭化粒を微量に含み、２層(第８図：土層の６)は地山粒を少量と焼土粒を微量に含んでいた。壁・底面に焼けた痕跡は認められなかった。２号土坑は住居中央の北東側に位置し、Ｐ35・36に切られていた。平面形は長軸0.85ｍ×短軸0.56ｍの方形を呈し、床面からの深さは４～８㎝(北東～南西側)である。覆土は黒褐色土と灰黄褐色土の２層で、両層ともかなり堅くしまっており、地山粒を多量と浮石粒を若干含み、焼土粒を微量に含んでいた。壁・底面に焼けた痕跡は認められなかった。いずれも、炉として作られた施設と考えるが、根拠となる資料が乏しく明確にできなかった。

出入口は住居西壁下に堅くしまった高まりの部分に設けられていた可能性があり、壁際のＰ29・30

は出入口に付随する柱穴と考えられた。Ｐ29は径17cm・深さ14cm、Ｐ30は径21cm・深さ８cmである。覆土の土色はＰ29が黒褐色、Ｐ30が灰黄褐色を呈していた。

遺物は、北壁下で縄文時代早期の尖底土器(第23図２)、石錘３個(第26図11・15・16)がまとまって出土し、南東～南壁沿いにかけて石錘３点(第26図17、第27図18・21)、擦り石６点、尖底土器(第23図３：ＳＫ18出土の土器胴部と接合)が出土した。このほか、縄文時代早期の土器で貝殻腹縁圧痕文が施された口縁部１点(第23図１)、胴部23点、石匙３点(第25図２～４)、トランシェ様石器１点、スクレイパー１点、磨製石斧１点(第25図５)、石錘11点(第25図６・７、第26図８～10・12～14、第27図19・20・22)、剥片82点が出土しており、これらは東側－西側にかけて分布していた。本遺構の構築時期は、出土した土器から縄文時代早期と判断される。

ＳＩ０２（第９図、図版４）

ＪＱ59・60、ＬＲ59・60、ＪＳ60グリッドで検出した。本遺構は、調査区の北西－南東に伸びるＳＤ09に上部を切られ、北側をＳＩ04に切られていた。なお、土地造成によって壁は削平を受けており、残存する壁高はわずかに１～４cmしかなかった。

平面形は長軸(南－北)4.87ｍ×短軸(東－西)2.68ｍの楕円形を呈し、床面積は12㎡である。覆土は２層で、確認面から床面までの深さは３～17cmである。床面は木の根によって、幾分凸凹していた。また、床面中央部は皿状に窪んでおり、その範囲は長軸(東－西)3.12ｍ×短軸(北－南)2.29ｍであった。この中に石囲炉が１基付設されていた。住居壁に沿って20個のピットを床面で検出した。このうち主柱穴と考えられたのは、Ｐ１・３・９・10・13・15・18・19・21の９個である。各ピットの規模は径12～34cm、深さ５～36cmで、覆土の土色はすべて黒褐色を呈していた。石囲炉は住居中央よりやや東寄りに位置していた。この石囲炉は平面形が径82cmほどの略円形を呈し、深さ７～18cmの掘り方内に長さ20～30cmの扁平な河原石や拳大の礫などを、北西－南東0.60ｍ、北東－南西0.56ｍのほぼ方形に配置した炉である。炉壁に用いられた礫は火熱を受けて赤変し脆かった。

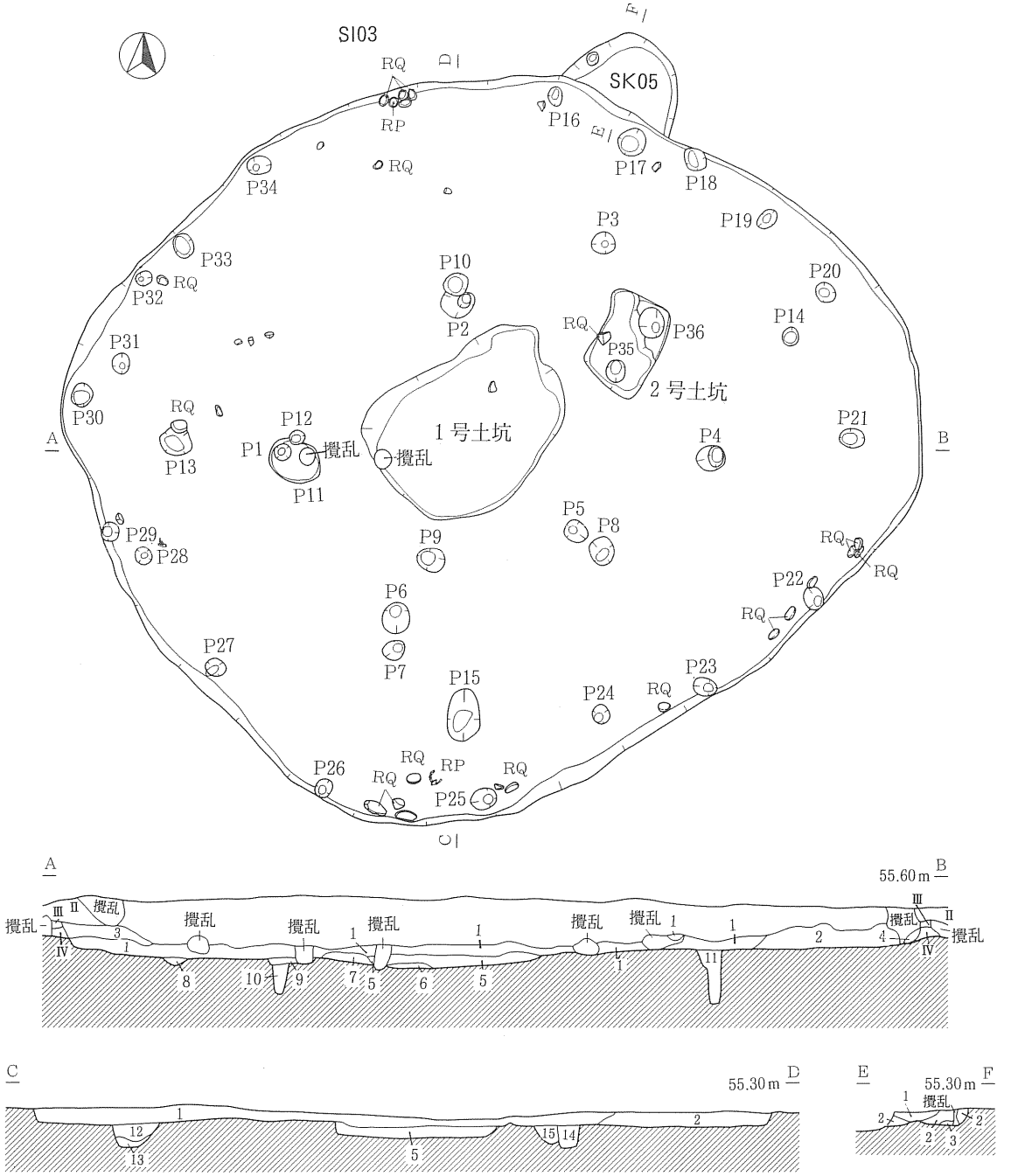
壁溝はないが、住居の西壁際にあるＰ12・16は出入口に付設された柱穴と考えられ、出入口は住居西側であったと推察される。Ｐ12は径23cm・深さ28cm、Ｐ16は27cm・深さ14cmであり、覆土の土色は両方とも黒色を呈していた。

遺物は、Ｐ２から磨製石斧１点(第25図１)、Ｐ21から縄文土器の胴部１点、剥片がＰ４から１点と炉の西側から２点出土した。構築時期は判然としないが、炉の形態より縄文時代後期と推察される。

ＳＩ０４（第９図、図版４）

ＪＱ60、ＪＲ60グリッドで検出した。本遺構はＳＩ02の北側を切って構築していた。また、ＳＩ02と同様に土地造成によって壁は削平を受けていて、残存する壁高はわずかに２～９cmしかなかった。

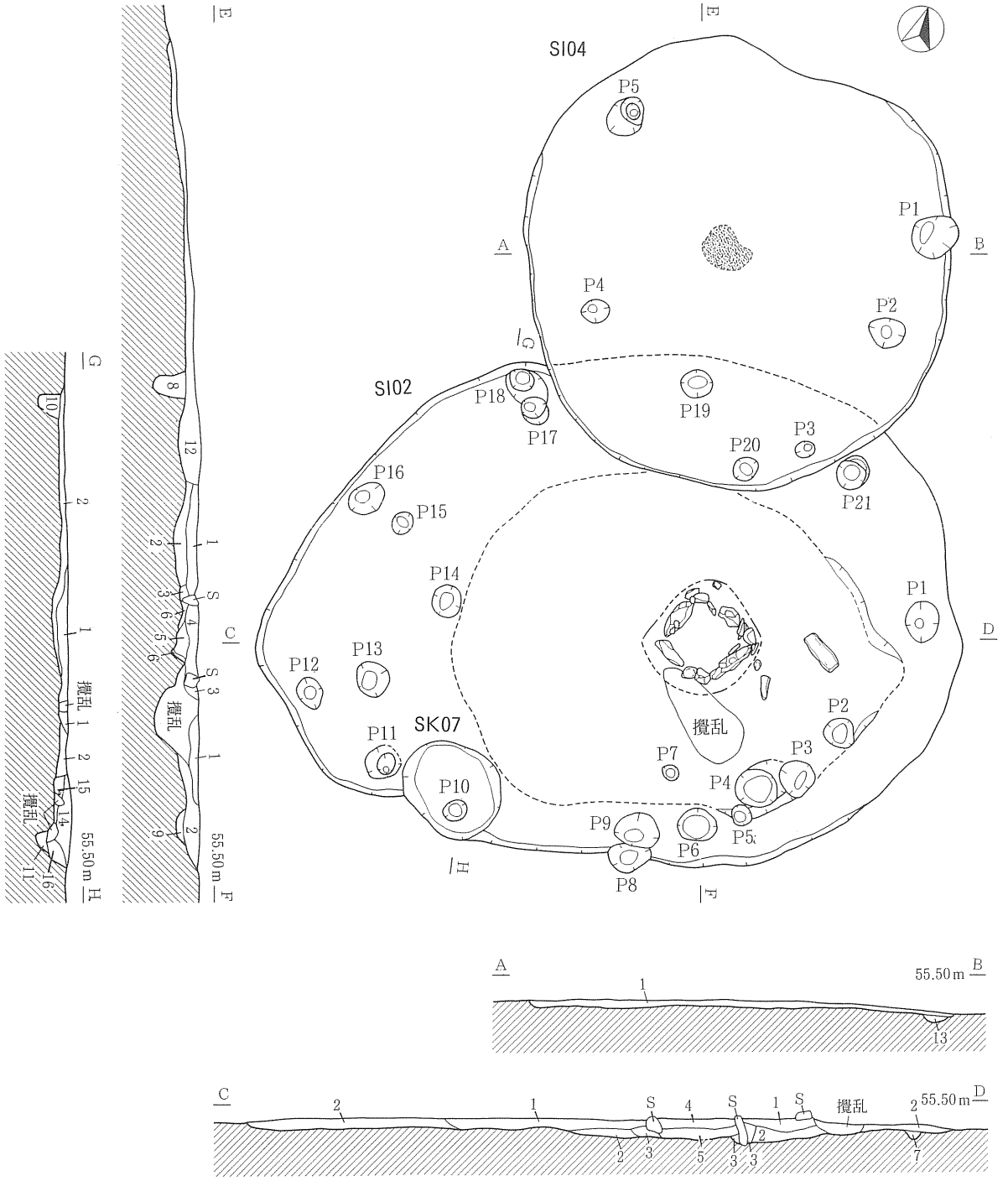
平面形は長軸(南－北)3.17ｍ×短軸(東－西)2.91ｍの楕円形を呈し、床面積は７㎡である。覆土は１層で、確認面から床面までの深さは２～15cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で堅くしまっていた。この床面で住居に伴う柱穴と考えられるＰ１～Ｐ５の５個を検出した。規模は径14～34cm、深さ11～33cmで、覆土の土色はＰ１・２・５がにぶい黄褐色、Ｐ３が灰黄褐色、Ｐ４が黒褐色を呈していた。地床炉と思われる焼土を住居のほぼ中央で確認した。焼土はごく薄く広がっており、その範囲は長軸35×短軸29cmであった。掘り込みは認められなかった。壁溝はなく、出入口の位置は不明である。



ＳＩ０３　１．黒褐色土(10YR3／2)
２．灰黄褐色土(10YR4／2)
３．暗褐色土(10YR3／3)
４．にぶい黄褐色土(10YR4／3)
５．黒褐色土(10YR3／2)
６．黒褐色土(10YR3／1)
７．にぶい黄褐色土(10YR4／3)
８．黒褐色土(10YR3／1)
９．黒褐色土(10YR3／2)
10．暗灰黄色土(2.5Y5／2)
11．灰黄褐色土(10YR4／2)
12．黒褐色土(10YR3／1)
13．暗灰黄色土(2.5Y4／2)
14．黒褐色土(10YR3／1)
15．灰黄褐色土(10YR4／2)

ＳＫ０５　１．黒褐色土(10YR3／2)
２．灰黄褐色土(10YR4／2)
３．にぶい黄褐色土(10YR5／3)

第８図　ＳＩ03・ＳＫ05



ＳＩ０２　1．黒色土(10YR2／1)
2．灰黄褐色土(10YR4／2)
3．黒褐色土(10YR3／2)
4．黒褐色土(10YR3／1)
5．暗褐色土(10YR3／3)
6．明赤褐色土(5YR5／6)
7．黒褐色土(10YR3／2)
8．黒褐色土(10YR3／1)
9．にぶい黄褐色土(10YR5／3)
10．黒褐色土(10YR3／1)
11．黒褐色土(10YR3／1)
ＳＩ０４　12．暗褐色土(10YR3／3)
13．にぶい黄褐色土(10YR5／3)
ＳＫ０７　14．黒色土(7.5YR2／1)
15．明黄褐色土(10YR7／6)
16．にぶい黄橙色土(10YR6／4)

……焼土

0　2 m

第９図　ＳＩ02・04・ＳＫ07

遺物は住居跡の南～中央部にかけて縄文土器胴部の細片が３点が出土した。構築時期は決め手となる資料がなく、不明である。

ＳＩ１３７（第10図、図版４）

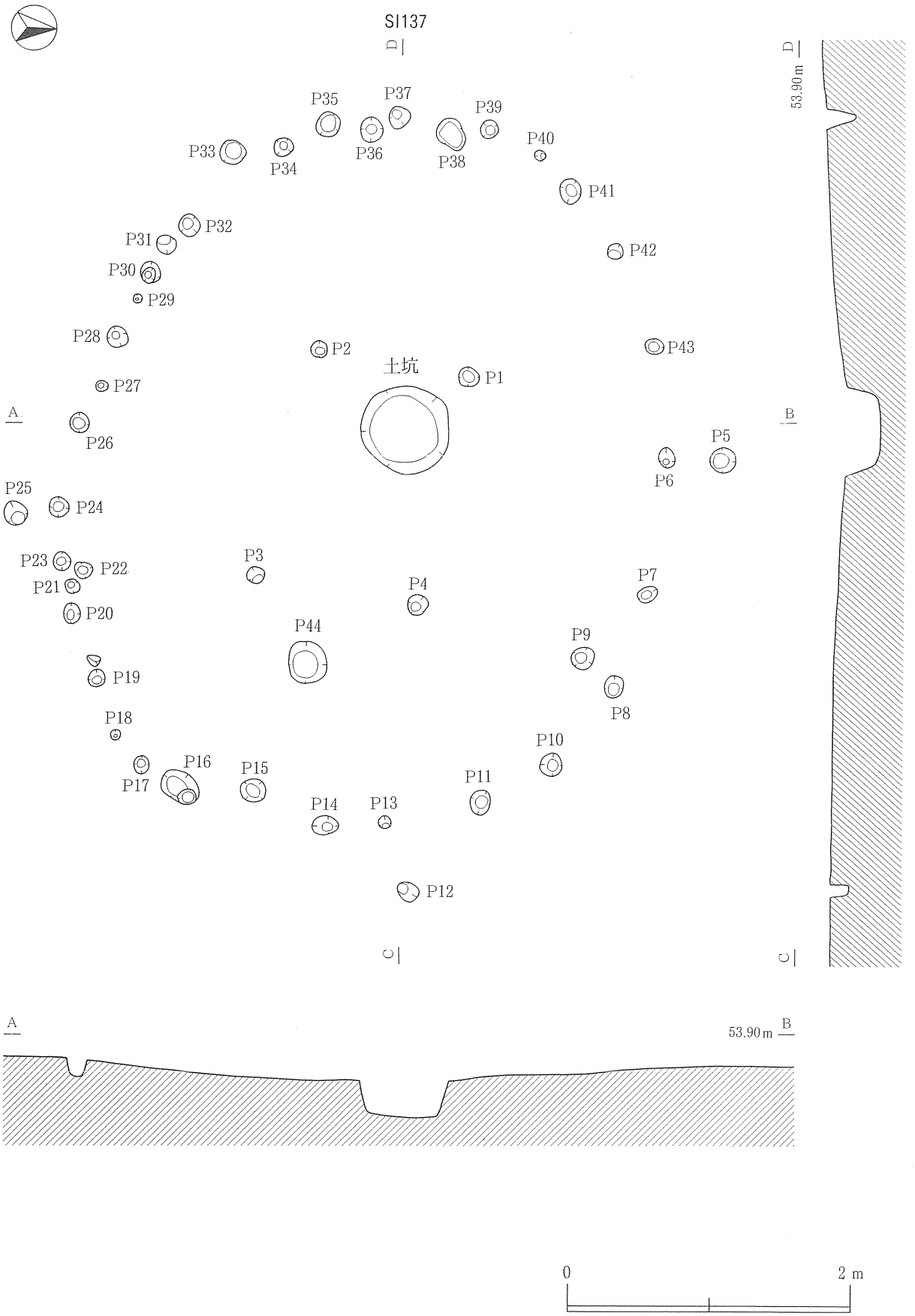
ＭＯ44・45、ＭＰ44・45・46グリッドで検出された。土地造成によって壁は削られたものと思われ確認できなかったが、本遺構の平面形は環状に配列されたピット群から、楕円形を呈するものと推察され、その規模は長軸(東－西)5.67ｍ×短軸(北－南)5.19ｍで、床面積は19㎡と推測される。床面は平坦で堅くしまっており、中央に向かって緩やかに傾斜していた。検出したピットは44個である。このうち、主柱穴はほぼ方形状に配置されたＰ１～４の４個で、Ｐ５～43の39個は壁沿いに巡らされた壁柱穴と考えられる。覆土の土色は、Ｐ１～３・８・９・14・16・26・34・35が黒色、Ｐ４～７・10～13・17～25・27～33・36～43が黒褐色を呈していた。各ピットの規模は第１表に記載した。

また、住居中央部で付帯施設と思われる土坑が掘り込まれていた。その平面形は径66㎝のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは23㎝である。底面は凸凹しており、壁の立ち上がりは急である。覆土は３層に分けられ、１層黒色土、２層褐色土、３層黒褐色土である。全層とも１～３㎝の地山ブロック（１層若干、２層多量、３層少量)を含み堅くしまっていた。壁・底面に焼けた痕跡は認められず、用途不明の土坑である。この住居に壁溝はなく、出入口の位置は不明である。

遺物は、１号土坑から剥片３点、Ｐ４と柱穴列内から各１点出土した。これらの遺物から本遺構は、縄文時代に構築されたものであると判断したが、その帰属時期は決定資料がなく明確にできなかった。

第１表　ＳＩ137ピット計測一覧

P.No	平面形	大きさ			底面の標高	P.No	平面形	大きさ			底面の標高
		長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ	
1	円　形	15㎝	13㎝	17㎝	53.42ｍ	23	円　形	13㎝	12㎝	12㎝	53.59ｍ
2	円　形	12㎝	12㎝	10㎝	53.47ｍ	24	円　形	14㎝	14㎝	11㎝	53.60ｍ
3	円　形	13㎝	12㎝	15㎝	53.46ｍ	25	楕円形	18㎝	16㎝	10㎝	53.63ｍ
4	円　形	15㎝	15㎝	17㎝	53.45ｍ	26	円　形	14㎝	13㎝	12㎝	53.60ｍ
5	円　形	19㎝	19㎝	10㎝	53.58ｍ	27	円　形	9㎝	8㎝	7㎝	53.65ｍ
6	楕円形	15㎝	12㎝	22㎝	53.45ｍ	28	円　形	15㎝	15㎝	21㎝	53.49ｍ
7	楕円形	14㎝	11㎝	24㎝	53.43ｍ	29	円　形	7㎝	7㎝	4㎝	53.65ｍ
8	円　形	17㎝	14㎝	24㎝	53.35ｍ	30	楕円形	16㎝	14㎝	17㎝	53.52ｍ
9	円　形	17㎝	16㎝	25㎝	53.36ｍ	31	円　形	14㎝	13㎝	12㎝	53.57ｍ
10	円　形	17㎝	16㎝	23㎝	53.40ｍ	32	円　形	15㎝	15㎝	28㎝	53.42ｍ
11	楕円形	18㎝	16㎝	22㎝	53.40ｍ	33	楕円形	19㎝	17㎝	7㎝	53.66ｍ
12	楕円形	16㎝	13㎝	12㎝	53.53ｍ	34	楕円形	18㎝	17㎝	15㎝	53.56ｍ
13	円　形	9㎝	9㎝	9㎝	53.55ｍ	35	円　形	18㎝	17㎝	6㎝	53.64ｍ
14	楕円形	18㎝	13㎝	16㎝	53.45ｍ	36	円　形	18㎝	16㎝	10㎝	53.59ｍ
15	円　形	18㎝	17㎝	9㎝	53.54ｍ	37	楕円形	17㎝	15㎝	21㎝	53.48ｍ
16	楕円形	30㎝	21㎝	22㎝	53.44ｍ	38	楕円形	24㎝	20㎝	7㎝	53.62ｍ
17	楕円形	13㎝	11㎝	13㎝	53.54ｍ	39	円　形	13㎝	13㎝	18㎝	53.53ｍ
18	円　形	7㎝	7㎝	5㎝	53.62ｍ	40	円　形	8㎝	8㎝	10㎝	53.59ｍ
19	円　形	12㎝	12㎝	14㎝	53.54ｍ	41	楕円形	19㎝	15㎝	21㎝	53.46ｍ
20	楕円形	15㎝	12㎝	9㎝	53.63ｍ	42	円　形	11㎝	11㎝	14㎝	53.53ｍ
21	円　形	11㎝	10㎝	7㎝	53.63ｍ	43	円　形	13㎝	12㎝	17㎝	53.48ｍ
22	円　形	13㎝	12㎝	7㎝	53.63ｍ						


SI137
D
D
53.90m
P35
P37
P39
P33
P34
P36
P38
P40
P41
P32
P31
P42
P30
P29
P28
P2
P43
土坑
P1
P27
A
B
P26
P5
P6
P25
P24
P23
P22
P3
P7
P21
P4
P20
P44
P9
P19
P8
P18
P10
P16
P15
P17
P11
P14
P13
P12
C
C
A
53.90m
B
0
2 m

第10図　ＳＩ137

２．土坑

ＳＫ０５（第８図）

ＫＥ62グリッドで検出した。ＳＩ03に切られており、全容を把握できなかったが、平面形は楕円形を呈すると推察される。現状では長軸1.07ｍ、短軸0.62ｍ、確認面からの深さ14㎝である。底面はやや凹凸があり、壁の立ち上がりは急である。覆土は３層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ０７（第９図、図版５）

ＪＲ59グリッドで検出した。ＳＩ02を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸0.73ｍ、短軸0.60ｍ、確認面からの深さ17㎝である。底面はほぼ平坦で、南側がやや凹んでおり、底には径16㎝、底面からの深さ８㎝のピットが１個穿たれている。壁の立ち上がりは急である。覆土は３層に分けられ、縄文土器胴部１点(第23図に掲載)、剥片２点が出土した。

ＳＫ０８（第11図、図版５）

ＪＳ56、ＪＴ56グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.81ｍ、短軸0.57ｍ、確認面からの深さ28㎝である。底面の中央部は凹んでおり、壁の立ち上がりは急である。覆土は３層に分けられ、石匙１点(第28図に掲載)、擦り石２点が出土した。

ＳＫ１０（第11図、図版５）

ＪＰ・ＪＱ58グリッドで検出した。平面形は略楕円形を呈し、長軸0.62ｍ、短軸0.53ｍ、確認面からの深さ９㎝である。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ１８（第11図、図版５）

ＪＳ61・62、ＪＴ61・62グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.08ｍ、短軸0.99ｍ、確認面からの深さ31㎝である。底面はほぼ平坦である。北東壁は緩やかに立ち上がっているが、南西壁は開口部まで内傾して立ち上がっている。覆土は２層に分けられ、縄文土器胴部３点（内２点はＳＩ03尖底土器に接合・第24図に掲載)、剥片１点が出土した。

ＳＫ１９（第11図、図版５）

ＫＡ63グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.83ｍ、短軸0.76ｍ、確認面からの深さ18㎝である。底面は丸みを帯びている。北東壁は緩やかに立ち上がっているが、南西壁の立ち上がりは急である。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ２１（第11図、図版５）

ＪＴ62グリッドで検出した。北側壁を木の根で攪乱されていたが、平面形は楕円形を呈するものと思われ、現状では長軸0.51ｍ、短軸0.47ｍ、確認面からの深さ15㎝である。底面は南西から北東へ緩やかに傾斜しており、壁の立ち上がりは急である。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ２２（第11図、図版５）

ＪＴ62グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.68ｍ、短軸0.47ｍ、確認面からの深さ12㎝である。底面は南西側から北東側へ緩やかに傾斜し、壁の立ち上がりは急である。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ２７（第12図、図版５）

ＫＩ・ＫＪ61グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸1.20ｍ、短軸1.15ｍ、確認面からの

深さ101cmである。底面はほぼ平坦である。壁は下位から中位にかけてほぼ垂直で、中位から上位は傾斜して立ち上がっている。覆土は28層に分けられ、縄文土器口縁部１点・胴部２点、剥片１点が出土した。

ＳＫ２８（第12図、図版５）

ＫＬ60・61グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.89ｍ、短軸0.86ｍ、確認面からの深さ38cmである。底面はほぼ平坦であるが、北側がやや凹んでいる。壁の立ち上がりは急である。覆土は４層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ２９（第12図、図版６）

ＫＭ60グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.52ｍ、短軸1.03ｍ、確認面からの深さ91cmである。底面はほぼ平坦である。壁は下位がオーバーハングしており、中位から上位の立ち上がりは急である。覆土は23層に分けられ、スクレイパー１点、剥片５点が出土した。

ＳＫ３１（第12図、図版６）

ＬＤ57グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.75ｍ、短軸0.52ｍ、確認面からの深さ17cmである。底面は中央部が凹んでいる。壁の立ち上がりは急である。覆土は６層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ３３（第13図、図版６）

ＬＥ56・57グリッドで検出した。平面形は方形を呈し、長軸1.12ｍ、短軸0.82ｍ、確認面からの深さ75cmである。底面はほぼ平坦である。壁は北東壁と南西壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、北西壁と南東壁の立ち上がりは急である。覆土は４層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ３５（第13図、図版６）

ＬＧ55グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.74ｍ、短軸0.69ｍ、確認面からの深さ71cmである。底面はほぼ平坦である。壁は下位はオーバーハングしており、中位からの立ち上がりは急である。覆土は２層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ３６（第13図、図版６）

ＬＪ・ＬＫ54グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.60ｍ、短軸0.96ｍ、確認面からの深さ21cmである。底面は若干丸みを帯び、壁の立ち上がりは急である。覆土は３層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ３７（第13図、図版６・10）

ＬＬ53グリッドで検出した。ＳＫ87とＳＸ75を切っている。平面形はほぼ円形を呈し、長軸1.15m、短軸1.03ｍ、確認面からの深さ91cmである。底面は平坦で、壁は底面から中程までほぼ垂直に立ち上がり、開口部までは外傾して立ち上がる。覆土は21層に分けられ、擦り石１点が出土した。

ＳＫ３８（第14図、図版６）

ＬＭ53・54グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.20ｍ、短軸0.89ｍ、確認面からの深さ20cmである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。覆土は２層に分けられ、縄文土器胴部10点が出土した。

ＳＫ４１（第14図、図版６）

ＬＰ51グリッドで検出した。平面形は方形を呈し、長軸1.15ｍ、短軸1.12ｍ、確認面からの深さ72

cmである。底面は平坦で、壁は底面から中程まで垂直に立ち上がり、開口部まではやや外傾して立ち上がっている。覆土は６層に分けられ、擦り石１点、剥片２点が出土した。

ＳＫ４２（第14図、図版７）

ＬＯ51グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.91ｍ、短軸0.84ｍ、確認面からの深さ87cmである。底面は若干丸みを帯びており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は５層に分けられ、縄文土器胴部が２点、剥片３点が出土した。

ＳＫ４３（第14図、図版７）

ＬＮ49・50、ＬＯ49・50グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.23ｍ、短軸0.91ｍ、確認面からの深さ９cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ４４（第14図、図版７）

ＬＲ・ＬＳ49グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.84ｍ、短軸1.00ｍ、確認面からの深さ25cmである。底面はほぼ平坦であるが、南側に根の攪乱を受けた跡がある。壁の立ち上がりは急である。覆土は３層に分けられ、剥片３点が出土した。

ＳＫ４６（第15図、図版７）

ＬＴ49グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.94ｍ、短軸0.78ｍ、確認面からの深さ38cmである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。覆土は２層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ７３（第15図、図版７）

ＬＪ・ＬＫ56グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.87ｍ、短軸0.77ｍ、確認面からの深さ12cmである。底面は若干丸みを帯びており、壁の立ち上がりは急である。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ８６（第15図、図版７）

ＭＢ51グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.97ｍ、短軸0.82ｍ、確認面からの深さ30cmである。底面の東側はやや凹んでおり、その中には径15cm、底面からの深さ13cmのピットが１個穿たれている。壁の立ち上がりは急である。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ８７（第15図、図版７）

ＬＬ・ＬＭ53グリッドにかかるＳＸ75の底面で検出した。ＳＫ37、ＳＸ74・75に切られいるが、平面形は楕円形を呈すると推察される。現況は長軸1.51ｍ、短軸0.51ｍ、確認面からの深さ21cmである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ８８（第15図、図版７）

ＭＣ49グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.72ｍ、短軸0.64ｍ、確認面からの深さ37cmである。底面は南東側から北西側へ緩やかに傾斜している。壁の立ち上がりは急である。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ８９（第15図、図版８）

ＭＥ50グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.97ｍ、短軸0.90ｍ、確認面からの深さ９cmである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。覆土は２層に分けられ、遺物は出土しな

かった。

ＳＫ９０（第16図、図版８）

ＭＬ47グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.15ｍ、短軸0.95ｍ、確認面からの深さ45㎝である。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。覆土は２層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ９１（第16図、図版８）

ＮＦ39・40グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.86ｍ、短軸0.79ｍ、確認面からの深さ55㎝である。底面は北西側から南東側へ緩やかに傾斜している。壁の立ち上がりは急である。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ１４５（第16図、図版８）

ＭＳ42・43グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.95ｍ、短軸0.89ｍ、確認面からの深さ40㎝である。底面は丸みを帯びている。壁はやや内傾しながら立ち上がっている。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ１４６（第16図、図版８）

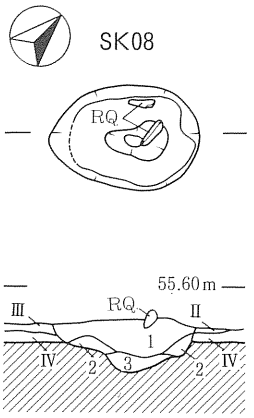
ＭＴ42グリッドで検出した。ＳＫ147の上部を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.45ｍ、短軸1.07ｍ、確認面からの深さ27㎝である。底面は東側から西側へ緩やかに傾斜しており、やや凸凹がある。壁の立ち上がりは急であるが、東壁だけは緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ１４７（第16図、図版８）

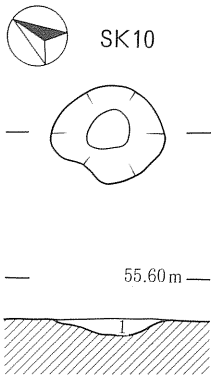
ＭＴ42グリッドにかかるＳＫ146の底面より検出した。ＳＫ146に切られている。平面形は円形を呈し、長軸0.93ｍ、短軸0.90ｍであり、ＳＫ146の確認面からの深さは42㎝で、ＳＫ146の底面からの深さ16㎝である。底面は東側から西側へ緩やかに傾斜し、壁の立ち上がりは急である。覆土は１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ１４８（第16図、図版８）

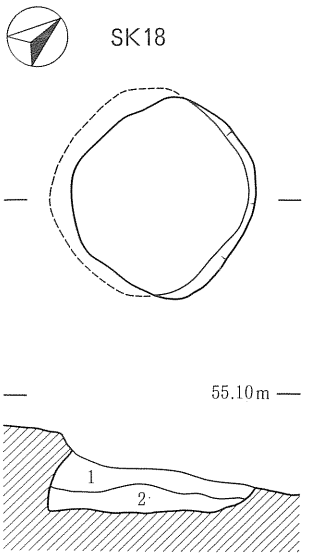
ＭＲ・ＭＳ41グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.53ｍ、短軸0.50ｍ、確認面からの深さ26㎝である。底面は若干丸みを帯び、壁の立ち上がりは急である。覆土は２層に分けられ、遺物は出土しなかった。



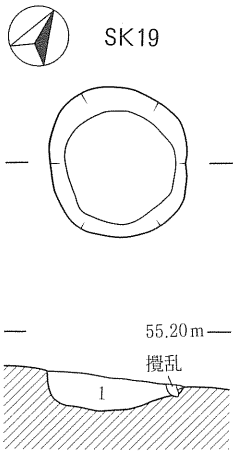
ＳＫ０８　１．黒褐色土(10YR3／1)
２．にぶい黄褐色土(10YR5／4)
３．黒褐色土(10YR2／2)



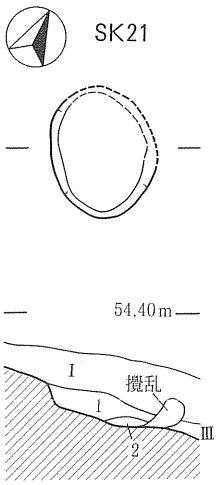
ＳＫ１０　１．黒褐色土(10YR3／1)



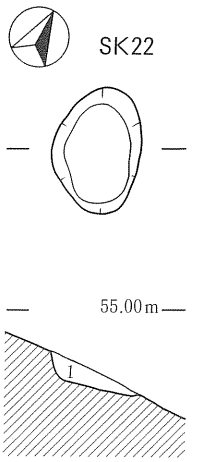
ＳＫ１８　１．黒色土(10YR2／1)
２．黒色土(10YR2／1)



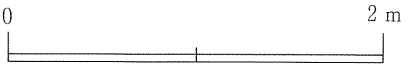
ＳＫ１９　１．黒色土(10YR2／1)



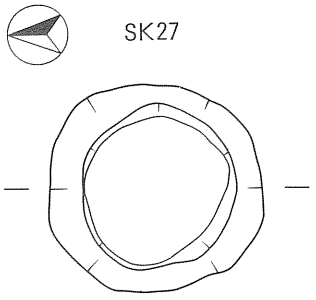
ＳＫ２１　１．黒色土(10YR2／1)
２．黒褐色土(10YR3／1)

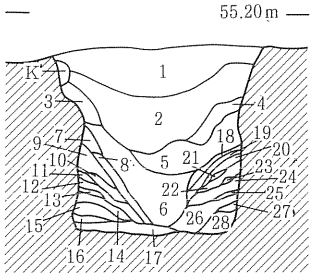


ＳＫ２２　１．黒色土(10YR2／1)

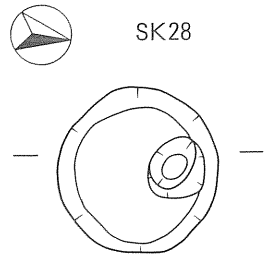


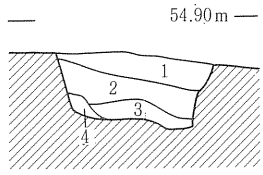
第11図　ＳＫ08・10・18・19・21・22



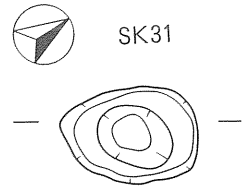


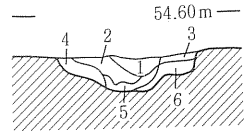
ＳＫ２７　1．黒色土(10YR2／1)
2．黒色土(7.510YR2／1)
3．黒褐色土(10YR3／1)
4．黒褐色土(7.5YR3／1)
5．黒褐色土(10YR3／2)
6．黒色土(10YR2／1)
7．黒褐色土(10YR3／1)
8．黄褐色土(2.5Y5／4)
9．黒褐色土(10YR3／1)
10．黄褐色土(2.5Y5／4)
11．黒褐色土(10YR3／1)
12．黄褐色土(2.5Y5／4)
13．黒褐色土(10YR3／1)
14．黄褐色土(2.5Y5／4)
15．黒褐色土(10YR3／1)
16．黄褐色土(2.5Y5／4)
17．黒色土(10YR2／1)
18．黒褐色土(10YR3／1)
19．黄褐色土(2.5Y5／4)
20．黒褐色土(10YR3／1)
21．黄褐色土(2.5Y5／4)
22．黒褐色土(10YR3／1)
23．黄褐色土(2.5Y5／4)
24．黒褐色土(10YR3／1)
25．黄褐色土(2.5Y5／4)
26．黒褐色土(10YR3／1)
27．黄褐色土(2.5Y5／4)
28．黒色土(10YR2／1)



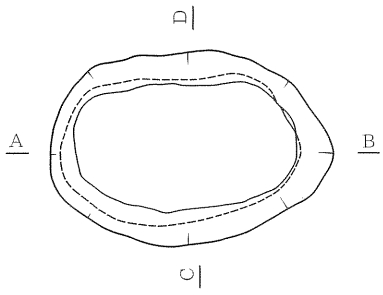


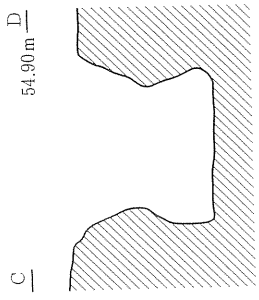
ＳＫ２８　1．黒色土(10YR2／1)
2．黒色土(10YR1.7／1)
3．黒褐色土(10YR3／1)
4．黒褐色土(10YR3／2)

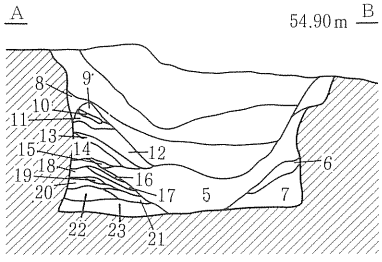




ＳＫ３１　1．黒褐色土(10YR2／2)
2．黒褐色土(10YR2／2)
3．黒褐色土(10YR3／1)
4．黒褐色土(10YR2／2)
5．黒褐色土(10YR2／3)
6．黒褐色土(10YR2／2)



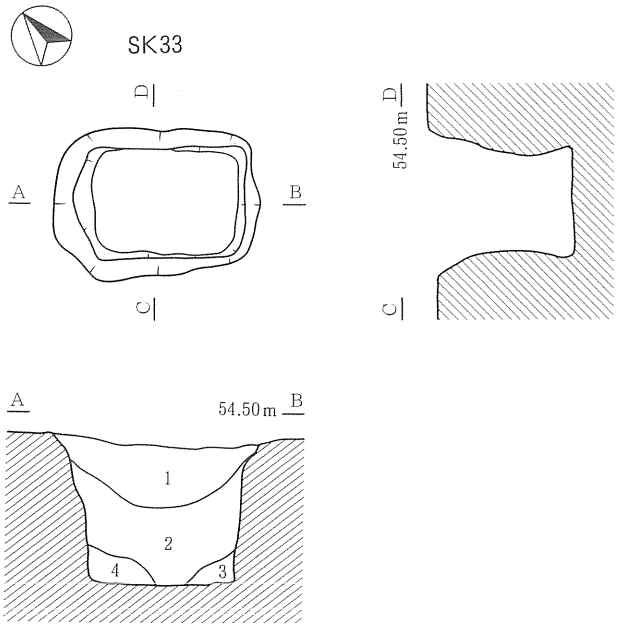




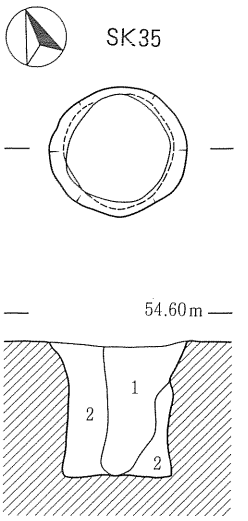
ＳＫ２９　1．黒色土(10YR2／1)
2．黒褐色土(10YR3／1)
3．黒色土(10YR2／1)
4．黒色土(10YR2／1)
5．黒褐色土(10YR2／2)
6．黒色土(10YR2／1)
7．黒色土(10YR2／1)
8．黒褐色土(2.5Y3／2)
9．黒色土(10YR2／1)
10．明黄褐色土(2.5Y6／6)
11．黒色土(10YR2／1)
12．黒褐色土(10YR3／1)
13．黒色土(10YR2／1)
14．にぶい黄色土(2.5Y6／4)
15．黒色土(10YR2／1)
16．暗灰黄色土(2.5Y4／2)
17．黒色土(10YR2／1)
18．黄褐色土(2.5Y5／4)
19．黒色土(10YR2／1)
20．明黄褐色土(2.5Y6／6)
21．黒色土(10YR2／1)
22．黄褐色土(2.5Y5／4)
23．黒色土(10YR2／1)

0　2 m

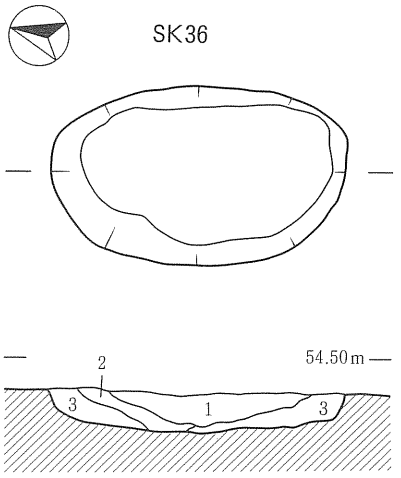
第12図　ＳＫ27・28・29・31



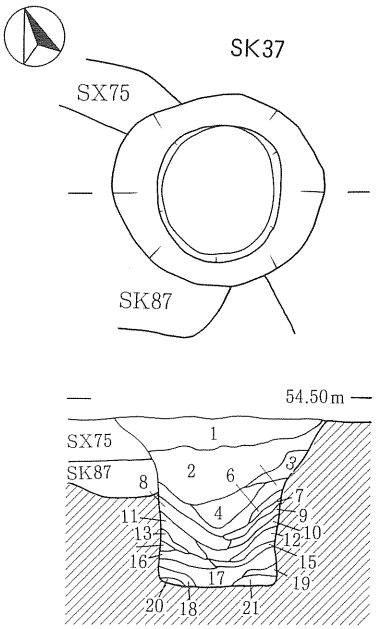
ＳＫ３３　１．黒色土(10YR1.7／1)　３．黒色土(10YR2／1)
２．黒色土(10YR1.7／1)　４．３層と同じ



ＳＫ３５　１．黒褐色土(10YR2／2)
２．黒褐色土(10YR2／2)



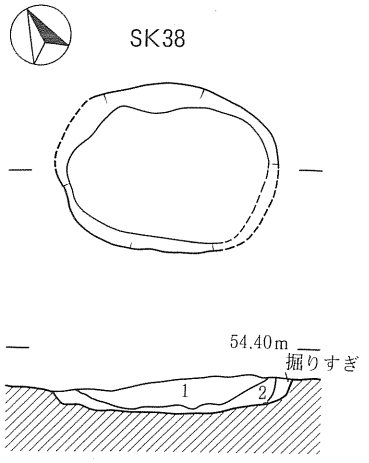
ＳＫ３６　１．黒色土(10YR1.7／1)
２．黒色土(10YR2／1)
３．黒褐色土(10YR2／2)



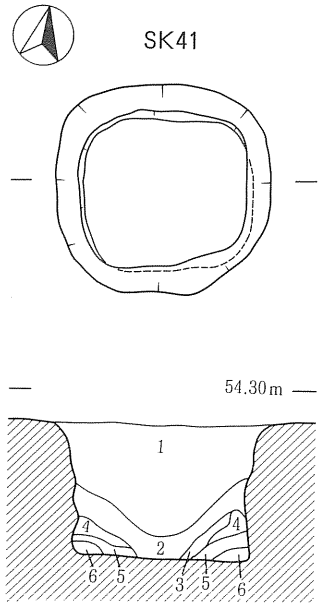
ＳＫ３７　１．黒色土(10YR2／1)　12．明黄褐色土(10YR6／6)
２．黒色土(10YR2／1)　13．黒褐色土(10YR3／1)
３．黒褐色土(10YR3／2)　14．灰黄褐色土(10YR4／2)
４．黒褐色土(10YR3／1)　15．黒褐色土(10YR3／2)
５．暗灰黄色土(2.5Y4／2)　16．黒色土(10YR2／1)
６．明黄褐色土(10YR6／6)　17．黒褐色土(10YR3／1)
７．黒褐色土(10YR3／1)　18．黒褐色土(10YR3／2)
８．黒褐色土(2.5Y3／1)　19．灰黄褐色土(10YR5／2)
９．明黄褐色土(10YR6／6)　20．黒色土(10YR2／1)
10．黒褐色土(10YR3／2)　21．赤褐色土(５YR4／6)
11．灰黄褐色土(10YR4／2)

0　2 m

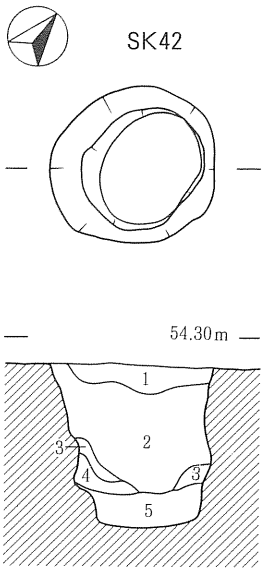
第13図　ＳＫ33・35・36・37



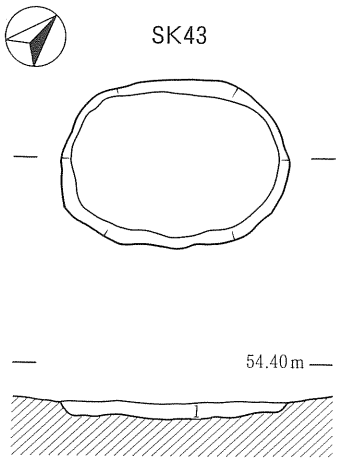
ＳＫ３８　１．黒色土(10YR1.7／1)
２．黒褐色土(10YR2／2)



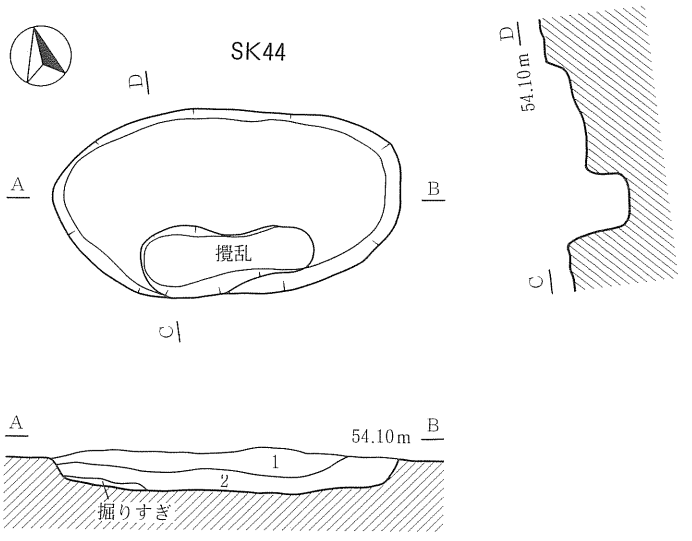
ＳＫ４１　１．黒色土(10YR2／1)
２．黒褐色土(10YR3／1)
３．黒褐色土(10YR3／2)
４．黄褐色土(2.5Y5／3)
５．黒色土(10YR2／1)
６．暗灰黄色土(2.5Y4／2)



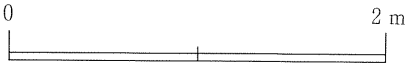
ＳＫ４２　１．黒色土(10YR2／1)
２．黒色土(10YR2／1)
３．暗褐色土(10YR3／3)
４．黒褐色土(10YR3／1)
５．黒色土(10YR2／1)



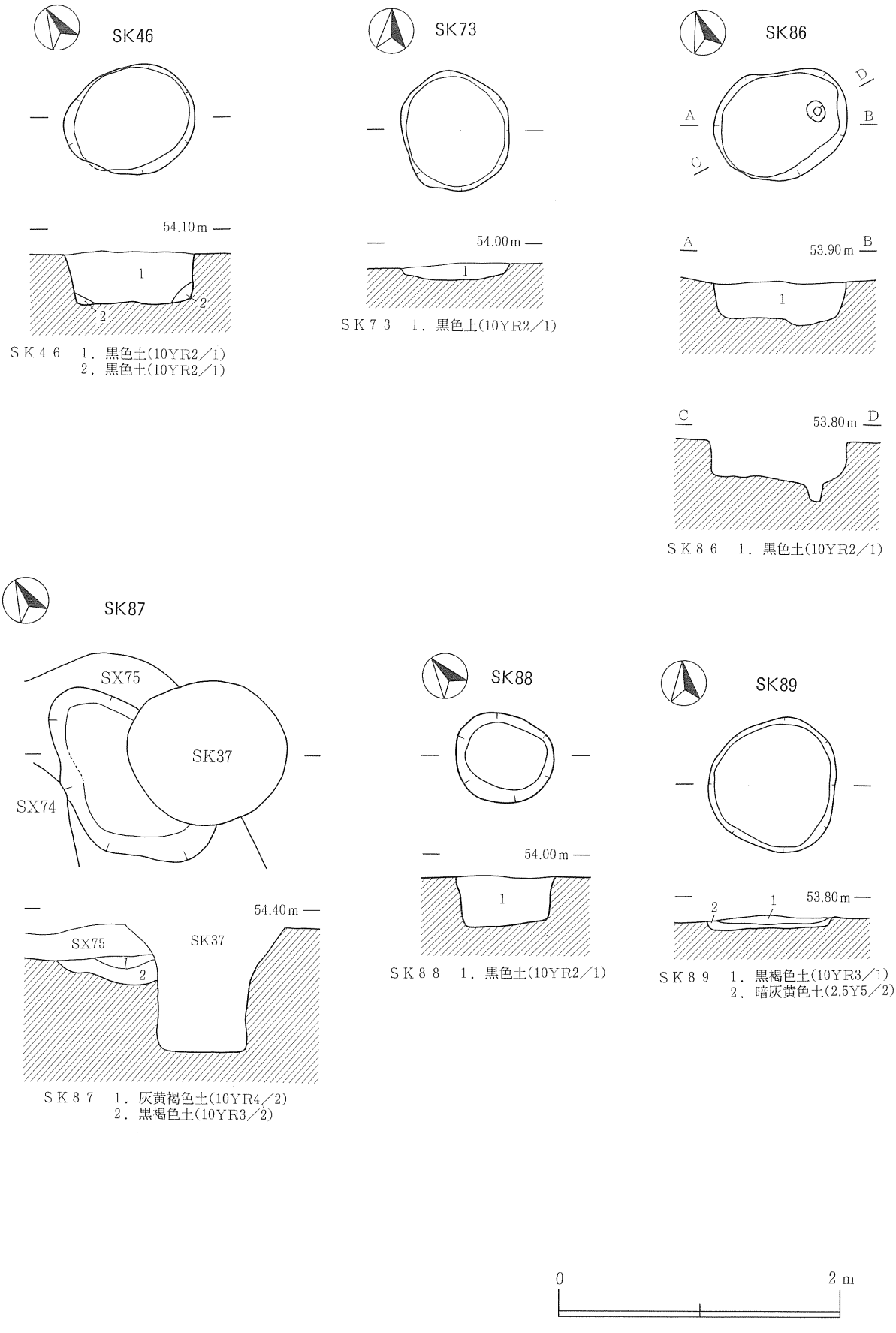
ＳＫ４３　１．黒色土(10YR1.7／1)



ＳＫ４４　１．黒色土(10YR2／1)
２．黒褐色土(10YR3／1)



第14図　ＳＫ38・41・42・43・44



ＳＫ４６　１．黒色土(10YR2／1)
２．黒色土(10YR2／1)

ＳＫ７３　１．黒色土(10YR2／1)

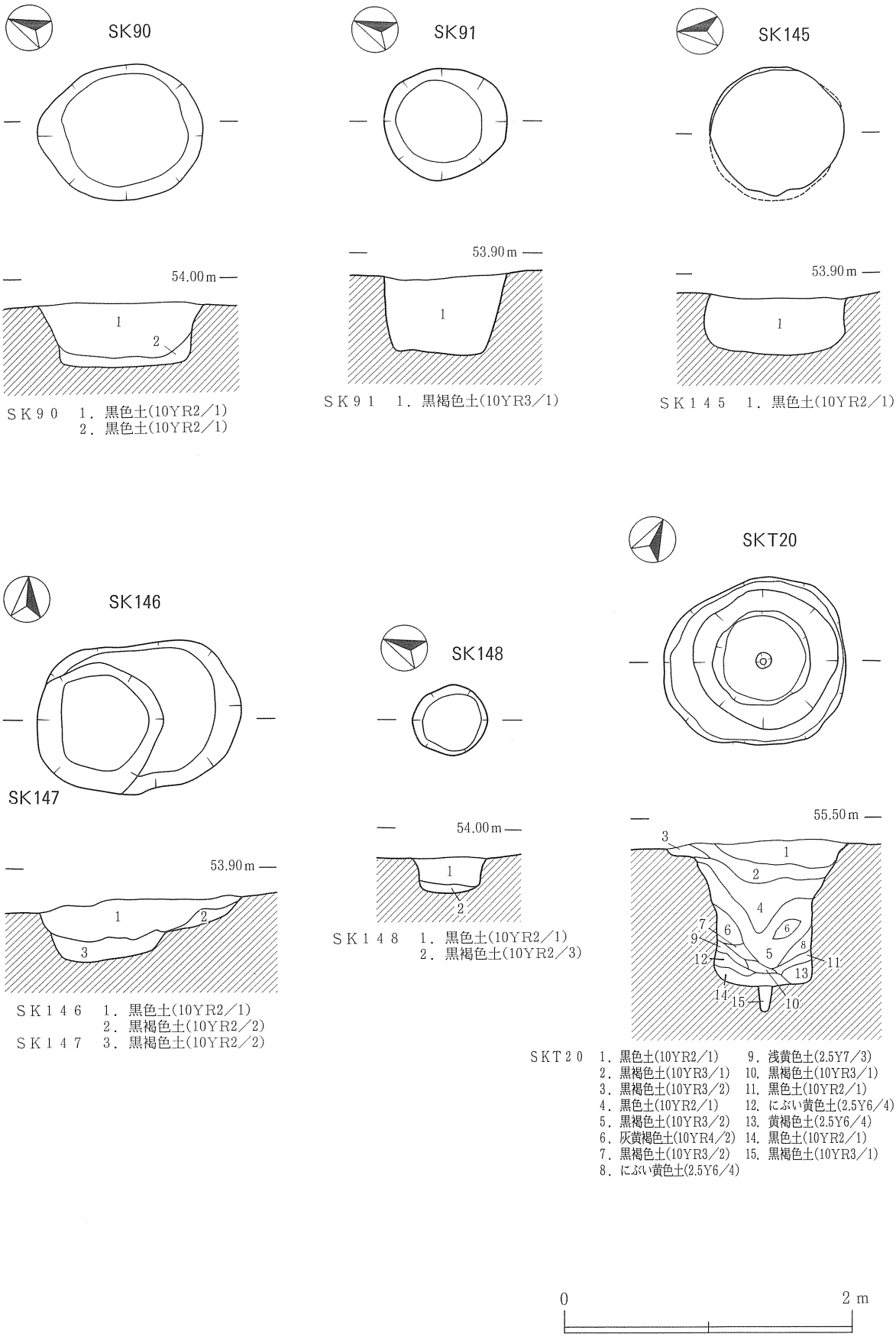
ＳＫ８６　１．黒色土(10YR2／1)

ＳＫ８７　１．灰黄褐色土(10YR4／2)
２．黒褐色土(10YR3／2)

ＳＫ８８　１．黒色土(10YR2／1)

ＳＫ８９　１．黒褐色土(10YR3／1)
２．暗灰黄色土(2.5Y5／2)

第15図　ＳＫ46・73・86・87・88・89



ＳＫ９０　１．黒色土(10YR2／1)
　　２．黒色土(10YR2／1)

ＳＫ９１　１．黒褐色土(10YR3／1)

ＳＫ１４５　１．黒色土(10YR2／1)

ＳＫ１４６　１．黒色土(10YR2／1)
　　２．黒褐色土(10YR2／2)
ＳＫ１４７　３．黒褐色土(10YR2／2)

ＳＫ１４８　１．黒色土(10YR2／1)
　　２．黒褐色土(10YR2／3)

ＳＫＴ２０　１．黒色土(10YR2／1)
　　２．黒褐色土(10YR3／1)
　　３．黒褐色土(10YR3／2)
　　４．黒色土(10YR2／1)
　　５．黒褐色土(10YR3／2)
　　６．灰黄褐色土(10YR4／2)
　　７．黒褐色土(10YR3／2)
　　８．にぶい黄色土(2.5Y6／4)
　　９．浅黄色土(2.5Y7／3)
　　10．黒褐色土(10YR3／1)
　　11．黒色土(10YR2／1)
　　12．にぶい黄色土(2.5Y6／4)
　　13．黄褐色土(2.5Y6／4)
　　14．黒色土(10YR2／1)
　　15．黒褐色土(10YR3／1)

第16図　ＳＫ90・91・145・146・147・148・ＳＫＴ20

３．陥し穴

ＳＫＴ２０（第16図、図版８）

ＫＢ60・61グリッドで検出した。本遺構は、調査区の北西－南東にのびるＳＤ09に上部を切られている。平面形は円形を呈し、長軸1.34ｍ、短軸1.18ｍ、確認面からの深さ101㎝である。底面はほぼ平坦で、中央に径11㎝、底面からの深さ19㎝のピットが１個穿たれている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は16層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫＴ３２（第17図、図版８）

ＬＤ57・58、ＬＥ57・58グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.71ｍ、短軸0.67ｍ、確認面からの深さ69㎝である。底面は若干丸みを帯びており、中央からやや南東側に径12㎝、底面からの深さ10㎝のピットが１個穿たれている。壁は底面から中程まではほぼ垂直に立ち上がり、開口部までの立ち上がりは急である。覆土は７層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫＴ３９（第17図、図版９）

ＬＮ54グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸1.06ｍ、短軸1.05ｍ、確認面からの深さ75㎝である。底面はほぼ平坦で、中央に径15㎝、底面からの深さ36㎝のピットが１個穿たれている。壁は開口部近くまでほぼ垂直に立ち上がる。覆土は14層に分けられ、遺物は出土しなかった。

ＳＫＴ４５（第17図、図版９）

ＬＳ51グリッドで検出した。平面形は方形を呈し、長軸1.03ｍ、短軸0.89ｍ、確認面からの深さ80㎝である。底面はほぼ平坦であるが、北東側は中央に向かって緩やかに傾斜している。中央には径15㎝、底面からの深さ12㎝のピットが１個穿たれている。壁の立ち上がりは急である。覆土は９層に分けられ、剥片７点が出土した。

ＳＫＴ４７（第17図、図版９）

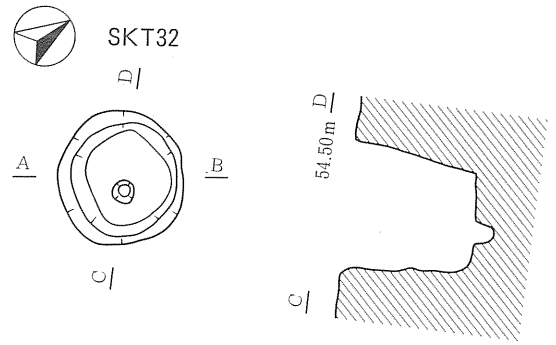
ＭＢ51・52グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸1.21ｍ、短軸1.18ｍ、確認面からの深さ93㎝である。底面は平坦で、中央に径17㎝、底面からの深さ９㎝のピットが１個穿たれている。壁は下位から中位まではほぼ垂直に立ち上がっているが、中位から上位までの立ち上がりは急である。覆土は13層に分けられ、器種不明石器１点(第28図に掲載)、剥片１点が出土した。

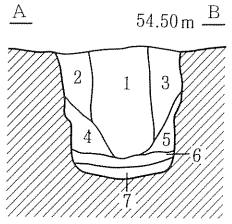
ＳＫＴ１３（第18図、図版９）

ＪＯ57・58グリッドで検出した。本遺構は、調査区の北西－南東にのびるＳＤ09に上部を切られている。平面形は溝状を呈し、長軸3.24ｍ、短軸0.91ｍの確認面からの深さ29㎝(北東側)～67㎝(南西側)である。底面はほぼ平坦であるが、南西側半分はやや凹んでいる。壁の立ち上がりは急で、南西壁は開口部近くまで内傾しながら立ち上がる。覆土は９層に分けられ、石箆１点(第28図に掲載)、剥片２点が出土した。

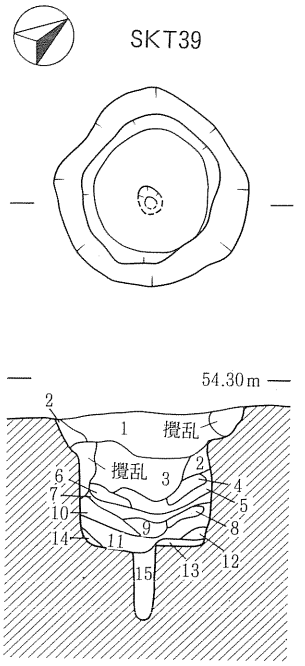
ＳＫＴ１５（第18図、図版９）

ＪＰ58グリッドで検出した。平面形は溝状を呈し、長軸1.80ｍ、短軸0.54ｍ、確認面からの深さ94㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は９層に分けられ、縄文土器口縁部～胴部１点(第24図に掲載)・口縁部４点(うち１点は第23図に掲載)・胴部46点・底部３点、半円偏平打製石器１点(第28図に掲載)、石錘２点(うち１点は第28図に掲載)、擦り石２点、磨製石斧１点(第28図に掲載)、剥片１点が出土した。

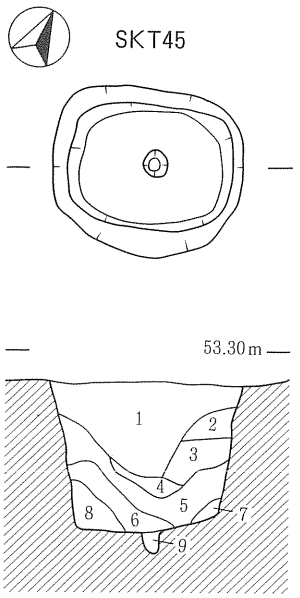




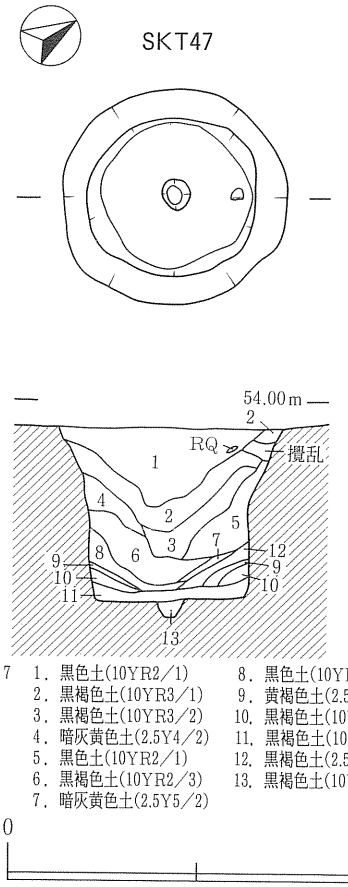
ＳＫ３２　1．黒色土(10YR1.7／1)
2．黒色土(10YR2／1)
3．２層と同じ
4．黒色土(10YR2／1)
5．４層と同じ
6．黒色土(10YR1.7／1)
7．オリーブ褐色土(2.5Y4／4)



ＳＫＴ３９　1．黒色土(10YR2／1)
2．黒褐色土(10YR3／1)
3．黒色土(10YR2／1)
4．にぶい黄橙色(10YR6／4)
5．黒褐色土(10YR3／1)
6．にぶい黄橙色(10YR6／4)
7．黒褐色土(10YR3／1)
8．にぶい黄褐色土(10YR5／4)
9．黒褐色土(10YR3／2)
10．にぶい黄橙色(10YR6／4)
11．黒色土(10YR2／1)
12．にぶい黄褐色土(10YR5／4)
13．黒褐色土(10YR3／2)
14．淡黄色土(５Y8／3)
15．黒褐色土(10YR3／1)

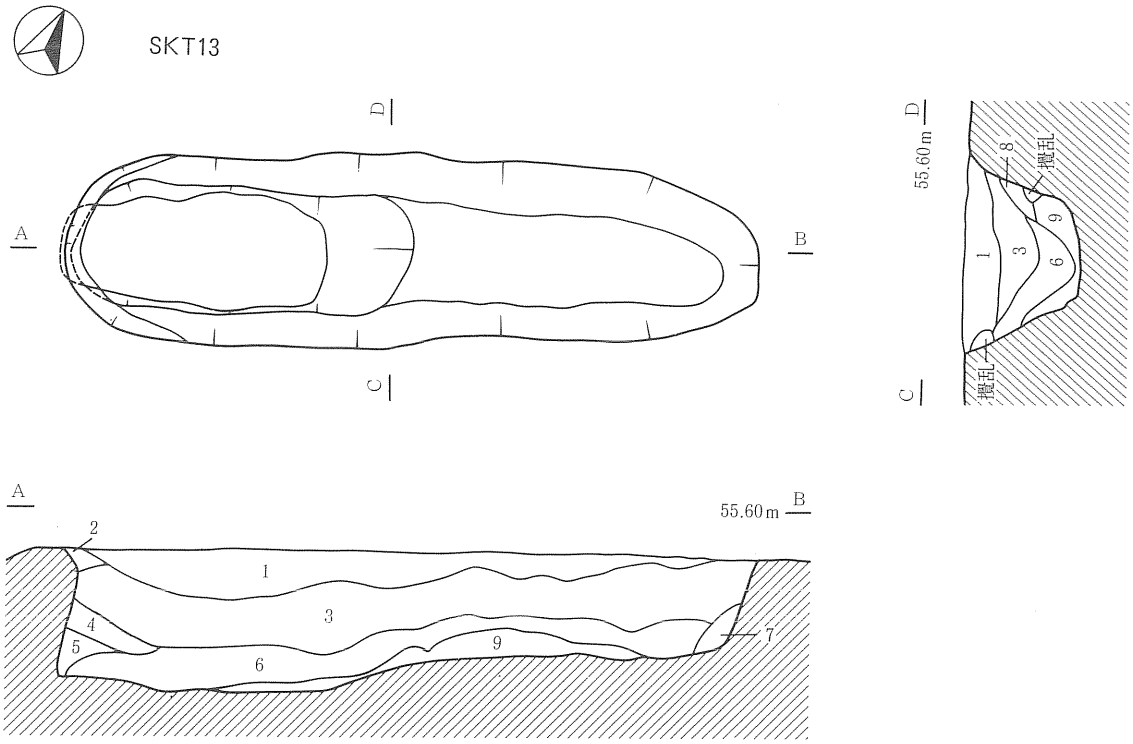


ＳＫＴ４５　1．黒色土(10YR2／1)
2．黒褐色土(10YR3／2)
3．黒褐色土(10YR3／2)
4．暗褐色土(10YR3／3)
5．黒褐色土(10YR3／1)
6．黒褐色土(10YR3／2)
7．暗褐色土(10YR3／3)
8．黒褐色土(10YR2／2)
9．黒褐色土(10YR3／1)

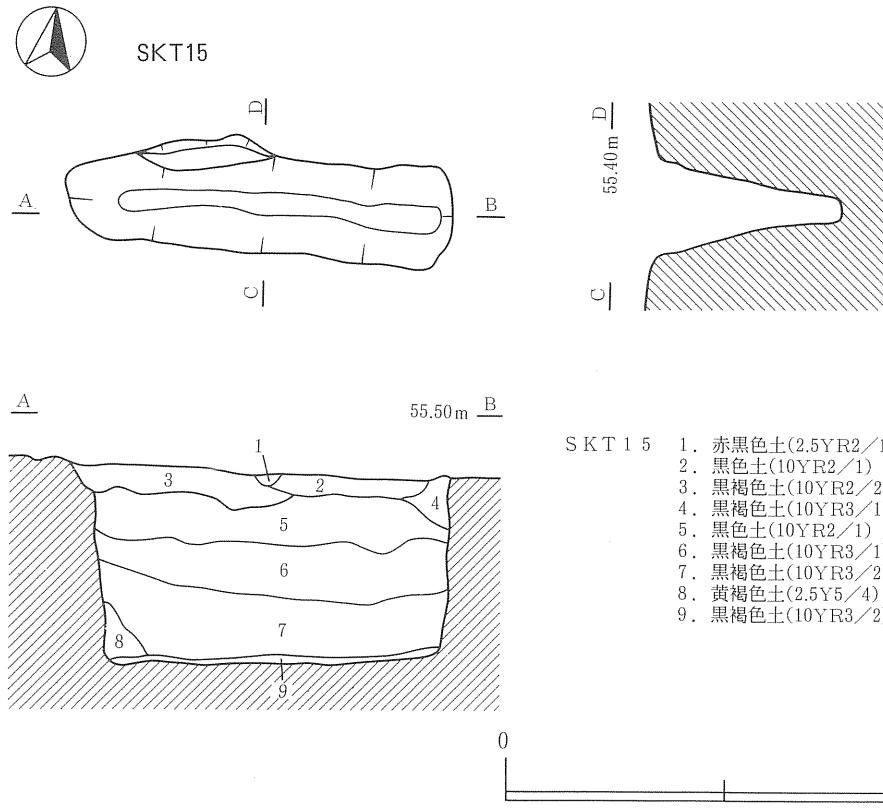


ＳＫＴ４７　1．黒色土(10YR2／1)
2．黒褐色土(10YR3／1)
3．黒褐色土(10YR3／2)
4．暗灰黄色土(2.5Y4／2)
5．黒色土(10YR2／1)
6．黒褐色土(10YR2／3)
7．暗灰黄色土(2.5Y5／2)
8．黒色土(10YR1.7／1)
9．黄褐色土(2.5Y5／4)
10．黒褐色土(10YR3／1)
11．黒褐色土(10YR3／1)
12．黒褐色土(2.5Y3／1)
13．黒褐色土(10YR3／1)

第17図　ＳＫＴ32・39・45・47

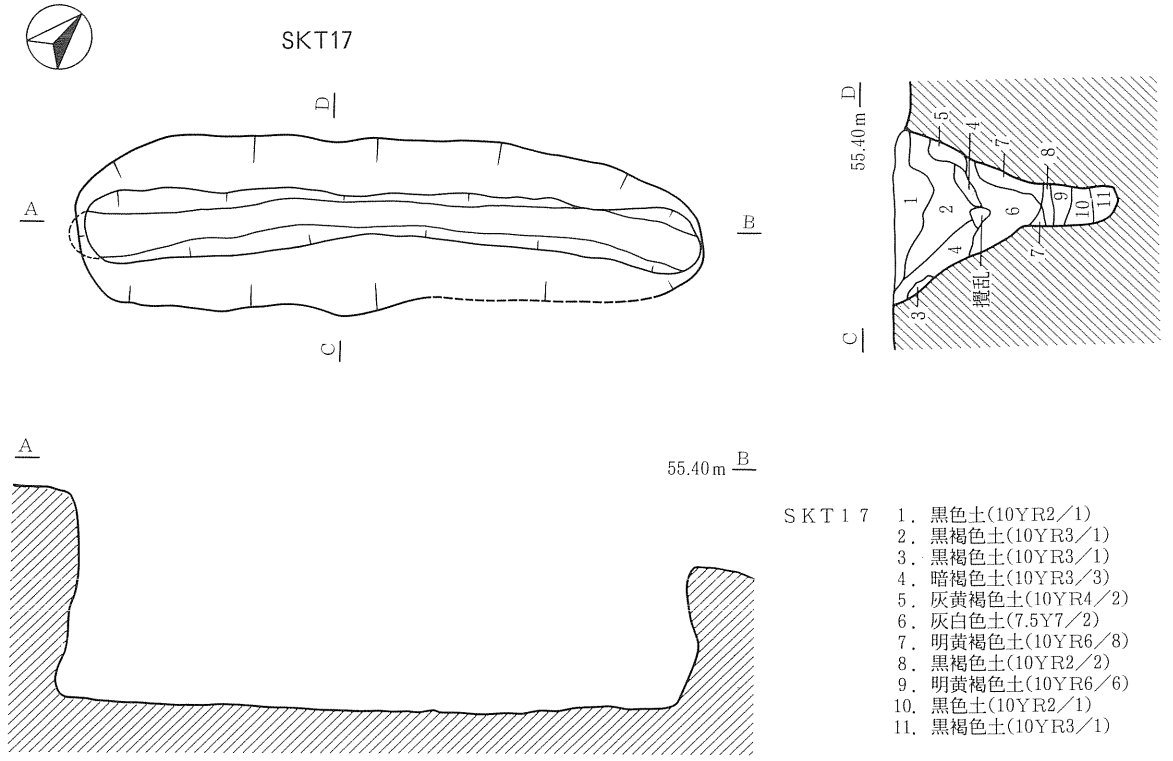


ＳＫＴ１３　1．黒色土(10YR2／1)
2．灰黄褐色土(10YR4／2)
3．黒色土(2.5Y2／1)
4．黒褐色土(2.5Y3／1)
5．明黄褐色土(10YR7／6)
6．黒褐色土(10YR3／1)
7．明黄褐色土(10YR7／6)
8．にぶい黄褐色土(10YR4／3)
9．明黄褐色土(10YR7／6)

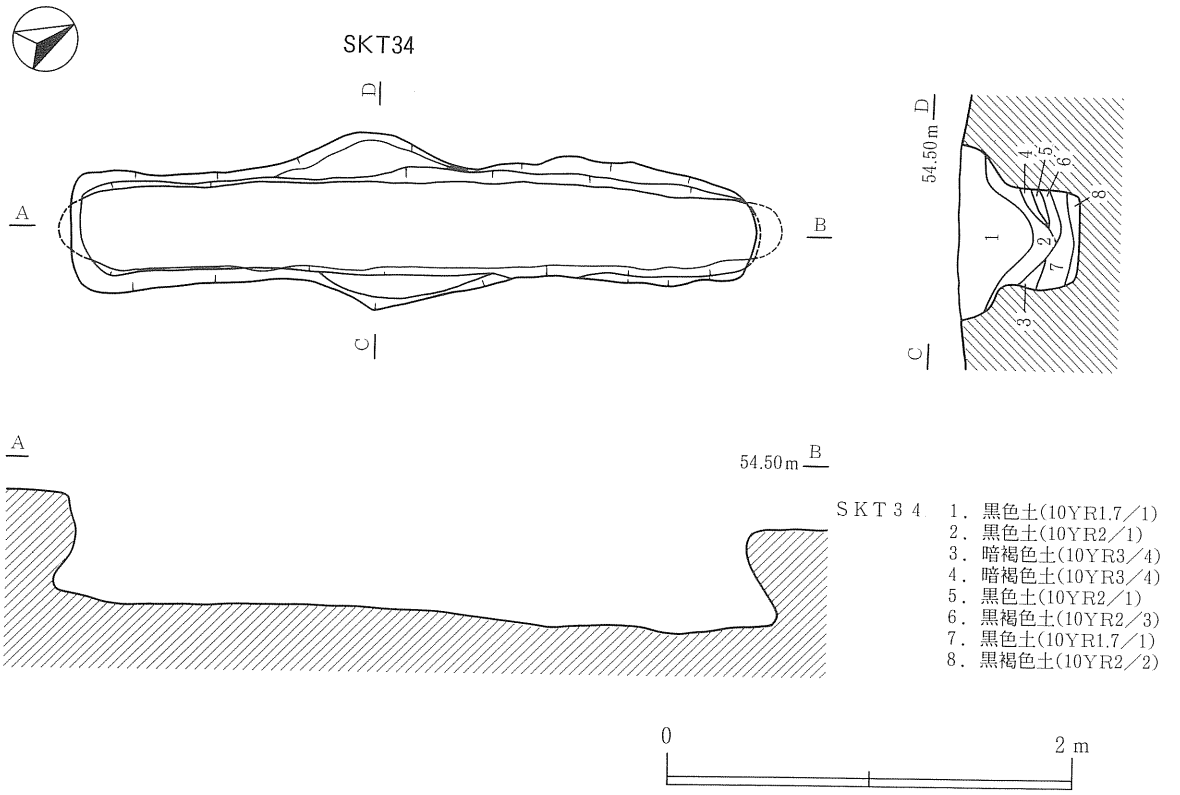


ＳＫＴ１５　1．赤黒色土(2.5YR2／1)
2．黒色土(10YR2／1)
3．黒褐色土(10YR2／2)
4．黒褐色土(10YR3／1)
5．黒色土(10YR2／1)
6．黒褐色土(10YR3／1)
7．黒褐色土(10YR3／2)
8．黄褐色土(2.5Y5／4)
9．黒褐色土(10YR3／2)

第18図　ＳＫＴ13・15

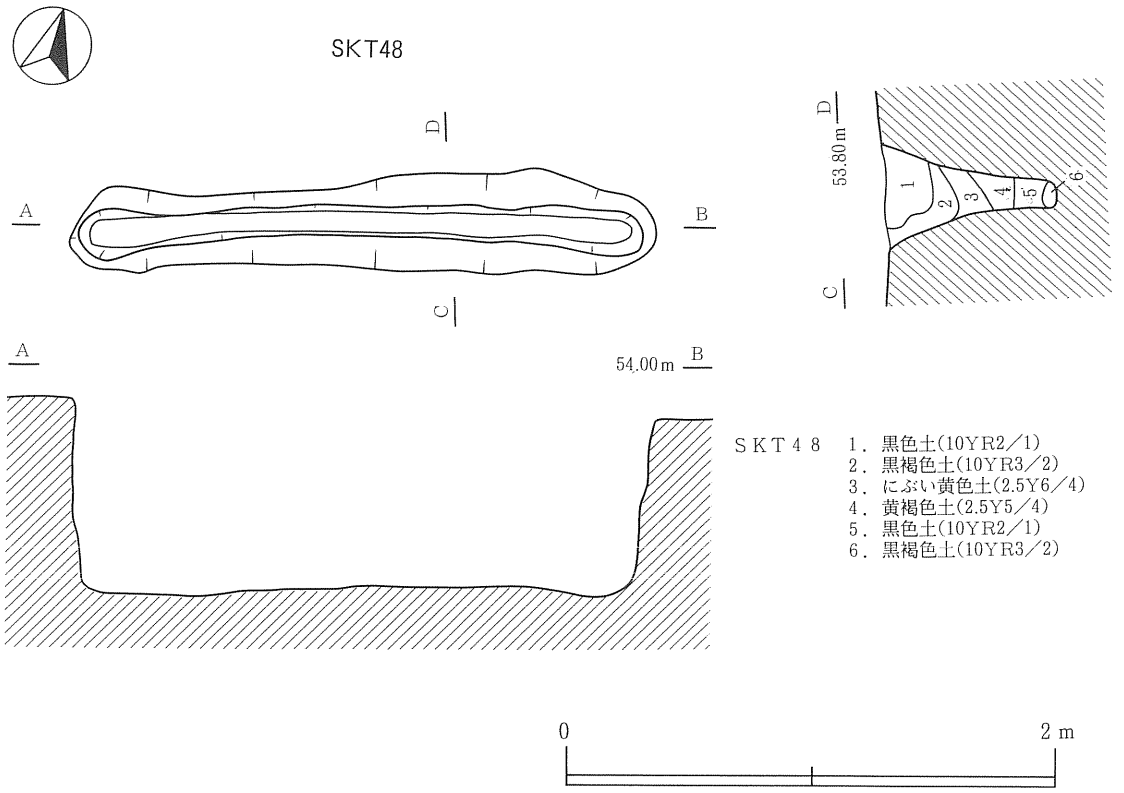


ＳＫＴ１７
1．黒色土(10YR2／1)
2．黒褐色土(10YR3／1)
3．黒褐色土(10YR3／1)
4．暗褐色土(10YR3／3)
5．灰黄褐色土(10YR4／2)
6．灰白色土(7.5Y7／2)
7．明黄褐色土(10YR6／8)
8．黒褐色土(10YR2／2)
9．明黄褐色土(10YR6／6)
10．黒色土(10YR2／1)
11．黒褐色土(10YR3／1)



ＳＫＴ３４
1．黒色土(10YR1.7／1)
2．黒色土(10YR2／1)
3．暗褐色土(10YR3／4)
4．暗褐色土(10YR3／4)
5．黒色土(10YR2／1)
6．黒褐色土(10YR2／3)
7．黒色土(10YR1.7／1)
8．黒褐色土(10YR2／2)

第19図　ＳＫＴ17・34



第20図　S.K T48

ＳＫＴ１７（第19図、図版９）

ＪＳ60・61、ＪＴ60・61グリッドで検出した。平面形は溝状を呈し、長軸3.11m、短軸0.88m、確認面からの深さ103cmであり、底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは急で、北東・南西壁は若干内傾しながら立ち上がっている。覆土は11層に分けられ、縄文土器胴部１点、石錘１点(第28図に掲載)、擦り石１点、剥片２点が出土した。

ＳＫＴ３４（第19図、図版９）

ＬＧ56・57グリッドで検出した。平面形は溝状を呈し、長軸3.39m、短軸0.88m、確認面からの深さ59cmである。底面は南西端から北東端へ若干傾斜している。壁は北西・南東壁がほぼ垂直に立ち上がり、北東・南西壁は内傾しながら立ち上がる。覆土は８層に分けられ、フレーク１点が出土した。

ＳＫＴ４８（第20図、図版９）

ＭＣ53グリッドで検出した。平面形は溝状を呈し、長軸2.43m、短軸0.41m、確認面からの深さは79cmである。底面はほぼ平坦で、東・西壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、北・南壁の立ち上がりは急である。覆土は６層に分けられ、剥片１点が出土した。

４．柱穴様ピット(第７図)

柱穴様ピットはＫＰ・ＫＱ60で４基、ＬＢ以西からＬＰ以東の北側で31基、ＬＴ以西からＭＯ以東の北側で76基の計111基を確認した。これらの柱穴様ピットに規則的な配列は認められず、柱痕も確認できなかった。覆土は黒色土(10YR1.7/1)～灰黄褐色土(10YR4/2)、暗灰黄色土(2.5Y5/2)～にぶい黄色土(2.5Y6/4)で、堅くしまっている単一層である。平面形は円形か楕円形を呈するものが多く、

第２表　柱穴様ピット計測一覧

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸	短軸	深さ	底面の標高	ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸	短軸	深さ	底面の標高
23	ＫＰ60	円形	20cm	18cm	7cm	54.55m	115	ＭＨ51	楕円形	23cm	19cm	20cm	53.48m
24	ＫＰ60	楕円形	23cm	20cm	13cm	54.48m	120	ＭＩ50	円形	17cm	15cm	19cm	53.56m
25	ＫＰ60	円形	20cm	19cm	7cm	54.52m	121	ＭＨ50	楕円形	22cm	17cm	11cm	53.58m
26	ＫＱ60	楕円形	20cm	17cm	6cm	54.47m	122	ＭＨ50	円形	16cm	15cm	11cm	53.61m
51	ＬＢ57	楕円形	28cm	21cm	53cm	53.83m	123	ME51・52	円形	24cm	22cm	9cm	53.62m
52	LG・LH56	円形	25cm	23cm	12cm	54.11m	124	ＭＥ51	円形	23cm	22cm	13cm	53.60m
53	ＬＨ55	円形	21cm	20cm	12cm	54.16m	125	MI・MJ52	円形	20cm	19cm	11cm	53.65m
54	ＬＨ55	楕円形	34cm	31cm	64cm	53.64m	126	ＭＪ51	円形	18cm	16cm	14cm	53.56m
55	ＬＨ55	楕円形	25cm	21cm	13cm	54.15m	127	ＭＪ51	〔円形〕	18cm	(15cm)	7cm	53.64m
56	ＬＨ55	円形	21cm	20cm	14cm	54.18m	128	ＭＩ51	楕円形	22cm	19cm	19cm	53.56m
57	ＬＨ56	円形	26cm	25cm	16cm	54.06m	129	ＭＪ52	円形	20cm	18cm	13cm	53.58m
58	ＬＫ54	楕円形	24cm	21cm	13cm	54.15m	130	ＭＨ51	楕円形	27cm	21cm	8cm	53.60m
59	LL・LM55	楕円形	37cm	34cm	9cm	54.17m	131	ＭＨ51	楕円形	21cm	16cm	14cm	53.53m
60	LM55・56	楕円形	25cm	21cm	13cm	54.03m	132	ＭＪ52	円形	19cm	18cm	7cm	53.65m
61	ＬＭ55	円形	25cm	23cm	9cm	54.08m	133	ＭＫ51	円形	21cm	20cm	11cm	53.59m
62	ＬＭ55	楕円形	59cm	47cm	45cm	53.68m	134	ＭＩ52	円形	23cm	22cm	11cm	53.65m
63	LM・LN55	楕円形	30cm	27cm	28cm	53.86m	136	ＭＦ52	円形	18cm	17cm	8cm	53.73m
64	ＬＭ54	楕円形	21cm	18cm	14cm	54.12m	138	ＭＫ51	楕円形	26cm	21cm	24cm	53.40m
65	ＬＭ51	楕円形	35cm	30cm	17cm	53.97m	139	ＭＬ51	円形	24cm	22cm	17cm	53.53m
66	ＬＮ53	楕円形	17cm	16cm	20cm	53.89m	140	LT・MA49	円形	17cm	16cm	8cm	53.76m
67	ＬＮ53	円形	25cm	23cm	9cm	53.98m	141	ＭＡ49	円形	16cm	15cm	7cm	53.81m
68	LN53・54	楕円形	23cm	21cm	51cm	53.53m	142	ＭＡ49	楕円形	27cm	20cm	11cm	53.78m
69	ＬＮ54	円形	26cm	26cm	59cm	53.44m	143	ＭＡ50	円形	13cm	10cm	6cm	53.81m
71	ＬＯ53	楕円形	30cm	28cm	49cm	53.59m	144	ＬＴ50	楕円形	28cm	23cm	10cm	53.73m
72	ＬＯ53	楕円形	34cm	27cm	26cm	53.68m	149	ＭＤ51	円形	13cm	12cm	8cm	53.65m
76	ＬＪ56	円形	26cm	25cm	17cm	54.08m	150	ＭＥ51	円形	15cm	13cm	12cm	53.59m
77	ＬＪ56	楕円形	34cm	28cm	12cm	54.11m	151	ＭＥ52	円形	19cm	18cm	9cm	53.70m
78	ＬＪ56	楕円形	24cm	18cm	8cm	53.96m	152	ＭＥ52	円形	15cm	13cm	5cm	53.74m
79	ＬＪ57	楕円形	29cm	25cm	8cm	54.04m	153	ＭＥ53	円形	16cm	14cm	7cm	53.71m
80	ＬＫ55	楕円形	23cm	19cm	9cm	54.12m	154	ＭＥ51	円形	15cm	14cm	6cm	53.65m
81	LK・LL56	楕円形	45cm	42cm	14cm	54.06m	155	ＭＥ51	楕円形	18cm	15cm	9cm	53.60m
82	ＬＫ52	円形	24cm	23cm	10cm	54.16m	156	ＭＥ51	円形	21cm	19cm	11cm	53.59m
83	ＬＬ52	楕円形	21cm	19cm	12cm	54.10m	157	ＭＦ51	円形	12cm	11cm	9cm	53.68m
84	ＬＬ52	楕円形	17cm	15cm	9cm	54.15m	158	ＭＧ52	円形	15cm	14cm	5cm	53.75m
92	ＭＤ52	楕円形	25cm	22cm	15cm	53.68m	159	ＭＦ51	円形	22cm	22cm	11cm	53.66m
93	ＭＤ52	円形	24cm	23cm	7cm	53.77m	160	ＭＧ51	円形	15cm	14cm	8cm	53.66m
94	ＭＤ52	楕円形	24cm	20cm	23cm	53.56m	161	ＭＧ51	円形	32cm	32cm	10cm	53.62m
95	MD51・52	楕円形	26cm	22cm	19cm	53.62m	162	MF・MG51	円形	13cm	12cm	8cm	53.61m
96	ＭＥ51	円形	21cm	21cm	11cm	53.65m	163	ＬＴ49	楕円形	16cm	12cm	8cm	53.74m
97	ＭＥ51	円形	31cm	30cm	7cm	53.65m	164	ＭＨ52	円形	17cm	16cm	9cm	53.61m
98	ＭＦ51	円形	21cm	21cm	11cm	53.67m	165	ＭＩ49	円形	18cm	16cm	16cm	53.58m
99	ＭＦ51	楕円形	22cm	19cm	9cm	53.66m	166	ＭＩ50	円形	14cm	13cm	15cm	63.51m
100	ＭＦ52	楕円形	24cm	21cm	12cm	53.69m	167	ＭＩ50	円形	18cm	15cm	5cm	53.64m
101	ＭＦ52	円形	23cm	23cm	14cm	53.65m	168	ＭＧ51	円形	16cm	15cm	9cm	53.61m
102	ＭＦ53	円形	21cm	20cm	10cm	53.71m	169	ＬＴ49	円形	18cm	17cm	10cm	53.76m
103	MF・MG52	円形	20cm	19cm	10cm	53.67m	170	ＭＢ50	円形	22cm	19cm	8cm	53.75m
104	ＭＧ52	楕円形	21cm	18cm	14cm	53.61m	171	ＭＤ51	円形	17cm	16cm	5cm	53.67m
105	ＭＧ52	円形	21cm	21cm	23cm	53.53m	172	ＭＤ51	円形	13cm	13cm	7cm	53.64m
106	ＭＧ51	円形	19cm	17cm	8cm	53.68m	175	ＭＭ49	円形	18cm	16cm	16cm	53.58m
107	ＭＧ51	楕円形	21cm	18cm	19cm	53.53m	177	ＭＭ48	円形	14cm	14cm	17cm	53.51m
108	ＭＧ51	楕円形	21cm	18cm	19cm	53.56m	178	ＭＭ48	楕円形	18cm	15cm	16cm	53.57m
109	ＭＨ52	円形	21cm	20cm	11cm	53.61m	179	ＭＭ48	楕円形	19cm	16cm	12cm	53.65m
110	ＭＨ52	楕円形	27cm	25cm	9cm	53.61m	180	ＭＭ47	円形	12cm	12cm	7cm	53.59m
112	ＭＨ51	円形	21cm	20cm	11cm	53.63m	181	ＭＮ48	楕円形	16cm	12cm	18cm	53.44m
113	ＭＨ52	楕円形	17cm	15cm	9cm	53.65m	182	ＭＮ48	円形	15cm	14cm	11cm	53.56m
114	ＭＨ51	円形	15cm	14cm	9cm	53.67m							

※〔 〕内の平面形は推定形で、( )内の数値は残存値である。

遺物はほとんど出土せず、その時期を明確にすることができなかった。また、個々の柱穴様ピットについては第２表にまとめた。

５．溝跡

ＳＤ０１（第７図）

調査区東部で確認した。西－東に延びる溝で、ＫＥ60グリッド付近で南東方向に曲がり調査区外に入り込んでいる。残存部の長さは67.60ｍ、幅59～73㎝、深さ６～11㎝で、覆土は地山浮石粒子を含む黒色土である。断面形は鍋底形を呈する。縄文土器胴部２点、石錘２点(第28図に掲載)、剥片13点が出土した。

ＳＤ０９（第７図）

調査区東部で確認され、ＳＩ02・03、ＳＫＴ13・20を切っている。ＳＤ01の北側を並行して走る溝で、調査区外に入り込んでいる。残存部の長さは75.20ｍ、幅24～48㎝、深さ５～11㎝で、覆土は地山浮石粒子を含む黒色土である。断面形は逆台形を呈する。擦り石１点が出土した。

６．その他の遺構

ＳＸ４９（第21図）

ＬＴ50グリッドで検出した。第Ⅱ層で砕片・剥片が長軸1.46ｍ×短軸1.31ｍの範囲に集中して出土し、その砕片・剥片を取り上げたところ、本遺構のプランを確認することができた。平面形は楕円形を呈し、長軸0.86ｍ、短軸0.69ｍ、確認面からの深さ６㎝(南東側)～12㎝(北西側)である。底面は南東側から北西側へ緩やかに傾斜している。壁の立ち上がりは急である。覆土は２層に分けられた。縄文土器胴部２点(うち１点は第23図に掲載)、スクレイパー１点(第28図に掲載)、器種不明石器１点(第28図に掲載)、砕片・剥片476点が出土した。

ＳＸ５０（第22図、図版10）

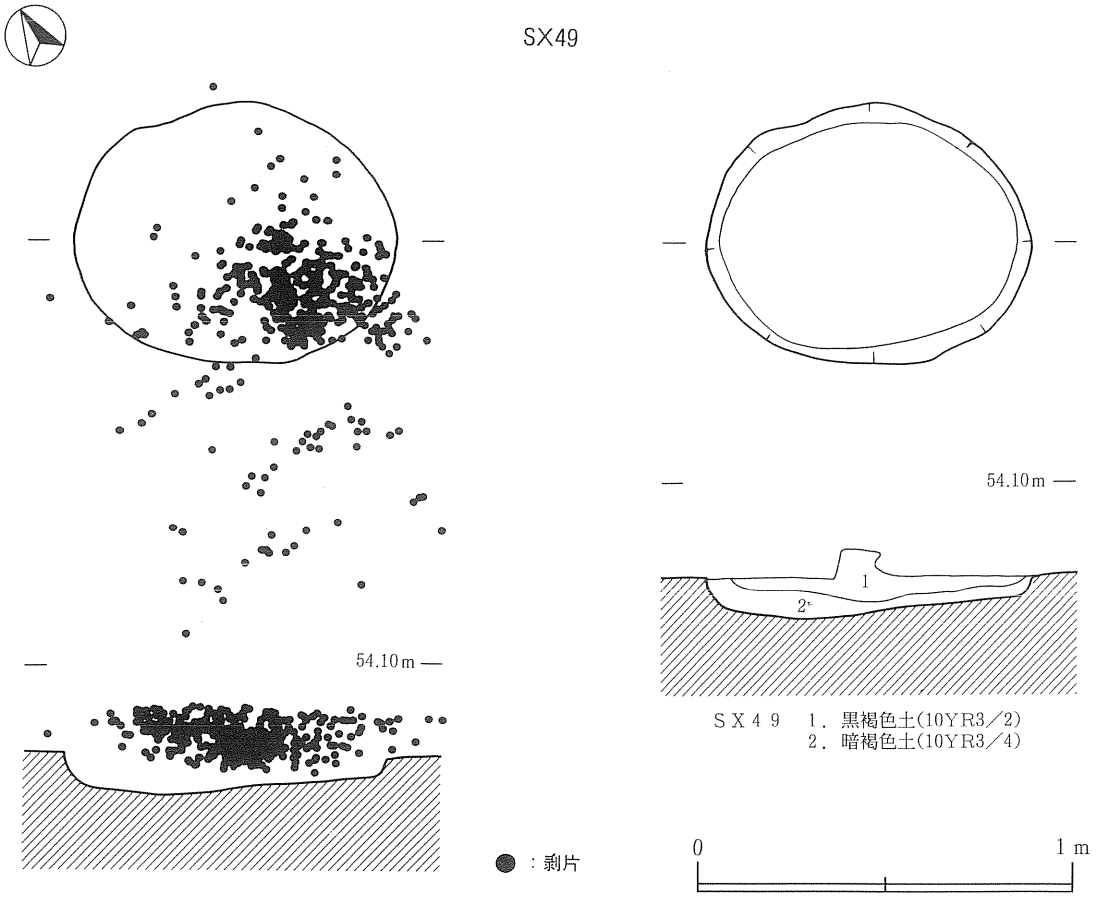
ＬＭ52グリッドで検出した。ＳＸ74・75を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸2.77ｍ、短軸1.40ｍ、確認面からの深さ19㎝である。底面にはやや凹凸がある。壁の立ち上がりは急である。覆土は４層に分けられ、縄文土器胴部３点、擦り石５点(うち１点は第28図に掲載)、剥片55点が出土した。

ＳＸ７４（第22図、図版10）

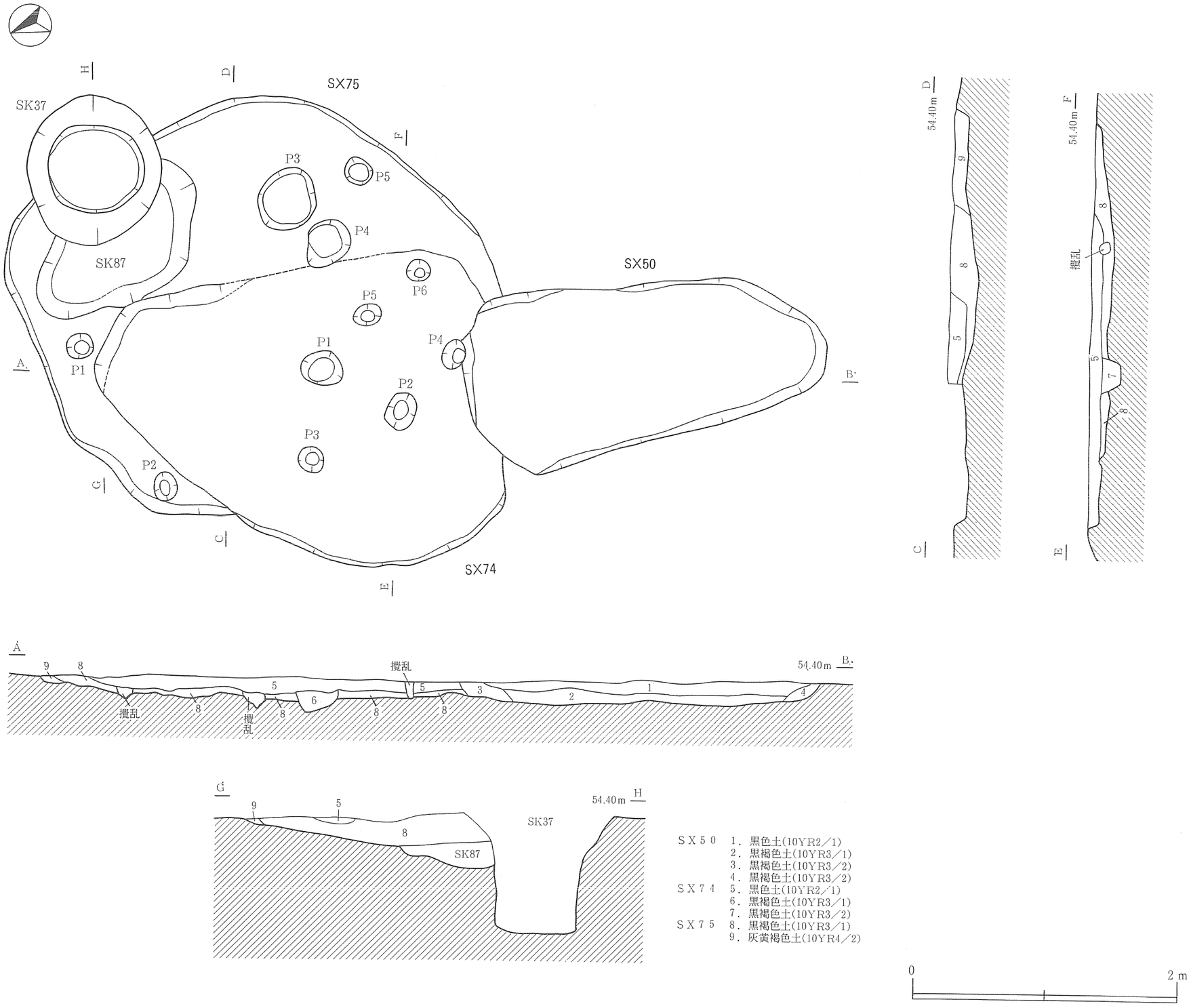
ＬＭ52・53グリッドで検出した。ＳＸ50に切られ、ＳＸ75を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸3.31ｍ、短軸2.47ｍ、確認面からの深さ13㎝である。底面にはやや凹凸があり、径18～33㎝、深さ７～16㎝のピットが６個穿たれている。壁の立ち上がりは急である。覆土は３層に分けられ、縄文土器胴部１点、剥片11点が出土した。

ＳＸ７５（第22図、図版10）

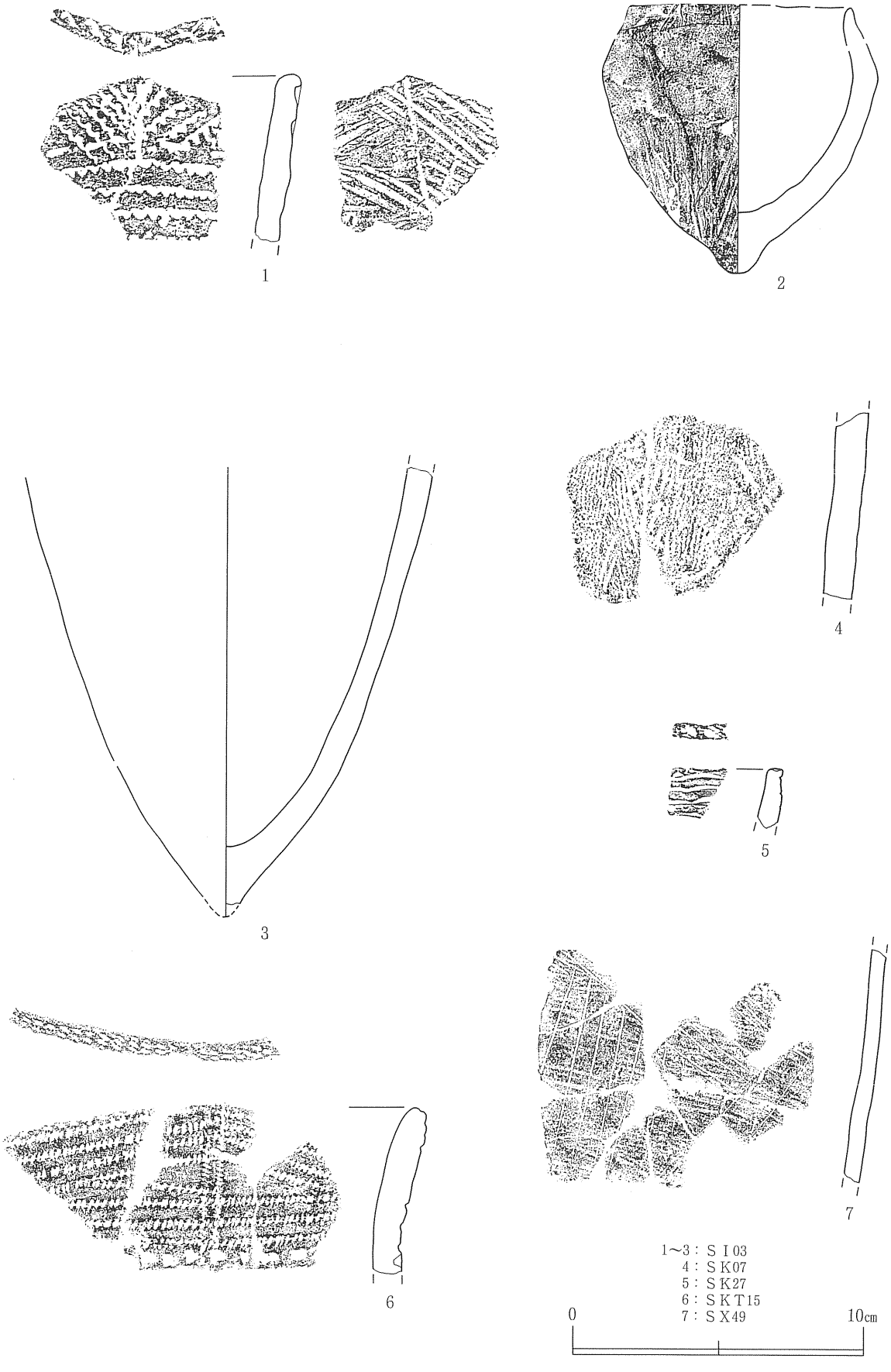
ＬＬ52・53、ＬＭ52・53グリッドで検出した。ＳＫ87を切り、ＳＫ37とＳＸ50・75に切られている。その全容を把握できなかったが、現状から径3.33ｍほどの円形を呈すると推測される。確認面からの深さ22㎝である。底面はやや凹凸があり、底面には径20～50㎝、深さ５～14㎝のピットが５個穿たれている。覆土は６層に分けられ、遺物は出土しなかった。



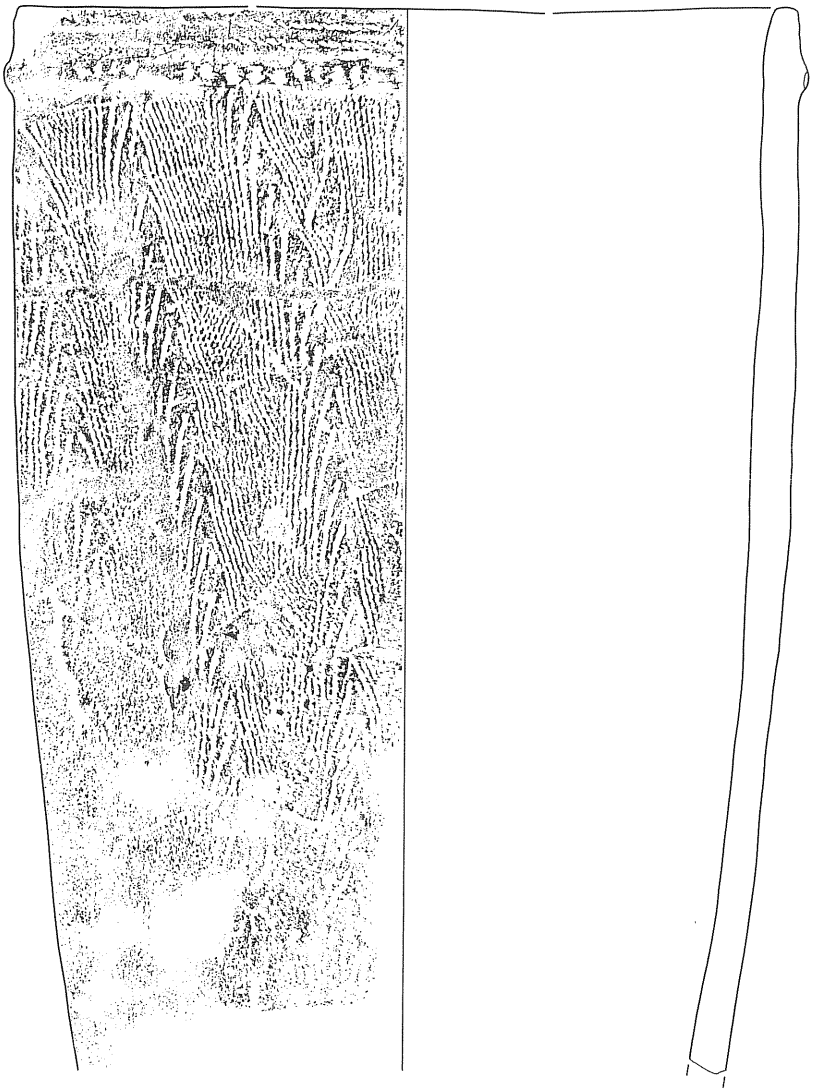
第21図　ＳＸ49



第22図　ＳＸ50・74・75



第23図　遺構内出土土器（１）

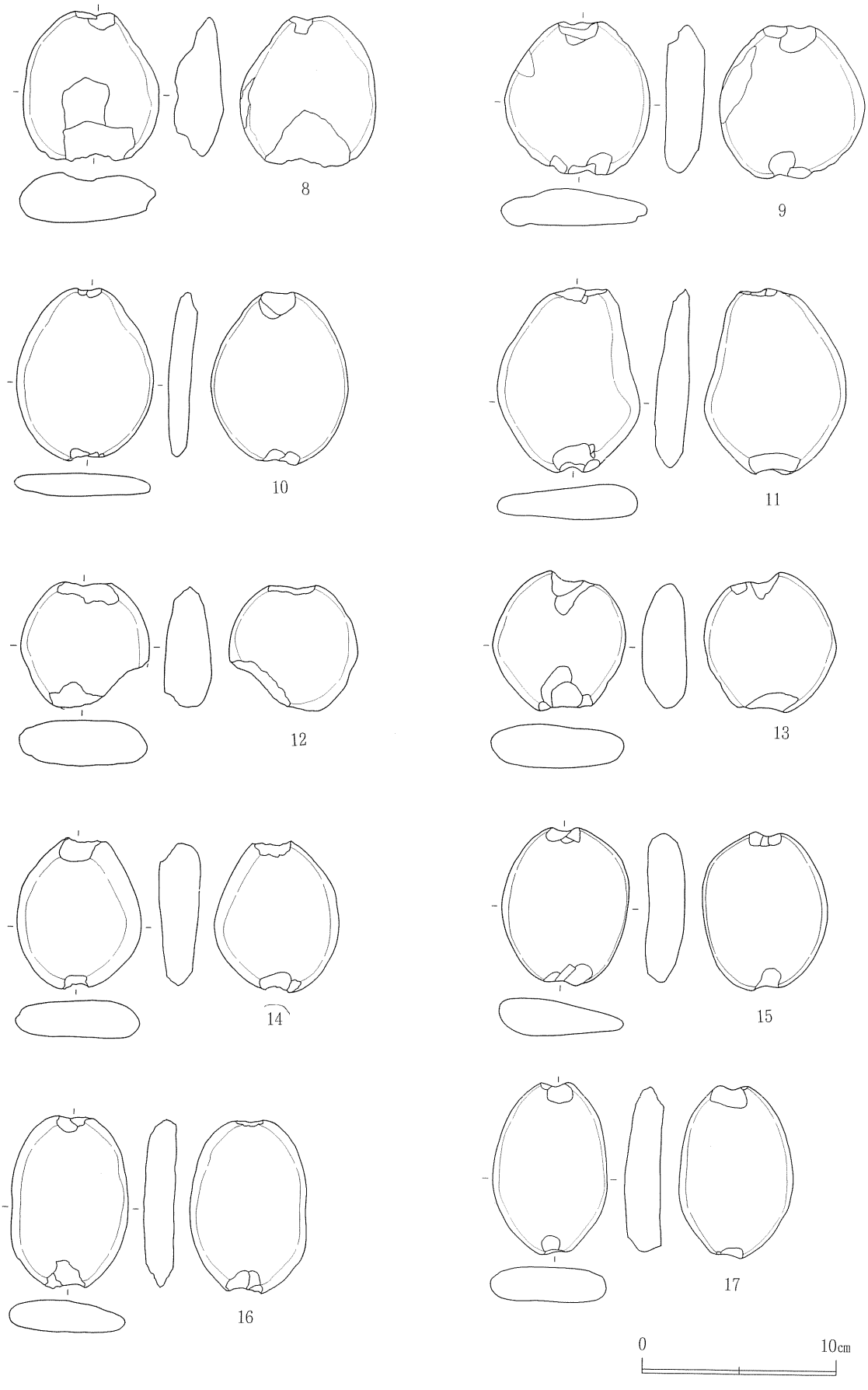


8

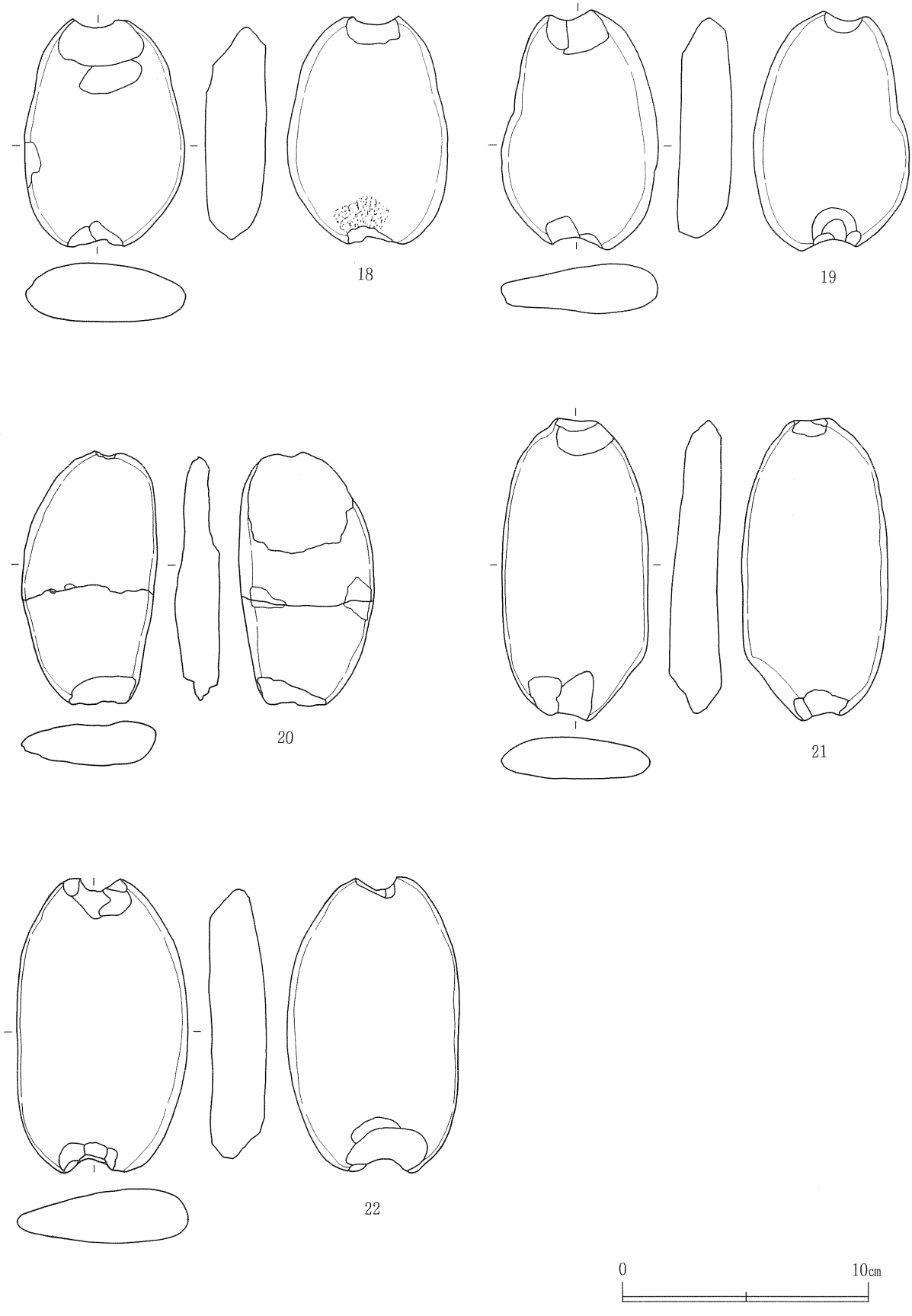
0　10cm

第24図　遺構内出土土器（２）〔ＳＫＴ15〕

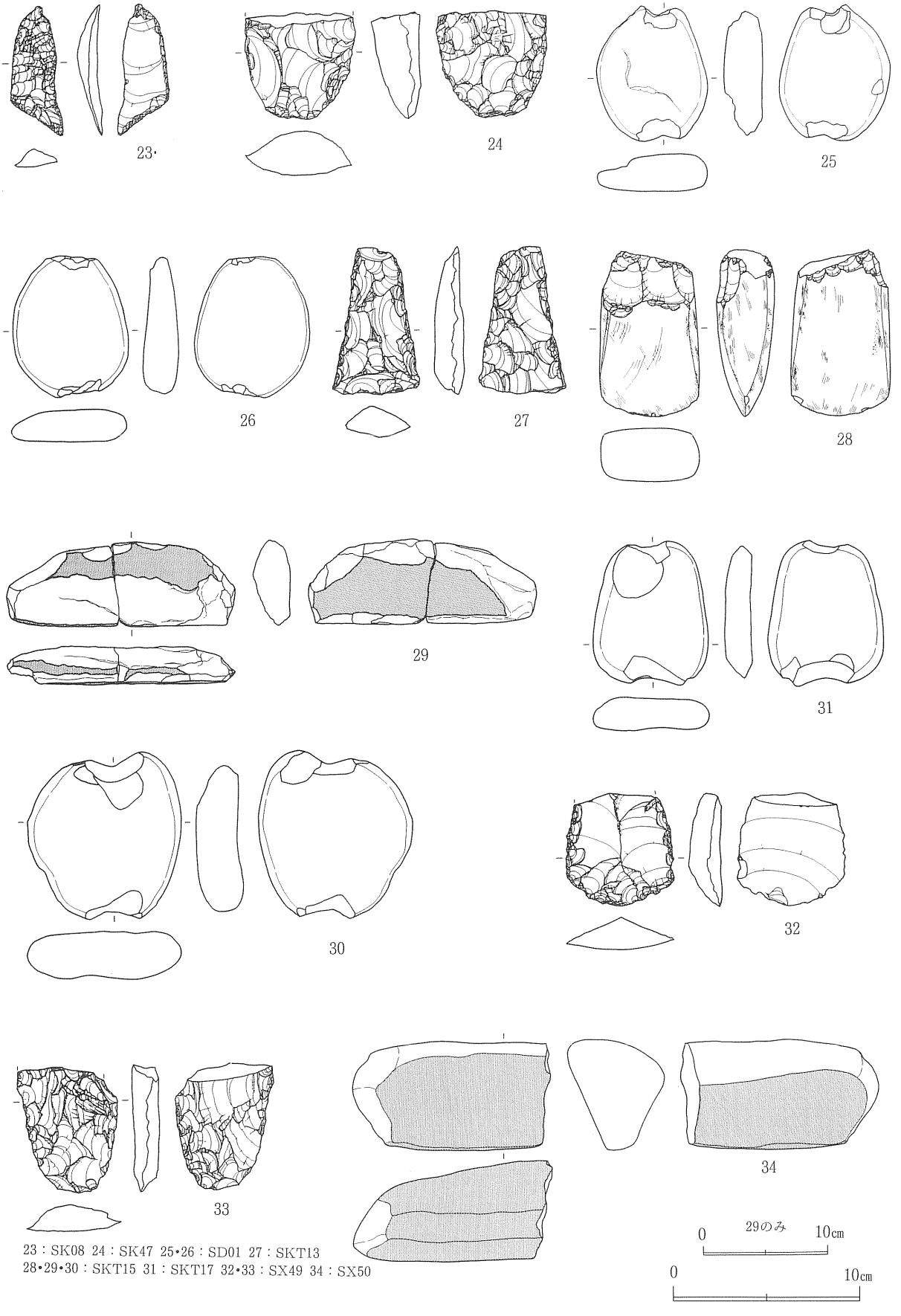
第25図　遺構内出土石器（１）



第26図　遺構内出土石器（２）〔ＳＩ03〕



第27図　遺構内出土石器（３）〔ＳＩ03〕



23：SK08 24：SK47 25•26：SD01 27：SKT13
28•29•30：SKT15 31：SKT17 32•33：SX49 34：SX50

第28図　遺構内出土石器（４）

第３表　遺構内出土石器計測一覧

挿図番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	挿図番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材
26－1	ＳＩ02	磨製石斧	69.0	39.0	24.5	90.19	安山岩	28－18	ＳＩ03	石錘	93.0	65.0	25.0	155.83	安山岩
2	ＳＩ03	石匙	68.0	43.0	7.0	10.63	頁岩	19	ＳＩ03	石錘	97.0	64.0	22.0	162.11	安山岩
3	ＳＩ03	剥片石器	62.5	39.5	13.0	19.95	頁岩	20	ＳＩ03	石錘	103.0	56.0	17.0	132.56	安山岩
4	ＳＩ03	石匙	95.0	30.5	17.0	24.02	頁岩	21	ＳＩ03	石錘	123.0	60.0	21.0	188.34	安山岩
5	ＳＩ03	磨製石斧	41.0	54.0	21.0	65.11	花崗岩	22	ＳＩ03	石錘	115.0	70.0	24.0	231.65	安山岩
6	ＳＩ03	石錘	63.0	56.0	21.0	89.55	安山岩	29－23	ＳＫ08	石匙	70.5	28.5	12.0	13.08	頁岩
7	ＳＩ03	石錘	54.0	63.5	17.0	81.59	安山岩	24	ＳＫ47	器種不明	57.0	59.5	26.5	83.30	頁岩
27－8	ＳＩ03	石錘	88.0	69.0	26.0	146.58	安山岩	25	ＳＤ01	石錘	74.0	60.0	21.0	97.59	頁岩
9	ＳＩ03	石錘	79.0	75.0	20.0	112.83	安山岩	26	ＳＤ01	石錘	76.5	62.0	19.0	128.28	砂岩
10	ＳＩ03	石錘	89.0	70.0	14.0	122.59	安山岩	27	ＳＫＴ13	石箆	80.0	47.0	16.0	54.73	頁岩
11	ＳＩ03	石錘	95.0	74.0	17.5	138.66	安山岩	28	ＳＫＴ15	磨製石斧	89.0	54.0	31.5	248.67	凝灰岩
12	ＳＩ03	石錘	65.0	66.0	24.5	134.24	安山岩	29	ＳＫＴ15	半円状扁平	68.0	184.0	30.0	520.77	安山岩
13	ＳＩ03	石錘	72.0	68.0	23.0	127.74	安山岩	30	ＳＫＴ15	石錘	90.0	83.0	26.0	226.82	安山岩
14	ＳＩ03	石錘	79.0	64.0	21.5	138.11	安山岩	31	ＳＫＴ17	石錘	78.0	62.0	16.0	101.86	安山岩
15	ＳＩ03	石錘	82.0	65.0	20.0	131.61	安山岩	32	ＳＸ49	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	60.0	58.0	18.0	57.90	頁岩
16	ＳＩ03	石錘	89.0	60.5	17.0	112.31	安山岩	33	ＳＸ49	器種不明	69.0	54.0	15.0	55.80	頁岩
17	ＳＩ03	石錘	89.0	59.0	20.0	130.19	安山岩	34	ＳＸ50	磨石	59.0	107.0	52.5	381.47	安山岩

※ 半円状扁平＝半円状扁平打製石器

第２節　遺構外出土遺物

遺構外からは縄文時代の土器・土製品と石器・石製品および剥片などが出土した。土器は中コンテナ(規格54×34×10cm)で14箱分出土した。このうち全体の形状を把握できる資料は、ほぼ完形で出土した縄文時代晩期の注口土器１個と、接合復原によるもの３個で、他はすべて破片資料である。土製品は円盤状土製品が２点出土した。石器は石鏃17点・石槍10点・石匙61点・スクレイパー56点・トランシェ様石器28点・石箆70点・磨製石斧５点・石錘308点・半円状扁平打製石器３点・擦り石33点・凹石12点・石皿２点の計605点出土した。石製品は２点で、剥片などは中コンテナで２箱分出土した。

土器の記述にあたっては文様や胎土などから時期別にして第Ⅰ群から第Ⅳ群に分けて記載した。石器は器種・形態により分類して、その大きさ等は、第４・５表に記載した。

１．土器

第Ⅰ群土器(第29～39図、図版10～20)：縄文時代早期中葉と思われる土器である。

９～11は接合と図上復原によって、器形を把握できた資料である。これらは尖底深鉢形土器であり、10・11の底部は乳頭状を呈する。９・11は両面に貝殻条痕文、10は外面のみに貝殻条痕文が施されている。９は底部を欠いているが、その底部は10・11と同様に乳頭状を呈すると推察される。また、10は内面底部から胴部上位に煤状炭化物が付着しており、11の外面胴部には貝殻殻表圧痕文が施されている。図上復元によるが、９は口径6.6cm、器高9.4cm、10は口径8.9cm、器高14.0cm、11は口径10.2cm、器高12.3cmである。

12～57・59～100は尖底深鉢形土器と思われる口縁部から胴部上半の破片、101は胴部上半から底部の破片、102・103は胴部下半の破片であり、内面には貝殻条痕文が認められる。16～18、22と23は各々同一個体である。12は口唇に刻み目が斜めに施文されている。両面は無文で箆ナデによる調整痕が認

められる。また、両面には煤状炭化物が付着している。13～21の口縁部外面に貝殻腹縁圧痕文が横位に施文されており、13・16・17の胴部外面には貝殻殻頂圧痕文、14の胴部外面には貝殻殻表圧痕文が施されている。また、14には口縁部と胴部を画して口縁と平行に２条の刺突列、口唇には刻み目が施されている。17・18・20の口唇にも刻み目が認められ、17の口縁部にはつまみ出しによる突起がみられる。　22～29のによる羽状文が横位に施されており、22・23・25の口唇には原体は判然としないが刻み目が施されている。24には口縁部と胴部を画する刺突列が口縁と平行に１条施されている。28の口唇には細い棒状工具によると思われる沈線が断続的に施されており、口縁部には補修孔が１孔みられる。29の口縁には刻み目が付けられている。

30～41も口縁部外面に貝殻腹縁圧痕文が施されているが、30～37は斜位、38・39は斜位と横位、40は縦位、41は縦位と斜位に付けられている。また、30～35・38～40は口唇に刻み目が付けられていて、これらのうち、31・33・40は貝殻腹縁圧痕による刻みとわかったが、他は原体不明である。

42～48は口縁部外面に貝殻殻頂圧痕文が施されており、43の口唇には貝殻条痕文が認められた。

49～57は口縁部外面と内面に貝殻条痕文が施されており、49～52は横位に、53～56は縦位に、57は斜位に付されている。また、56は口唇に貝殻腹縁圧痕文が施されている。58は尖底深鉢形土器の胴部の破片である。器面上位には貝殻腹縁圧痕文、その下には貝殻腹縁押し引き文が施されている。

59・60、65・66は各々同一個体である。59～73は口縁部外面に貝殻殻表圧痕文が施されており、60・65～68・70・71の口唇にも貝殻殻表圧痕文が施されている。また、61・62の器面は磨滅していて不鮮明であるが、貝殻殻表圧痕文がわずかに認められる。

74～89は口縁部外面に貝殻条痕文が施されている。81・82・85の口唇部は貝殻殻表圧痕文が施され、74・83・89の口唇部にわずかにみられる刻み目の原体は不明である。

90～103は外面が無文である。97・98の口唇部に付された原体は不明である。99には補修孔が１孔ある。101は口縁部と底部先端が欠けているが、乳頭状を呈するものと推察される。まばらに煤状炭化物が付着している。

104～107・111～115は尖底深鉢形土器の底部の破片であり、乳房状を呈している。108・109・116は胴部下半から底部の破片で、底部先端は乳房状を呈している。図上復元によるが、口径は大きいもので11.6㎝、小さいもので3.1㎝、器高は大きいもので10.5㎝、小さいもので2.1㎝である。

第Ⅱ群土器(第40～44図、図版21～24)：帰属時期が縄文時代早期から前期に属すると思われる土器である。すべて深鉢形土器の破片である。

117は口縁部から胴部の破片で、外面にはＬＲＬ縄文が施されており、内面には箆ナデによる痕跡が認められる。 胎土に繊維を含んでいる。119～121は口縁部から胴部上半の破片であり、胎土に繊維を含み軽い。119の口縁部には棒状工具による押し引きが横位に10条平行に施文され、胴部には０段多条のＬＲ縄文が施されている。120の口縁部には棒状工具による押し引きが横位に９条平行に施文され、胴部には磨滅のため原体が不明だが縄文が施されている。121の口縁部にはＬＲＬ縄文が、胴部には不整撚糸文(原体Ｒ？）が施されている。122～138は口縁部の破片で、137を除いて胎土に繊維を含んでいる。122・123は同一個体である。その口縁部にはＬＲＬ縄文が施されている。124の口縁部には沈線が５段施され、その下には原体は不明だが縄文が施されている。125はＬ撚糸文が施されており、補修孔が１孔認められる。126・127・131・133・137は原体は不明だが縄文が施されてい

る。128はループ文が施されている。129・132はＬＲ縄文が施されている。130・134・136・138はＲＬ縄文が施されている。また、138の口唇部の原体は不明である。139は胴部、140は口縁部の破片である。いずれも表裏縄文土器で、139の両面にはＲＬ縄文が、140の口唇と両面にはＬＲ縄文が施されている。141～147は口縁部の破片である。141・142はＲＬ縄文、143・145は不整撚糸文(原体Ｒ？)が施されている。141の口唇には刺突列が付されていると思われる不鮮明で原体は不明である。144は原体が不明だが縄文が施文されている。146は口縁に平行にＬ原体の側面圧痕文が３条、頸部には半截竹管文が横位に施されている。また、胴部には木目状撚糸文が縦位に施されている。147は口縁部の破片で、口唇部には等間隔で刻み目が、無文地の胴部には竹管文が施されている。148は胴部破片で原体は不明だが縄文が施文されている。なお、139～146・148の胎土には繊維が含まれている。

149は口縁部から胴部の破片である。口縁に平行にＲ原体の結条体圧痕文が３条、その直下には口縁に平行に刺突列が施されており、胴部には木目状撚糸が施文されている。150は胴部から底部の破片で、原体は不明だが縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。151～165は底部の破片で、151～163・165は胎土に繊維を含んでいる。151・153はＬＲ縄文が施されており、153の外面上半には煤状炭化物が付着している。152は両面に原体が不明だが条痕文が、底面には網目状の文様が認められる。154は底面にはＬ撚糸文が施され、外面にも磨滅してはっきりしないが、底面と同様にＬ撚糸文が施文されていると思われる。155は斜めに縄文を施し、さらに棒状工具で細い沈線を縦方向に加えて縄文と交差させて、格子目状の文様を表出している。底面には棒状工具による細い沈線が認められる。156・157には原体が不明だが縄文が施されおり、157の底面には原体が不明だが縄文が認められる。158～160の外面と底面には原体は判然としないが縄文が施されている。161はＲＬ縄文が施されており、底面には原体が不明だが縄文が認められる。162は原体が不明だが縄文が施されている。163にはＲ撚糸文が施文されている。164はミニチュア土器の底部である。165は土器製作時に敷かれたと思われる編物の圧痕が残っている。出土した底部資料は、大半が破片で底径の値は図上復元によるが、大きいもので11.0㎝、小さいもので6.6㎝である。時期は、縄文時代前期と考えられる。

166・167は円盤状土製品である。両方とも素材とした土器片の縁辺を加工して、円形状に仕上げており、その器面の中央に孔を１つ穿つ。孔は両面から穿ち貫通させている。また、いずれも縄文が施されている土器片で、胎土には繊維を含んでいる。

第Ⅲ群土器(第40図118、第45図168・171～178、図版21・25)：縄文時代後期と思われる土器である。大半は深鉢形土器の破片である。

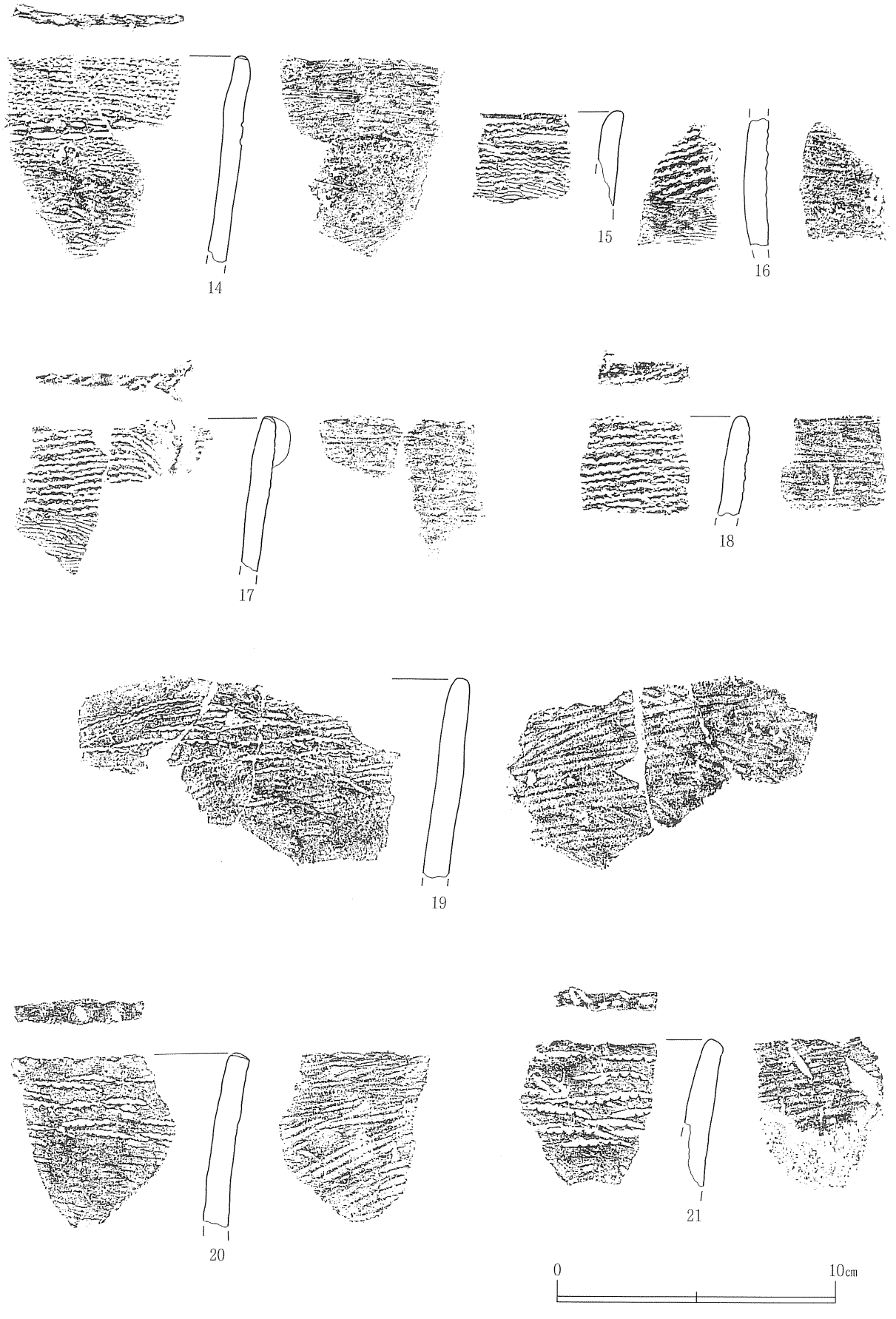
118は胴部の破片である。外面にはＬＲ縄文が施されている。168は深鉢形土器の口縁部から胴部の破片である。外面にはＬＲ縄文が施されており、部分的に煤状炭化物が付着している。171～173は口縁部の破片である。171の口縁部上端は無文で、その直下にはＬＲ縄文が施文されている。外面には煤状炭化物が付着している。172・173は原体は判然としないが縄文が施されており、173の外面の一部には煤状炭化物が付着している。174は口縁部から胴部の破片で、頸部が「く」字状に屈曲し口縁部が外反している。文様は器面が磨滅しており判然としないが、頸部には口縁に平行に１条の沈線が施されている。175・176は胴部から底部の破片である。175の底面は鍋底状を呈しており、外面にはＬＲ縄文が施されている。176の底面は若干上げ底になっており、外面には不鮮明であるがＬＲ縄文が不定方向に施されている。内外面には煤状炭化物が付着している。177は台付土器の台部の破片で

ある。外面に文様は施されておらず、内面には黒班がみられる。178は底部の破片である。底面はほぼ平らで、外面にはＬＲ縄文が施文されている。

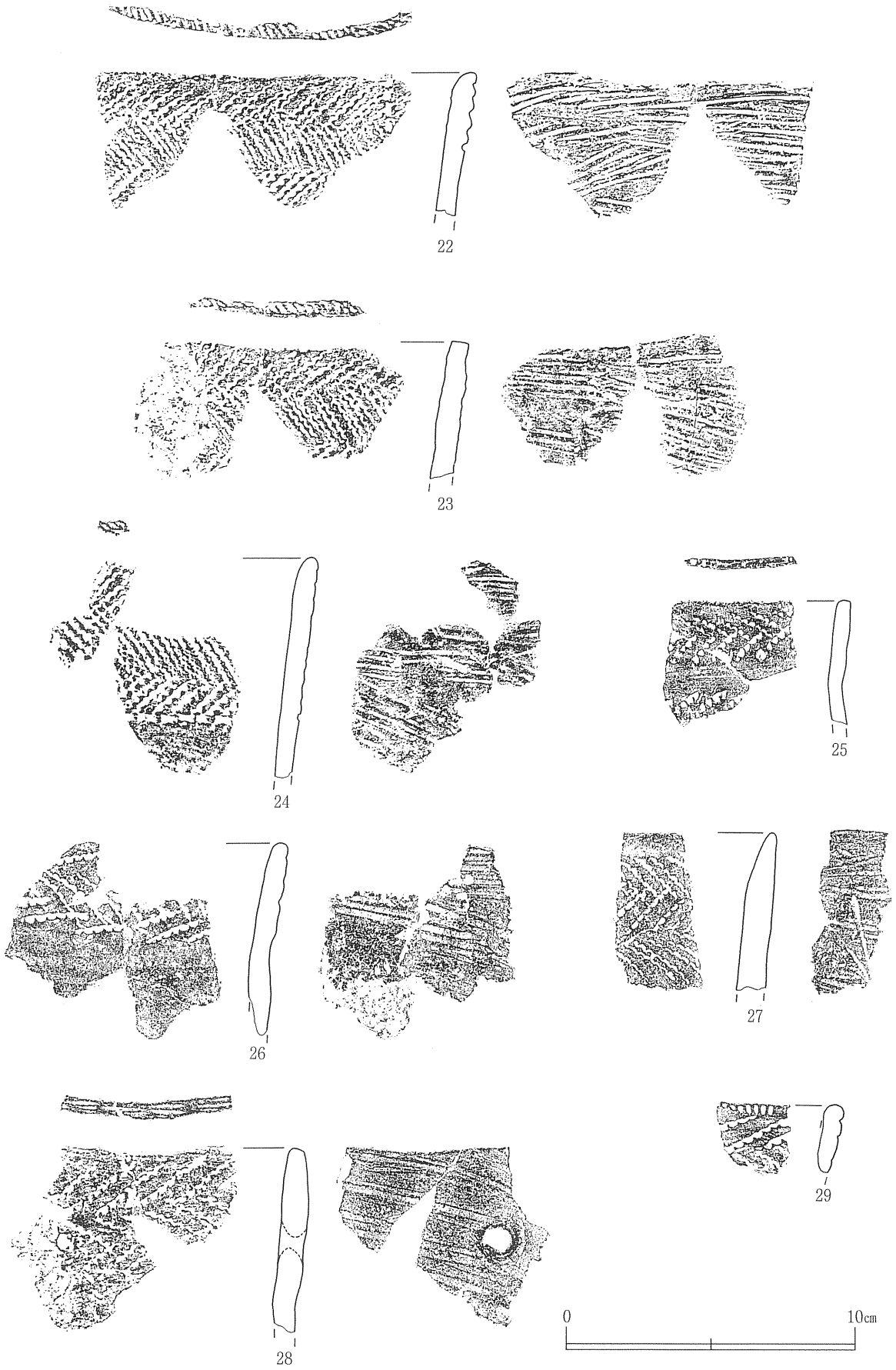
第Ⅳ群土器（第45図169・170、第46図、図版25・26）：縄文時代晩期の土器である。

169は鉢形土器の口縁部から胴部上半の破片である。口唇にはＢ突起が表出され、内湾する口縁部には截痕列を挟んで上に１条と下に２条の沈線が横位に施されており、その上に縦位のＢ突起を付している。胴部にはＬＲ縄文が施文され、内外面には煤状炭化物が付着している。170は小波状口縁をなす深鉢形土器と思われる口縁部から胴部上半の破片である。口縁部には口縁に平行に３条の沈線が施され、胴部にはＬＲ縄文が施されている。内外面に煤状炭化物が付着している。179～181は注口土器である。179・180は口縁部から肩部の破片で、羊歯状文が施されている。181は口縁部を僅かに欠き、注口部を欠損している。口唇にはＢ突起が配され、口縁部には口縁に平行する数条の沈線を施し、その上に刻み目列を加えている。この口縁部と肩部の間は無文帯となっている。注口部が付く肩部には羊歯状文が施文されており、肩部上端にも口縁に平行に２条の沈線が施されている。底部は無文で丸い鍋底状を呈している。口径51㎜，器高67㎜、最大径106㎜を測る。182は深鉢形土器の口縁部から胴部上半の破片である。外反する口縁部は無文帯で、その口縁下には１条の沈線と屈曲する頸部に２条の沈線が口縁に平行に施されており、胴部にはＬＲ縄文が施文されている。また、外面には煤状炭化物が付着している。

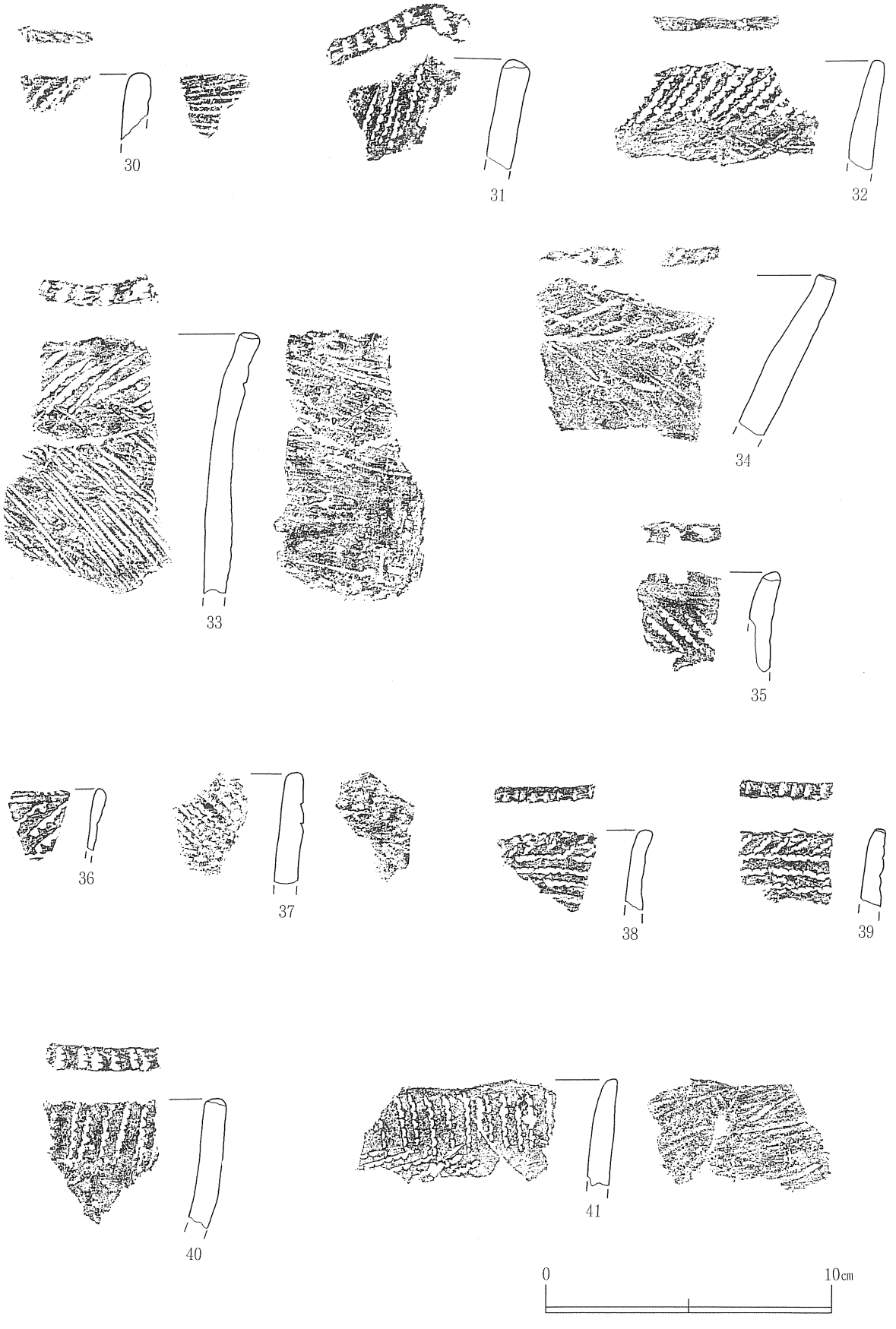
第29図　遺構外出土土器（１）



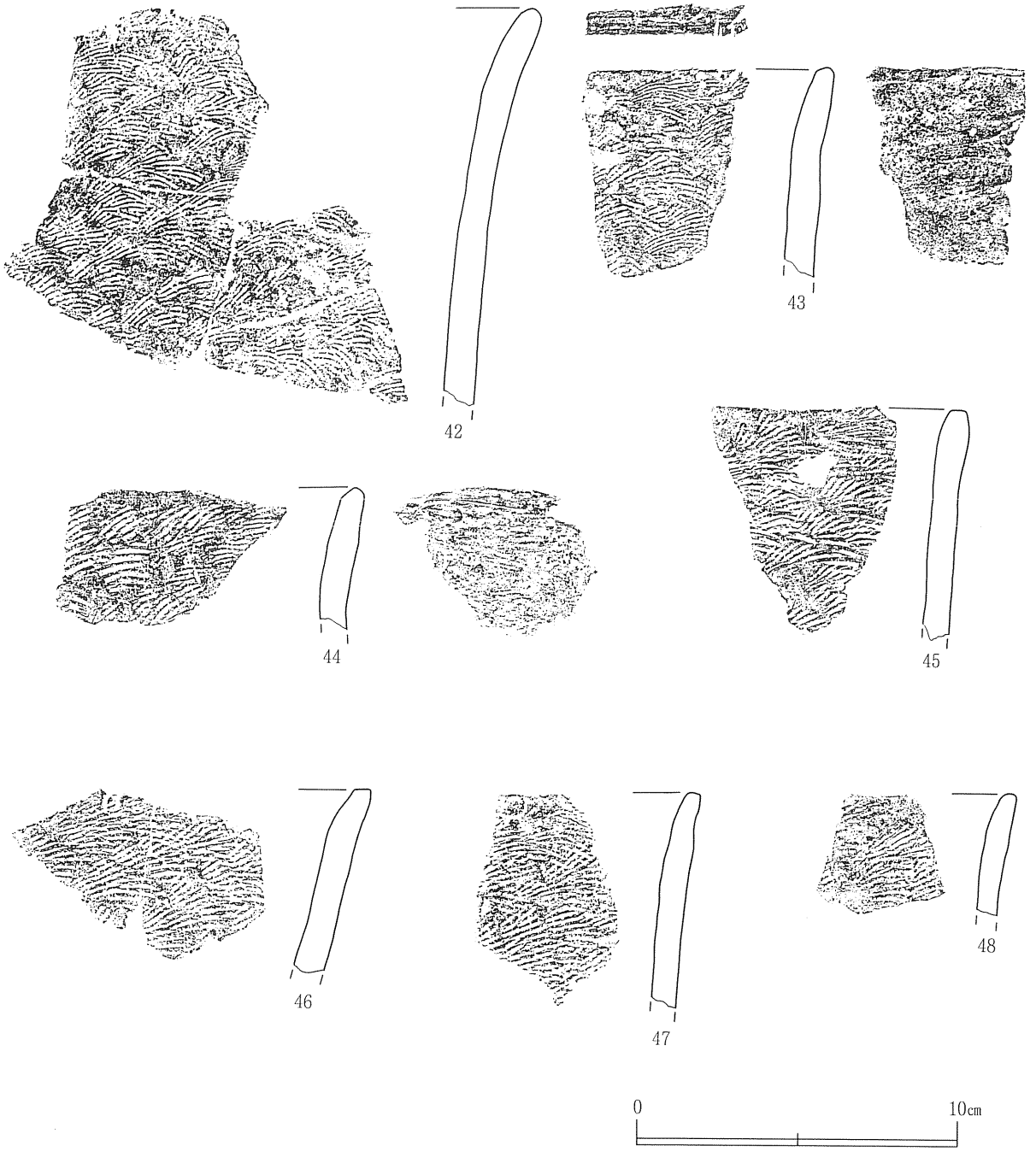
第30図　遺構外出土土器（２）



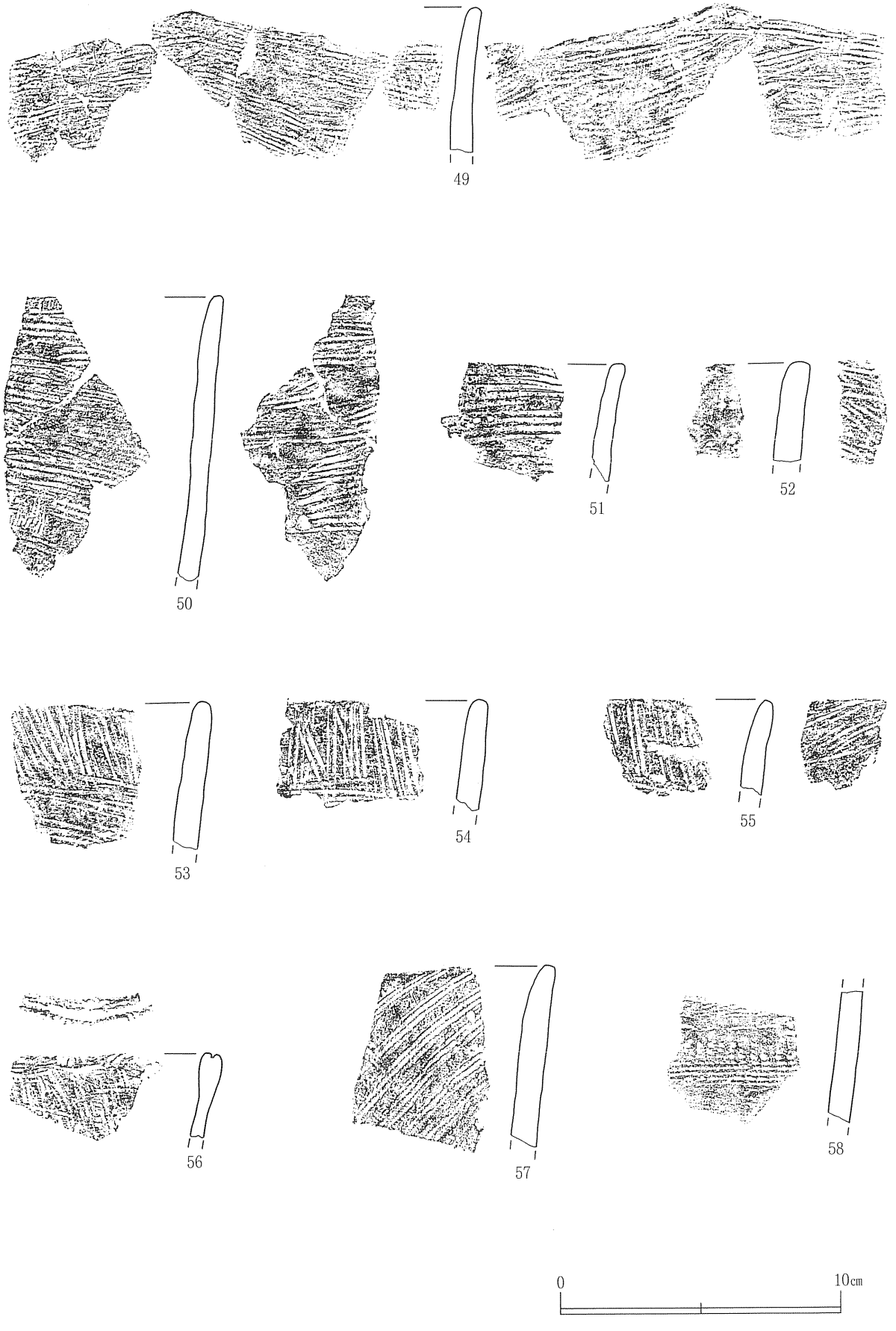
第31図　遺構外出土土器（３）



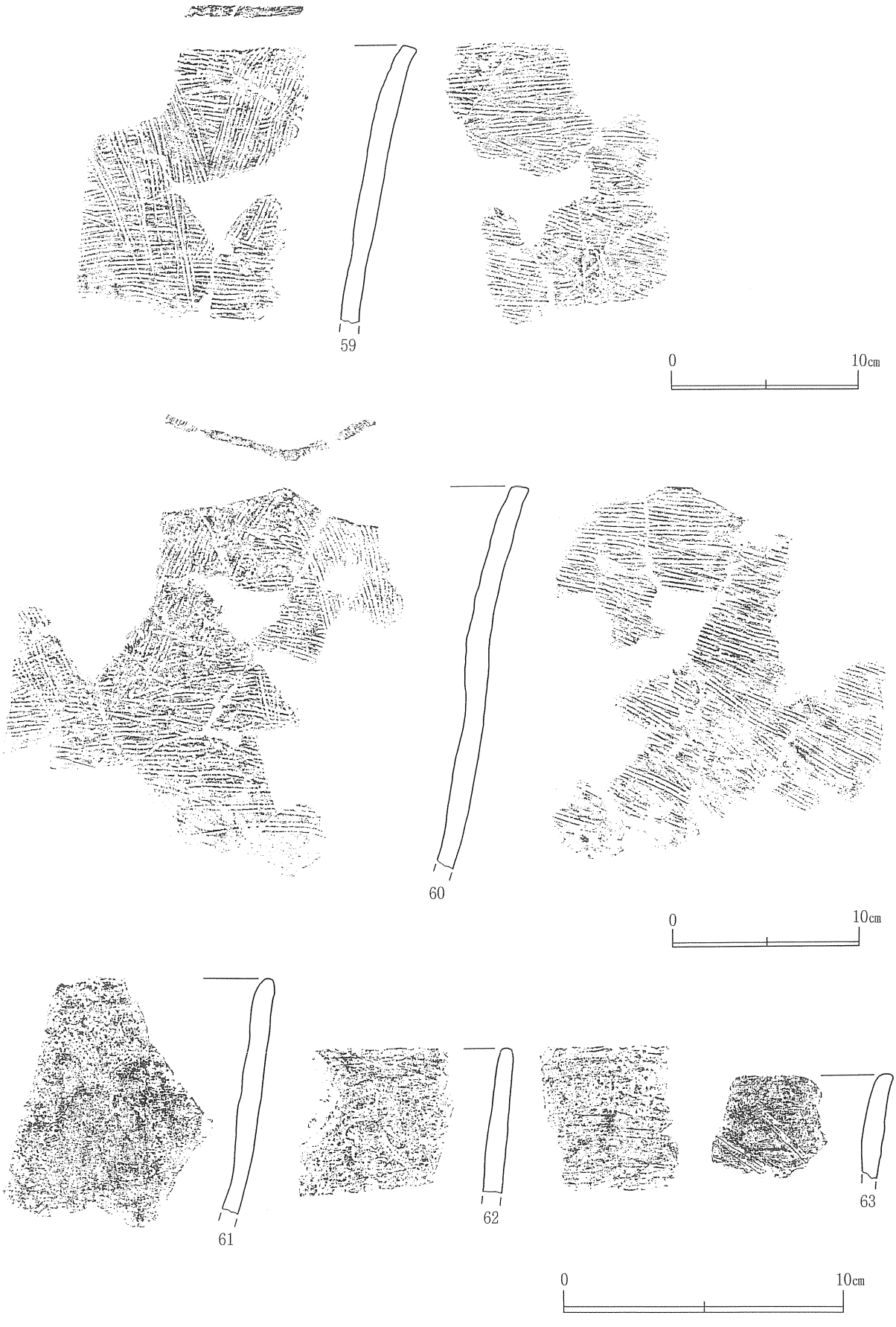
第32図　遺構外出土土器（４）



第33図　遺構外出土土器（５）

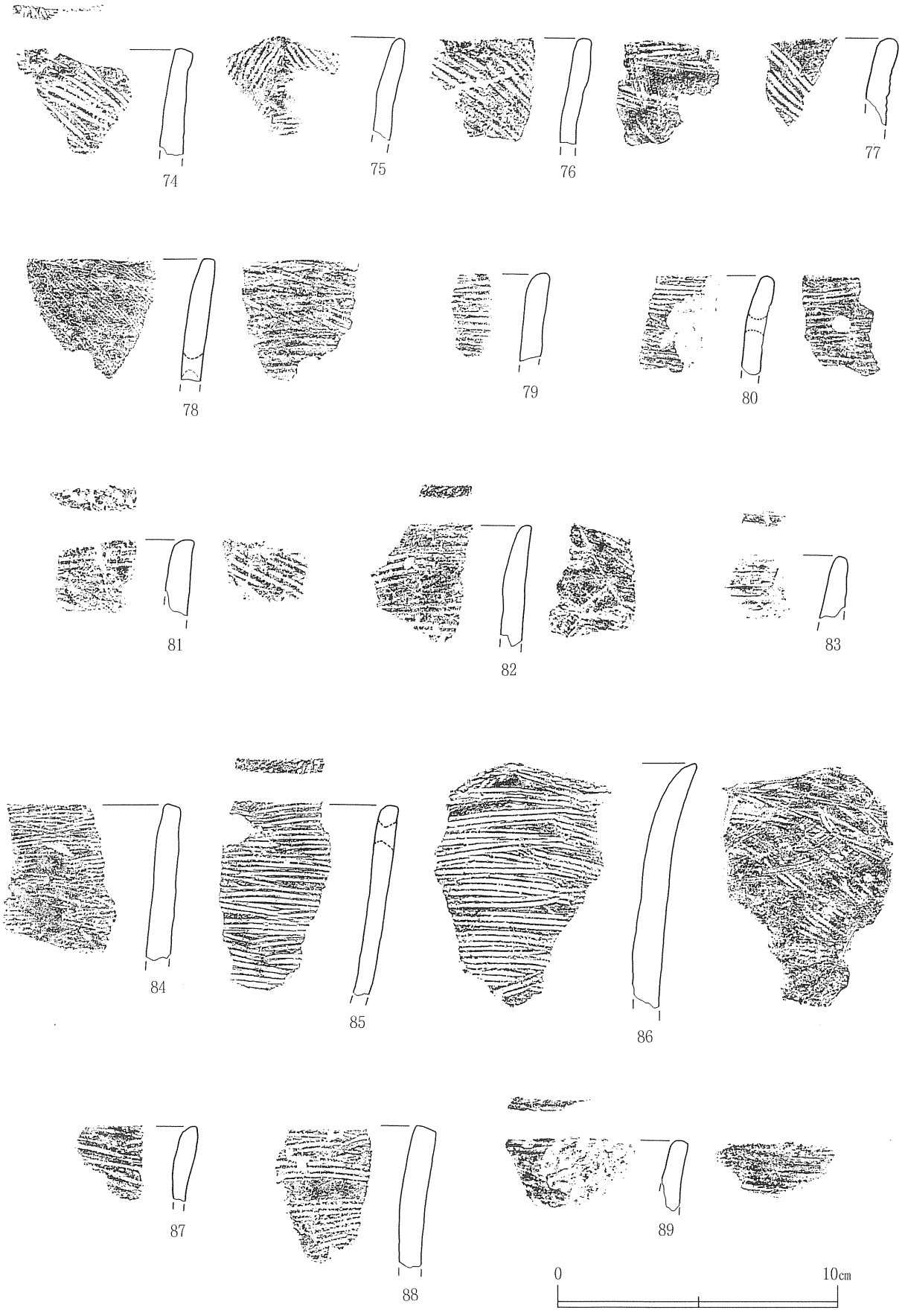


第34図　遺構外出土土器（６）

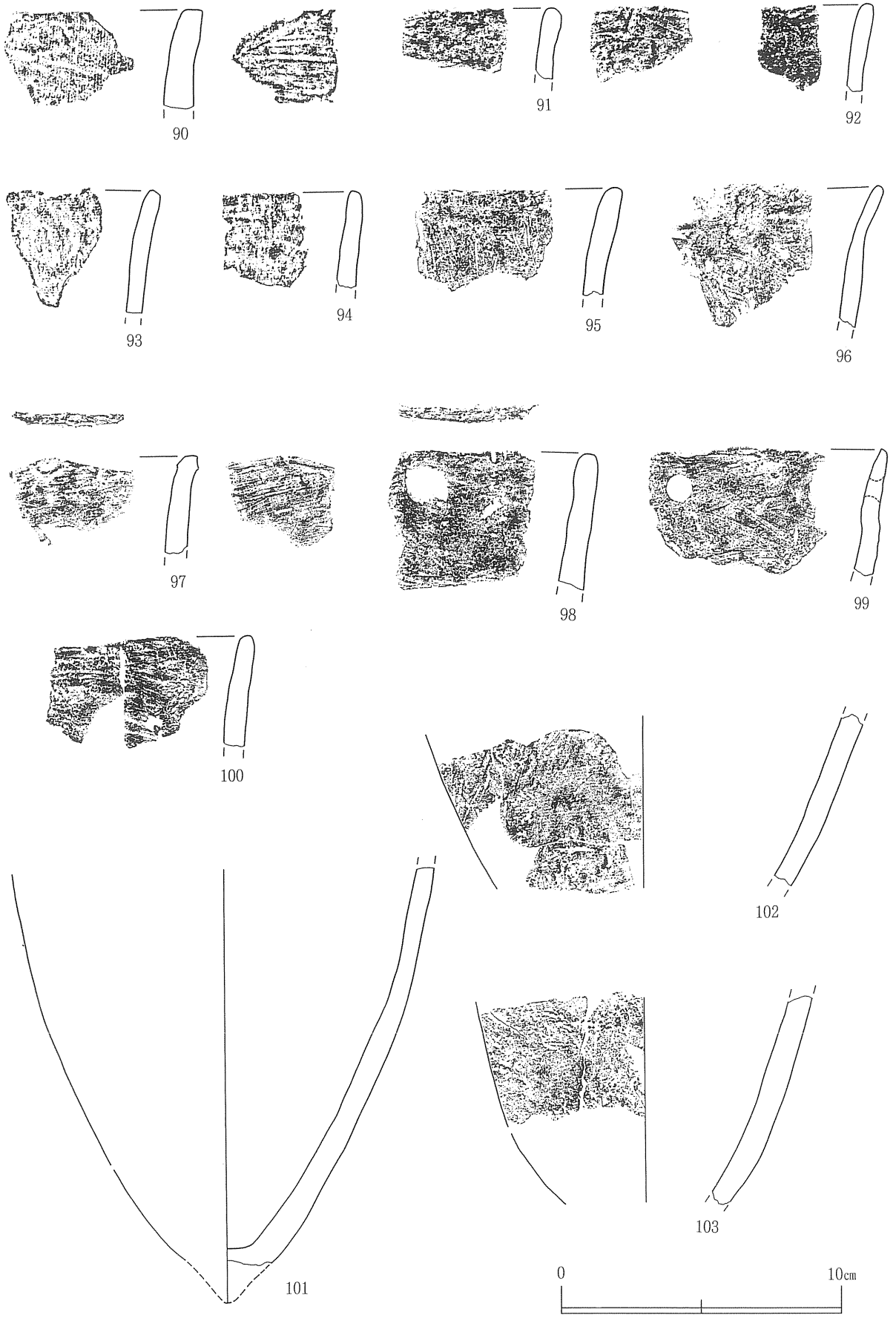


第35図　遺構外出土遺物（７）

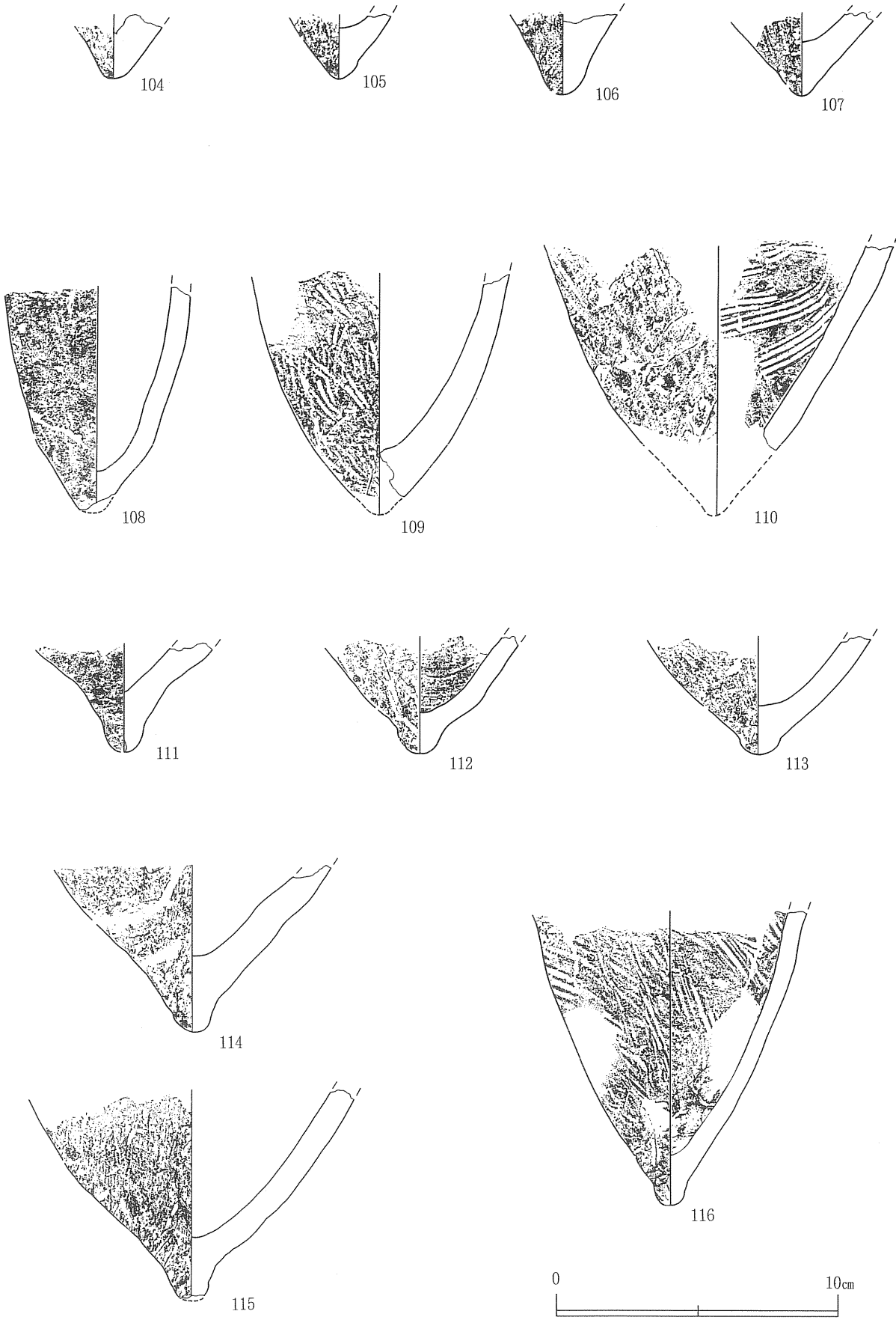
第36図　遺構外出土土器（８）



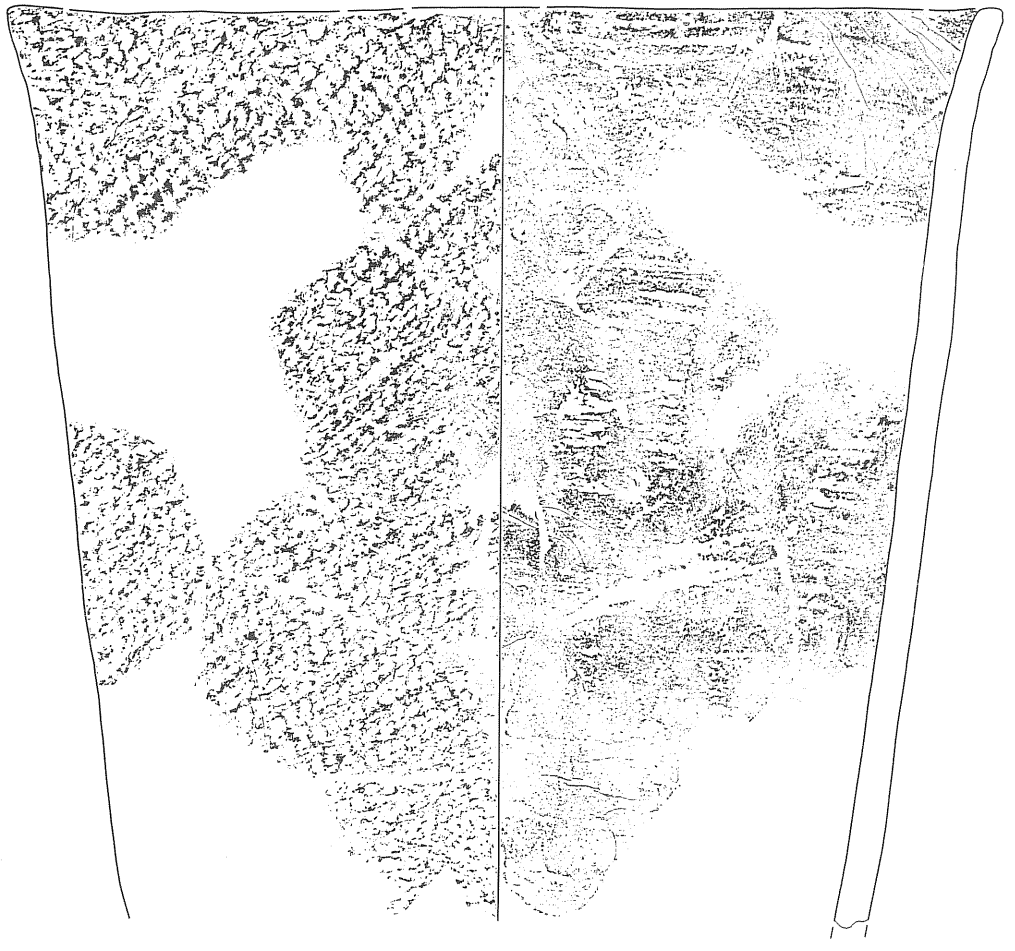
第37図　遺構外出土土器（９）



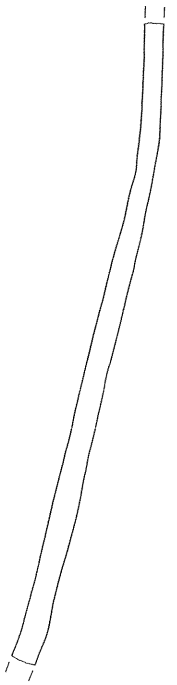
第38図　遺構外出土土器（10）



第39図　遺構外出土土器（11）



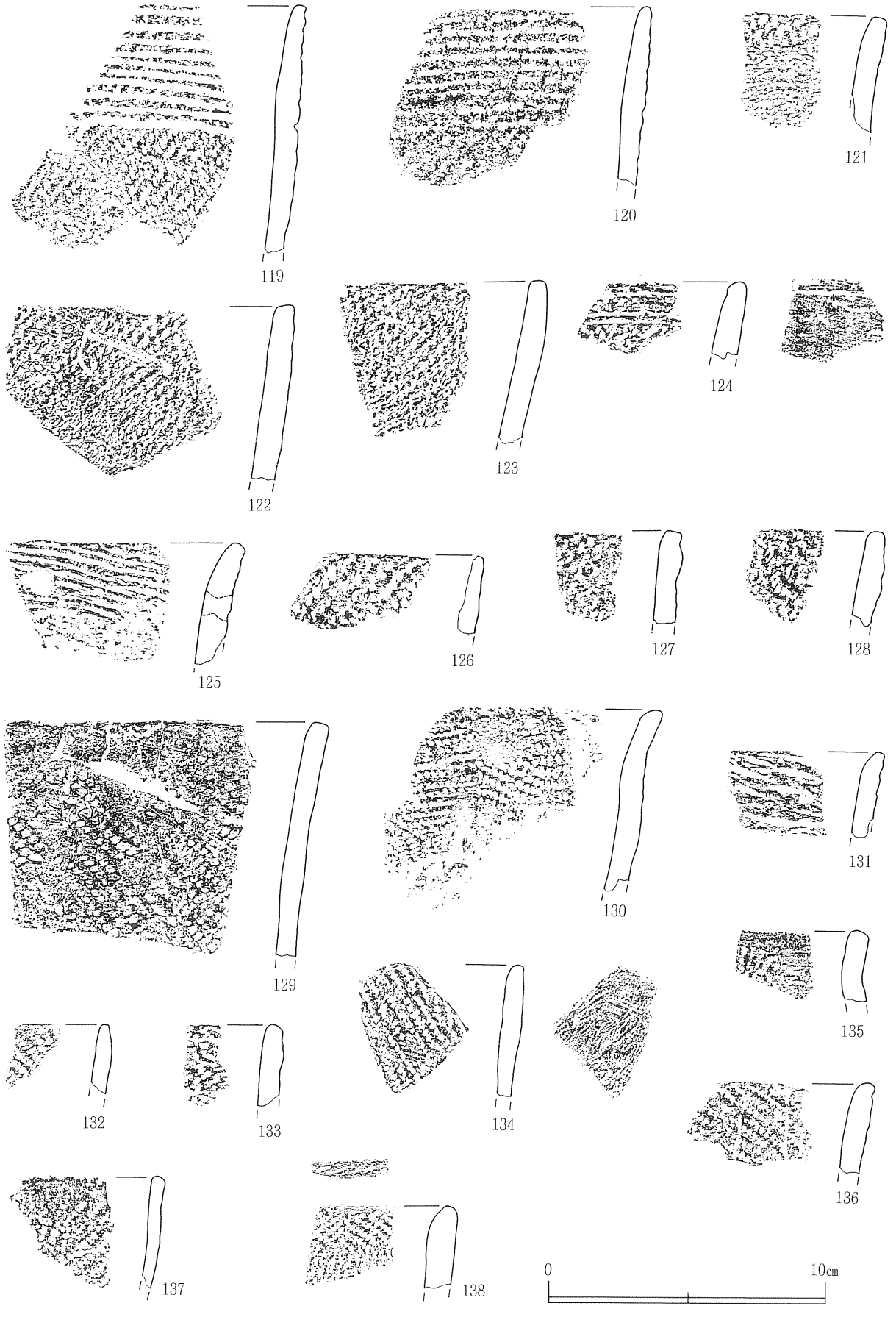
117



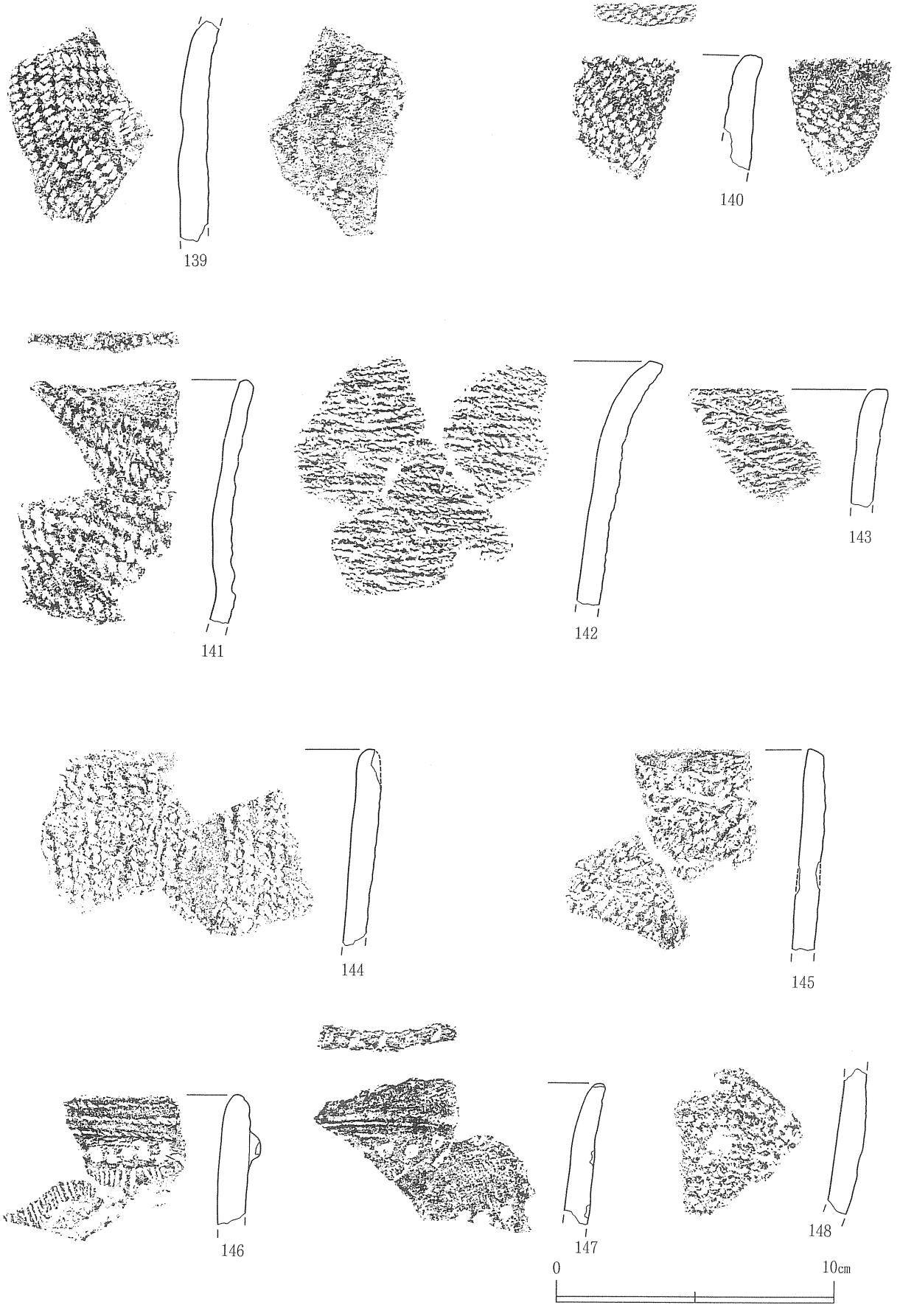
118

0　10cm

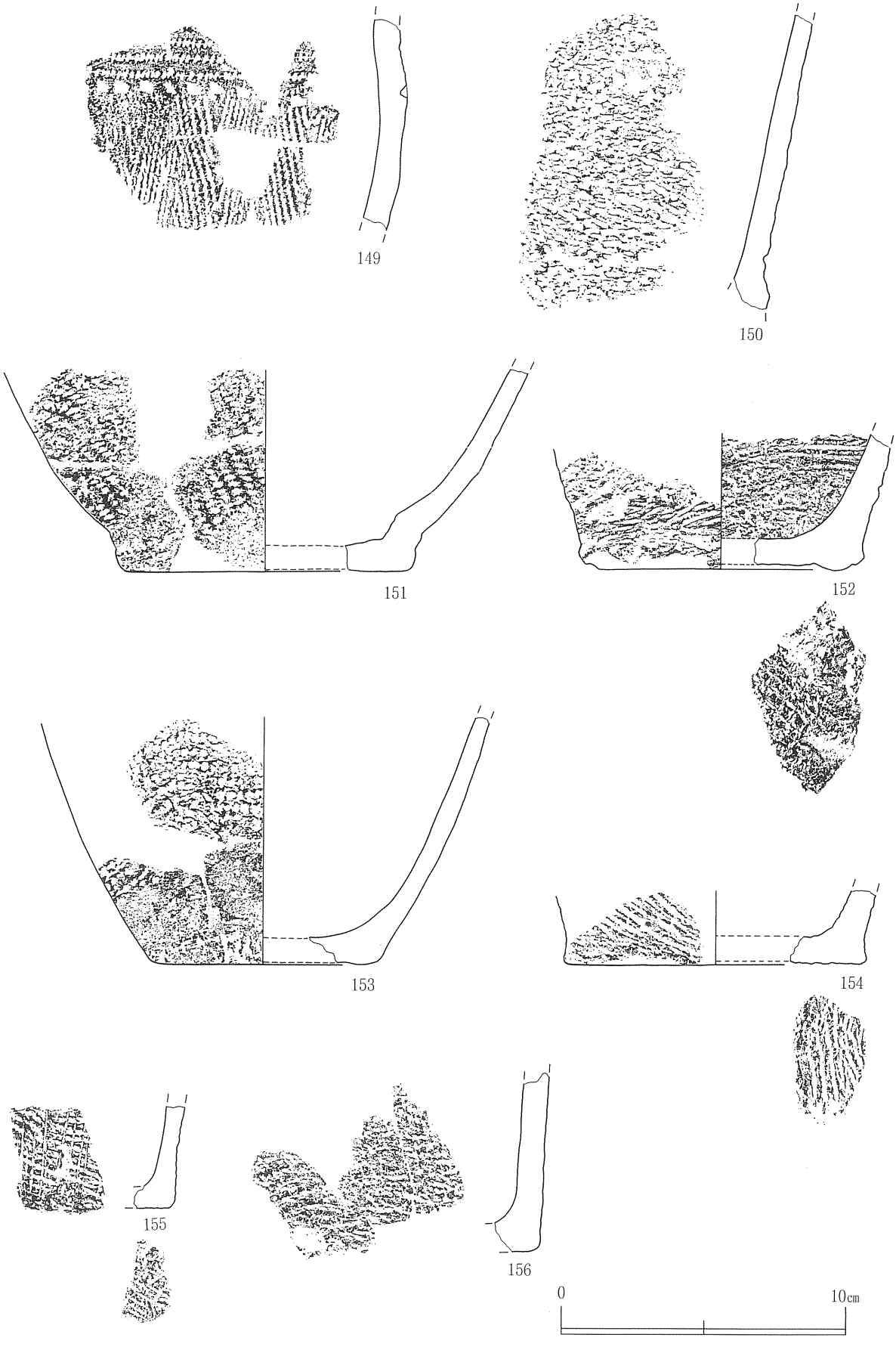
第40図　遺構外出土土器（12）



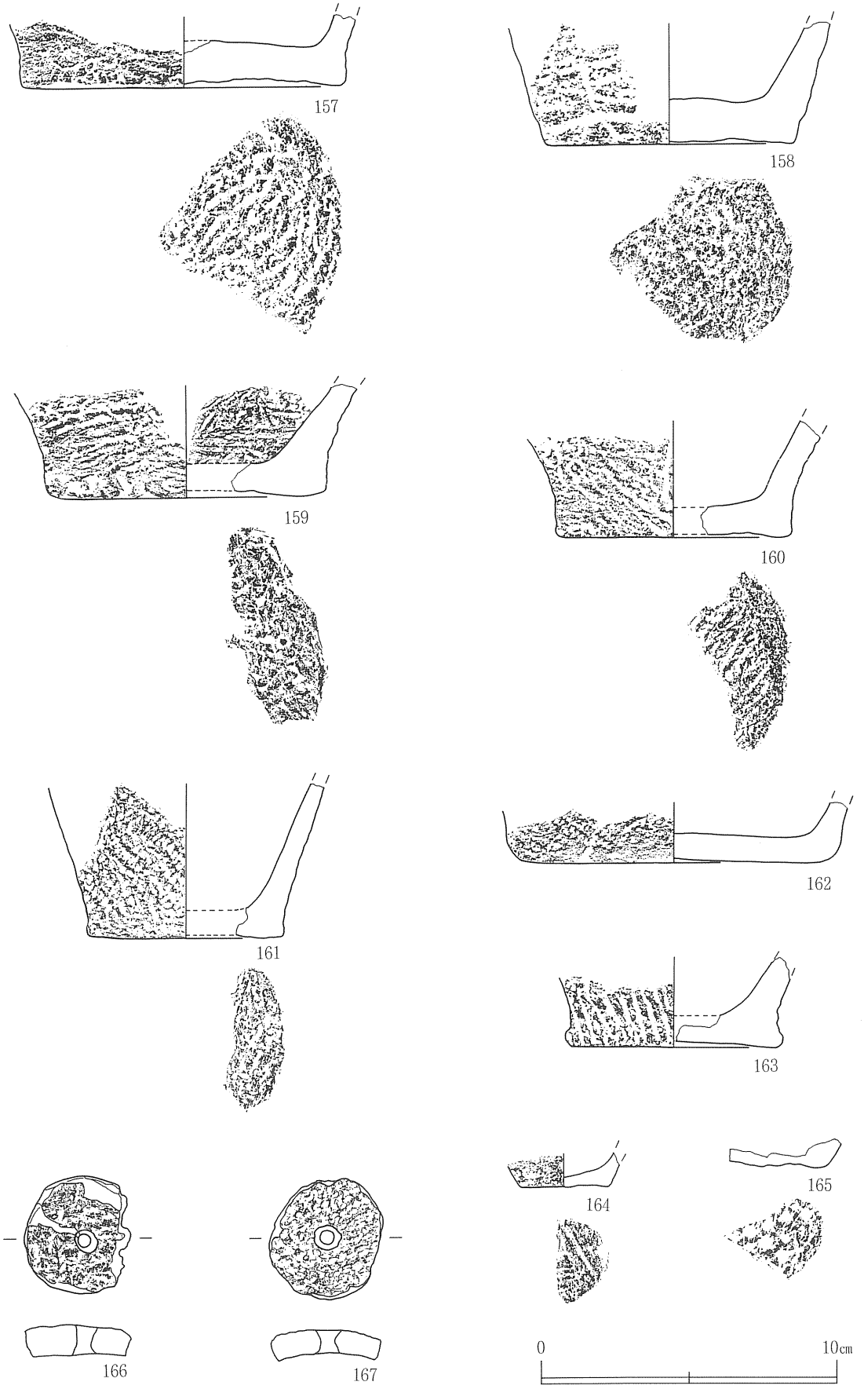
第41図　遺構外出土土器（13）



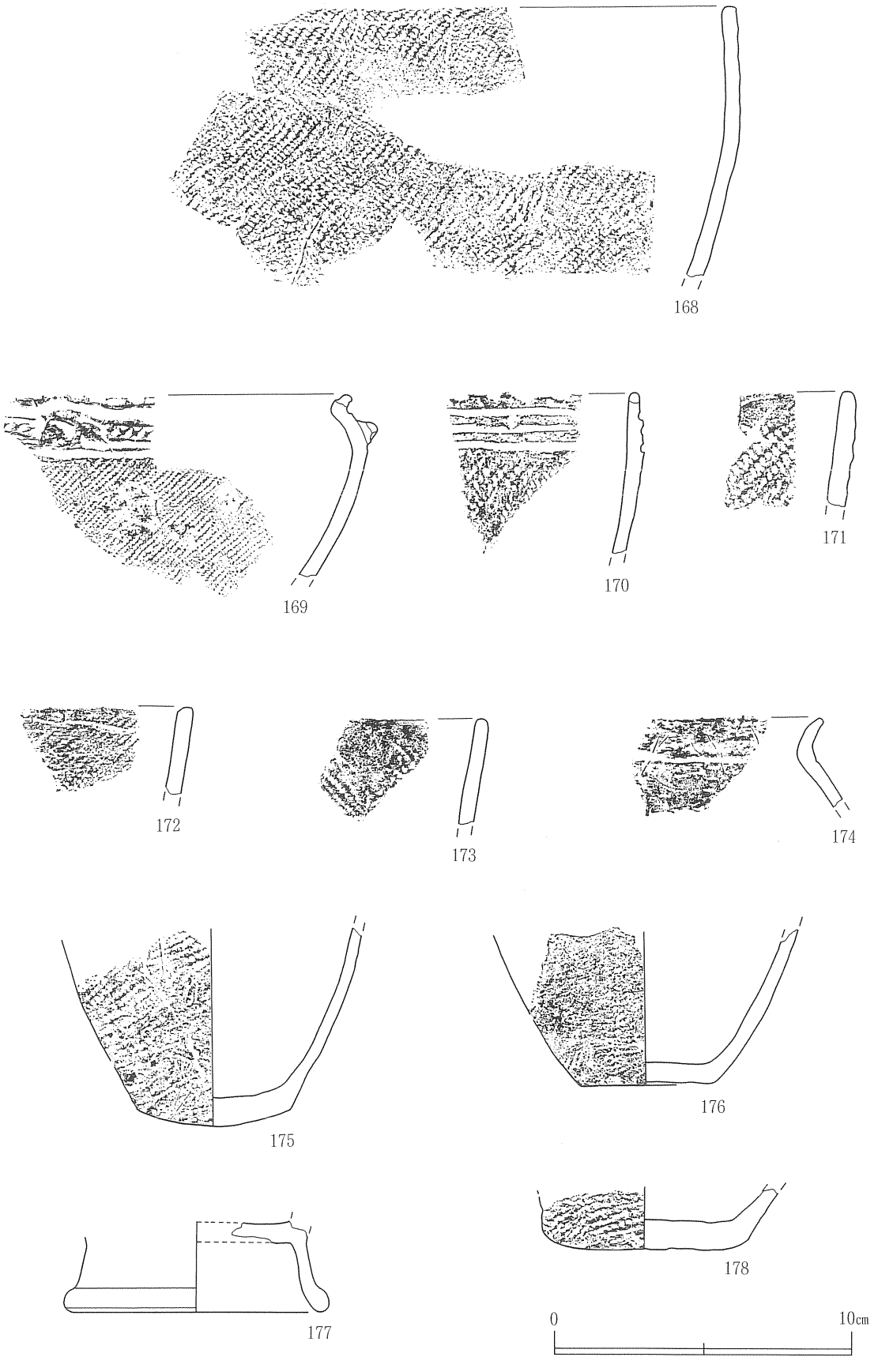
第42図　遺構外出土土器（14）



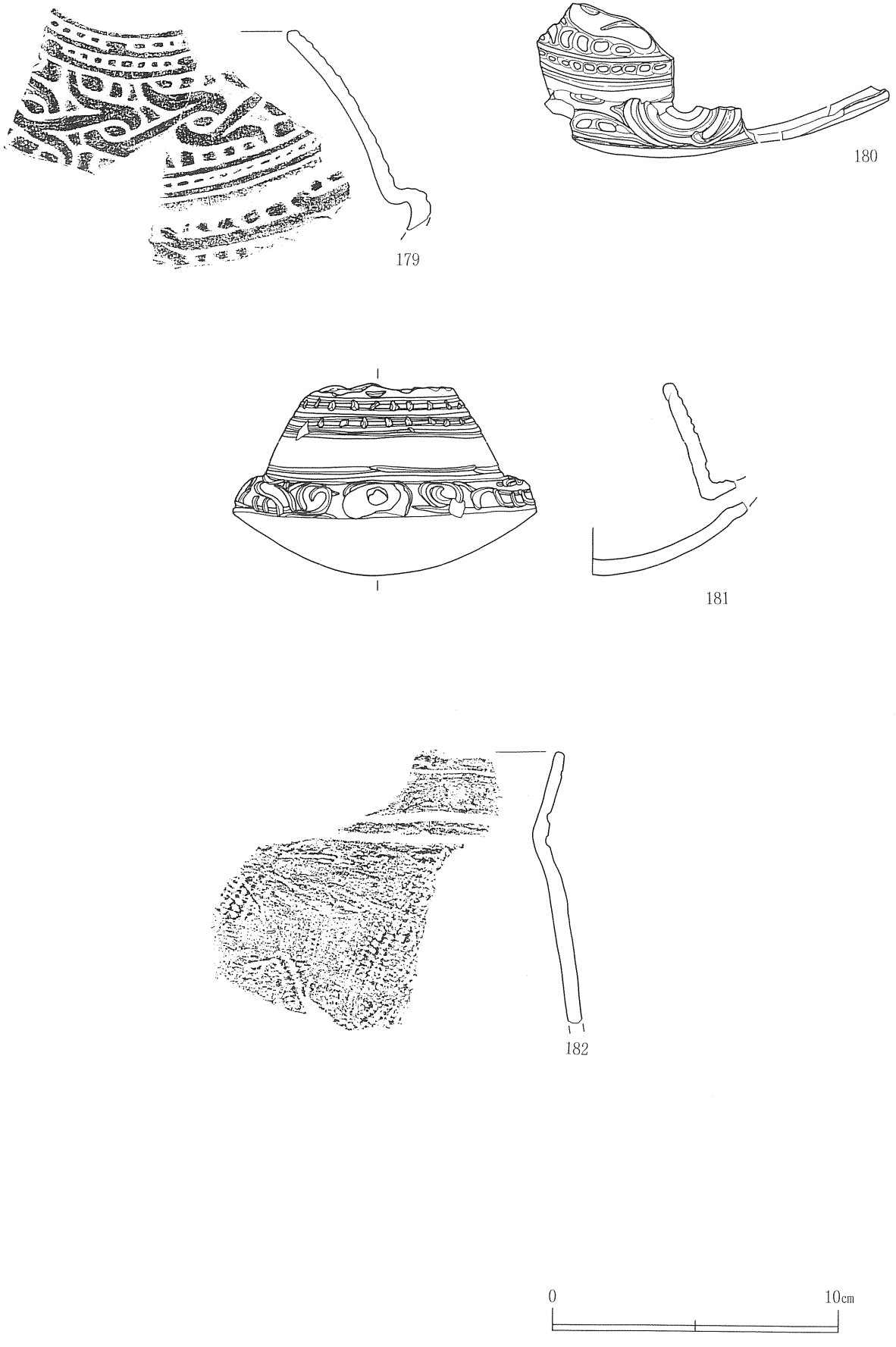
第43図　遺構外出土土器（15）



第44図　遺構外出土土器（16）



第45図　遺構外出土土器（17）



第46図　遺構外出土土器（18）

２．石器

石鏃(第47図)

１類：円基鏃(35)、２類：平基無茎鏃(36・37)、３類：凹基無茎鏃(38～50)に分類される。40・44・47を除いて、素材剥片の主要剥離面が看取される。このうち、35・37・41・46以外は素材剥片の打面を基部側に用いている点で共通している。38・41・44・46は先端部に抉りを入れてより先鋭に整形している。

石槍(第48・49図)

１類：尖頭部が先鋭で基部が弧状になるもの(51)、２類：尖頭部・基部ともに先鋭なもの(53)、３類：尖頭部・基部ともに弧状を呈するもの(54)、４類：平面形がティアドロップス状を呈するもの(55)、５類：尖頭部が鈍角で、基部が直線状もしくは直線状にちかい弧状を呈するもの(56・58～60)に分類される。51は表裏面に調整加工が施されているが、基部末端には打面を残す。先端部は若干欠損している。52は基部が欠損している。断面はレンズ状を呈する。53は裏面に素材剥片の主要剥離面が認められ、表面の上半部には礫の表面が大きく残されている。調整加工は裏面周辺にたいして顕著に施されており、とくに尖頭部よりも基部が入念に整形されている。左側縁の調整加工は急斜度で鋸歯縁状を呈する。他の石槍が両面加工であるのに対して、これは唯一の周辺加工例である。54の裏面先端部にみられる剥離痕は衝撃剥離痕とも考えられる。基部末端には潰れ痕がみられる。55は他と比べてやや形態的に異なる石槍である。表裏とも平坦な調整加工が施されており、尖頭部はとくに入念な整形が施されている。また、右側縁の裏面には階段状剥離が顕著に認められる。56は表裏面における大まかな平坦剥離後に、表面から裏面に対してより細かな調整加工が施されている。その結果、尖頭部・中央部・基部の両側縁が直線状を呈し、それぞれの境が明確に区別されている。57は上半部が欠損している。断面形は凸レンズ状を呈する。58は形態的に56と類似するが、両側縁がより弧状を呈している。左側縁両面には階段状剥離が顕著に認められる。59は最大幅が石器上半部にくる。基部末端は直線状に作り出されており、上半部両側縁には弧状を呈するのに対して、下半部は直線状に整形されている。60も59同様、尖頭部両側面縁が弧状を呈し、それより基部にかけては直線状となり、最大幅が石器上半部にくる。また、尖頭部の左側縁には鋸歯状剥離が施されており、その裏面および右側縁には衝撃剥離痕と考えられる剥離面が観察される。

石匙(第50・51図，第52図１・２)

１類：縦型(61～79)、２類：横型(80～83)に分類される。１類はさらに、ａ類：石器末端部が尖頭状を呈するもの(61・63～67)、ｂ類：石器中軸線と石器末端部の縁辺が直交もしくは斜交するもの(62・68～71)、ｃ類：石器両側縁が一方向に湾曲し、三日月状を呈するもの(72～79)に細分される。63・67・78・79以外は、素材剥片の主要剥離面が残されており、打面側につまみを作出していることがうかがえる。ただし、77は例外的に素材の末端部をつまみとして用いている。調整加工の部位は多様であるが、つまみが表裏から入念に施されている点で共通している。つまみ以外の器体調整に関しては、両面加工(63・67・78・79)、片面加工(61・66・70～73・75・76・80)、周辺加工(64・65・68・69・74・77・81・82)がある。83はつまみの作出以外はなされていない。両面加工のものがもっとも素材に対する変形度が高く、一方、周辺加工のものは素材の厚みまでは減じていない。また、62・64・68・70・74～76・83は打面が残置している。

スクレイパー(第52図84～89)

１類：横長幅広の剥片を素材として打面を残置し、縁辺に連続的な調整加工を施すもの(84・85・87)、２類：縦長剥片を素材として打面を除去し、縁辺に調整加工を施すもの(86・88)、３類：横長幅広剥片を素材として打面を除去し、片面が押圧剥離による剥離面で覆われるもの(89)に分類される。84の左側縁には、鎖交調整により抉りの入っている部分がみられる。85の平面形は、つまみの有無を除けば、石匙の１ｃ類と類似する。86は左側縁に調整加工が施されており、礫面と主要剥離面のなす右側縁には使用によると考えられる微細剥離痕がみとめられる。素材の打面は表裏からの平坦剥離により除去されている。石器末端部は欠損。88は全周に押圧剥離が加えられている。石器下端部には両面から調整が施されており、素材剥片の打面・バルブを除去し、厚みを減少させている。微細剥離痕は全周にわたって観察される。石器上端部は欠損。89は左側縁の上端部に表裏からの剥離が加えられ、抉り部が作出されている。石器上端部の両面からの調整は、88と同様、素材剥片の厚みの減少を意図したものであろう。また、表裏の下半部にはポジティブ面がみられ、剥片素材の石核から剥取された剥片を石器の素材に用いていることがうかがえる。

トランシェ様石器(第53～54図・第55図108・109)

平面形から、１類：長方形に近い台形状を呈するもの(90～99)、２類：三角形状を呈するもの(100・106・108)、３類：楔形を呈するもの(101～105・107・109)に分類される。また、刃部の形状から、ａ類：凹刃、ｂ類：凸刃、ｃ類：平刃に細分される。刃部は基本的に一次剥離によって生じた鋭い縁辺を利用しているが、連続的な調整加工を施して刃部を作出している例も９例ある。とくに、104・106・108・109はノッチ状に加工が施されており、刃部再生の可能性もある。また、91は基部末端の縁辺にノッチ状の加工がみられる。99・105・106・108以外は素材の主要剥離面が残されていることから剥片素材であることがわかる。このうち、93・98・102・103・109は打面部を基部側に用いており、その他は素材を横位置、つまり打面部を石器側縁に用いている。105は表裏に礫面がみられ、礫素材である。調整加工の種類は、押圧剥離による平坦加工が主体であるが、93・95・109は、素材剥片を断ち切るように急斜度な加工が施されている。92・94は平坦加工と急斜度加工が併用されている。急斜度加工のみによるものは、他に比べて素材面が多く残されており、素材剥片に対する整形度が最も低いといえる。使用による刃こぼれと考えられる微細剥離痕は、90・91・93・94～98・100～105・107・108にみとめられる。

石篦(第55図110～116・第57図124・125)

平面形から、１類：楔形・台形状(110～120・122～124)、２類：短冊形・長方形状(121)、３類：小判形・楕円形状(125)に分類され、さらに刃部形状から、ａ類：両凸刃、ｂ類：片凸刃、ｃ類：両平刃、ｄ類：片平刃に細分される。110～117・120・124には素材の主要剥離面が残されており、剥片素材であることがうかがえる。この場合、素材を縦に用いる例と横に用いる例の２者がみられる。調整加工の種類には、平坦剥離による両面加工(110・116・118・119・121～123・125)、半両面加工(121・124)、片面加工(111・120)、周辺加工(113・114・117・118)がある。111は右側縁中央に急斜度な調整を加え、抉りを作出している。柄の装着と関係があるのであろうか。114は他に比べて刃部角が大きく、欠損した刃部の再生が図られたものと考えられる。112～114・116・118～120には、使用によって生じたと考えられる微細剥離面が刃部裏面に顕著にみとめられる。

磨製石斧(第57図127～130)

１類：礫もしくは剥片を素材とし、全面研磨により製作されたもので、とくに側面を顕著に研磨し断面形が長方形を呈するもの(126～128)、２類：１類と同様であるが側面を形成せず、断面形が長楕円形を呈するもの(129)、３類：擦切技法により切断・製作されたもの(130)がある。刃部形状は、ａ類：平面形が円刃で、断面形が両凸刃のもの(127・129)、ｂ類：円刃で片凸刃のもの(128)、ｃ類：平刃で両凸刃のもの(126・130)が見受けられる。126は５cm未満と小さく、表裏の研磨面より側面の研磨面の方が新しいことから、磨製石斧の刃部破片を再加工したものと考えられる。基部の作出がとくに入念である。127・129は刃部破片である。127の左側縁には敲打痕がみられる。128は側面の研磨がとくに顕著で、明確な稜線を作り出している。また、基部には上方から力の加わった剥離面がみられる。柄に装着して使用した結果であろう。130は右側面に擦切痕が２条認められる。128と同様の剥離痕が基部にみられる。また、裏面および右側面には敲圧痕が観察される。

石製品(第56図131・132)

131は破片であるが、表裏および側面に線刻がみられ、表裏面から孔が穿たれている線刻有孔石製品である。132は、孔が途中まで穿たれた盲孔石製品である。

石錘(第58～64図)

１類：円形で両端に抉りをもつもの(133～145・147)、２類：楕円形で長軸の両端に抉りをもつもの(146・148～174・201)、三角形もしくは不整円形で両端に抉りをもつもの(175～200・202)がある。155・174・185・188などには、両極技法に特徴的な線状打面・潰れ痕・階段状剥離が、加工部位の両端もしくは一端にみられることから、両極技法により製作された可能性がある。144・160は、表裏面の中央に敲打痕がみられる。凹石の転用であろうか。

半円状扁平打製石器(第66図203～205)

素材には、平面形が長楕円形を呈する扁平な自然礫が用いられている。203は表裏と上・下側面を研磨し、平滑面を作出している。下側面はさらに稜線上から階段状の剥離が加えられている。204は下側面を研磨して平滑面を作出している。そののちに礫の両端と下側面の稜線に剥離が加えられている。205は下側面が研磨されたのちに、稜線上から断続的な剥離が施されている。204・205ともに器体中央で半分に割れており、使用による結果と考えられる。

擦り石(第65図206～209・第66図210)

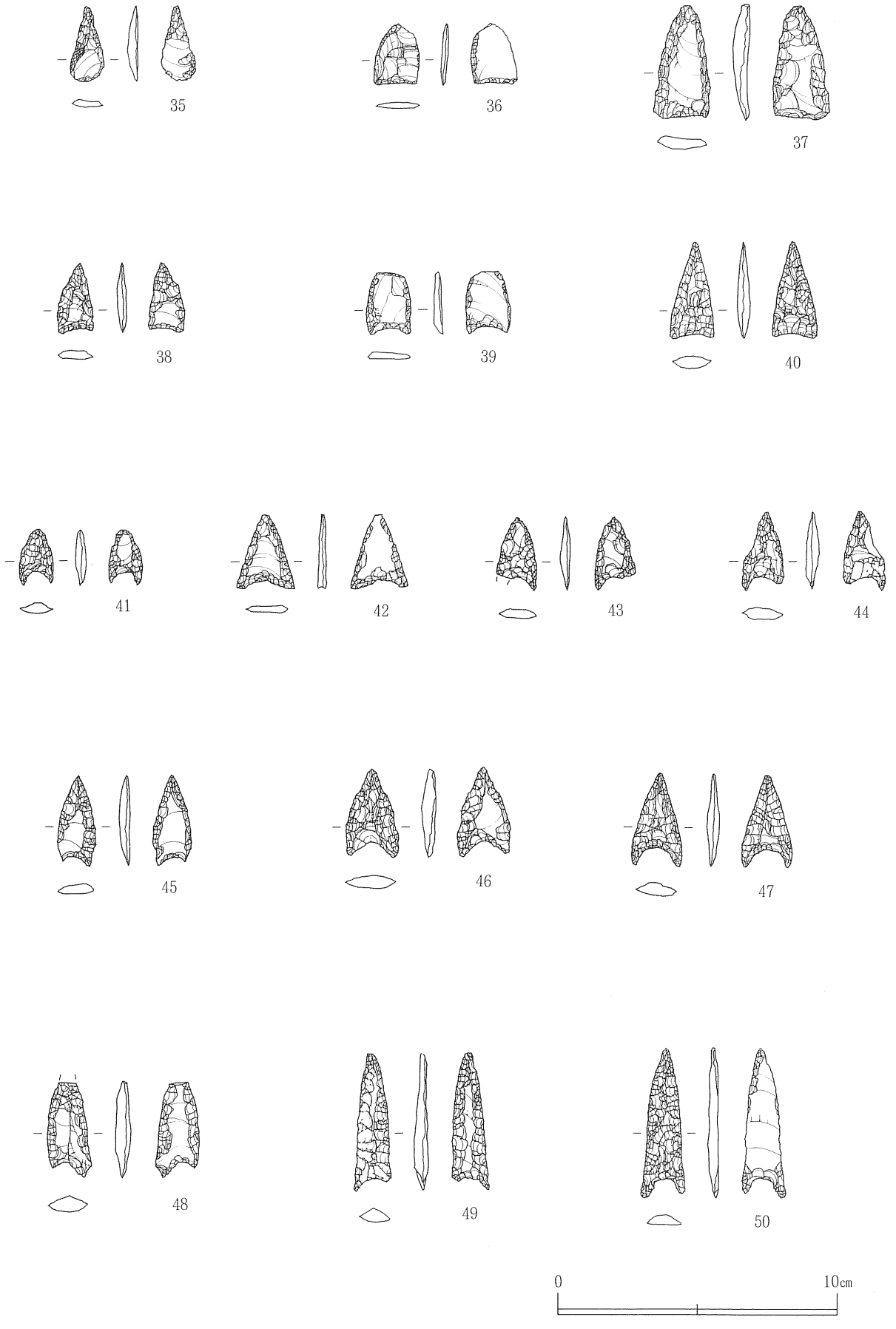
棒状礫を素材とし、研磨面が１面しかないものから、４面あるものまでみられる。断面形は三角形状・台形状・楕円形状がある。209は下側面の研磨面のほかに、右側面に凹み痕が２つみられる。210は右上端部に敲打痕が認められる。

凹石(第66図211～216)

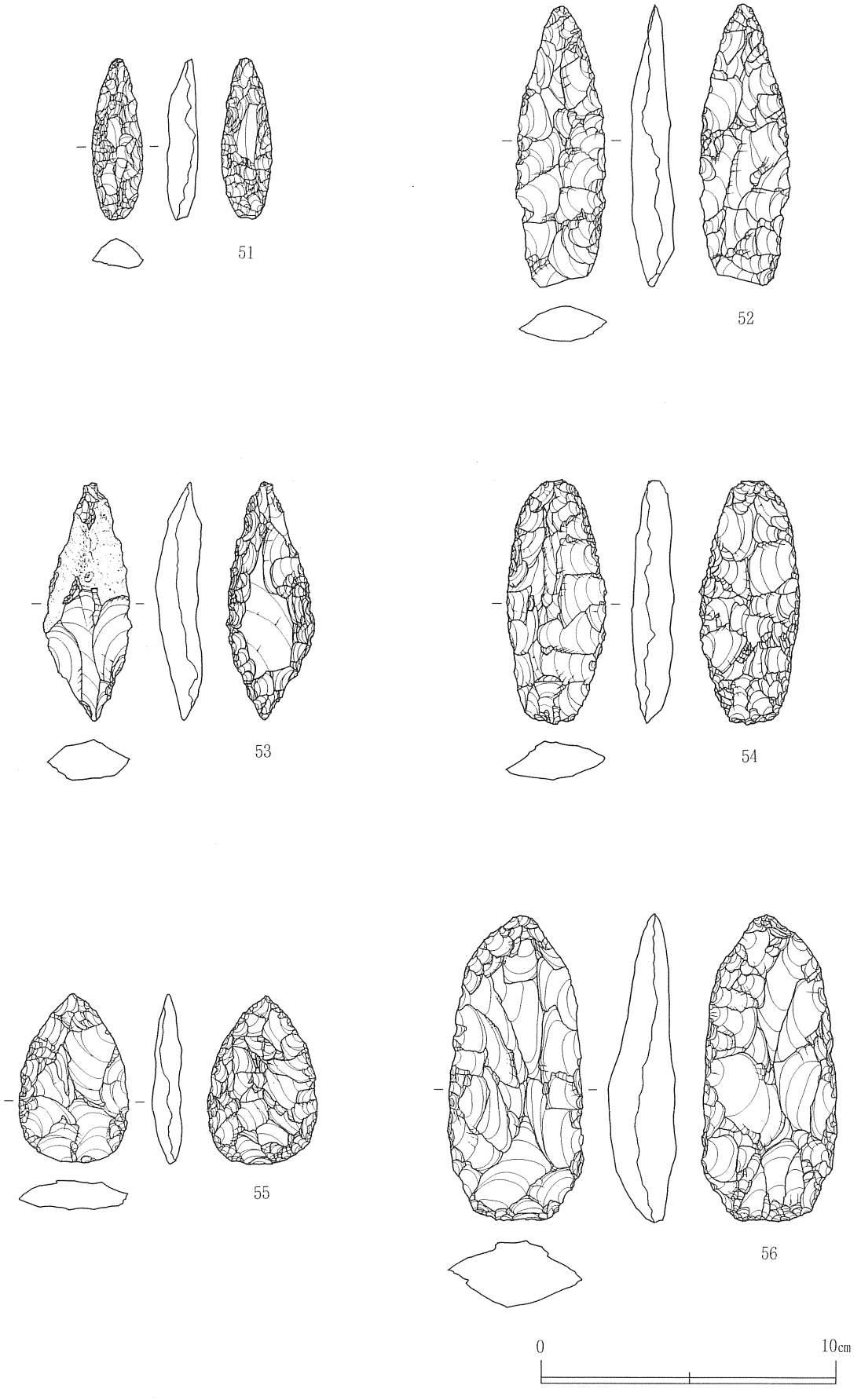
平面形から、１類：細長い長方形もしくは三角形状を呈するもの(211・212)、２類：円形のもの(213～216)に分類される。凹み痕は、212が１面のみにみとめられる他は、表裏両面にみられる。213は表面の半分が研磨されており、新旧関係は凹み痕の方が新しい。

石皿(第66図217・218)

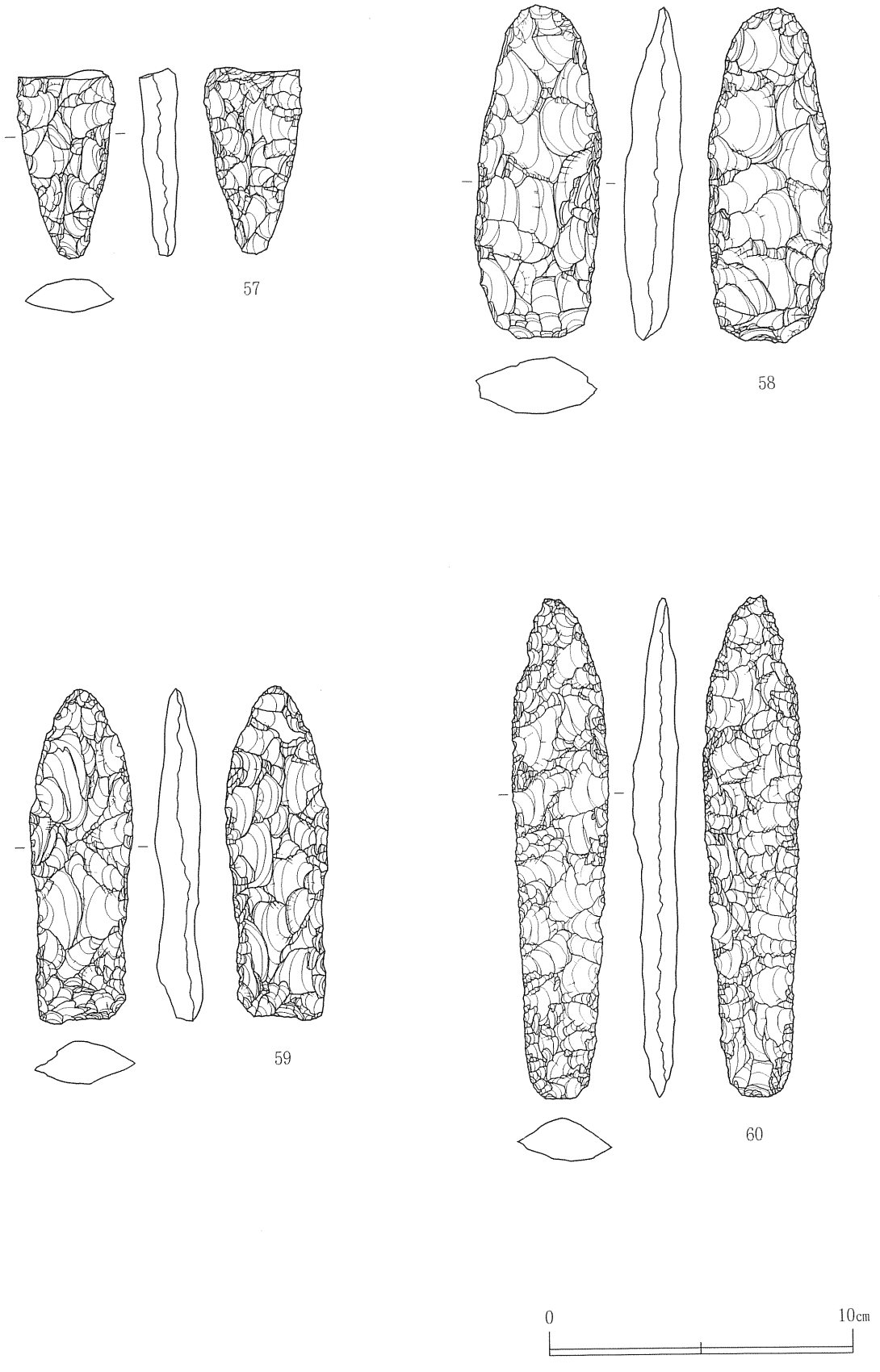
217・218とも扁平礫を素材としている。とくに217の表面は著しく摩耗しており、断面が凹状を呈する。



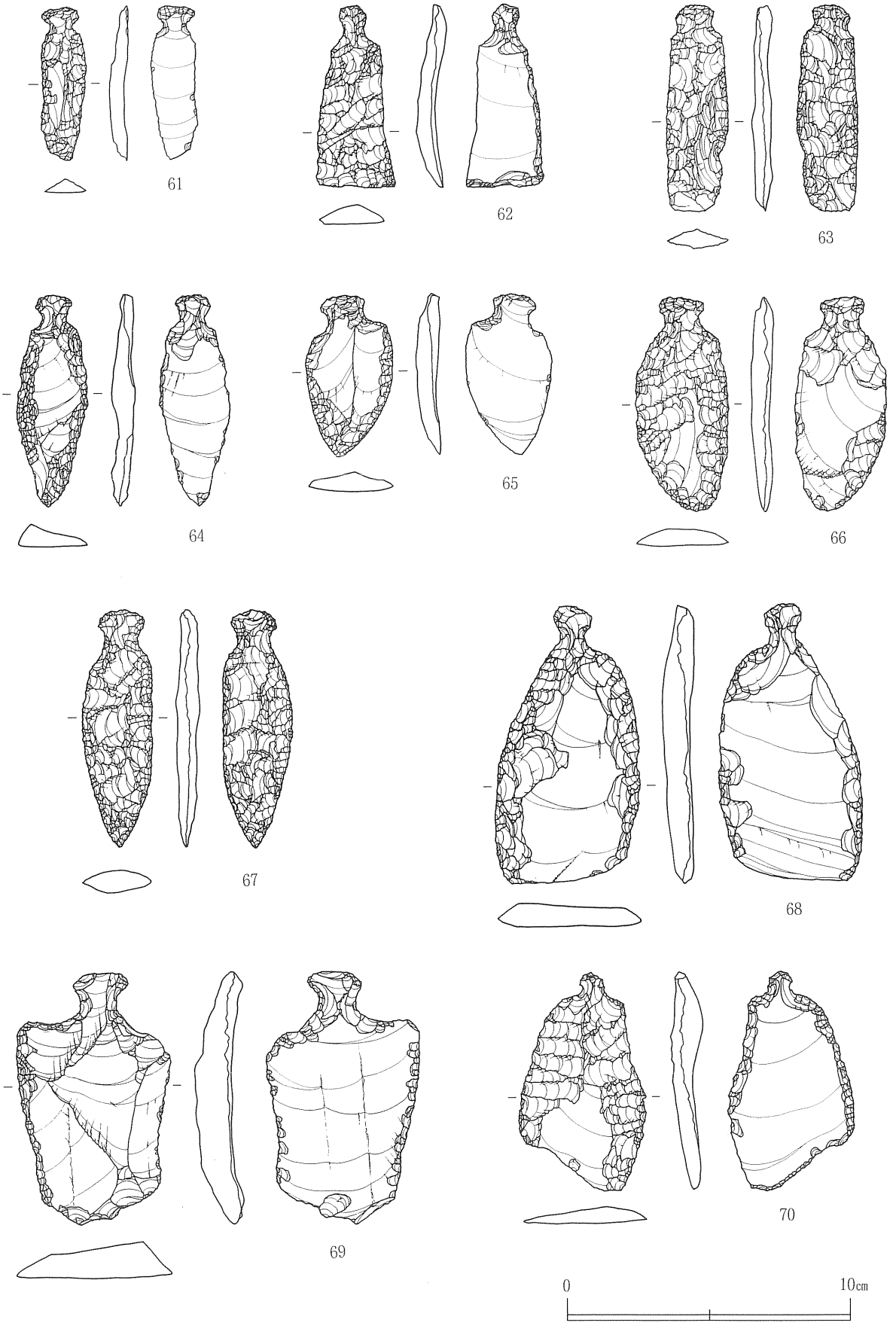
第47図　遺構外出土石器（１）



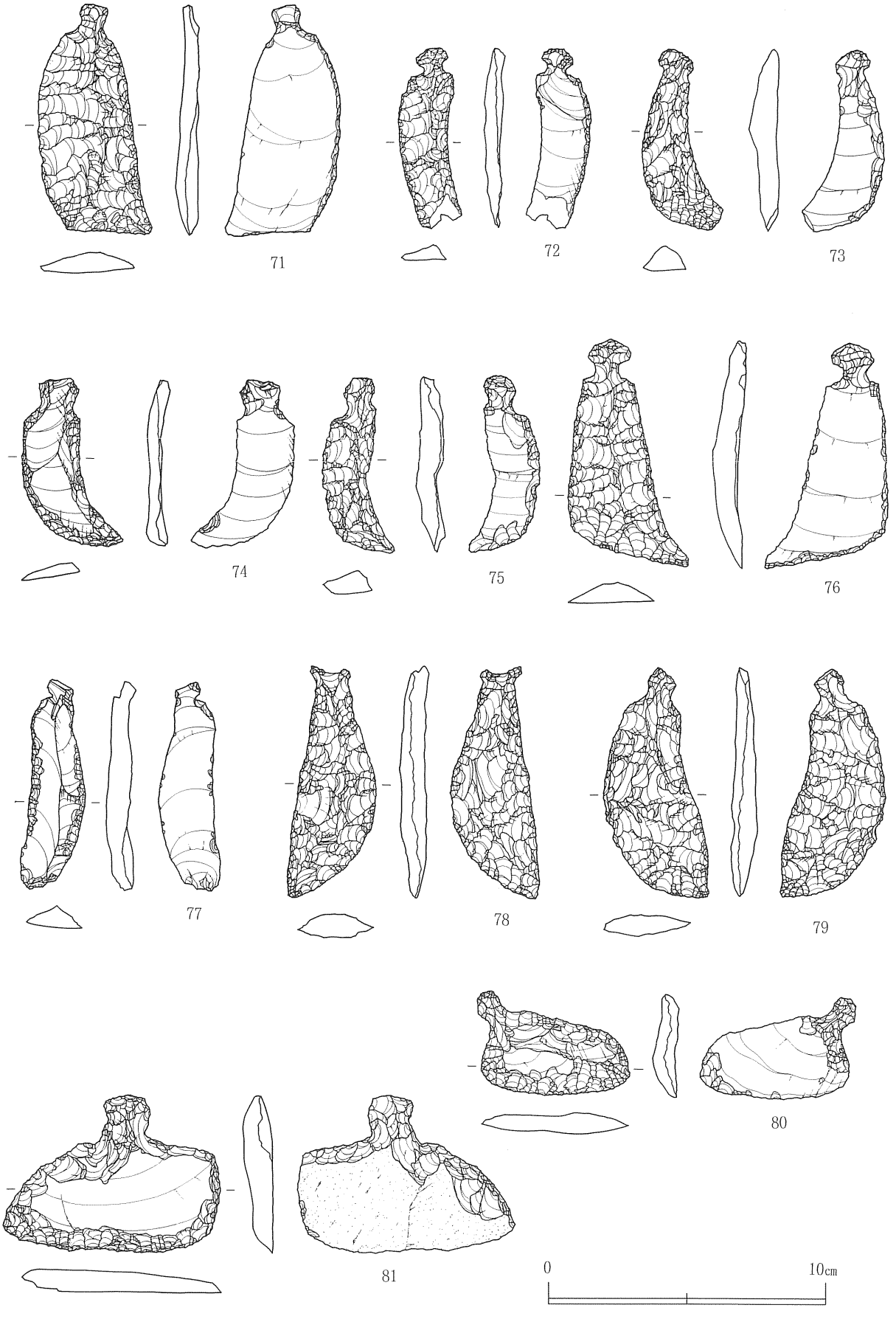
第48図　遺構外出土石器（２）



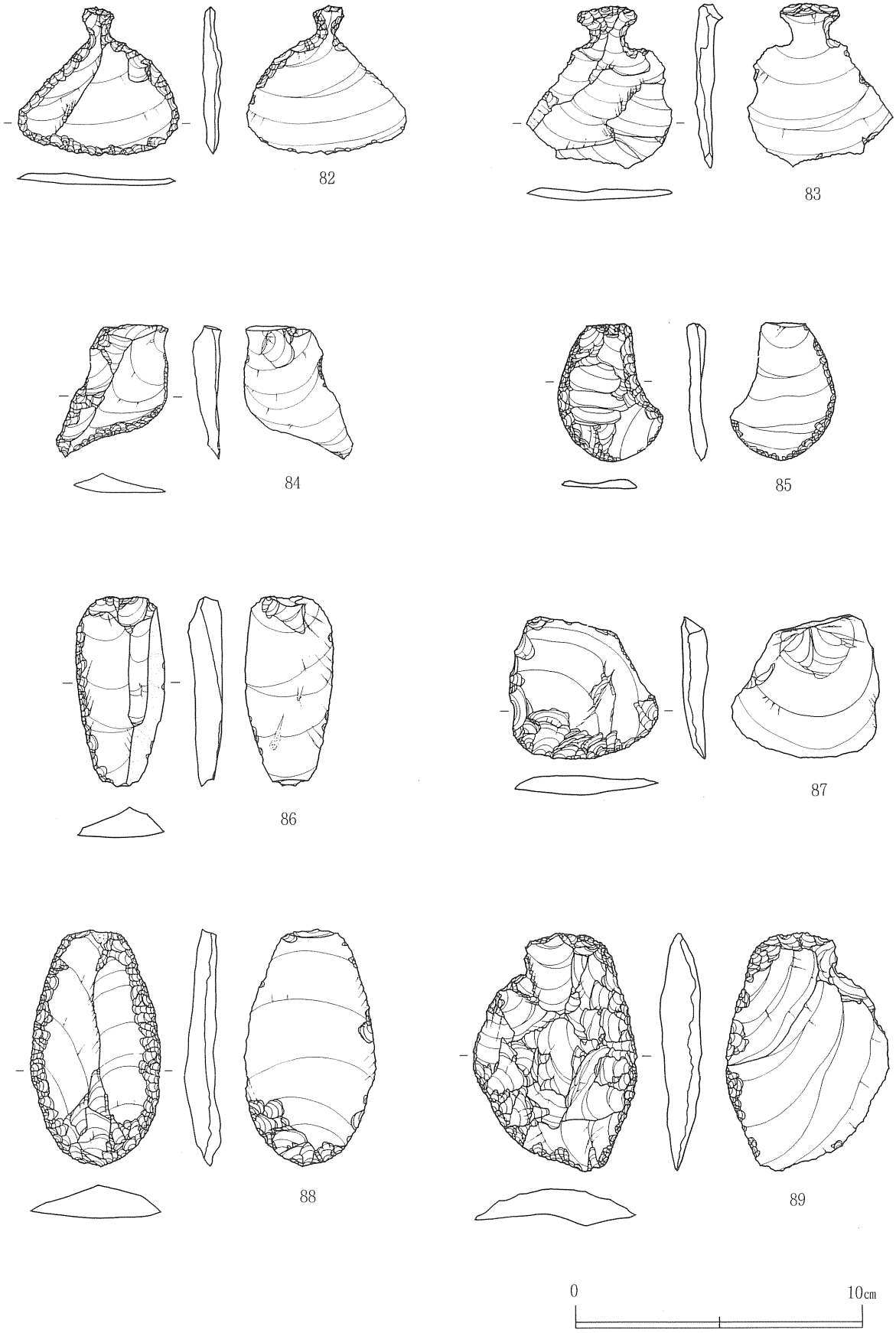
第49図　遺構外出土石器（３）



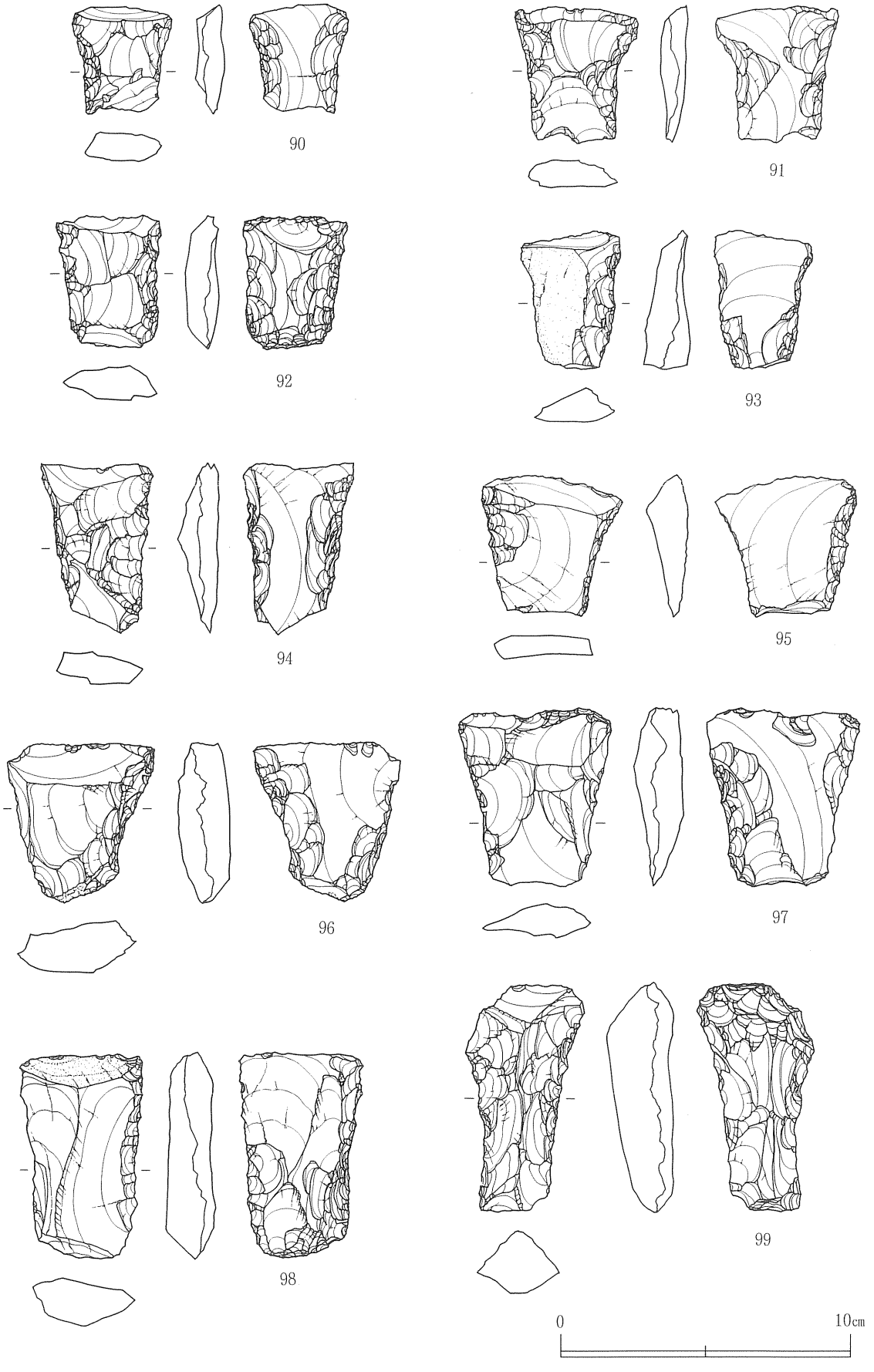
第50図　遺構外出土石器（４）



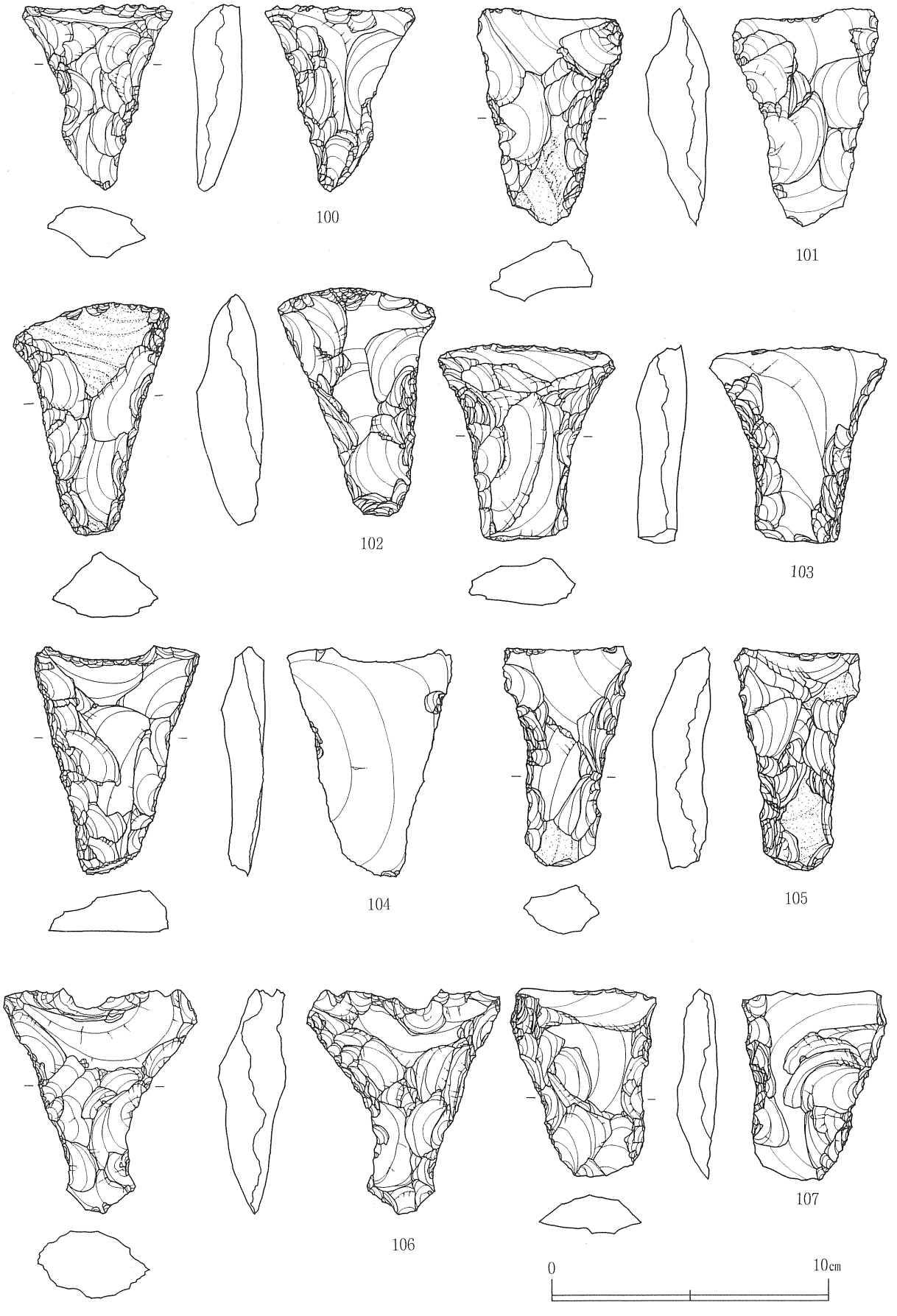
第51図　遺構外出土石器（５）



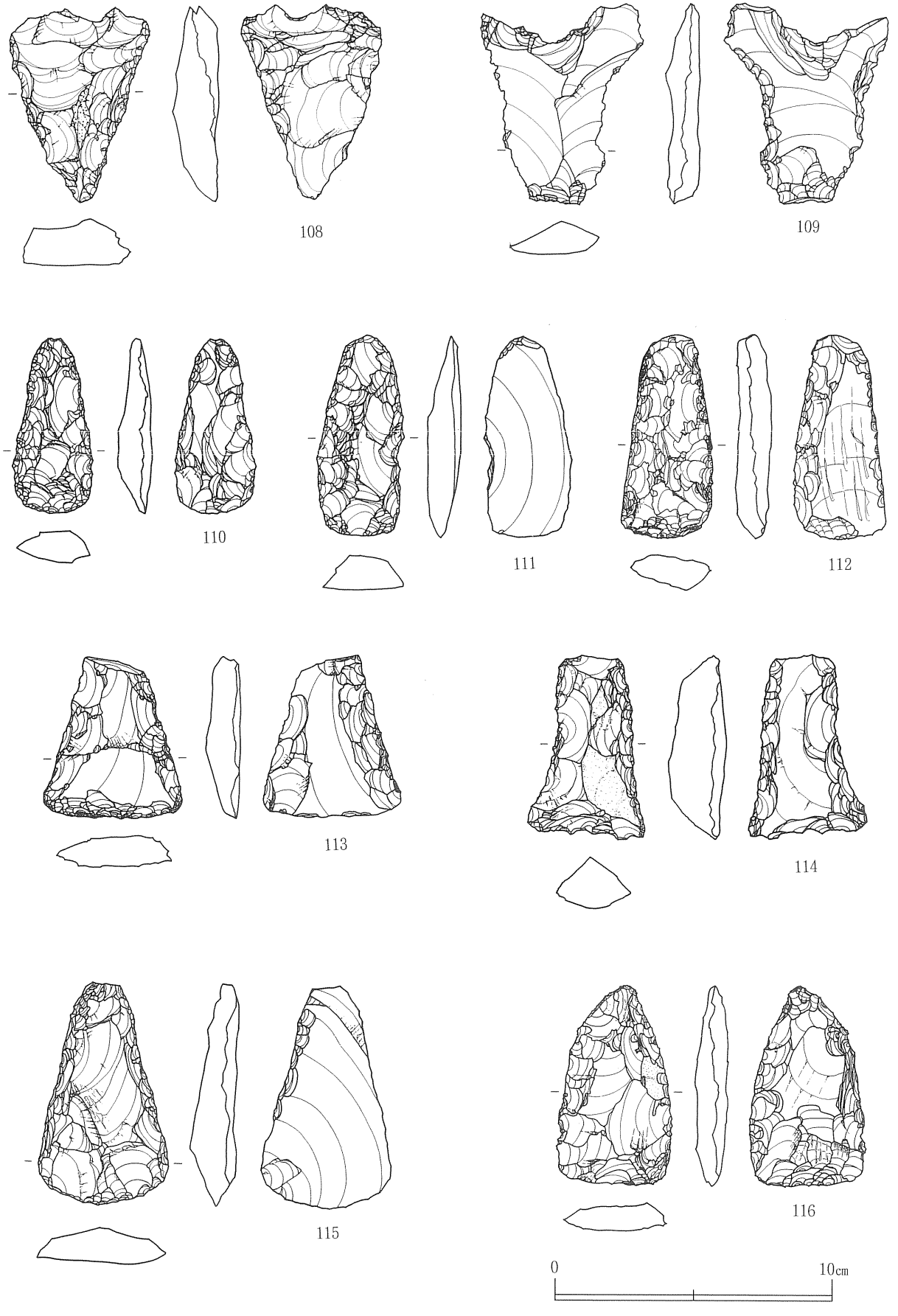
第52図　遺構外出土石器（６）



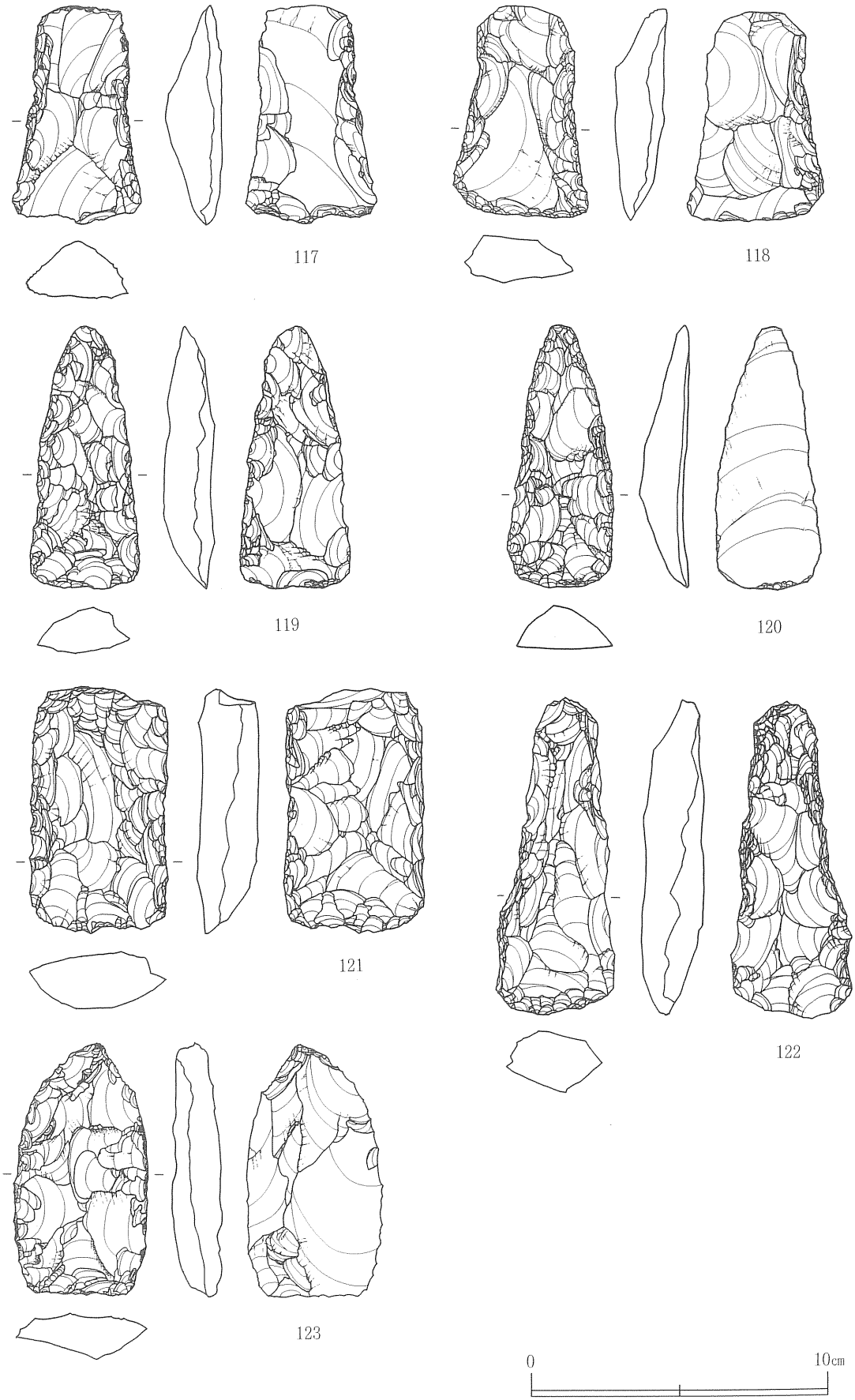
第53図　遺構外出土石器（７）



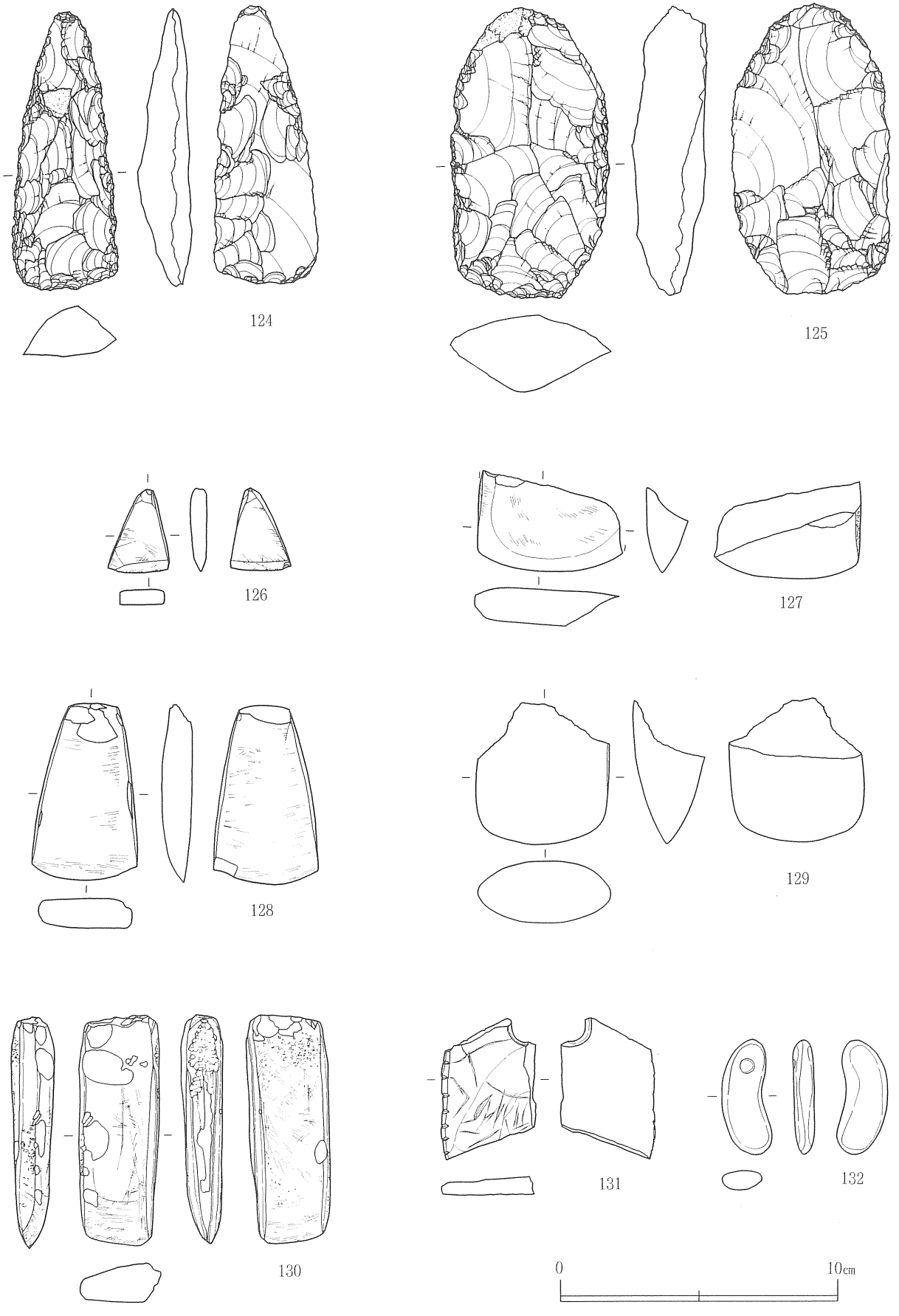
第54図　遺構外出土石器（８）



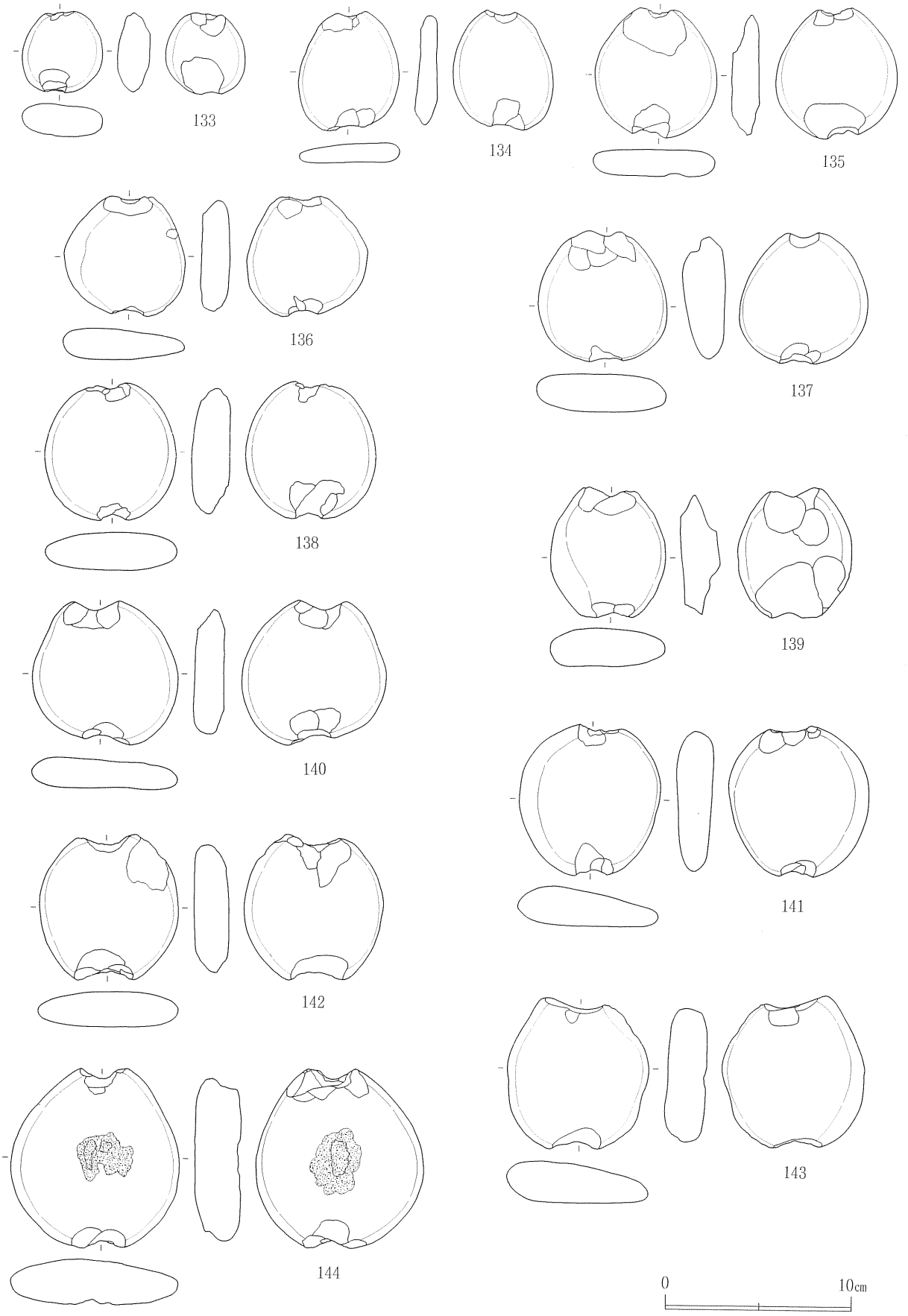
第55図　遺構外出土石器（９）



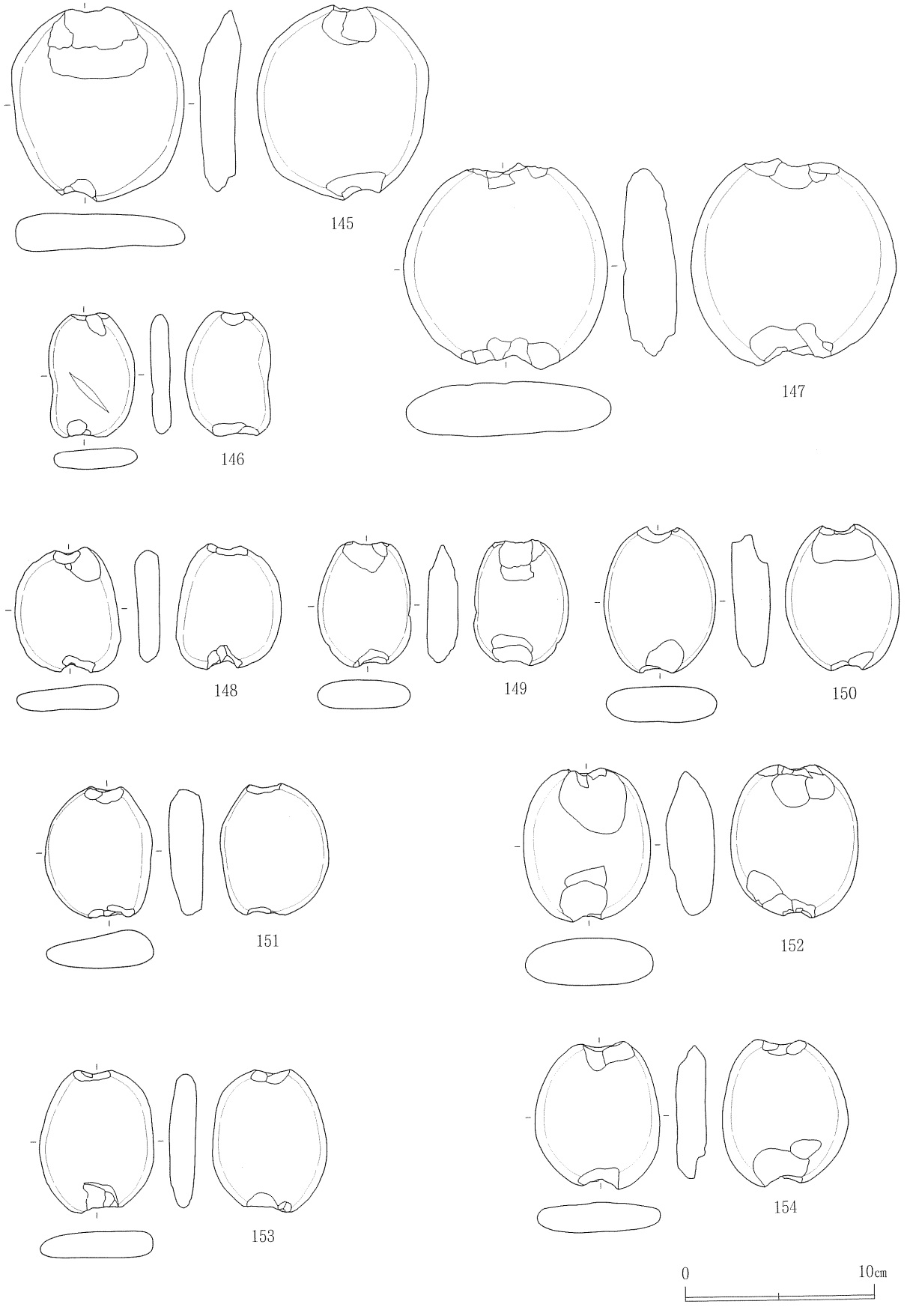
第56図　遺構外出土石器（10）



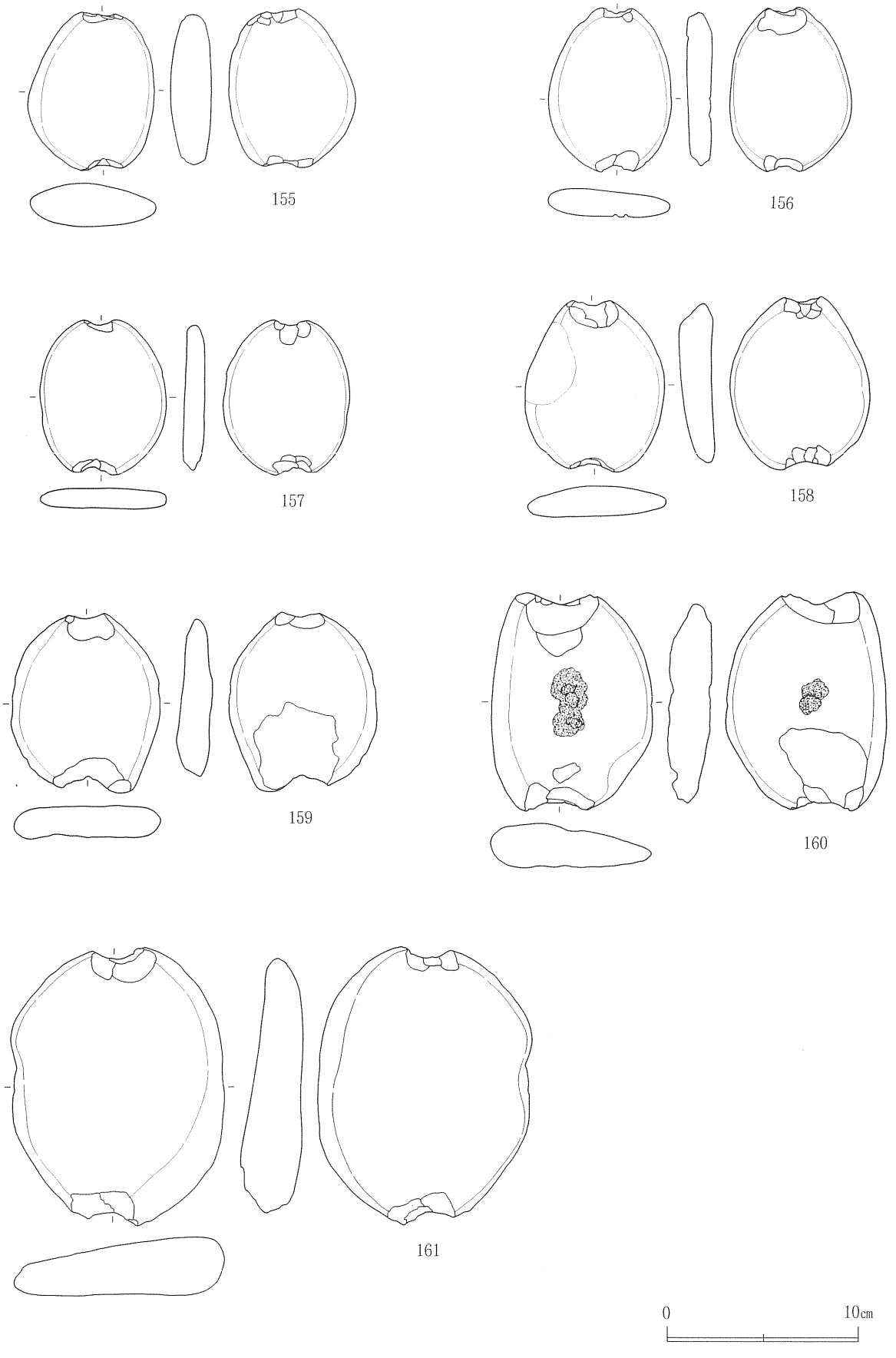
第57図　遺構外出土石器（11）



第58図　遺構外出土石器（12）

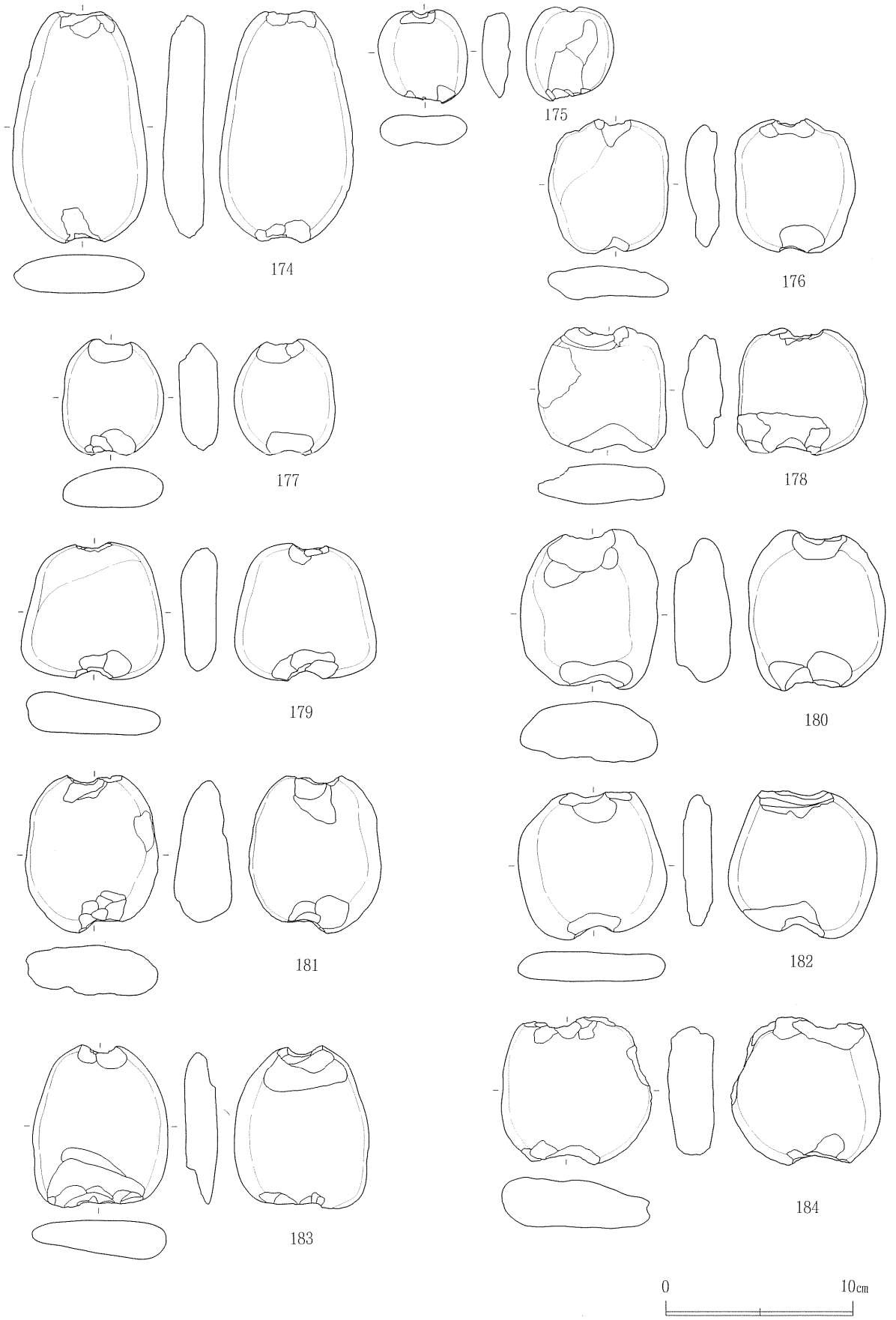


第59図　遺構外出土石器（13）

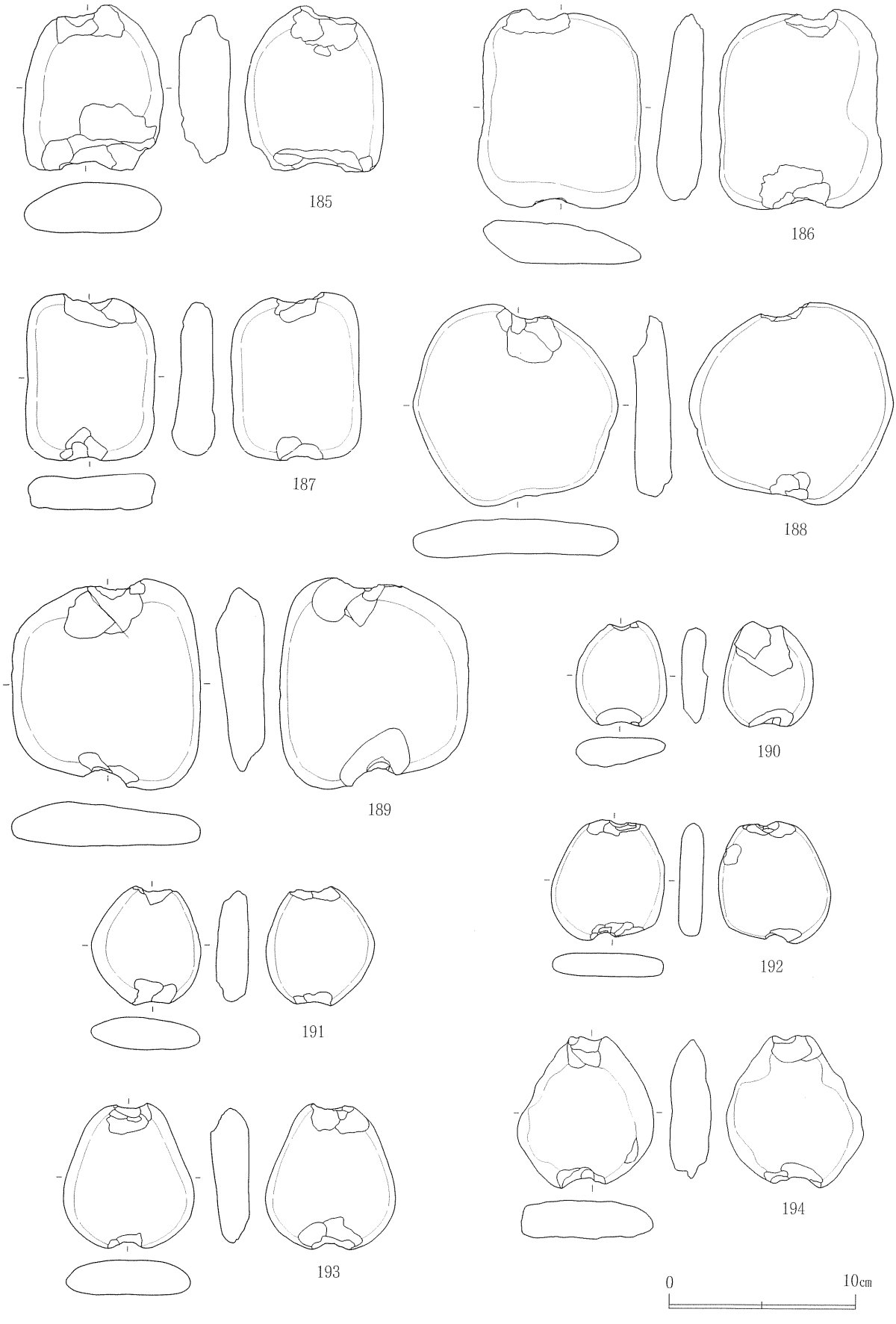


第60図　遺構外出土石器（14）

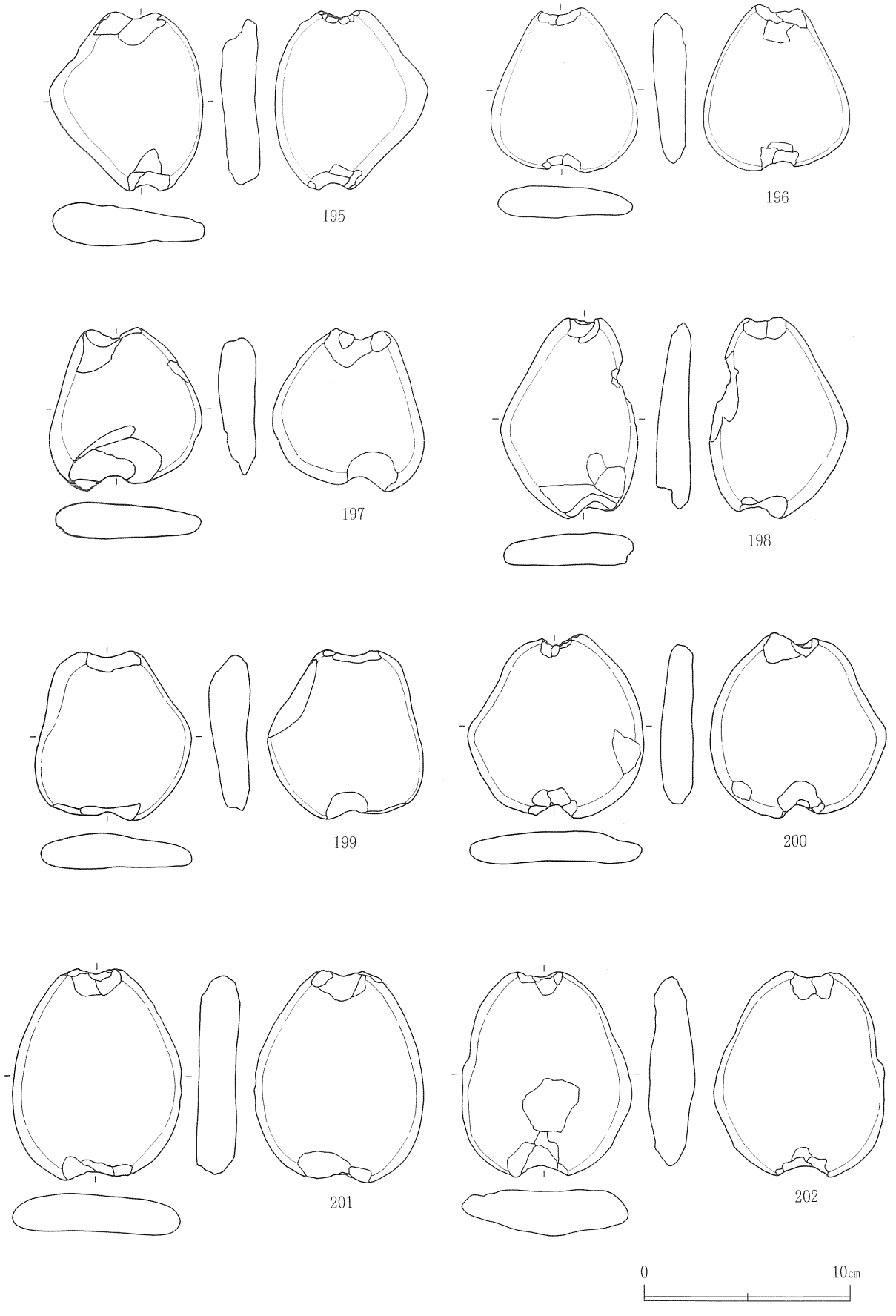
第61図　遺構外出土石器（15）



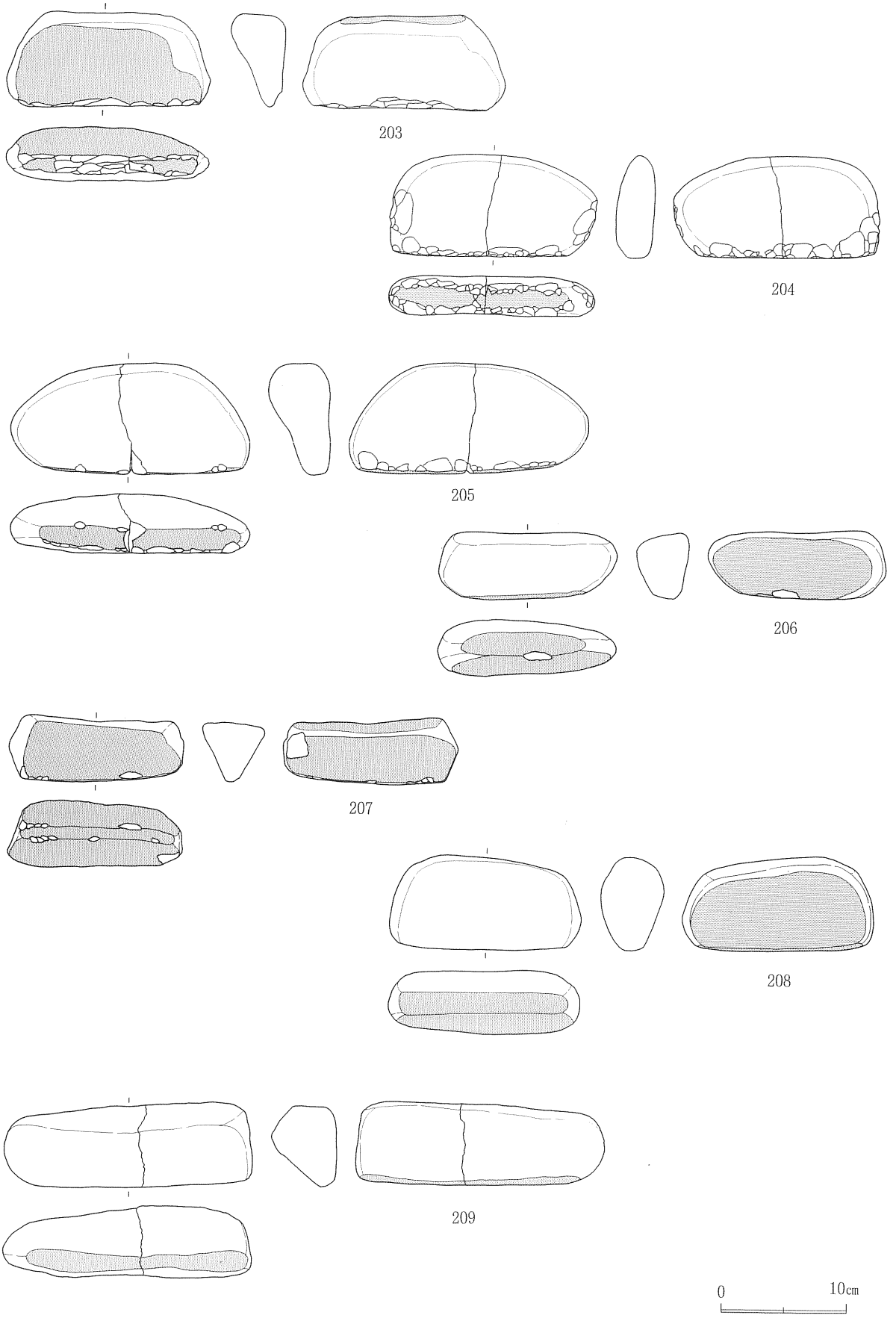
第62図　遺構外出土石器（16）



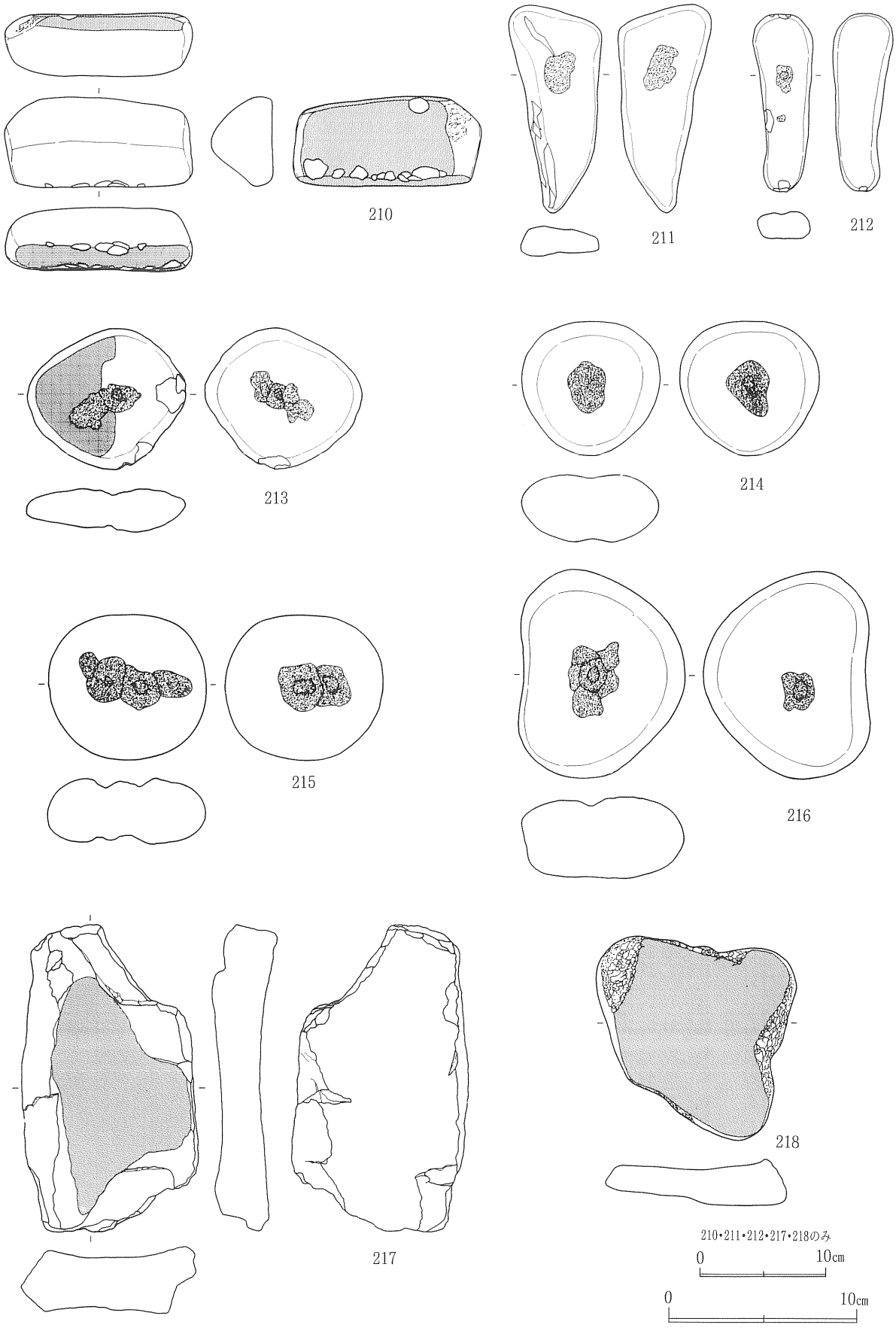
第63図　遺構外出土石器（17）



第64図　遺構外出土石器（18）



第65図　遺構外出土石器（19）



第66図　遺構外出土石器（20）

第4表　遺構外出土石器計測一覧（1）

挿図番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	挿図番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材
48－35	MI51	石鏃	27.0	13.0	3.9	0.97	頁岩	85	ME51	スクレイパー	48.5	37.0	7.0	8.25	頁岩
36	KD62	石鏃	22.0	17.0	2.0	0.87	頁岩	86	KD58	スクレイパー	67.0	31.0	13.0	20.69	頁岩
37	KD58	石鏃	41.0	20.5	6.0	4.77	頁岩	87	KA60	スクレイパー	50.0	52.5	9.0	22.75	頁岩
38	MG52	石鏃	25.0	13.0	3.5	0.85	頁岩	88	KL60	スクレイパー	83.0	45.0	13.0	37.78	頁岩
39	MH51	石鏃	22.0	16.0	3.0	1.61	頁岩	89	JT59	スクレイパー	83.0	57.0	15.0	59.72	頁岩
40	MS48	石鏃	35.0	16.0	4.0	1.99	頁岩	54－90	KE62	トランシェ	37.0	35.0	10.0	13.64	頁岩
41	KC62	石鏃	20.0	12.0	4.0	0.81	頁岩	91	JS62	トランシェ	47.5	42.0	9.0	18.24	頁岩
42	MS48	石鏃	26.5	21.0	4.0	1.28	頁岩	92	KC59	トランシェ	41.0	36.5	12.0	22.40	頁岩
43	KA60	石鏃	26.5	15.0	3.8	1.19	頁岩	93	KA61	トランシェ	48.0	35.0	16.0	21.30	頁岩
44	KD62	石鏃	28.0	15.0	4.0	1.37	頁岩	94	KA61	トランシェ	38.0	59.0	15.0	25.62	頁岩
45	JS62	石鏃	32.0	14.0	3.5	1.47	頁岩	95	KA58	トランシェ	49.0	49.0	15.0	25.44	頁岩
46	JR60	石鏃	32.0	19.0	4.5	2.46	頁岩	96	KA58	トランシェ	56.0	51.0	18.0	48.17	頁岩
47	KO59	石鏃	33.0	18.5	4.5	1.90	頁岩	97	JS63	トランシェ	62.0	58.0	17.0	40.29	頁岩
48	JS62	石鏃	34.5	16.0	6.0	2.53	頁岩	98	KA61	トランシェ	71.0	43.0	17.0	48.33	頁岩
49	KC61	石鏃	49.5	14.0	5.3	2.76	頁岩	99	KC59	トランシェ	79.0	40.0	22.0	58.80	頁岩
50	KH58	石鏃	54.0	16.0	4.0	2.43	頁岩	55－100	KA61	トランシェ	67.5	54.5	17.0	44.16	頁岩
49－51	KR60	石槍	55.0	17.0	10.0	9.98	頁岩	101	MD46	トランシェ	79.0	53.0	23.0	62.10	頁岩
52	LP52	石槍	96.0	31.0	15.0	38.01	頁岩	102	JN64	トランシェ	84.0	57.0	24.0	70.59	頁岩
53	KC59	石槍	81.0	30.0	16.0	30.05	頁岩	103	KB58	トランシェ	72.0	64.0	18.0	63.92	頁岩
54	LR51	石槍	83.0	34.0	14.5	42.28	頁岩	104	JM58	トランシェ	83.0	60.0	16.0	58.93	頁岩
55	MH51	石槍	57.5	37.0	10.5	20.95	玉髄	105	JS62	トランシェ	81.0	46.0	21.0	61.03	頁岩
56	LT51	石槍	104.0	47.0	23.0	93.47	頁岩	106	KE61	トランシェ	82.0	70.0	24.0	75.97	頁岩
50－57	JR58	石槍	62.0	32.0	12.5	23.31	頁岩	107	KC61	トランシェ	68.0	53.0	15.0	46.58	頁岩
58	MB50	石槍	111.0	41.0	19.0	85.25	頁岩	56－108	ME49	トランシェ	71.0	51.0	17.0	44.18	頁岩
59	MA50	石槍	110.0	39.0	15.0	55.04	頁岩	109	KA59	トランシェ	73.0	58.0	13.0	39.34	頁岩
60	MI50	石槍	175.0	32.0	16.0	72.56	頁岩	110	JT56	石箆	63.5	9.0	12.0	19.65	頁岩
51－61	JT62	石匙	54.5	16.5	6.5	4.34	頁岩	111	MH51	石箆	73.0	32.0	12.0	30.20	頁岩
62	KG56	石匙	65.0	28.0	10.0	11.63	頁岩	112	LM55	石箆	74.0	33.5	13.0	30.13	頁岩
63	NT38	石匙	73.0	32.0	7.5	10.98	頁岩	113	KD61	石箆	54.0	50.0	13.0	35.03	頁岩
64	KC59	石匙	75.0	25.5	9.0	13.25	頁岩	114	JS63	石箆	67.0	43.0	21.0	43.80	頁岩
65	MH52	石匙	52.0	31.0	8.5	11.26	頁岩	115	MT45	石箆	80.0	46.0	17.0	57.20	頁岩
66	JK58	石匙	76.0	32.5	8.0	17.75	頁岩	116	MB51	石箆	72.5	42.0	12.0	38.50	頁岩
67	KE62	石匙	94.0	24.5	9.0	16.58	頁岩	57－117	JR60	石箆	124.0	44.0	19.0	53.21	頁岩
68	KE59	石匙	98.5	51.5	11.0	46.99	頁岩	118	JS62	石箆	72.0	46.0	12.5	53.60	頁岩
69	JG60	石匙	89.0	55.0	18.0	62.07	頁岩	119	MB52	石箆	89.0	37.0	17.0	52.13	頁岩
70	KC62	石匙	77.0	45.0	12.0	25.43	頁岩	120	MF51	石箆	89.0	36.0	15.0	41.66	頁岩
52－71	KB60	石匙	84.0	42.0	9.0	22.71	頁岩	121	MA50	石箆	83.0	48.0	22.0	103.80	頁岩
72	MI50	石匙	65.0	23.0	7.0	6.94	頁岩	122	ME52	石箆	107.0	41.0	21.0	48.09	頁岩
73	MD51	石匙	65.5	29.5	11.5	11.16	頁岩	123	JS56	石箆	85.5	46.0	17.0	60.83	頁岩
74	MI52	石匙	60.0	37.0	7.5	9.19	頁岩	58－124	MH53	石箆	101.0	38.0	19.5	59.40	頁岩
75	KO59	石匙	63.5	26.0	10.0	11.29	頁岩	125	LS51	石箆	105.0	57.0	28.0	151.90	頁岩
76	MN50	石匙	82.0	44.0	11.5	20.89	頁岩	126	KC62	磨製石斧	30.0	22.0	6.0	3.96	安山岩
77	KG61	石匙	76.0	23.5	10.0	11.05	頁岩	127	NB40	磨製石斧	36.0	53.0	15.5	31.75	凝灰岩
78	NG52	石匙	84.0	42.0	11.0	21.46	頁岩	128	MG52	磨製石斧	64.0	39.0	11.0	46.09	凝灰岩
52－79	MG52	石匙	83.0	38.0	10.0	22.10	頁岩	129	KJ56	磨製石斧	51.5	48.5	26.5	52.65	花崗岩
80	NC44	石匙	37.0	55.0	9.6	14.01	頁岩	130	KH60	磨製石斧	83.0	30.0	15.5	54.97	鉄石英
81	JQ59	石匙	57.0	79.0	10.5	34.97	頁岩	131	ME48	石製品	51.0	34.0	6.5	10.92	砂岩
53－82	JT62	石匙	51.5	56.0	7.0	11.02	頁岩	132	KH54	石製品	42.0	19.0	8.0	7.29	安山岩
83	MK51	石匙	51.0	57.0	10.0	11.00	頁岩	59－133	KG55	石錘	43.5	43.0	17.5	40.60	安山岩
84	JR57	スクレイパー	46.5	39.0	10.0	11.00	頁岩	134	MH50	石錘	64.5	54.5	12.0	59.40	安山岩

※ トランシェ＝トランシェ様石器

第５表　遺構外出土石器計測一覧（２）

挿図番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	挿図番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材
135	ＫＣ62	石　錘	70.0	67.0	15.0	81.60	安山岩	177	ＭＨ51	石　錘	62.0	54.0	21.0	90.50	安山岩
136	ＫＣ59	石　錘	64.0	66.0	17.0	80.80	安山岩	178	ＫＩ61	石　錘	67.5	69.5	21.5	115.70	安山岩
137	ＫＥ61	石　錘	65.0	69.0	22.0	135.90	安山岩	179	ＮＧ50	石　錘	73.0	76.0	22.5	161.60	安山岩
138	ＫＧ59	石　錘	74.0	70.0	21.0	152.50	安山岩	180	ＭＥ51	石　錘	86.0	75.0	32.0	232.90	安山岩
139	ＭＦ51	石　錘	70.0	62.0	20.0	97.80	安山岩	181	ＪＴ60	石　錘	83.5	71.0	31.0	213.50	安山岩
140	ＭＧ51	石　錘	77.5	78.0	17.5	151.40	安山岩	182	ＪＴ60	石　錘	79.0	80.0	16.0	150.30	砂　岩
141	ＪＰ60	石　錘	81.0	76.0	21.0	169.80	安山岩	183	ＭＢ52	石　錘	87.0	72.5	20.0	114.70	安山岩
142	ＪＱ59	石　錘	78.0	75.0	19.0	137.10	安山岩	184	ＪＯ60	石　錘	79.0	81.0	27.5	209.60	安山岩
143	ＫＤ62	石　錘	81.0	77.0	23.0	194.40	安山岩	64－185	ＫＢ59	石　錘	89.0	84.5	27.0	207.50	安山岩
144	ＫＨ59	石　錘	96.0	90.0	25.0	190.00	安山岩	186	ＪＴ59	石　錘	24.5	86.5	25.5	312.00	安山岩
60－145	ＭＢ52	石　錘	104.0	93.0	22.5	267.40	安山岩	187	ＭＱ47	石　錘	90.0	69.5	23.0	179.30	安山岩
146	ＭＧ50	石　錘	67.0	46.0	11.0	52.60	安山岩	188	ＭＦ51	石　錘	108.5	109.5	22.0	306.70	安山岩
147	ＬＨ57	石　錘	110.5	108.5	29.0	351.30	安山岩	189	ＭＦ51	石　錘	113.5	101.0	26.0	370.90	安山岩
148	ＪＳ62	石　錘	67.5	57.0	13.5	79.30	安山岩	190	ＭＨ52	石　錘	56.5	48.5	16.0	40.80	安山岩
149	ＭＦ51	石　錘	67.0	51.0	16.5	78.00	安山岩	191	ＫＥ61	石　錘	64.5	59.0	17.5	72.40	安山岩
150	ＫＥ58	石　錘	78.0	61.0	21.0	127.10	安山岩	192	ＪＴ62	石　錘	64.5	60.0	13.0	74.20	安山岩
151	ＫＤ60	石　錘	70.5	58.0	20.0	105.50	安山岩	193	ＫＦ60	石　錘	58.5	70.0	21.0	138.80	安山岩
152	ＪＳ60	石　錘	81.5	67.5	25.5	169.20	安山岩	194	ＪＬ58	石　錘	81.0	73.0	22.5	139.30	安山岩
153	ＪＳ60	石　錘	76.0	61.0	14.0	89.60	安山岩	65－195	ＫＢ58	石　錘	87.0	74.5	21.0	134.00	安山岩
154	ＫＩ59	石　錘	78.5	66.0	16.0	89.00	安山岩	196	ＭＨ51	石　錘	81.0	71.5	16.0	107.20	安山岩
61－155	ＫＢ62	石　錘	82.5	66.0	23.0	152.10	安山岩	197	ＭＩ51	石　錘	79.0	74.0	18.5	110.50	安山岩
156	ＭＤ52	石　錘	85.0	64.0	13.0	90.70	安山岩	198	ＫＣ59	石　錘	98.0	67.5	17.0	112.20	安山岩
157	ＬＲ51	石　錘	81.0	66.0	11.0	85.50	安山岩	199	ＭＳ47	石　錘	83.0	76.0	20.5	136.20	安山岩
158	ＪＴ60	石　錘	89.5	53.0	19.0	132.80	安山岩	200	ＪＴ57	石　錘	90.0	86.0	16.5	121.40	安山岩
159	ＪＴ59	石　錘	93.0	77.0	22.0	181.70	安山岩	201	ＫＬ57	石　錘	103.0	82.5	20.0	252.90	安山岩
160	ＫＫ58	石　錘	113.5	84.0	23.0	244.30	安山岩	202	ＫＥ62	石　錘	100.0	84.0	23.5	208.80	安山岩
161	ＭＩ50	石　錘	145.0	111.5	32.5	573.80	安山岩	66－203	ＭＧ51	半円状扁平	78.0	164.0	44.5	734.75	安山岩
62－162	ＭＧ50	石　錘	69.0	51.5	15.5	59.90	安山岩	204	ＪＯ60	半円状扁平	82.0	165.5	31.0	719.43	安山岩
163	ＭＨ50	石　錘	71.5	44.0	15.0	53.20	安山岩	205	ＭＥ52	半円状扁平	88.0	191.0	49.0	1007.63	安山岩
164	ＫＣ61	石　錘	76.0	56.5	21.5	123.50	安山岩	206	ＪＳ62	擦り石	55.0	142.0	42.0	415.98	安山岩
165	ＫＧ61	石　錘	77.0	44.5	18.0	80.70	安山岩	207	ＫＦ61	擦り石	54.0	140.0	50.0	468.73	安山岩
166	ＭＬ52	石　錘	87.5	64.0	22.5	191.60	安山岩	208	ＪＲ57	擦り石	76.0	152.0	50.5	916.06	安山岩
167	ＭＨ51	石　錘	79.5	50.0	17.5	92.10	安山岩	209	ＭＩ50	擦り石	68.0	198.0	52.0	1089.21	安山岩
168	ＫＥ62	石　錘	83.0	56.0	24.0	108.70	砂　岩	67－210	ＭＢ40	擦り石	72.0	149.0	49.0	870.65	安山岩
169	ＫＰ59	石　錘	90.0	63.0	18.0	136.70	安山岩	211	ＪＯ60	凹　石	160.5	70.4	20.9	355.82	砂　岩
170	ＫＨ59	石　錘	90.0	61.5	18.0	130.80	安山岩	212	ＫＱ58	凹　石	141.0	48.5	26.0	192.95	安山岩
171	ＭＨ52	石　錘	91.0	68.0	17.0	141.60	安山岩	213	ＪＲ56	凹　石	126.0	112.0	34.0	415.02	安山岩
172	ＫＦ56	石　錘	101.0	69.5	22.0	202.00	安山岩	214	ＭＪ52	凹　石	73.5	70.5	37.0	248.06	安山岩
173	ＫＩ58	石　錘	100.0	69.0	21.0	166.60	安山岩	215	ＪＰ56	凹　石	126.5	118.5	51.0	841.51	安山岩
63－174	ＪＴ63	石　錘	124.0	71.5	23.0	266.50	安山岩	216	ＭＩ40	凹　石	132.0	165.0	64.0	1685.53	安山岩
175	ＬＳ51	石　錘	49.0	48.0	15.0	48.70	安山岩	217	ＬＧ58	石　皿	244.0	140.0	53.0	1901.14	安山岩
176	ＫＤ58	石　錘	71.0	65.0	19.0	87.10	安山岩	218	ＫＬ51	石　皿	162.0	158.5	37.0	952.65	安山岩

※ 半円状扁平＝半円状扁平打製石器

第５章　自然科学的分析

根下戸道下遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

根下戸道下遺跡は、米代川と長木川の合流点に中洲状に発達する台地に位置する。台地は、Hayakawa(1985)や池内遺跡等の調査結果から、１万２千年前に十和田火山が噴火した際の八戸火砕流の堆積面と考えられる。

本遺跡では、八戸火砕流の堆積物を侵食して形成された谷が確認されている。谷の堆積物中からは自然木等も出土し、上位には降下火山灰も認められている。また、火災流堆積物を掘り込んで構築された縄文時代の住居跡や土坑が検出されている。

本報告では、以下に示す分析課題を設定し、それぞれ自然科学分析を実施する。

Ⅰ．分析課題

１．放射性炭素年代測定

遺構の構築年代および沢内堆積物の堆積年代等に関する資料を得るため、出土した炭化材および自然木の放射性炭素年代測定を行う。なお、住居跡から出土した炭化材３点については、加速器質量分析法、住居跡の土坑内から出土した炭化材と沢５から出土した自然木11点については比例計数管法による年代測定をそれぞれ行う。

２．テフラ分析

沢５に堆積した火山灰を特定するため、火山ガラス比および屈折率測定を行う。

３．樹種同定

年代測定を行った試料について樹種同定を行い、用材選択および古植生に関する資料を得る。

４．種実遺体同定

土坑内から出土した種実遺体の種類を明らかにし、植物利用および古植生に関する資料を得る。

Ⅱ．放射性炭素年代測定

１．試料

試料は、住居跡から出土した炭化材４点(試料番号１～４)と、沢５から出土した自然木10点(試料番号５～14)である。試料番号１～４については加速器質量分析法(ＡＭＳ法)、試料番号５～14については比例計数管法による測定を行う。

２．方法

（１）加速器質量分析法

測定は、(株)地球科学研究所が行った。なお、放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

表１　年代測定結果

番号	遺構・出土位置・試料名	試料の質	測定方法	年代値	Code No.
1	ＳＩ02出土炭化物	炭化材	加速器質量分析	3540± 60	Beta－113297
2	ＳＩ03出土炭化物	炭化材	加速器質量分析	7820±100	Beta－113298
3	ＳＩ04出土炭化物	炭化材	比例計数管法	14400±160	GaK－19946
4	ＳＩ03床面中央部土坑出土炭化物	炭化材	比例計数管法	12380±130	GaK－19895
5	沢５－木１	炭化材	比例計数管法	12320±120	GaK－19896
6	沢５－木２	生木	比例計数管法	2630± 70	GaK－19897
7	沢５－木３	生木	比例計数管法	1720± 90	GaK－19898
8	沢５－木４	生木	比例計数管法	5480± 80	GaK－19899
9	沢５－木５	生木	比例計数管法	1870± 70	GaK－19900
10	沢５－木６	生木	比例計数管法	2000± 60	GaK－19901
11	沢５－木７	生木	比例計数管法	4510± 80	GaK－19902
12	沢５－木８	生木	比例計数管法	4840± 70	GaK－19903
13	沢５－木９	生木	比例計数管法	5290± 80	GaK－19904
14	沢５－木10	生木	比例計数管法	5500± 80	GaK－19905

１)年代値は、いずれも1950年を基点とした年数

２)放射性炭素の半減期は、試料番号１～３が5568年、４～14が5570年を使用した。

（２）比例計数管法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。なお、放射性炭素の半減期は、5570年を使用した。

３．結果

各測定結果を表１に示す。試料番号１，２については、得られた年代値に炭素安定同位体比（13C/12C）による補正値を加えて算出した値を表記した。

４．考察

年代測定を行った住居跡は、発掘調査所見から、ＳＩ02が縄文時代中期、ＳＩ03が縄文時代早期、ＳＩ04が縄文時代晩期と考えられている。得られた年代値は、ＳＩ02が3540±60y.B.P.、ＳＩ03が7820±100y.B.P.、ＳＩ04が14,400±160y.B.P.であった。ＳＩ04以外の年代値は、それぞれ北海道南部や東北地方北部で行われた縄文時代早期および中期の年代測定結果(キーリ・武藤，198)と調和的である。しかし、ＳＩ04の年代値は縄文時代晩期の遺跡で得られている年代測定結果より、かなり古い値となっている。本住居跡が八戸火砕流堆積物上に構築されていること、得られた年代値が八戸火砕流直下の埋没林の年代測定値(大池，1964；大池・庄子，1977；大池ほか，1977；寺田ほか，1994)に近いこと等から、火砕流に伴う炭化材が何らかの経路を経て取り込まれたものと考えられる。

一方、ＳＩ03の床面中央部土坑から出土した炭化材は12380±130y.B.P.であり、試料番号２よりも古い年代を示した。ＳＩ03も火砕流堆積物を掘り込んで構築されていること、得られた年代値が上記した八戸火砕流直下の埋没林の年代測定値と一致すること等から、炭化材は火砕流に伴う可能性と、本土坑が住居跡に伴うものではない可能性が考えられる。

沢５から出土した木材は、1720～12320y.B.P.までの年代値が得られた。沢５は火砕流堆積物を削って形成されており、上部に認められた火山灰は後述するように十和田ａと白頭山苫小牧テフラに同定されている。このことを考慮すれば、木材は約12000年に火砕流が堆積してから十和田ａが降灰する

914年までの間に周囲に生育していた樹木が流れ込んだものと推定される。また、試料番号5については、火砕流が侵食された際に洗い出されて再堆積したものと考えられる。

Ⅲ．テフラ分析

1．試料

試料番号30・32は、沢堆積上位火山灰とされている暗褐色の主に火山ガラスからなるブロック状堆積物である。また、沢堆積下位火山灰とされる試料番号31・33は黄褐色の主に粗粒径の軽石からなるブロック状堆積物である。試料番号30・32はA.D.915年に十和田カルデラから噴出した十和田ａテフラ(To-a：Hayakawa、1985)に由来すると考えられている。

2．分析方法

試料約40ｇに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1／16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1／4㎜-1／8㎜の砂分をポリタングステート(比重約2.96に調整)により重液分離、得られた軽鉱物分および重鉱物を偏光顕微鏡下にて観察する。火山ガラスは、便宜上軽鉱物に含め、その形態によりバブル型・中間型・軽石型・繊維束型の４タイプに分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラス、軽石型は小気泡を非常に多く持つスポンジ状、繊維束型は気泡の長く伸びたものが集まった繊維束状のものとする。また、重鉱物の中で、不透明な粒については斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。粒径1／4㎜以上の砂分についても実体顕微鏡で観察し、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石の産状を定性的に調べる。さらに火山ガラスの屈折率の測定を行う。以上の観察および屈折率の測定結果からテフラの同定を行う。なお、屈折率の測定は、古澤(1995)に示された温度変化型屈折率測定装置を用いて行う。

3．結果

結果を表２に示す。試料番号30・32には、多量の細砂～極細砂径の無色透明の火山ガラスが認められる。火山ガラスの形態はバブル型および繊維束型が多く、軽石型は少ない。また、軽石およびスコリアは全く認められない。重鉱物は微量であるが、斜方輝石が最も多く、単斜輝石、角閃石、不透明鉱物などが認められる。火山ガラスの屈折率は、平均値1.5167、最小値1.5138、最大値1.5198であっ

表２　火山ガラス・重鉱物分析結果

試料番号	火山ガラス		軽石			重鉱物	
	量	色調・形態	量	色調・発砲度	最大粒径	量	種類
30・32	＋＋＋＋	cl•bw•fb〉pm	－			＋	Opx〉Cpx, Ho, Opq
31・33	＋＋＋＋	cl•pm, fb〉bw	＋＋＋＋	W～GBr•g	3.5	＋＋＋	Opx〉Cpx, Opq

凡例　－:含まれない　＋＋＋:中量　＋＋＋＋:多量

cl:無色透明　bw:バブル型　pm:軽石型　fb:繊維束型

GBr:灰褐色　W:白色

g:良好　最大粒径は㎜

Opx:斜方輝石．Cpx:単斜輝石．Ho:角閃石．0pq:不透明鉱物

た。この火山ガラスは、町田ほか(1981)、Arai et.al.(1986)、町田・新井(1992)等の記載および検出層準から、現地所見とは異なって朝鮮半島の基部にある白頭山(長白山)から噴出した白頭山苫小牧テフラ(B-Tm：町田ほか、1981)に由来すると考えられる。本テフラはTo-aの直上に、ごく薄い黒土や泥炭層を挟んで認められることから当初10世紀～13世紀までの間に噴出したと考えられていた。(町田ほか、1981)。これに対して、最近の湖底堆積物の分析により、To-aの噴出がA.D.915年とすればB-Tmの噴火は923年から924年にかけての冬期と推定されている(町田・福沢、1996)。

試料番号31・33には多量の細砂～極細砂径の無色透明の火山ガラスが認められる。火山ガラスの形態は、軽石型および繊維束型が多く、バブル型は比較的少ない。重鉱物は斜方輝石が最も多く、単斜輝石と不透明鉱物が認められる。火山ガラスの屈折率は平均値1.5009、最小値1.4990、最大値1.5034であった。また、最大粒径3.5㎜で白色～灰褐色を呈し発泡が良好な軽石が多量含まれる。この火山ガラスや軽石は、町田ほか(1981)、Arai et.al.(1986)、町田・新井(1992)等の記載および検出層準から、A.D.915年に十和田カルデラより噴出したTo-aに由来すると考えられる。

Ⅳ. 樹種同定

1．試料

試料は、住居跡や沢から出土した構築材や自然木など14点(試料番号15～28)である。いずれも放射性炭素年代測定を行った試料と同一試料を分割したものである。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表3に記した。

2．方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3．結果

樹種同定結果を表3に示す。試料は、針葉樹2種類(カラマツ属またはトウヒ属・アスナロ属)、広葉樹7種類(ハンノキ属ハンノキ亜属・カバノキ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・キハダ・カエデ属・アジサイ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・カラマツ属またはトウヒ属(Larix or Picea)　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状でないことは明らかであるが、詳細は不明。放射組織は単列、1～20細胞高。

・アスナロ属(Thujopsis)　　ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。晩材部には樹脂細胞が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属(Alnus subgen. Alnus)　　カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に

対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織とがある。木繊維の細胞壁が薄いことなどから、根材と考えられる。

・カバノキ属(Betula)　　カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状～交互状に配列する。放射組織は同性であるが、保存状態が悪く、幅および高さは不明。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus)　　ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(Castanea crenata Sieb. et Zucc)　　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・キハダ(Phellodendron amurense Ruprecht)　　ミカン科キハダ属

環孔材で孔圏部は2～5列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合して紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

表3　樹種同定結果

番号	遺構・出土位置・試料名	試料の質	性格など	樹　種	備　考
15	ＳＩ02出土炭化物(縄文時代中期)	炭化材	住居構築材？	キハダ	年代測定No.1
16	ＳＩ03出土炭化物(縄文時代早期)	炭化材	住居構築材？	キハダ	年代測定No.2
17	ＳＩ03床面中央部土坑出土炭化物	炭化材	自然木	カバノキ属	年代測定No.4
18	ＳＩ04出土炭化物(縄文時代晩期)	炭化材	住居構築材？	カラマツ属またはトウヒ属	年代測定No.3
19	沢5－木1	炭化材	自然木	アスナロ属	年代測定No.5
20	沢5－木2	生木	自然木	クリ	年代測定No.6
21	沢5－木3	生木	自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	年代測定No.7
22	沢5－木4	生木	自然木	アジサイ属	年代測定No.8
23	沢5－木5	生木	自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	年代測定No.9
24	沢5－木6	生木	自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	年代測定No.10
25	沢5－木7	生木	自然木	カエデ属	年代測定No.11
26	沢5－木8	生木	自然木	コナラ属コナラ亜属コナラ節	年代測定No.12
27	沢5－木9	生木	自然木	クリ	年代測定No.13
28	沢5－木10	生木	自然木	クリ	年代測定No.14

・カエデ属(Acer)　　カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・アジサイ科(Hydrangea sp.)　　ユキノシタ科

散孔材で、小型の道管がほぼ均一に散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性で、直立細胞のみで構成される高い単列部と、2細胞幅で数細胞高の組織で構成される。単列部は、時に上下に連結する。

4．考察

（1）用材選択について

住居跡から出土した炭化材のうち、試料番号15,16,18は、住居跡に伴うものであり、住居構築材などの一部の可能性がある。このうち、縄文時代早期と中期で共にキハダが利用されていることから、似たような用材の選択が行われていた可能性がある。これまで県内で行われた縄文時代の住居構築材の樹種同定結果では、クリが比較的多く認められている(未公表資料)。これは、隣接する青森県や岩手県の結果ともよく似ており(パリノ・サーヴェイ株式会社，1992；嶋倉，1983,1984)、秋田県でもクリが多く利用されていた可能性がある。それらの結果と比較すると、今回の結果はやや異なる。しかし、各住居1点の調査結果であるため、詳細は不明である。今後さらに資料を蓄積することで明らかにしたい。

（2）古植生について

自然木と考えられる試料は、年代測定で12380～1720y.B.P.までの年代値が得られている。この結果から、自然木は約12000年前以降の様々な時代の試料が混在していると考えられる。樹種同定の結果では、針葉樹1種類、広葉樹6種類が確認され、このうちハンノキ亜属は全て根材と考えられる。火砕流に覆われる前の本地域には、樹種同定の結果から針葉樹のアスナロ属や落葉広葉樹のカバノキ属が生育する植生、火砕流に覆われた後はハンノキ亜属やクリなど等の落葉広葉樹が生育する植生がそれぞれ見られたと考えられる。しかし、各時代の植生史については、詳細は不明であり、今後さらに資料を蓄積すると共に花粉分析などによる植生復元も行いたい。

V．種実遺体の同定

1．試料

試料は、ＳＫＴ20覆土中と沢5覆土中から得られた種実遺体2点である。

2．方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

3．結果

沢5覆土中からは、エゴノキ属が3個体とコナラ亜属が3個体、ＳＫＴ20覆土中から得られたものは、炭化した地下茎のようなもので、種類は不明である。以下に同定された種類の形態的特徴を記す。

・コナラ属コナラ亜属(Quercus subgen. Lepidobaranus)　　ブナ科

核斗が検出された。椀形で、大きさは直系1cm程度。黒褐色を呈し、厚くてやや堅い。表面は、総苞が互いに癒着して瓦状になる。

・エゴノキ属(Styrax sp.)　　エゴノキ科

核が検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ1㎝程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の浅い溝がある。核は厚くて硬い。

４．考察

検出された種実はいずれも堅く、化石として残りやすい。このうちコナラ亜属は、樹種同定の結果からコナラ節に由来する可能性がある。これらの種実遺体は、沢５沿いに生育していた可能性がある。沢５については、年代測定の結果から様々な時代の植物遺体が混入している可能性が指摘されている。植生については、樹種同定の結果から、落葉広葉樹が生育する植生が推定されており、種実遺体同定の結果も基本的には一致する。

＜引用文献＞

Arai,F.,Machida,H.,Okumura,K.,Miyauchi,T.,Soda,T.,and Yamagata,K.(1986)Catalog for Late Quaternary Marker-Tephras in JapanⅡ-Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido -.Geographical of Tokyo Metropolitan University,21,p.223-250.

古澤　明(1995) 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, p.123-133.

Hayakawa,Y.(1985) Pyroclastic Geology of Towada Volcano.Bull.Earthq.Res.Inst.,Univ.Tokyo,60,507-592.

キーリC.T.・武藤康弘(1982) 縄文時代の年代.「縄文文化の研究１　縄文人とその環境」, p.246-275, 雄山閣.

町田　洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス. 276p., 東京大学出版会.

町田　洋・福沢仁之(1996) 湖底堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代. 日本第四紀学会講演要旨集, 26, p.80-81.

町田　洋・新井房夫・森脇　広(1981) 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p.562-569.

大池昭二(1964) 八戸浮石層の絶対年代　－日本第四紀層の^{14}C年代Ⅲ－. 地球科学、70、p.38-39.

大池昭二・庄子貞雄(1977) 八戸浮石層直下の埋没土の^{14}C年代　－日本第四紀層の^{14}C年代(116)－. 地球科学, 31, p.90.

大池昭二・松山　力・竹内貞子(1977) 八戸浮石層直下の埋没化石林の^{14}C年代　－日本第四紀層の14C年代(118)－. 地球科学, 31, p.136-137.

パリノ・サーヴェイ株式会社(1992) 花粉分析・炭化材同定・樹種同定.「御所野遺跡Ⅰ　縄文時代中期の大集落跡」, p.341-355, 一戸町教育委員会.

嶋倉巳三郎(1983) 韮窪遺跡出土炭化材の樹種調査報告. 青森県埋蔵文化財調査報告書第84集「韮窪遺跡　－東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－」, p.392-393, 青森県教育委員会.

嶋倉巳三郎(1984) 大石平遺跡(１)出土の炭化材. 青森県埋蔵文化財調査報告書第90集「大石平遺跡　－むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書－」, p.495, 青森県教育委員会.

寺田和雄・太田貞明・鈴木三男・能城修一・辻　誠一郎(1994) 十和田火山東麓における八戸テフラ直下の埋没林への年輪年代学の適用. 第四紀研究, 33, p.153-164.

第6章　まとめ

根下戸道下遺跡の発掘調査は、大館西道路建設事業に係った遺跡の北辺部についてのみ実施した。調査の結果、当該部分では縄文時代早期の竪穴住居跡をはじめ、土坑、陥し穴、柱穴様ピットの他、溝跡などが検出され、縄文時代早期・前期・後期・晩期の土器・石器などが出土した。特に検出例が僅少な縄文時代早期の竪穴住居跡とそれに伴う貝殻文土器などの遺物が発見されたことで、該期の様相を知る良好な資料を得ることができた。

遺構について

検出された縄文時代の竪穴住居跡は4軒であるが、このうち時期がわかったのは、ＳＩ03とした早期の竪穴住居跡であり、他の3軒の竪穴住居跡の時期ついては明確にできなかった。秋田県内では早期の竪穴住居跡の検出例は、能代市寒沢Ｉ遺跡の早期末に位置付けられる竪穴住居跡7軒だけであったが、本遺跡の竪穴住居跡は、寒川Ｉ遺跡に次いで2例目となると同時に、現段階では県内最古の竪穴住居跡となった。

調査区西部で検出されたＳＩ137とした遺構は土地造成の際に削平を受けており、時期を特定できなかったが、柱穴の配列等から縄文時代後期に属するものと考えられる。

土坑は平面形が楕円形と円形のものがありが、時期や用途つにいては明確にできなかった。陥し穴には円形と溝状のものがあり、縄文時代前期に位置付けられる。この他、柱穴様ピットなども時期不明のものが多く、その性格を把握することができなかった。しかし、これらの柱穴様ピット群もＳＩ137同様に削平された縄文時代の竪穴住居に伴う柱穴であった可能性が高いと考えられる。

遺物について

土器は主に縄文時代早期の貝殻文尖底土器である。この土器には、無文のもの、貝殻腹縁圧痕文を横位・縦位・羽状に施したもの、貝殻殻表圧痕文を横位に施したもの、貝殻条痕文を横位・縦位・斜位に施したものがみられ、貝殻腹縁押し引き文が施されている例も観察される。また、口縁が波状をなし、器形は砲弾形を呈するものが多く、底部の形状は大半が乳頭形である。胎土は緻密で、焼成も良好であり、繊維を含有するものはないようである。これらのことから、本遺跡出土の貝殻文土器は、早期中葉にあたると思われる。当該期の土器は本遺跡が所在する大館市の鳶ケ長根Ⅳ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡(第2次調査)、寒沢遺跡でも出土している。

石器は石槍、石鏃、石匙、トランシェ様石器、石箆、石錘などが出土した。中でも石錘は早期の竪穴住居跡から17個まとまって出土しており、遺構内外合わせて330個と、出土した石器のなかでは圧倒的に多かったことから、断定はできないが貝殻文土器を出土する遺跡の特徴の一つとして、位置付けらけるかもしれない。

以上、今回の調査区は縄文時代早期において竪穴住居が構築され集落が営まれていた。前期には居住域が別の地点に移動して狩猟の場となった。その後、後期・晩期には再び生活の場へと変遷したことが窺われ、縄文時代全般にわたって利用された遺跡であることがわかった。また、調査区の南東に隣接する畑地では縄文時代の土器片、石器が表採できることから、遺跡の範囲は台地の南側までを広

がっており、台地全域が利用されていたと推察される。

調査区西端の沢に堆積した土の中から、秋田県県境にある十和田火山(今の十和田湖)を噴出源とする十和田ａ火山灰と、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)と中国の国境にある白頭山を噴出源とする白頭山・苫小牧火山灰の２枚の降下火山灰層(図版12－１)が検出された。この火山灰層が２枚新旧関係を保って検出されるのは、たいへん珍しく、考古学における遺構などの年代解明や地質に関する研究を行う上で貴重な資料である。その堆積状況を保存するため土層転写(剥ぎ取り保存)を行った(図版12－２)。

引用・参考文献

青森市蛍沢遺跡発掘調査団 『蛍沢遺跡－青森市新団地造成計画に基づく戸山団地予定地内蛍沢遺跡緊急発掘調査報告書－』 1979(昭和54)年

秋田県教育委員会 『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第84集 1981(昭和56)年

青森県八戸市教育委員会 『八戸市都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　丹後谷地遺跡』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集　1986(昭和61)年

青森県八戸市教育委員会 『八戸市都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　鳥木沢遺跡　丹後谷地遺跡(２)笹子遺跡(４)』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第17集　1986(昭和61)年

秋田県教育委員会 『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』 秋田県埋蔵文化財調査報告書第167集　1988(昭和63)年

秋田県教育委員会 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－上ノ山Ⅱ遺跡第２次調査－』 秋田県文化財調査報告書第193集　1990(平成２)年

秋田県教育委員会 『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－寒沢遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第254集　1995(平成７)年

領塚正浩「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年(上)」『史館』 第27号　史館同人 1996(平成８)年

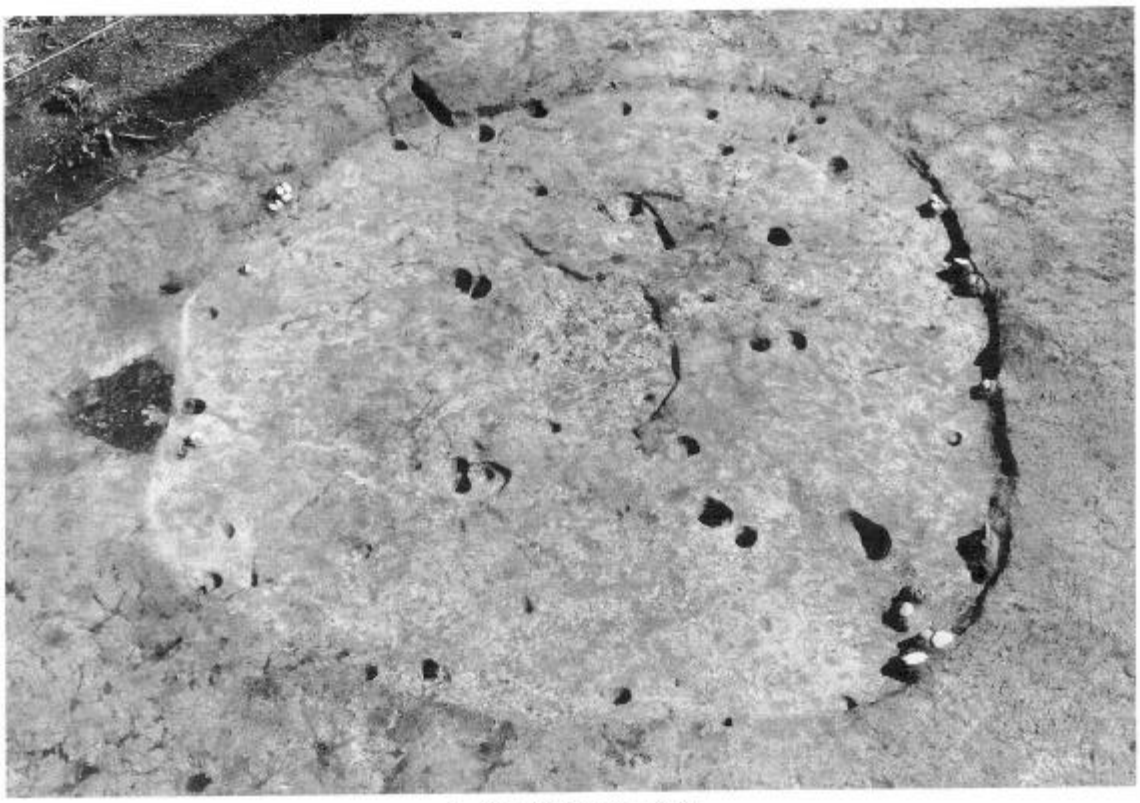
領塚正浩「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年(下)」『史館』 第28号　史館同人 1996(平成８)年

青森県教育委員会 『櫛引遺跡－東北縦貫自動車道八戸線（八戸～八戸）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－』 青森県埋蔵文化財調査報告書第263集　1999(平成11)年

空から見た遺跡遠景（南西→北東）

図版2

空から見た遺跡全景（東→西）

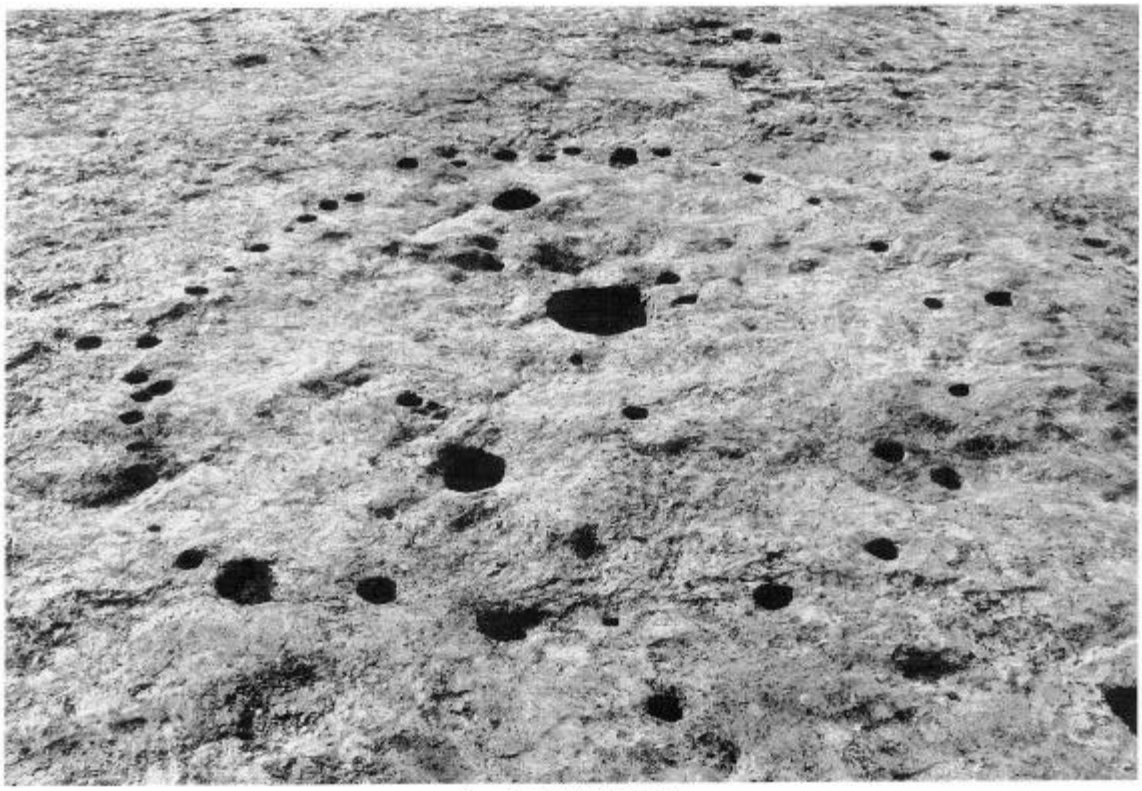


1．ＳＩ03（南西→北東）

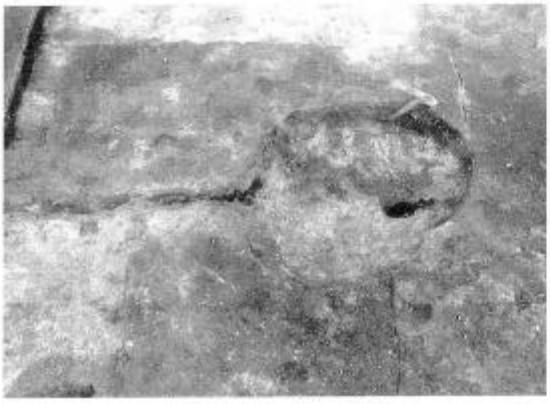
2．ＳＩ03（北東→南西）

図版4

1．S I 02・04（西→東）

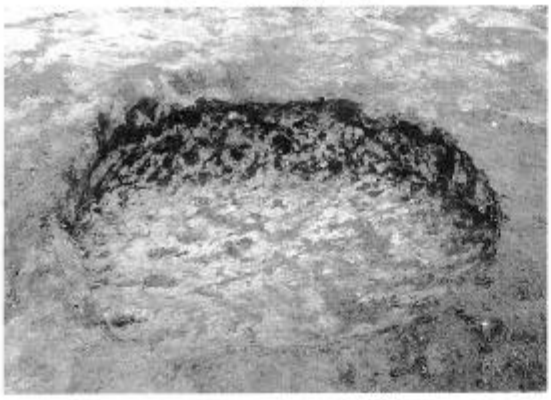


2．S I 137（東→西）

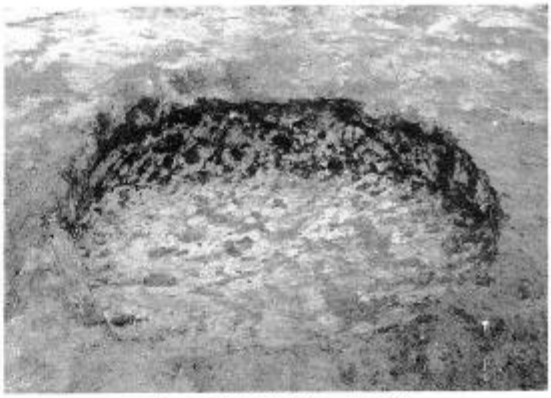


1．ＳＫ07（西→東）

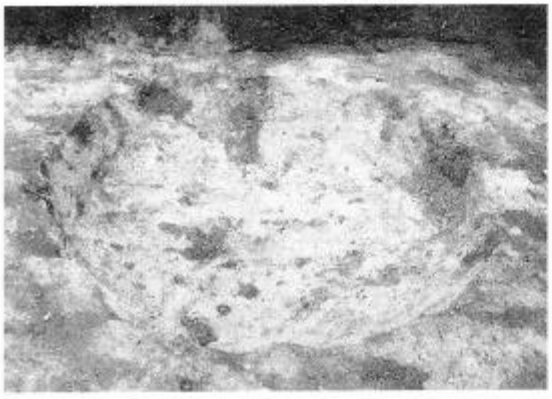
2．ＳＫ08（南東→北西）



3．ＳＫ10（南西→北東）



4．ＳＫ18（南東→北西）



5．ＳＫ19（南東→北西）

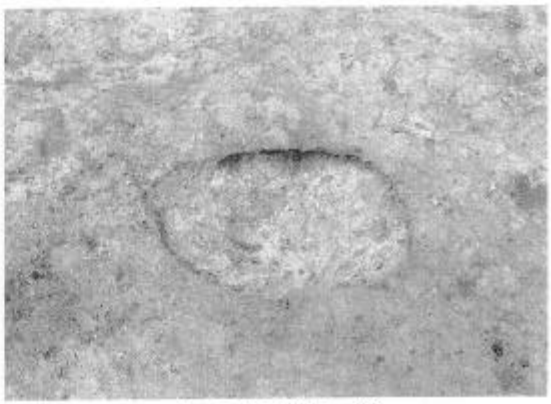
6．ＳＫ21・22（北東→南西）

7．ＳＫ27（東→西）

8．ＳＫ28（東→西）

図版6

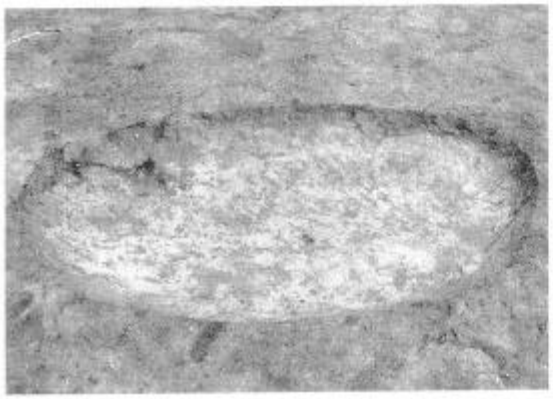
1．ＳＫ29（東→西）



2．ＳＫ31（南→北）

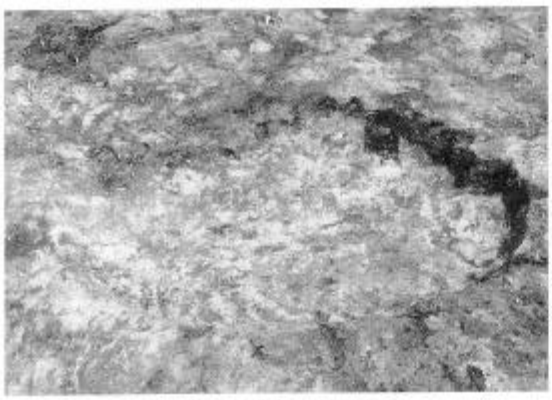
3．ＳＫ33（南西→北東）

4．ＳＫ35（南西→北東）



5．ＳＫ36（西→東）

6．ＳＫ37（南西→北東）

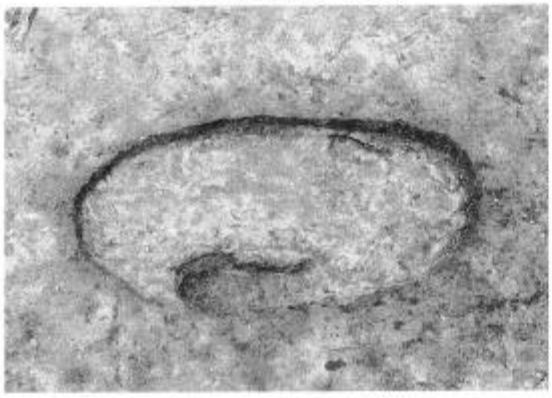


7．ＳＫ38（南西→北東）

8．ＳＫ41（南東→北西）

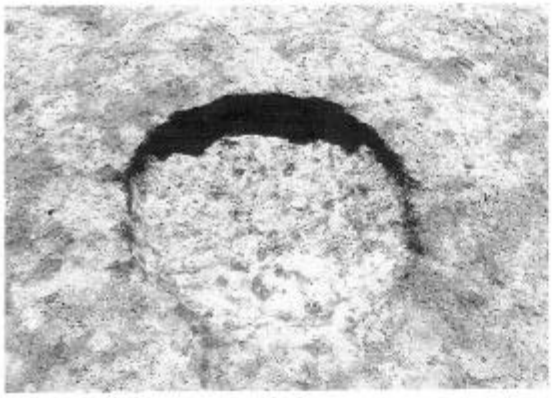
1．ＳＫ42（南東→北西）

2．ＳＫ43（南東→北西）

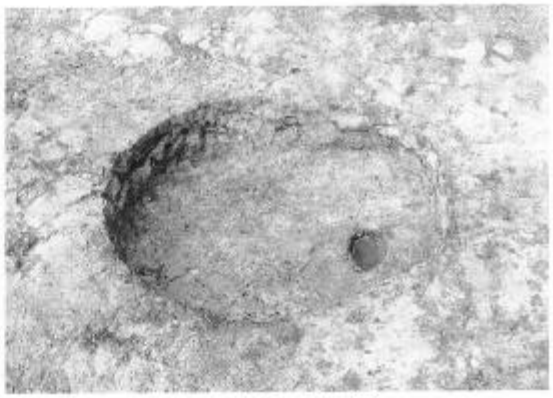


3．ＳＫ44（南西→北東）

4．ＳＫ46（南→北）

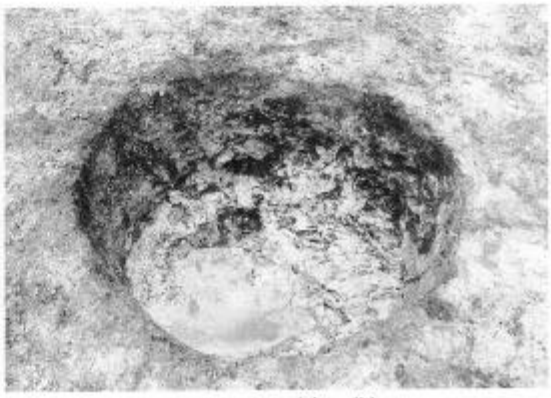


5．ＳＫ73（南→北）



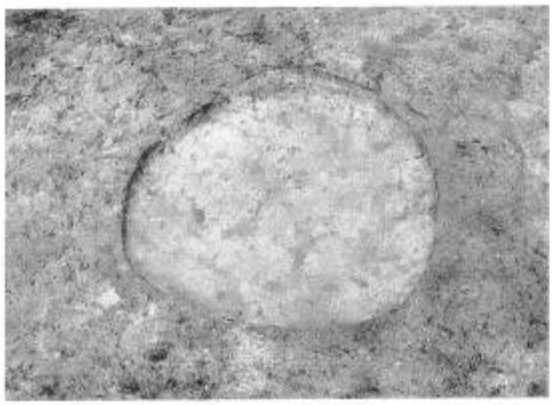
6．ＳＫ86（南→北）

7．ＳＫ87（南→北）

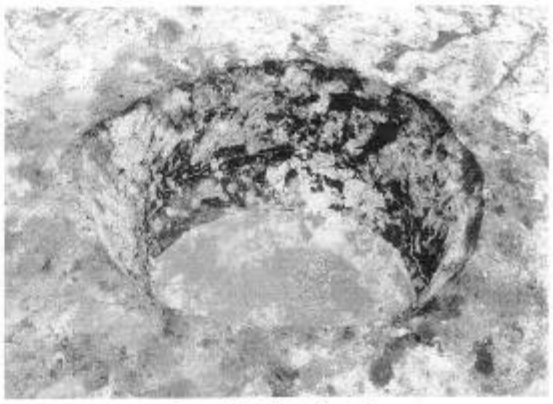


8．ＳＫ88（南→北）

図版8

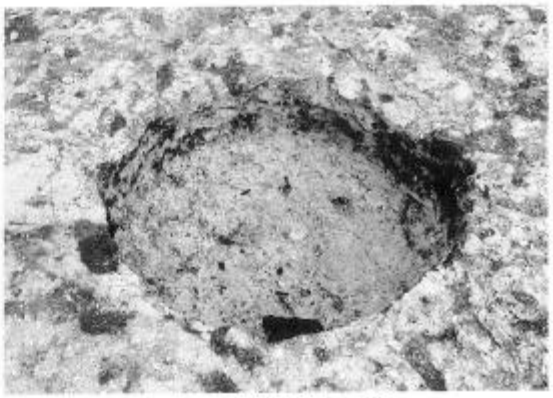


1．ＳＫ89（南→北）



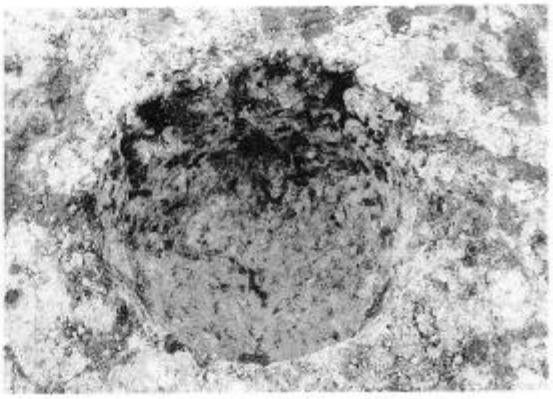
2．ＳＫ90（西→東）

3．ＳＫ91（東→西）

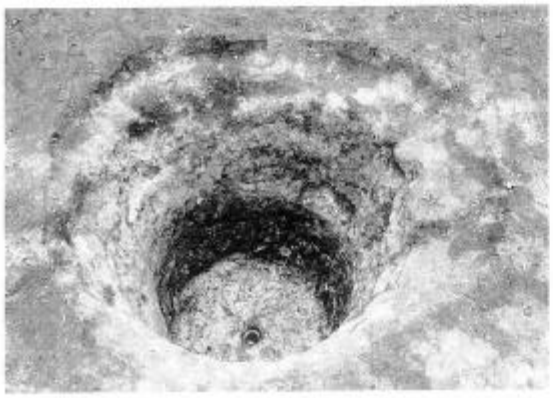


4．ＳＫ145（西→東）

5．ＳＫ146（南→北）



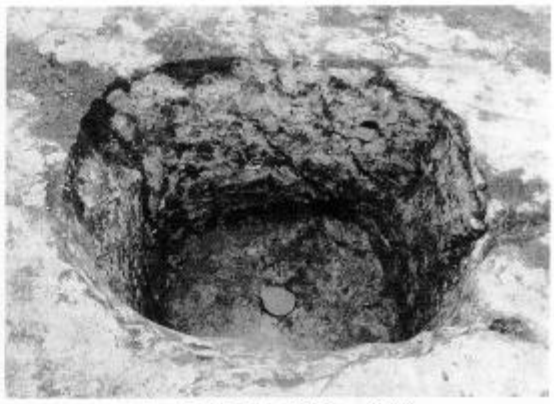
6．ＳＫ148（南→北）



7．ＳＫＴ20（北西→南東）

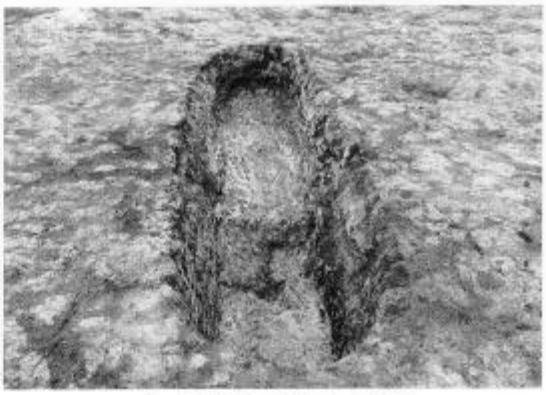
8．ＳＫＴ32（南→北）

1．ＳＫＴ39（東→西）



2．ＳＫＴ45（南東→北西）

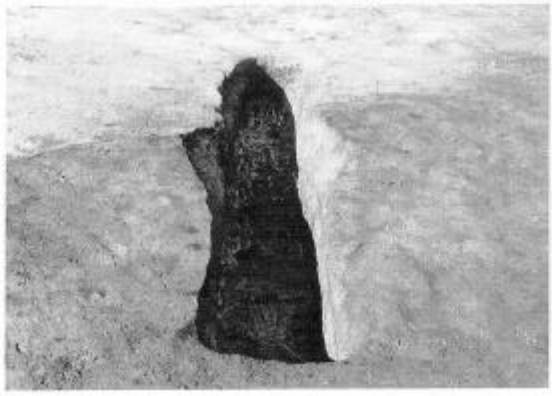
3．ＳＫＴ47（南東→北西）



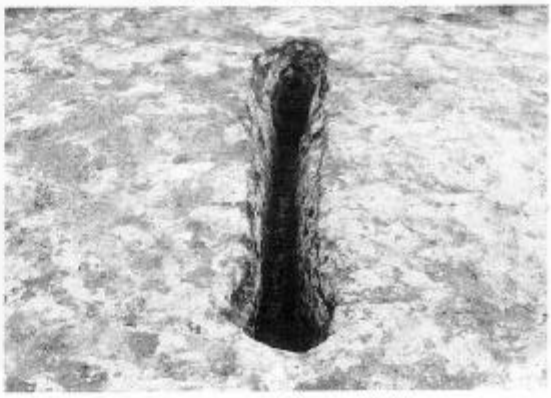
4．ＳＫＴ13（北東→南西）

5．ＳＫＴ15（北東→南西）

6．ＳＫＴ17（南西→北東）

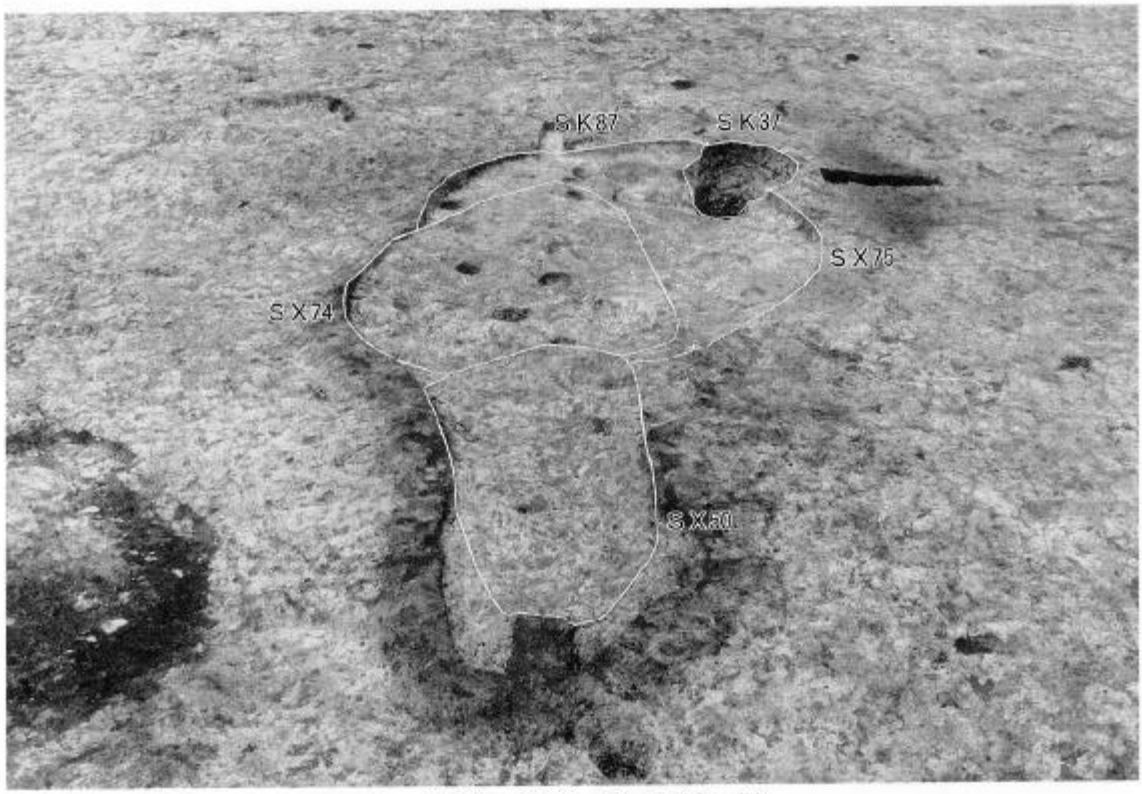


7．ＳＫＴ34（南西→北東）



8．ＳＫＴ48（南西→北東）

1．柱穴様ピット群（西→東）



2．SK37、SX50・74・75（南→北）

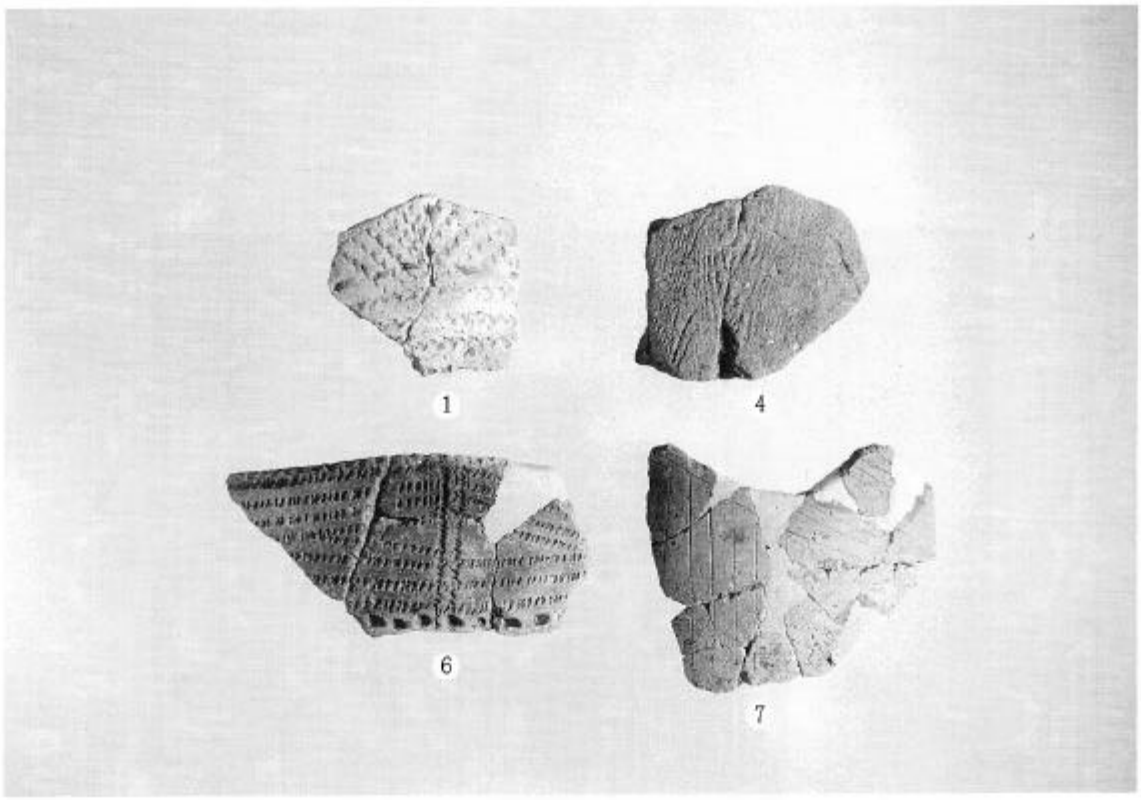
1．空から見た西端部の沢（真上）

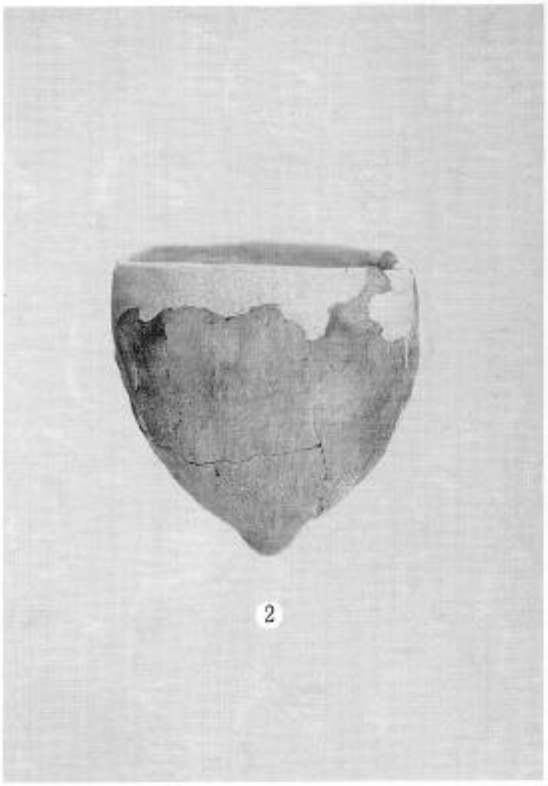
2．調査区西端部沢内の自然木出土状況（東→西）

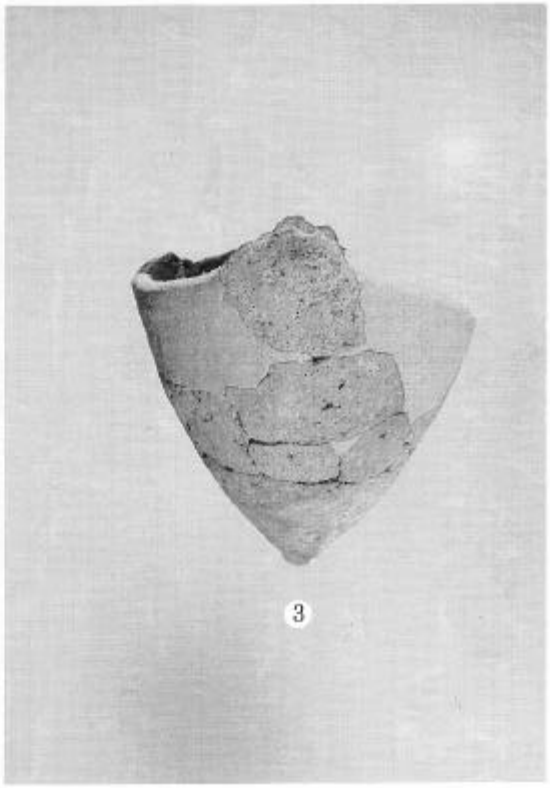
図版12

1．調査区西端部沢内埋土中に堆積する２枚の降下火山灰層（北→南）

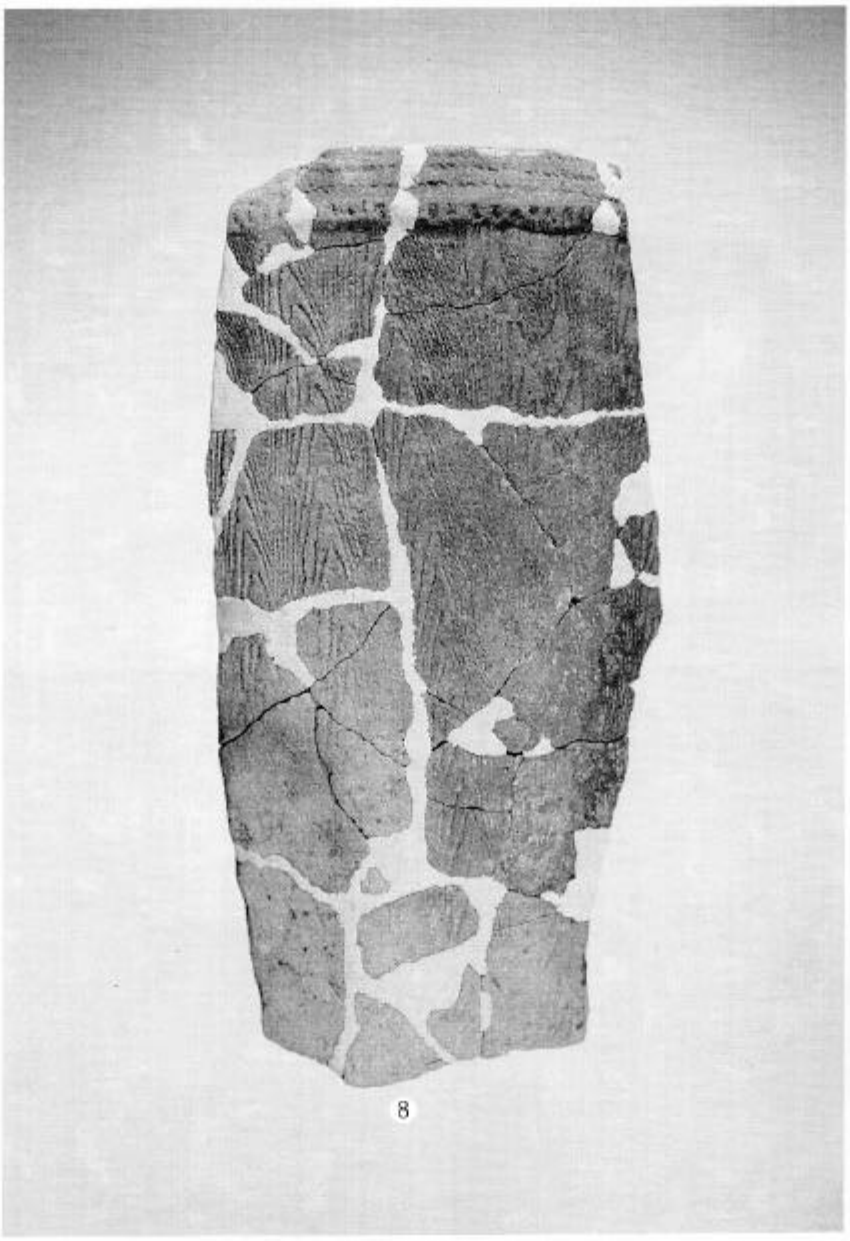
2．降下火山灰層転写剥ぎ取り作業風景（北→南）



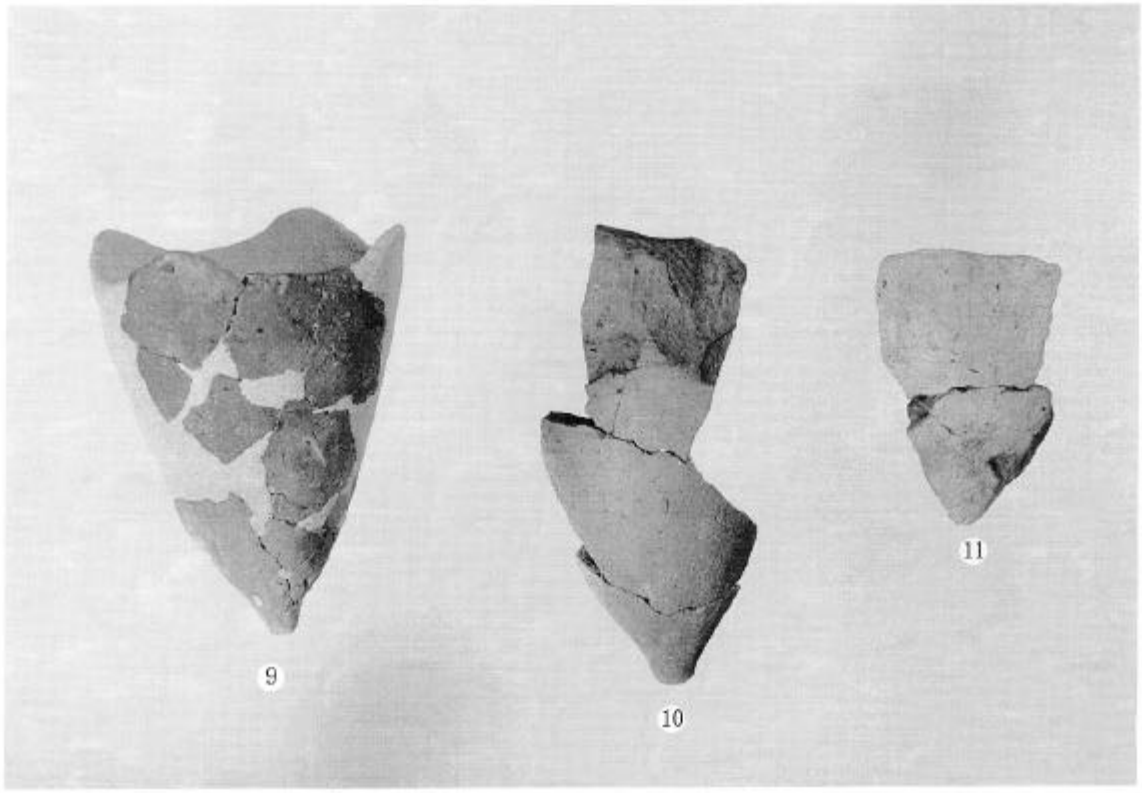


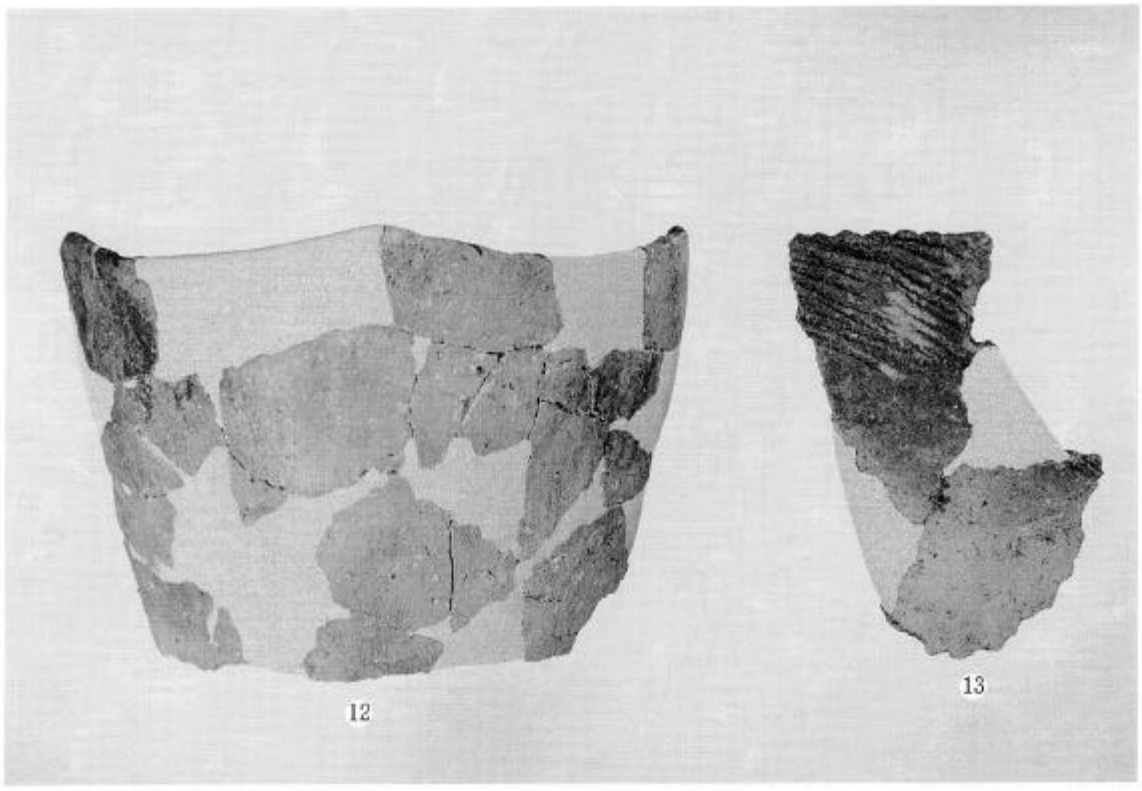


遺構内出土土器（1）

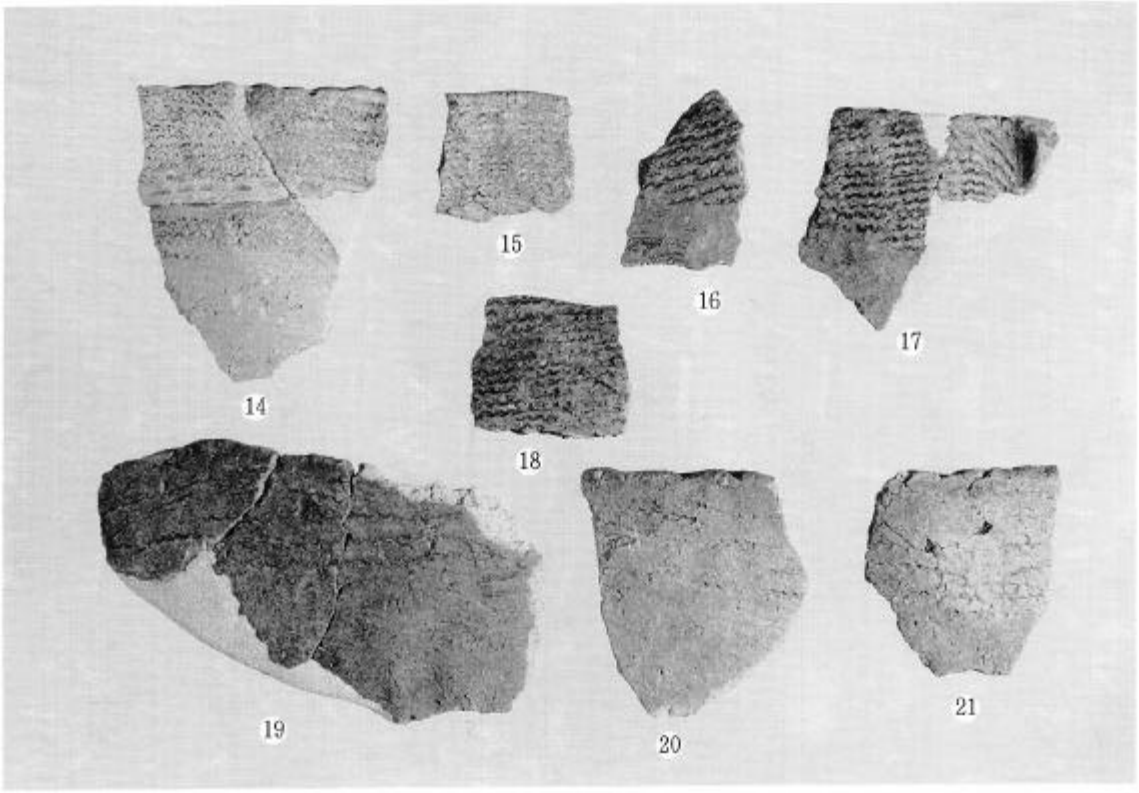


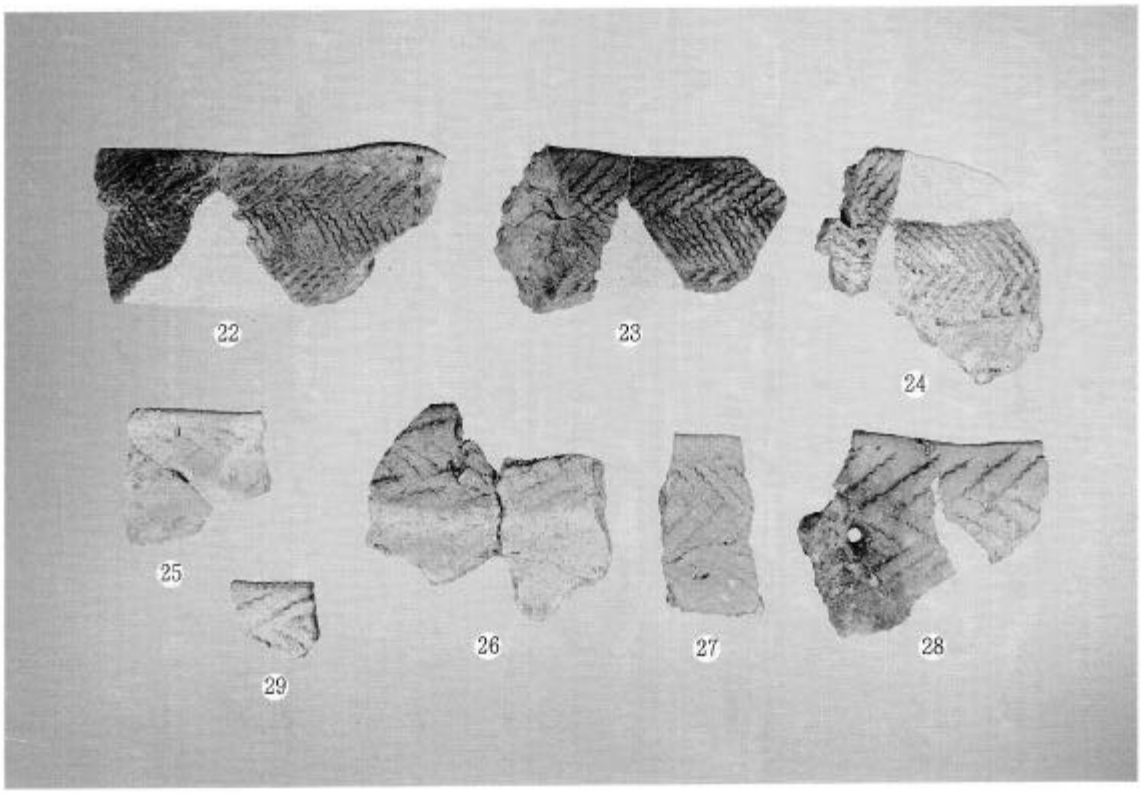
遺構内出土土器（2）



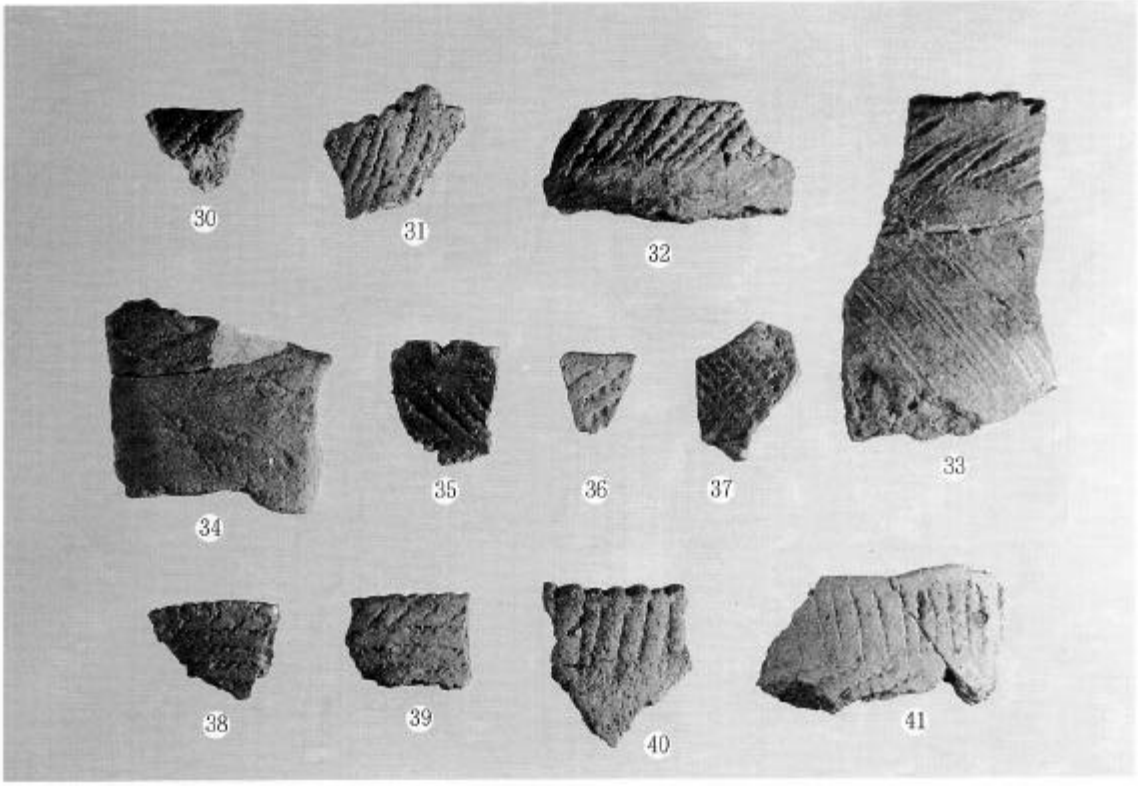


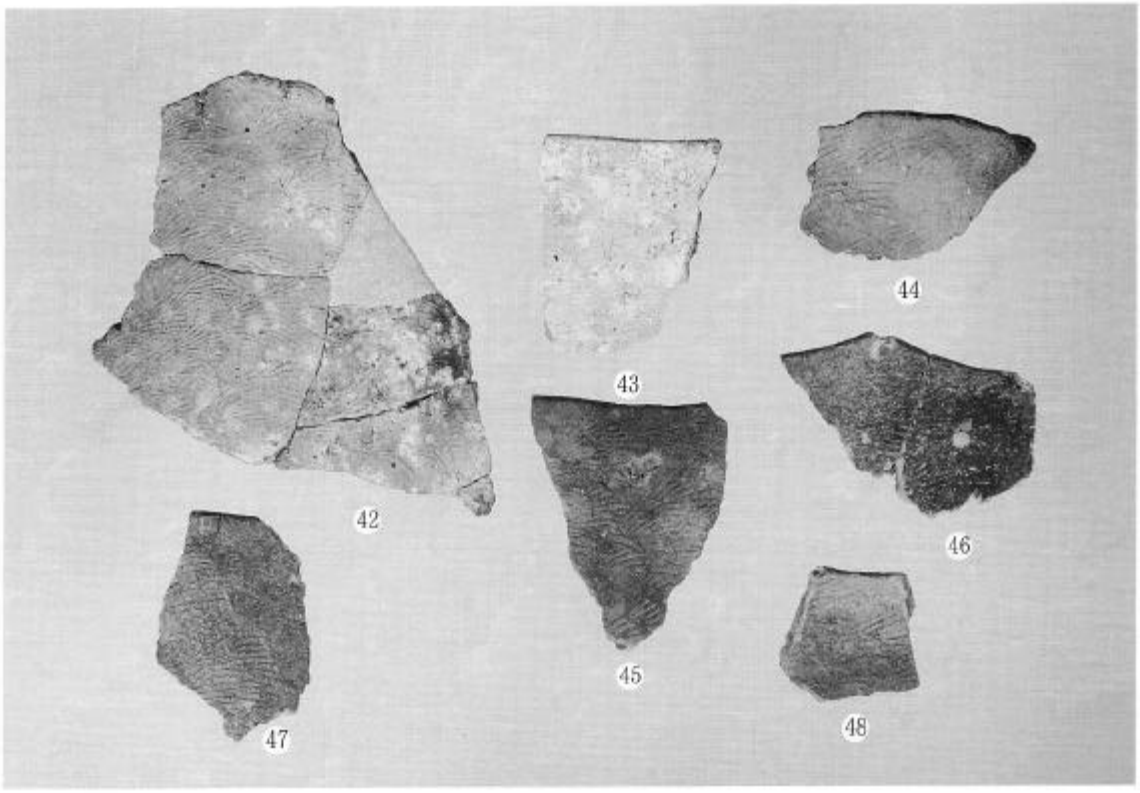
遺構外出土土器（1）



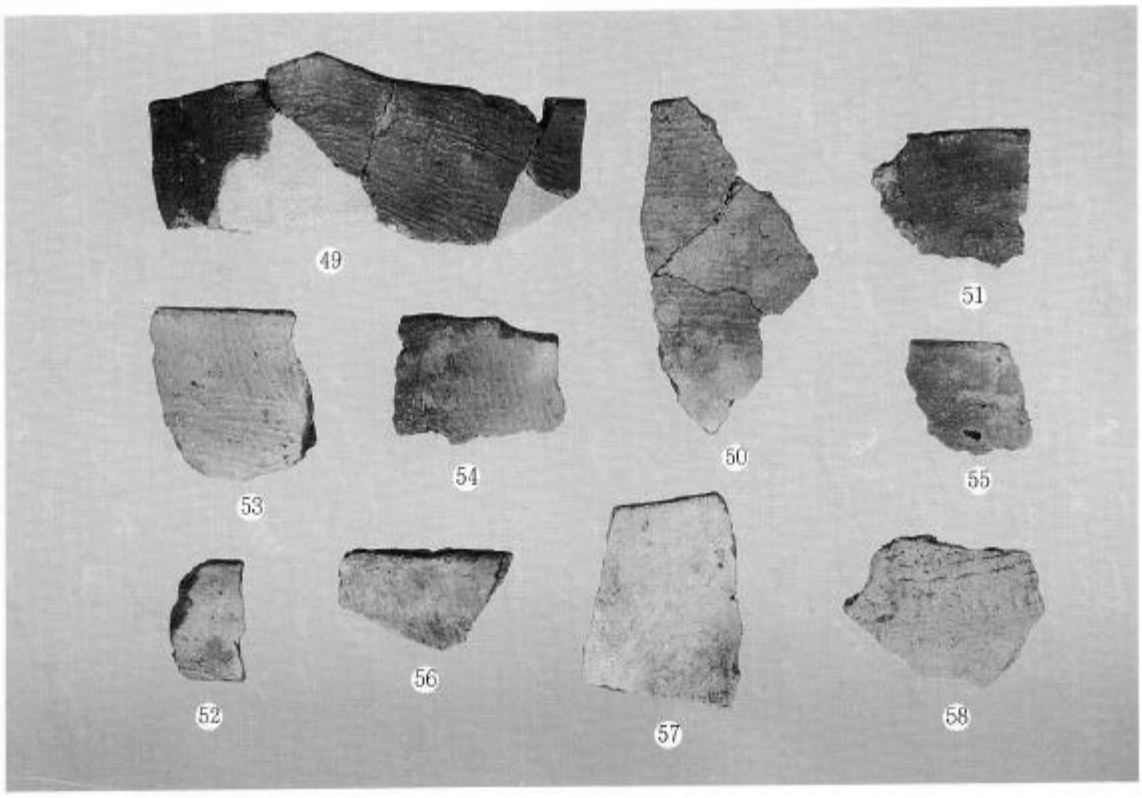


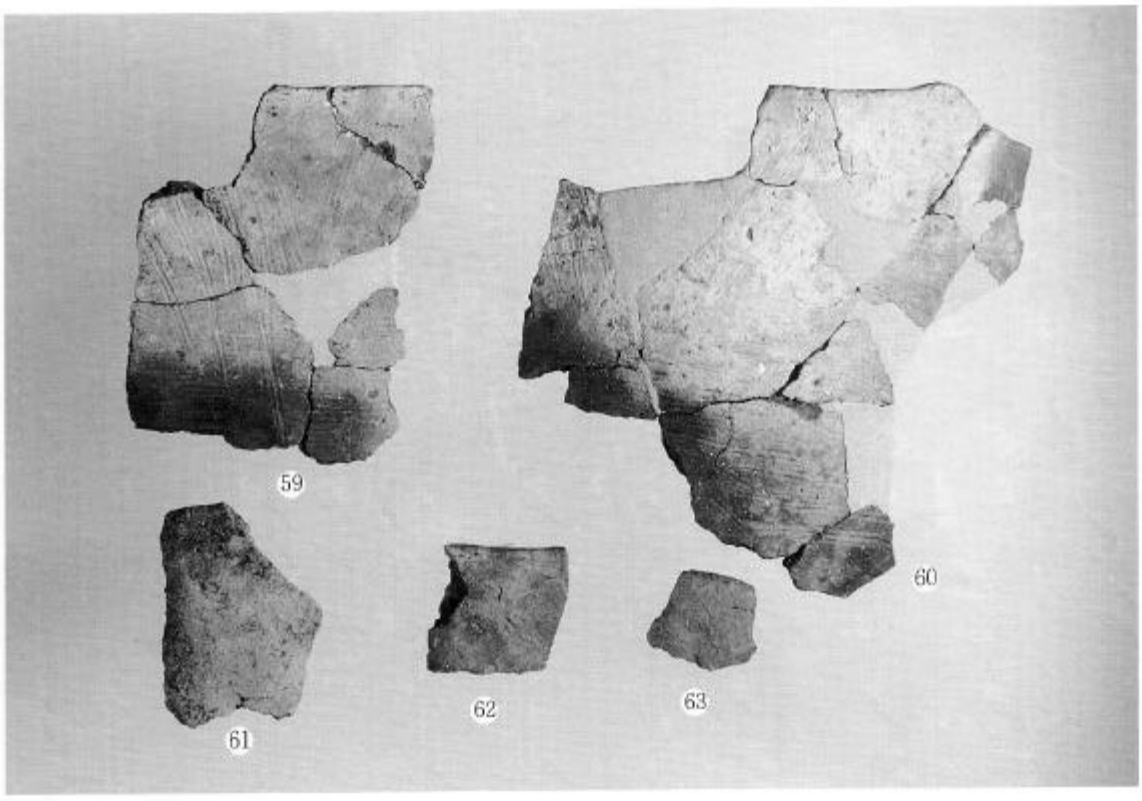
遺構外出土土器（2）



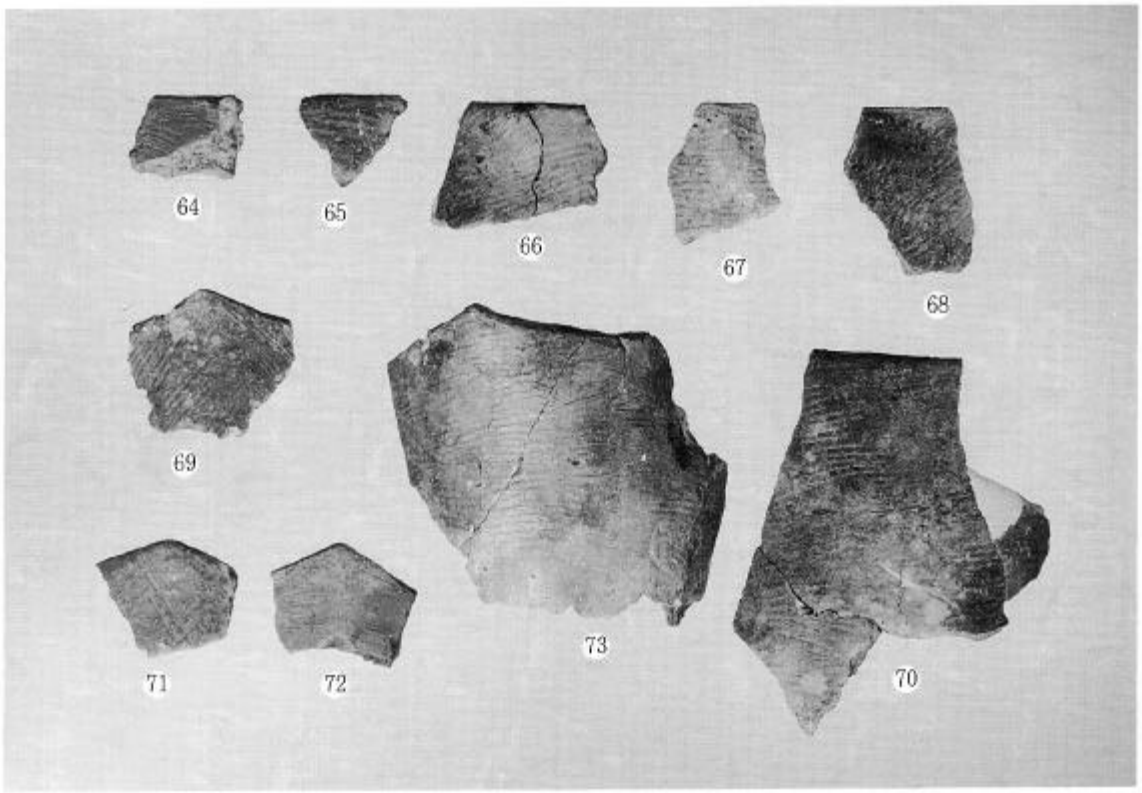


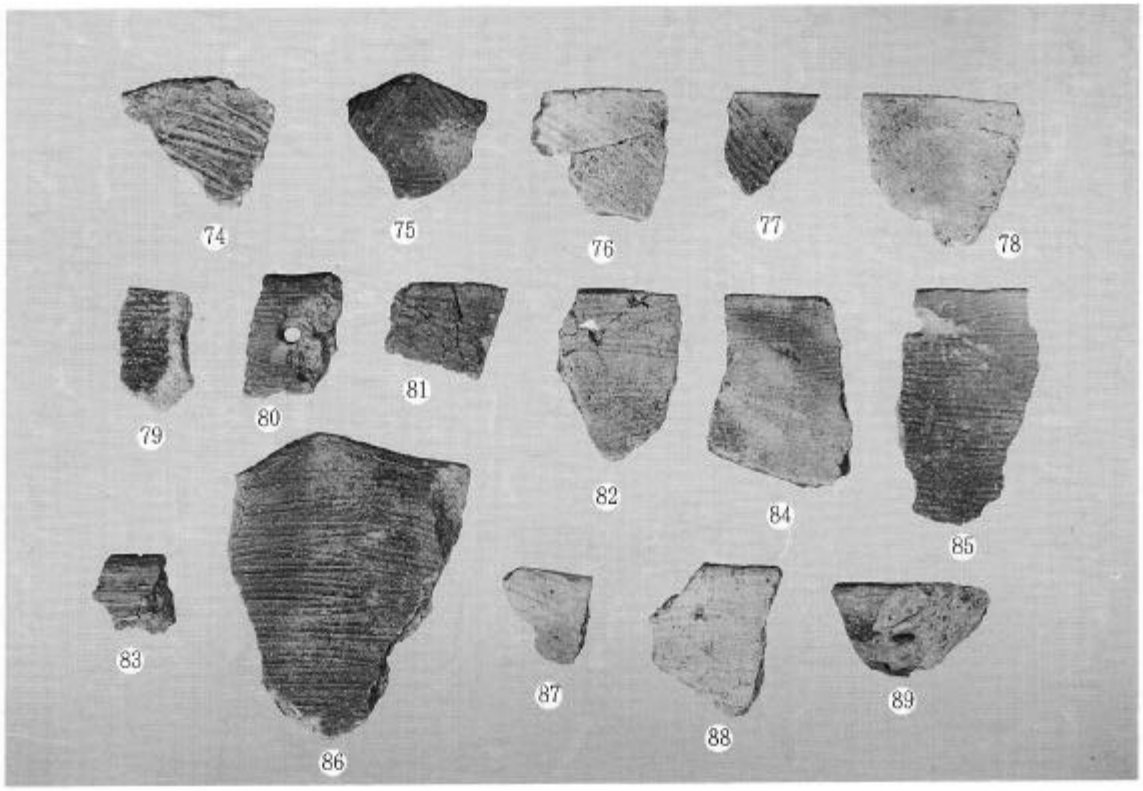
遺構外出土土器（3）



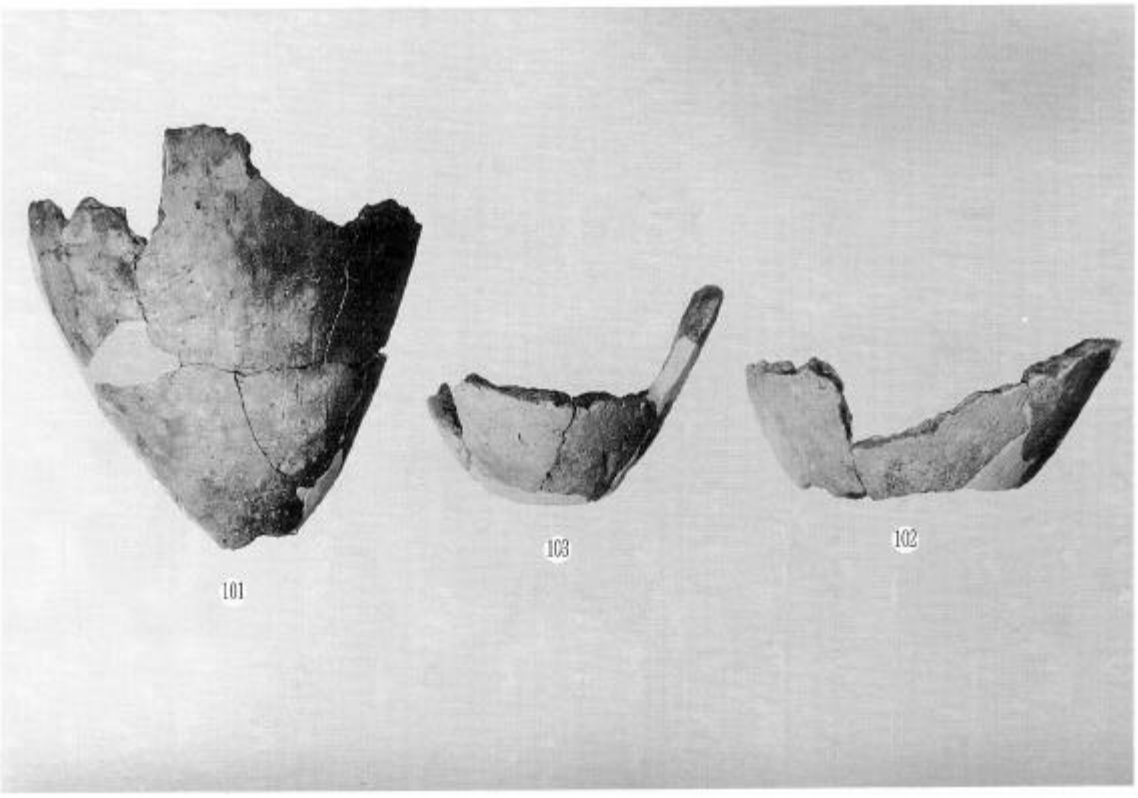


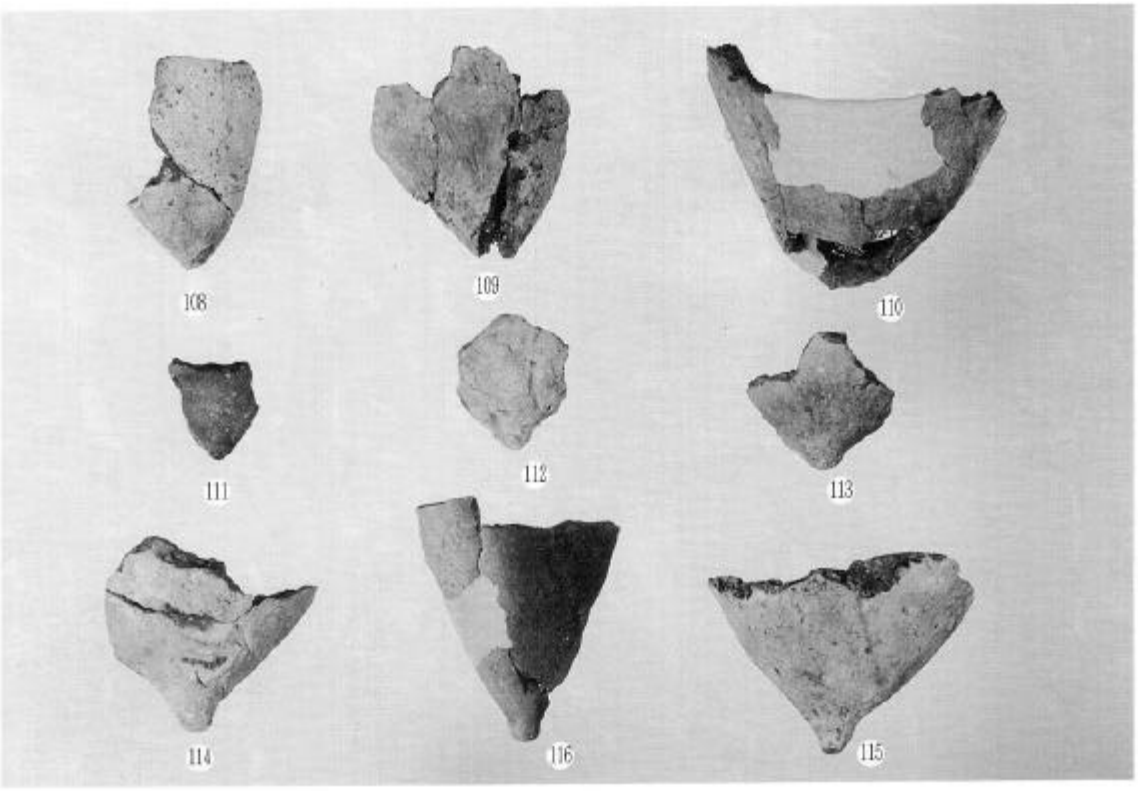
遺構外出土土器（4）


64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

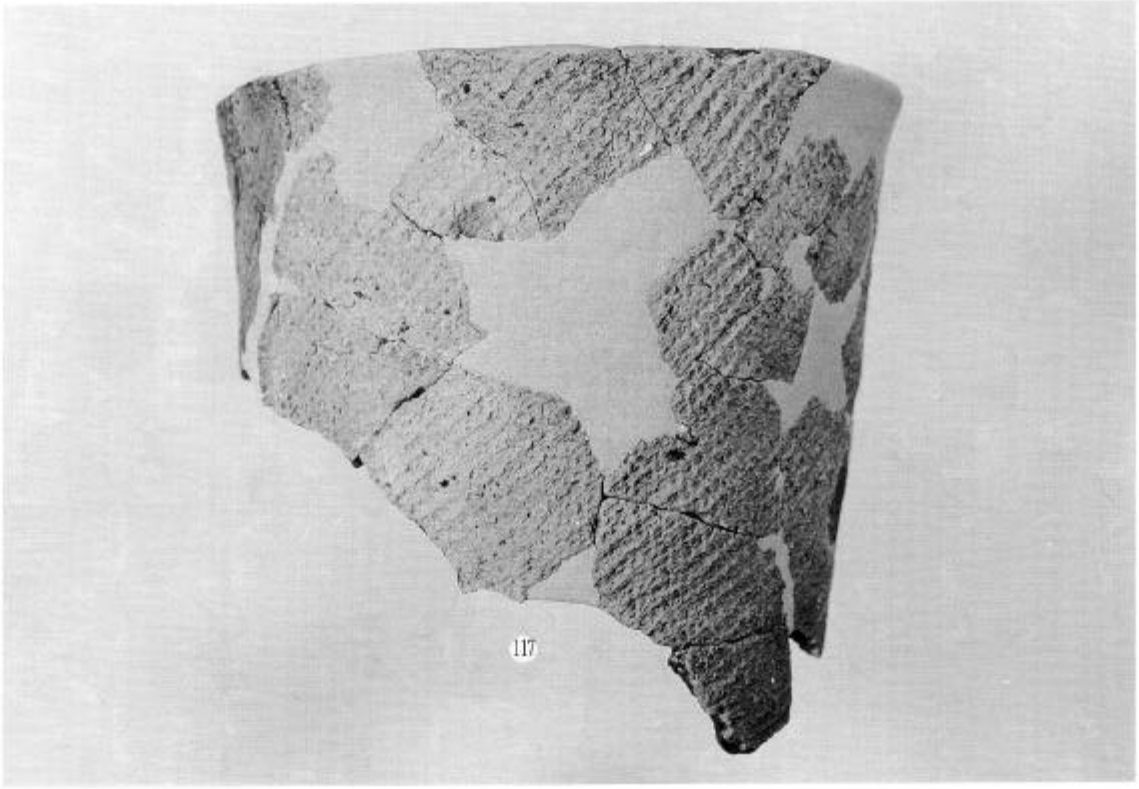

74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89

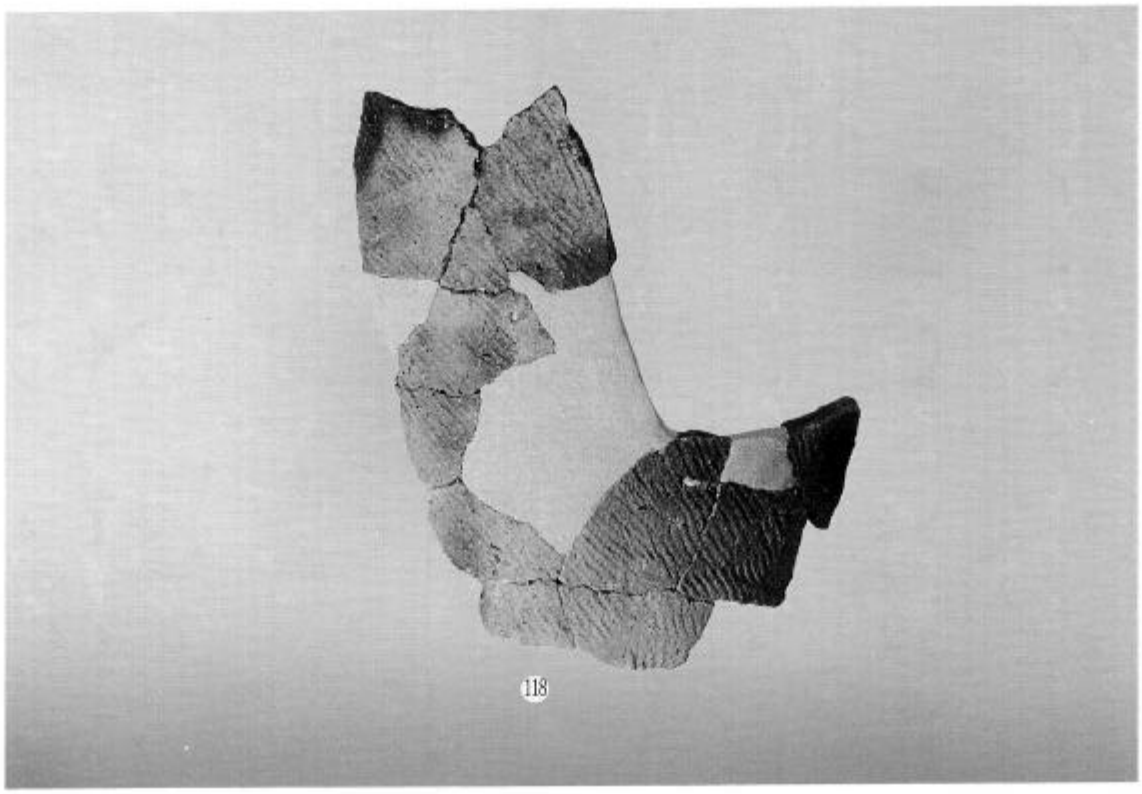
遺構外出土土器（5）



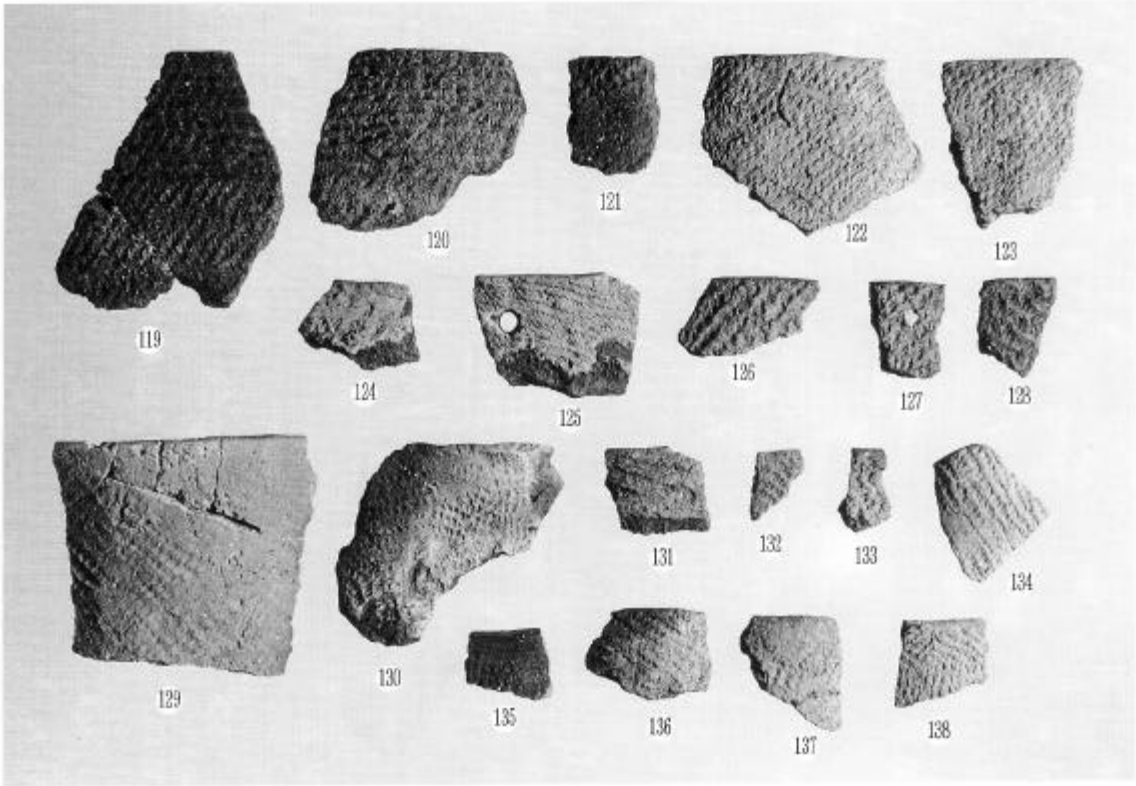


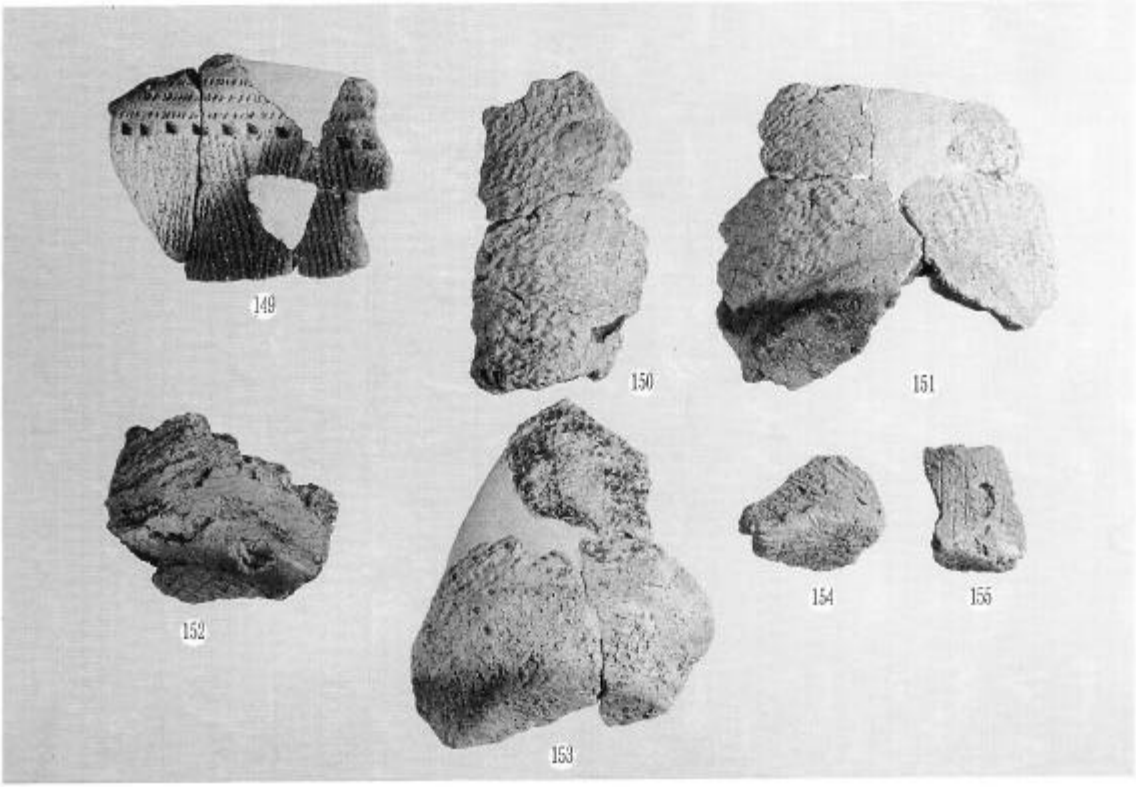
遺構外出土土器（6）



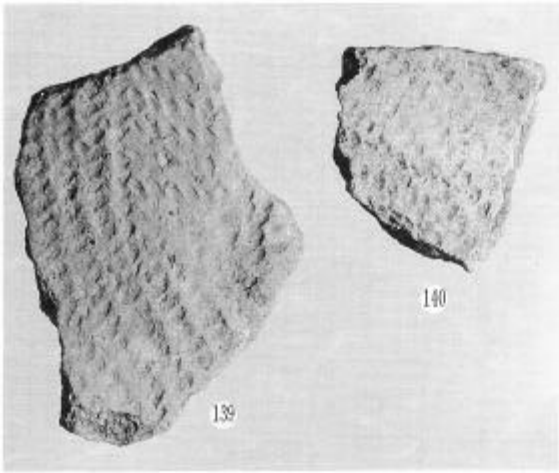


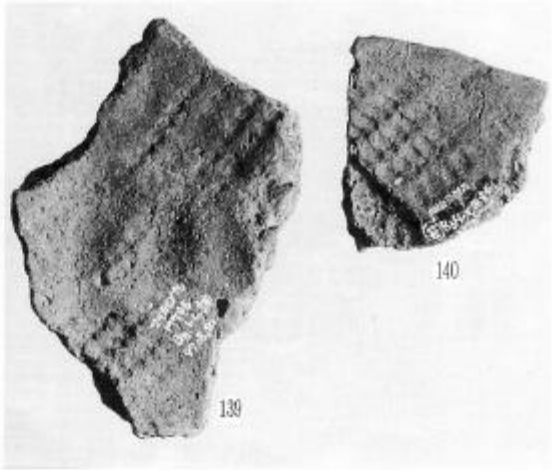
遺構外出土土器（7）

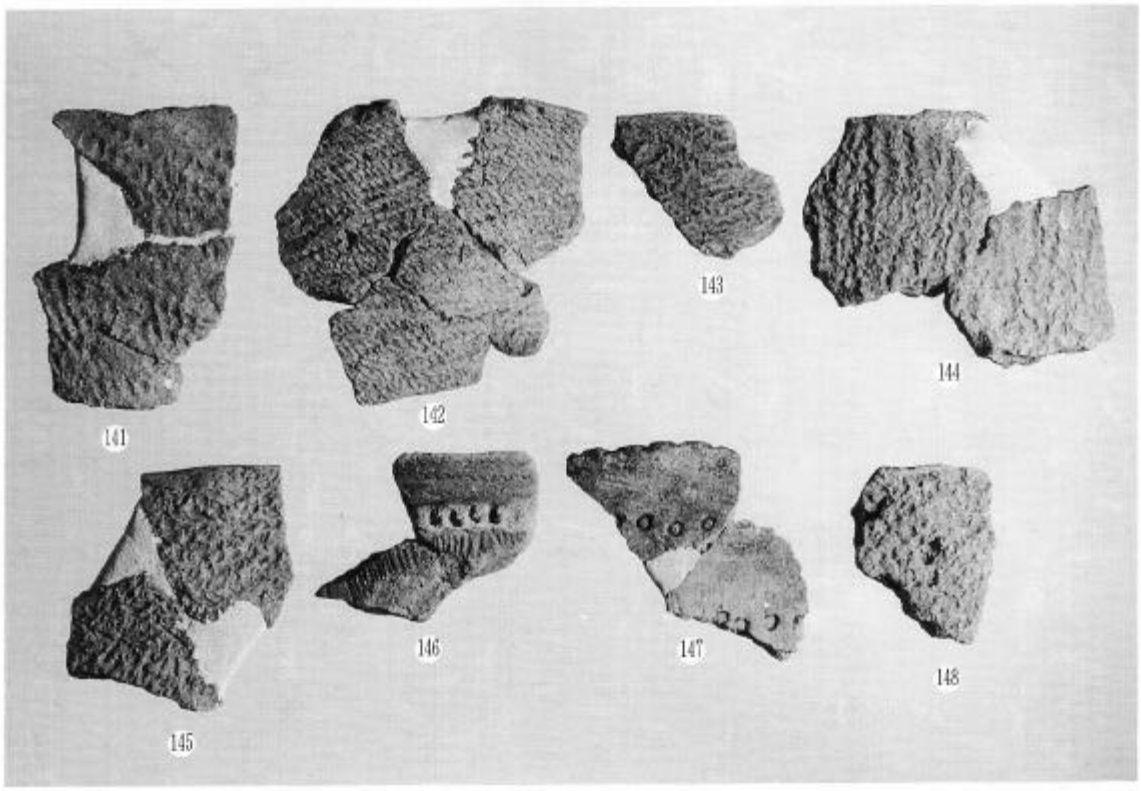

119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138


149
150
151
152
153
154
155

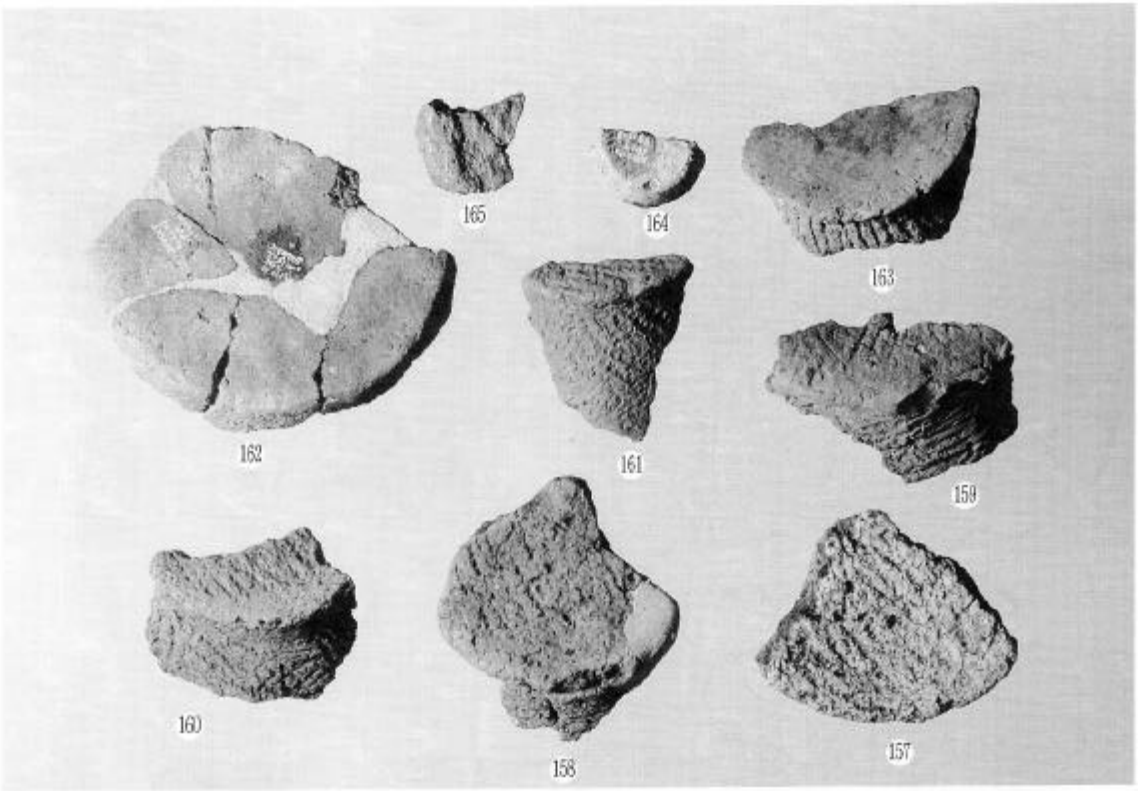
遺構外出土土器（8）

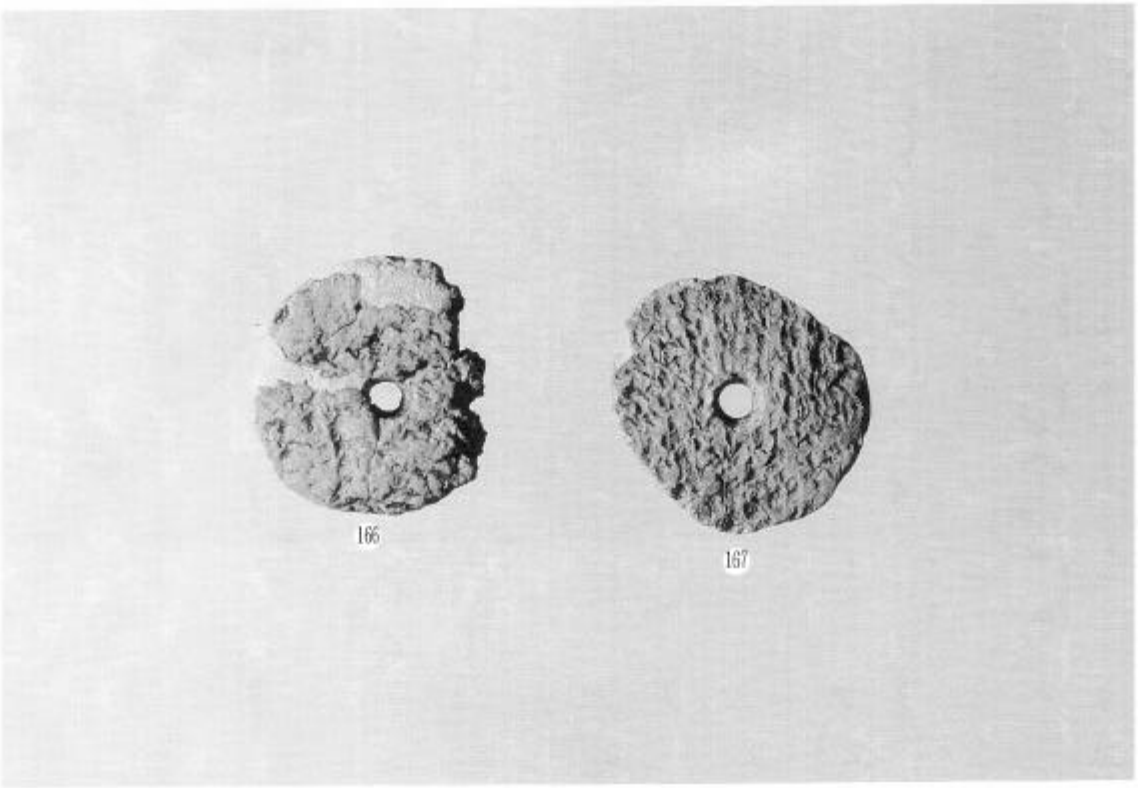




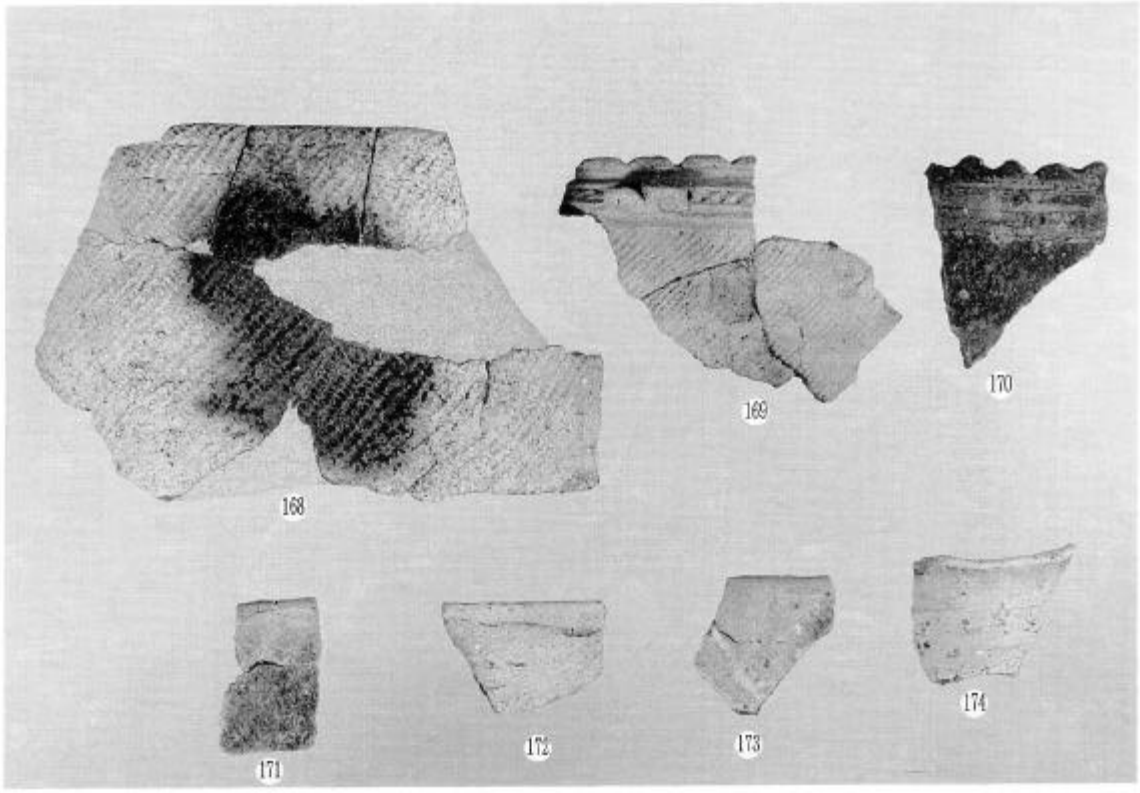


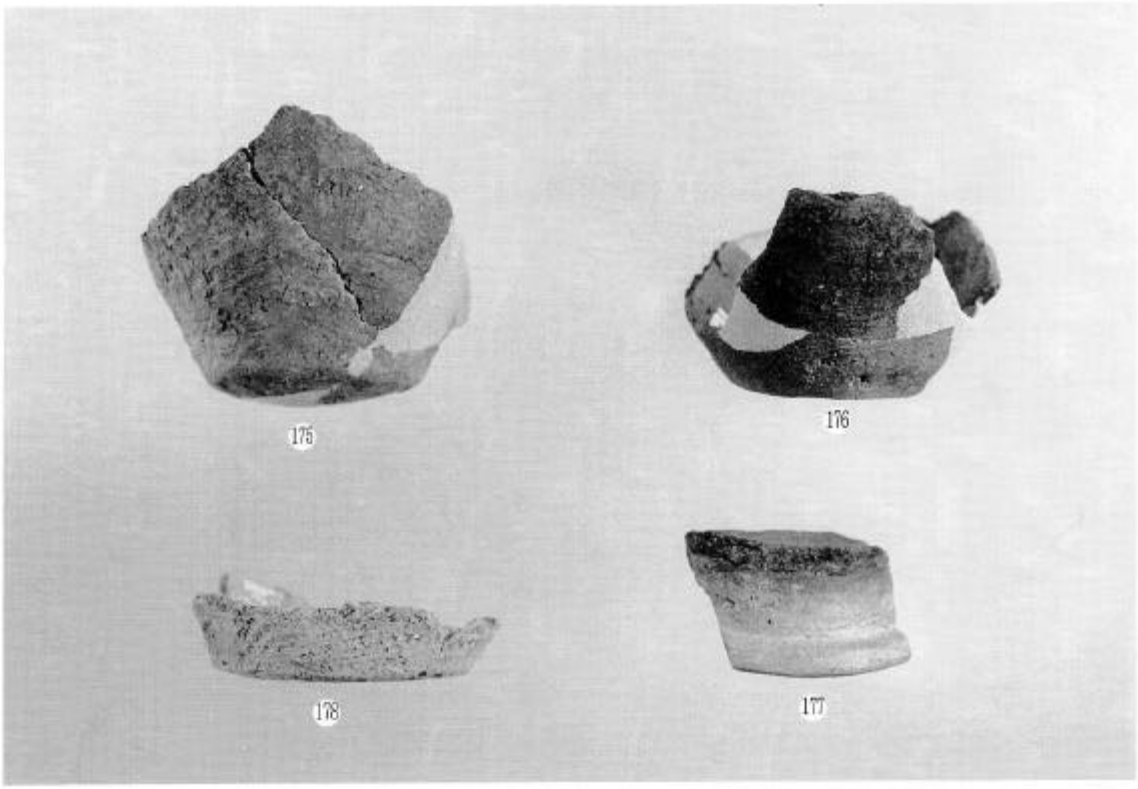
遺構外出土土器（9）





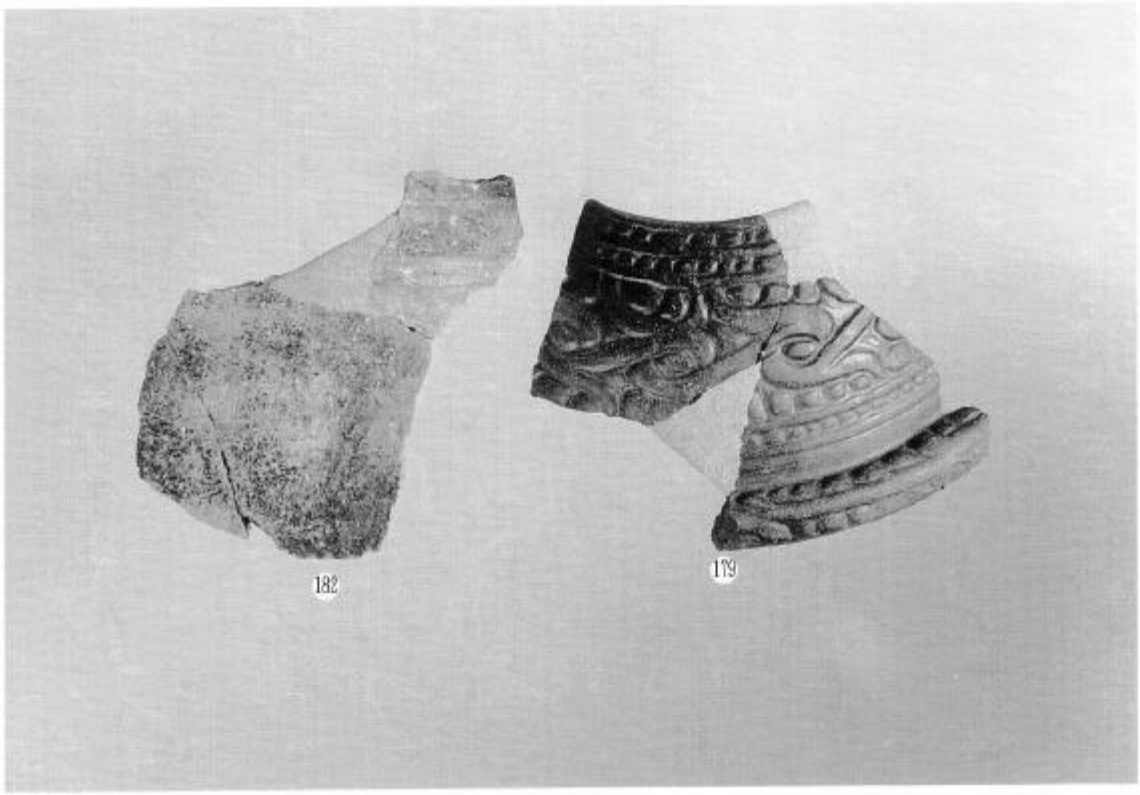
遺構外出土土器（10）

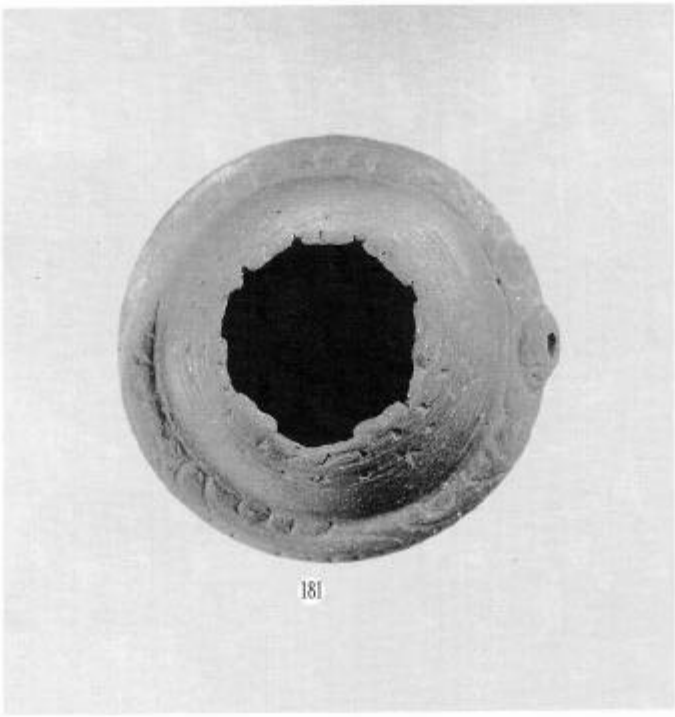




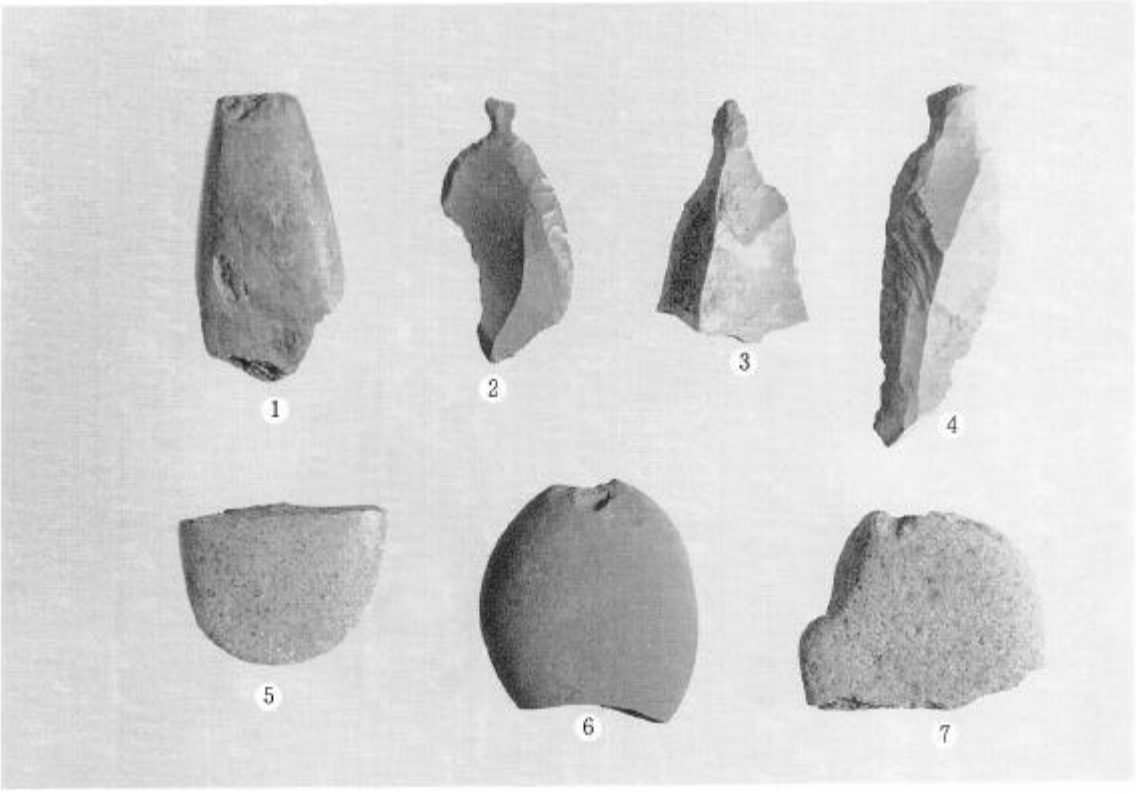
遺構外出土土器（11）

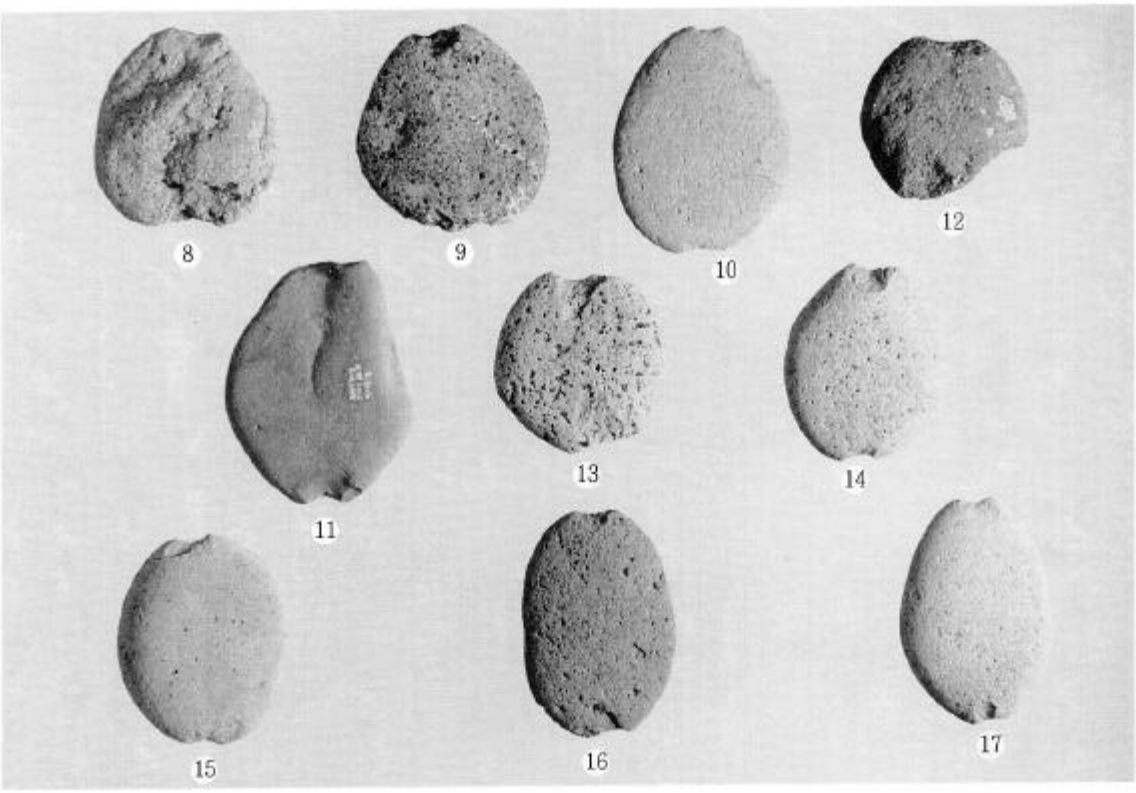
図版26



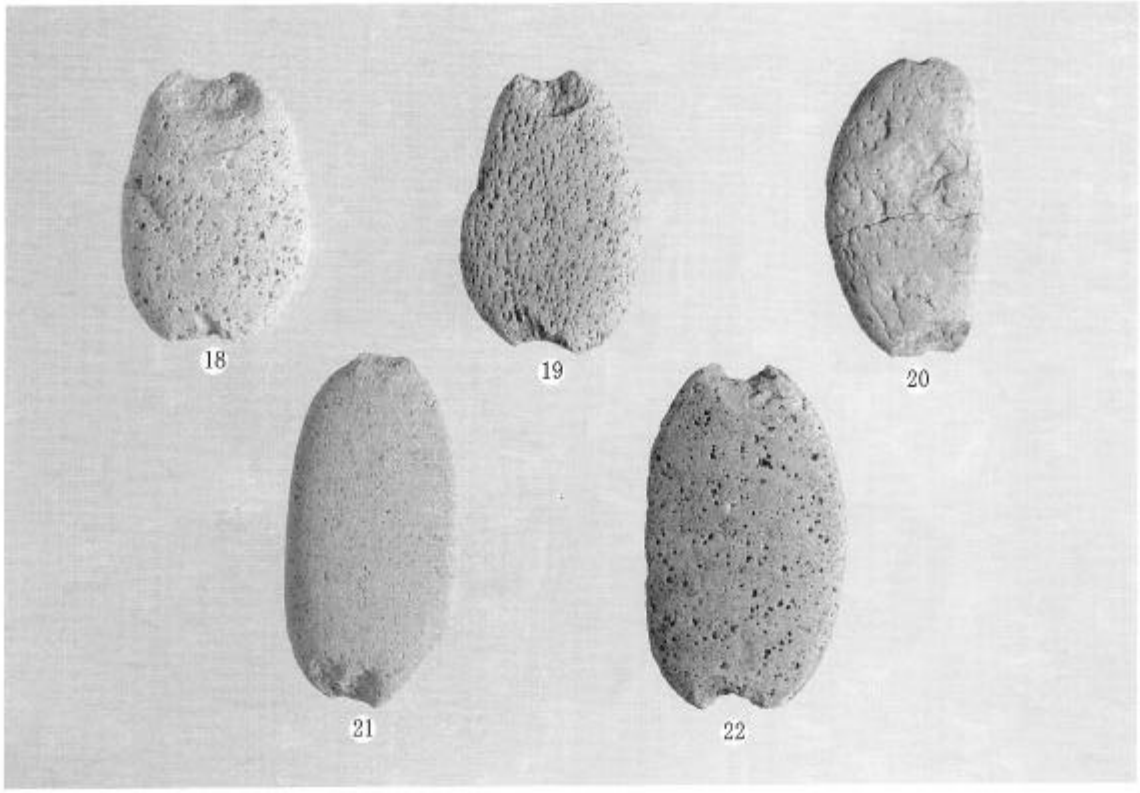


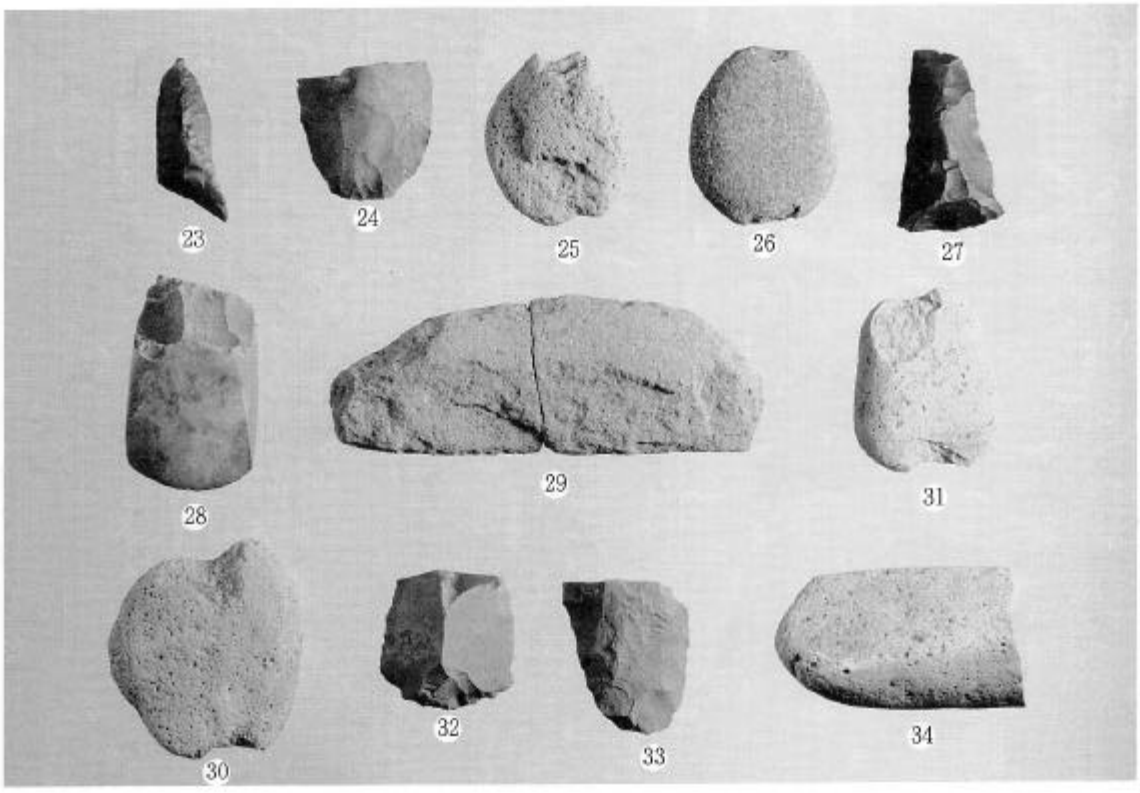
遺構外出土土器（12）



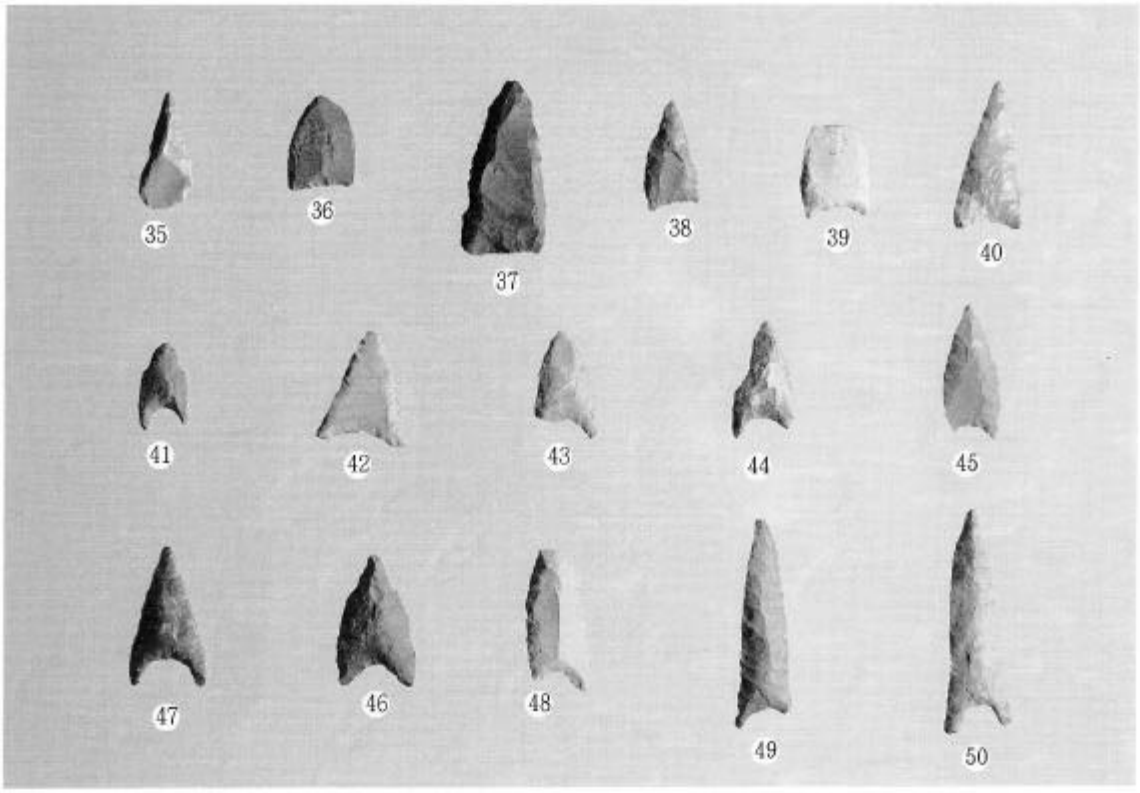


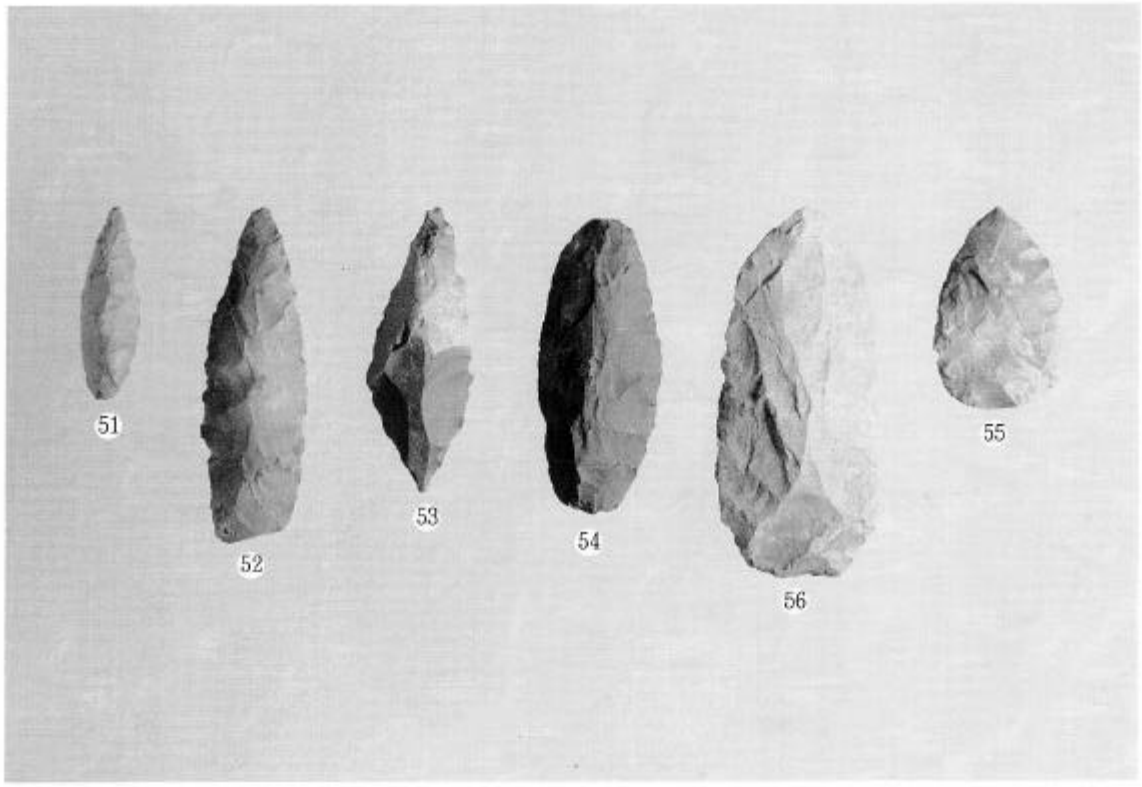
遺構内出土石器（1）



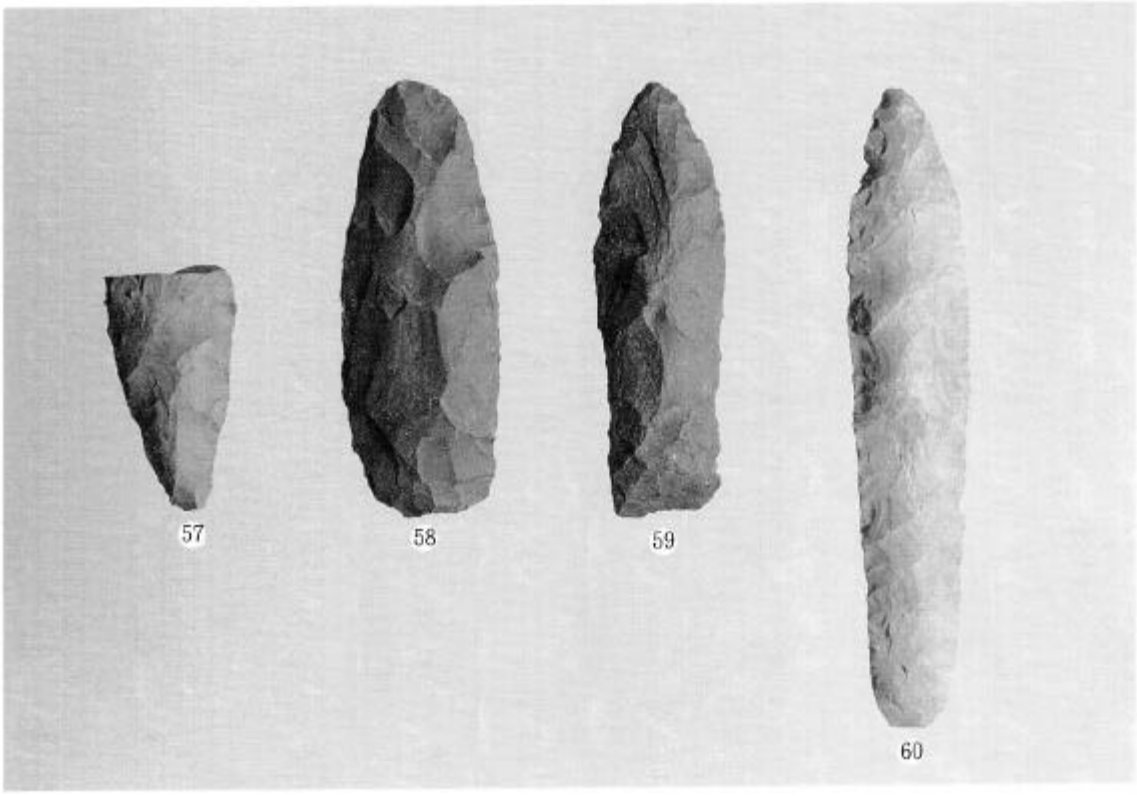


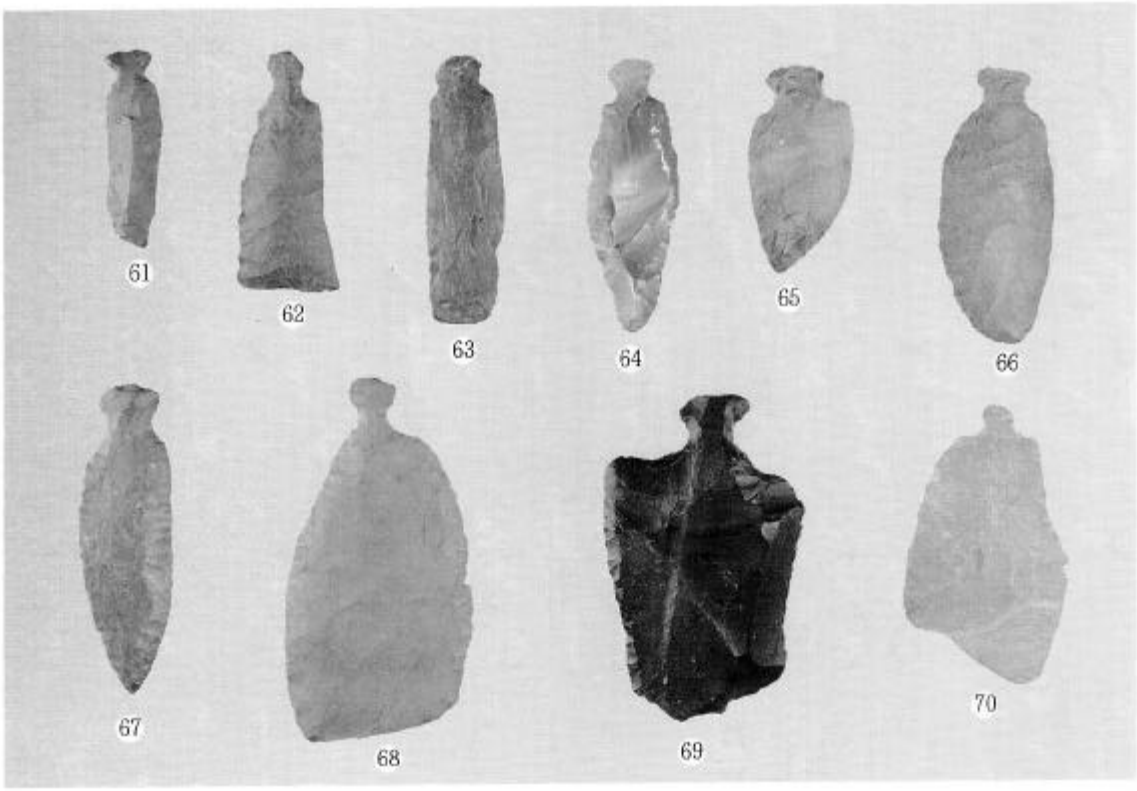
遺構内出土石器（2）



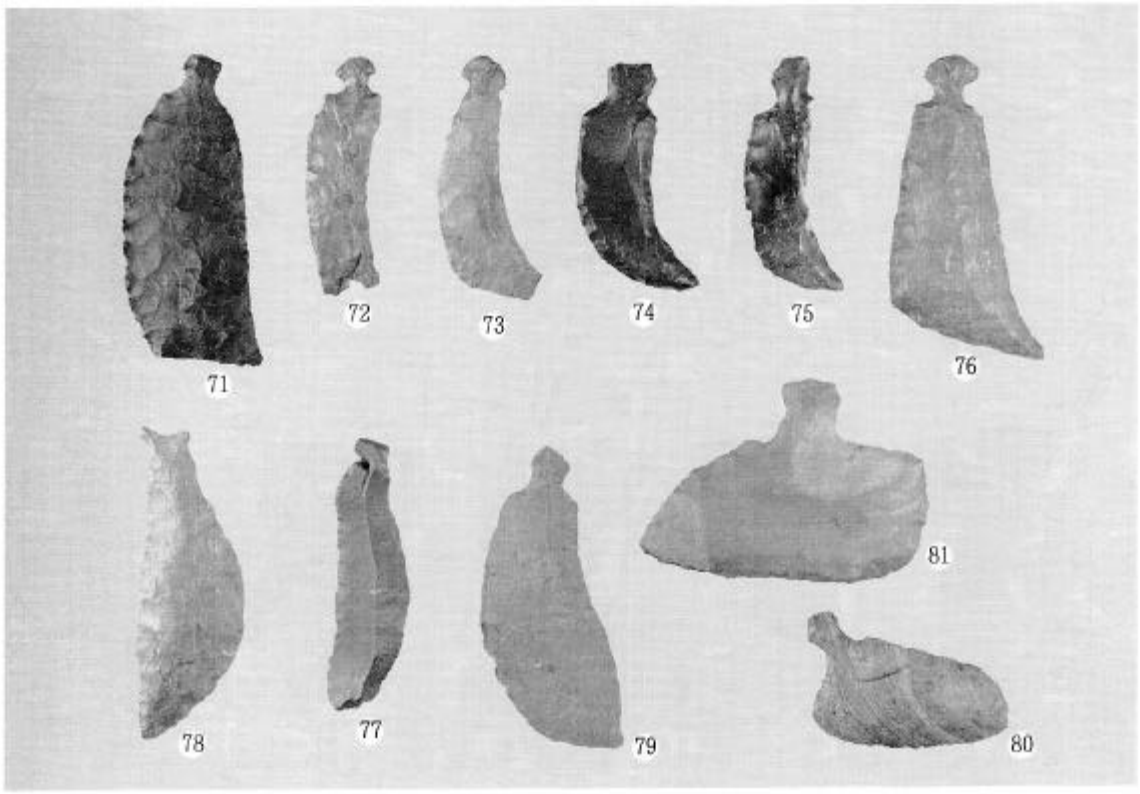


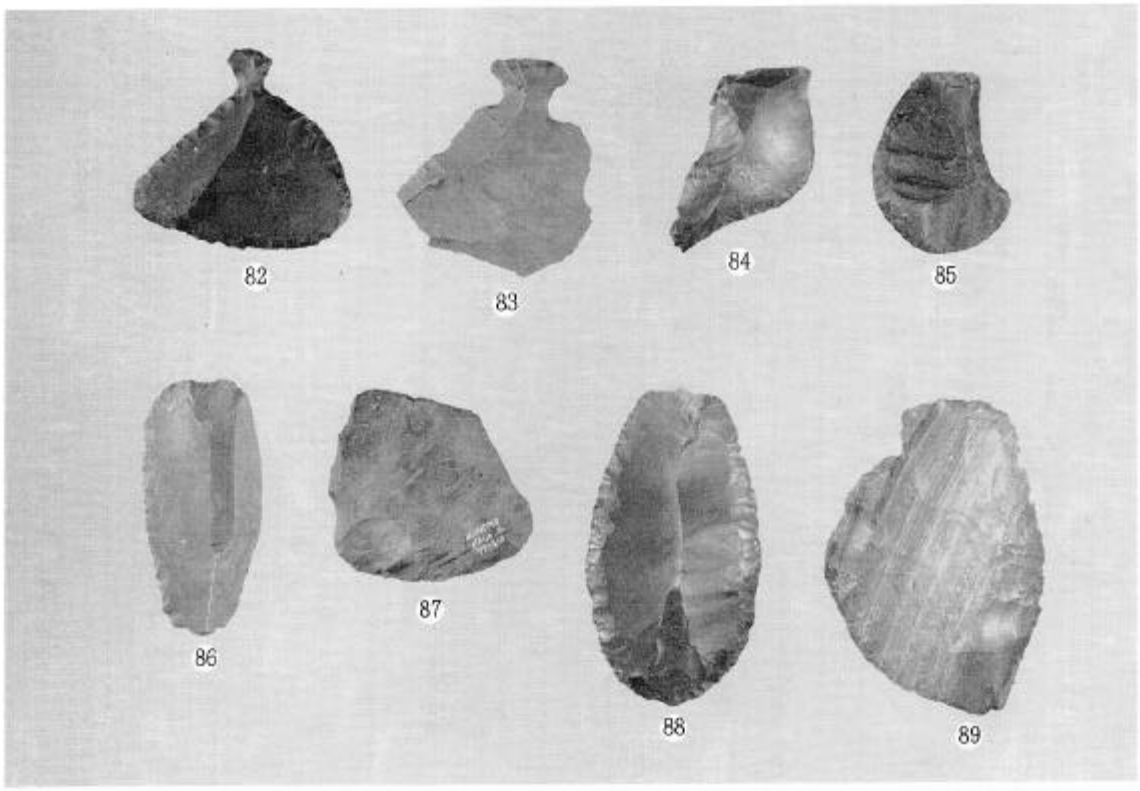
遺構外出土石器（1）



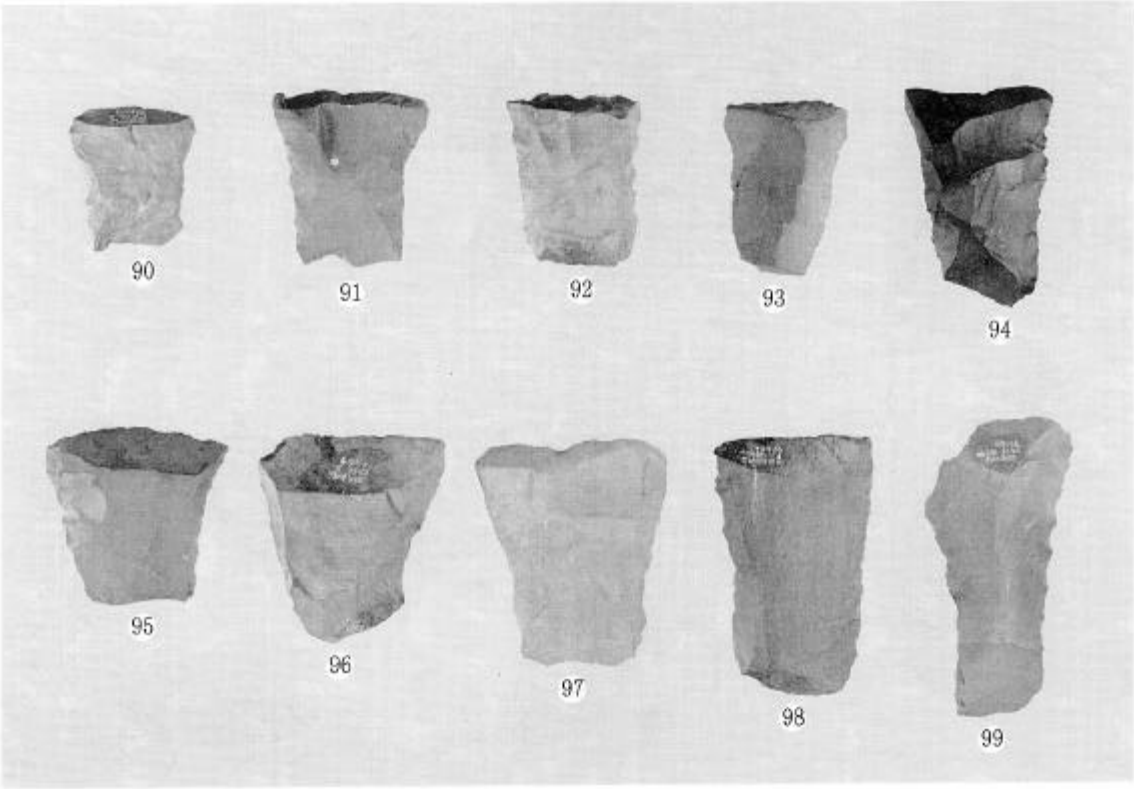


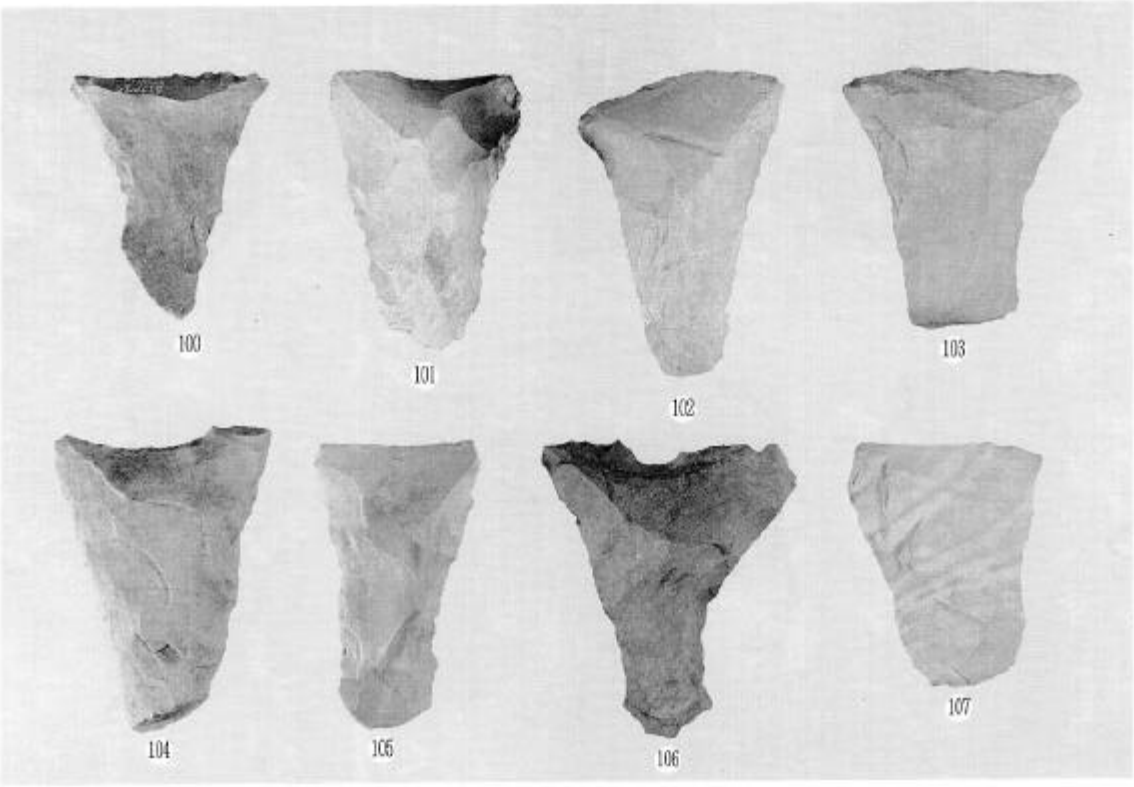
遺構外出土石器（2）



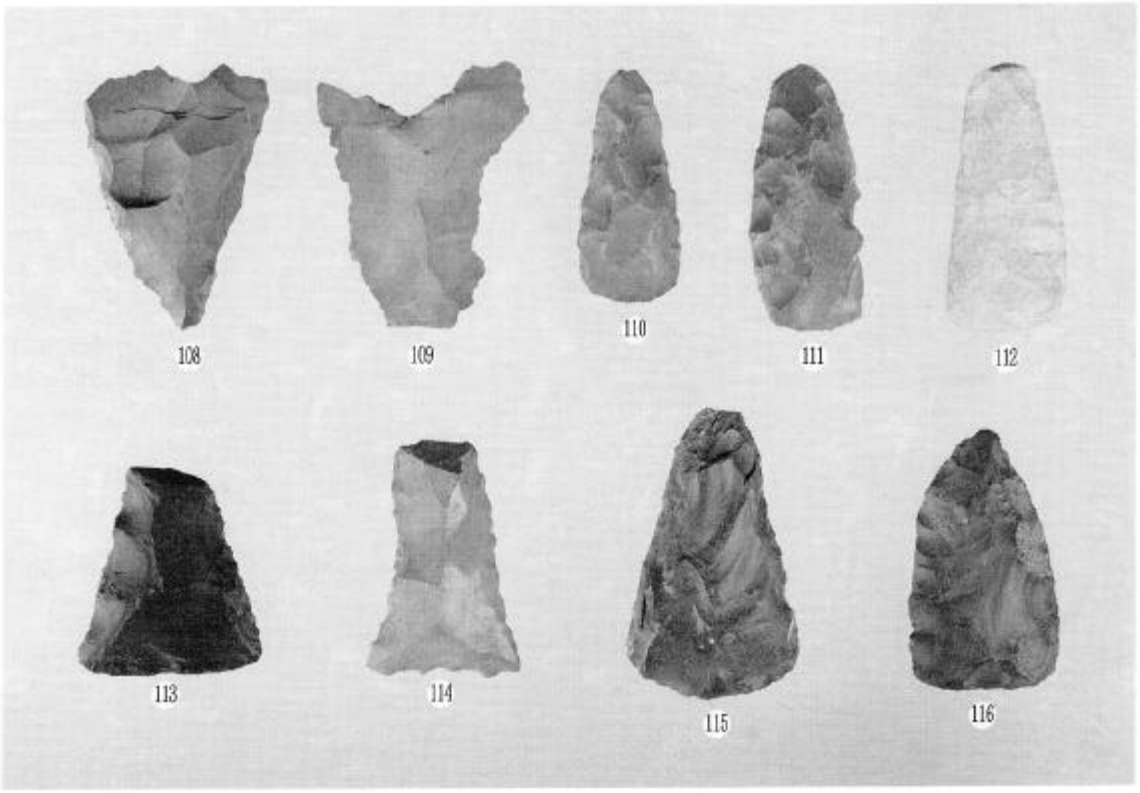


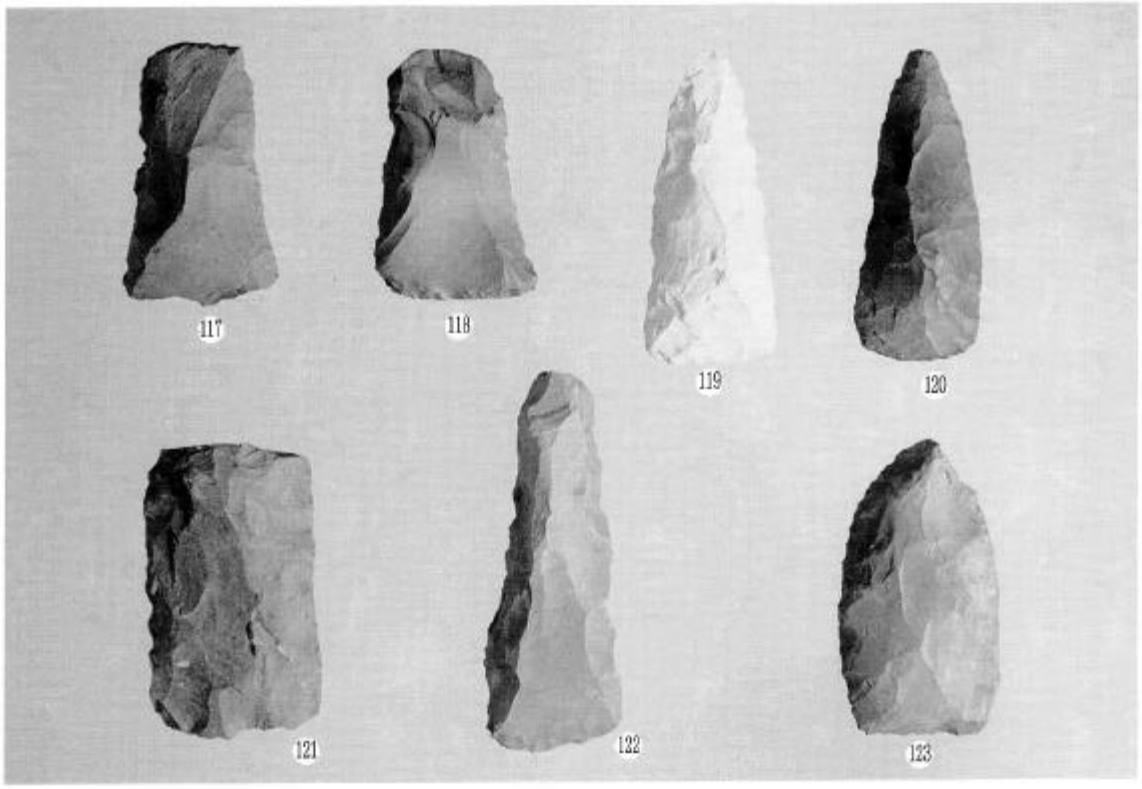
遺構外出土石器（3）





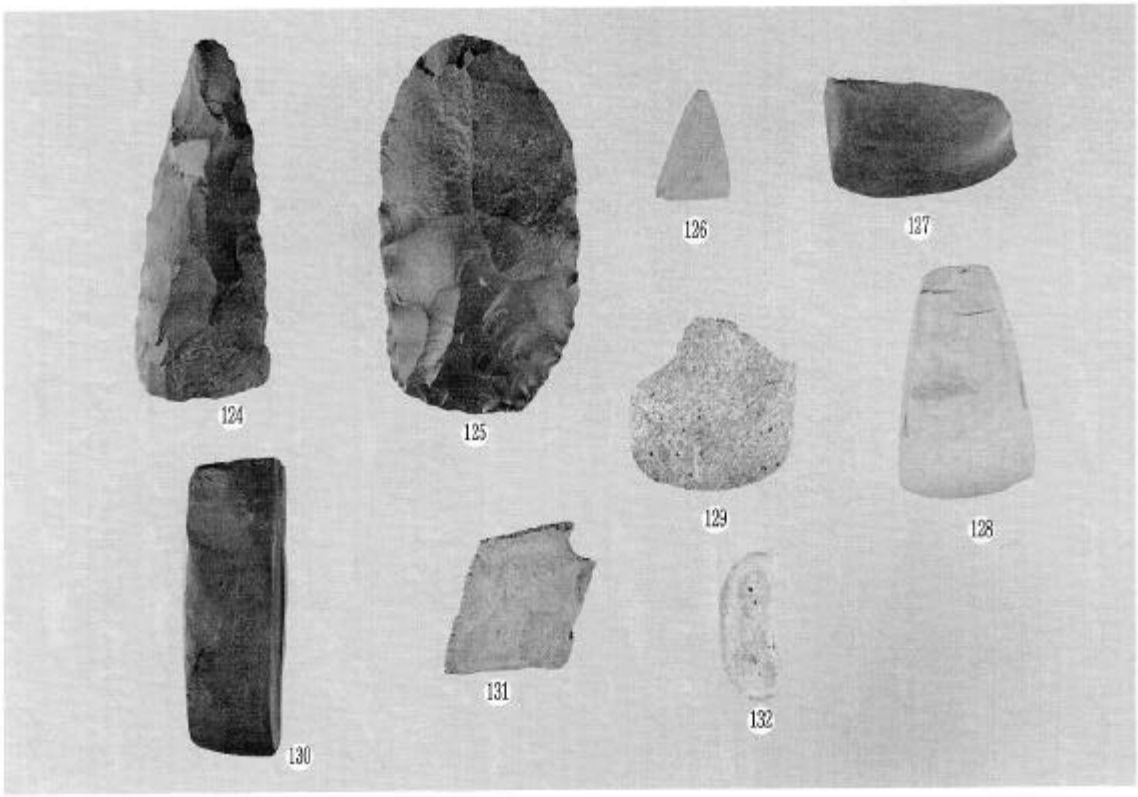
遺構外出土石器（4）



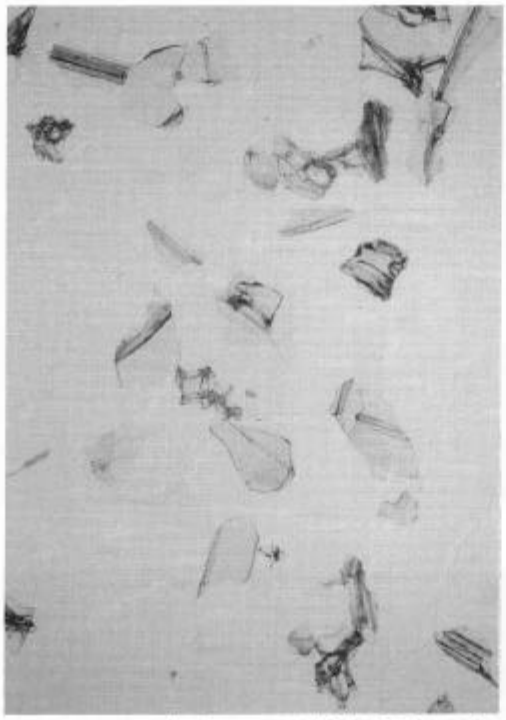


遺構外出土石器（5）

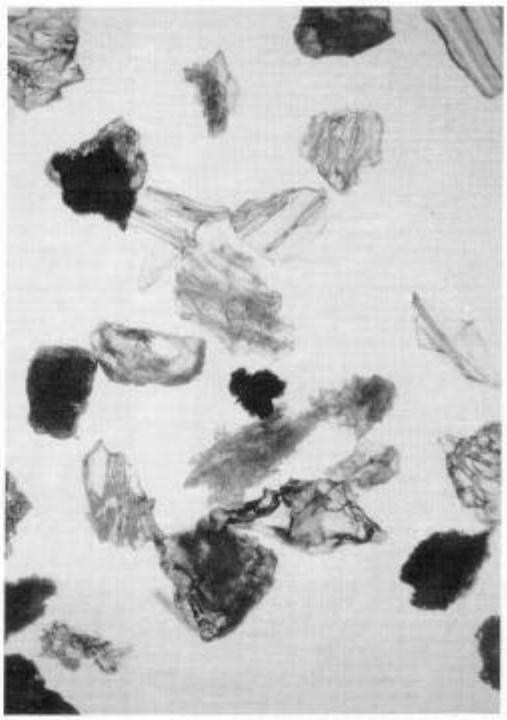
図版34



遺構外出土石器（6）



1. B-Tmの火山ガラス（試料番号30•32）



2. To-aの火山ガラス（試料番号31•33）

0.5mm
(1,2)

3

4

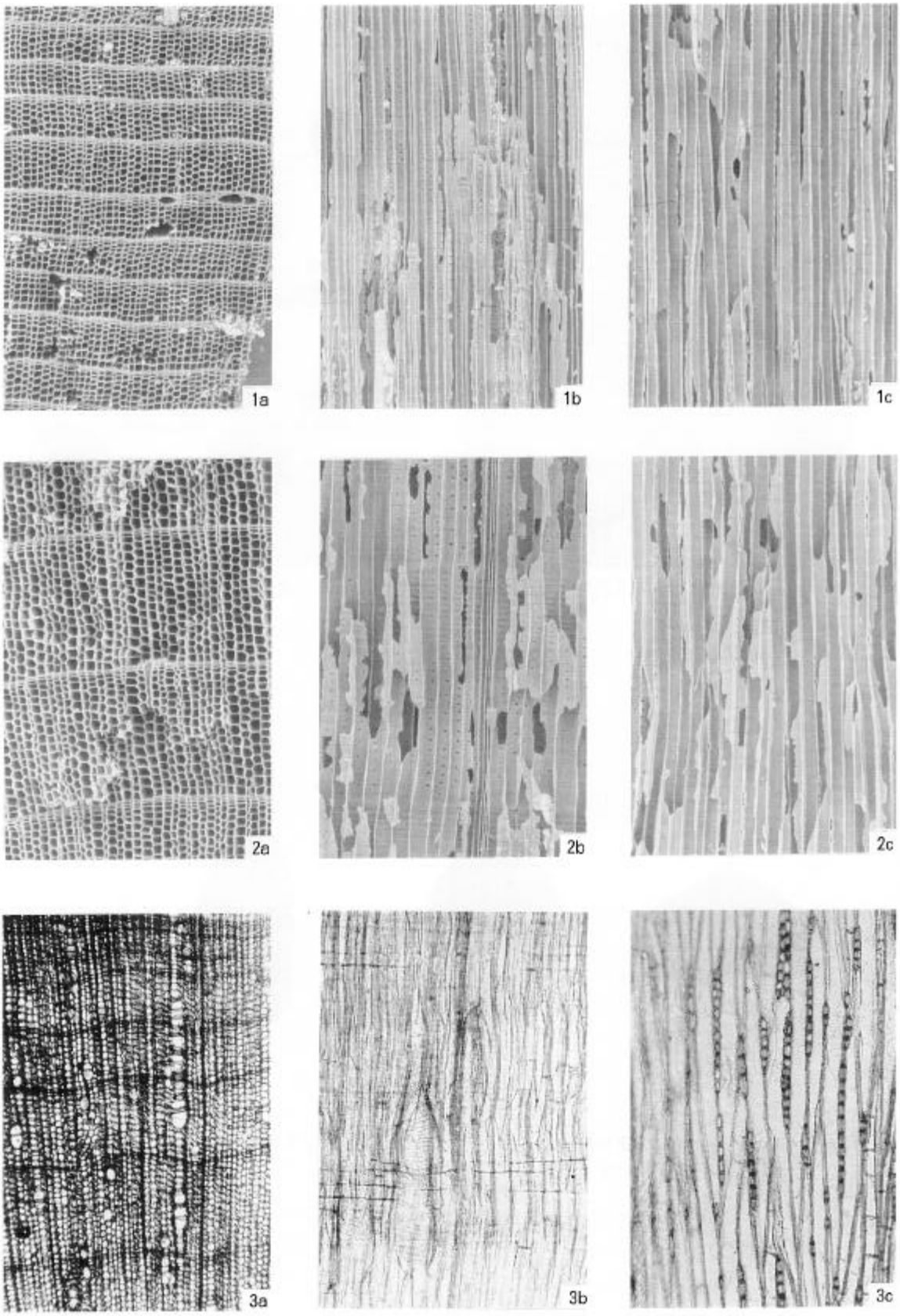
5

4mm
(3-5)

3. コナラ亜属(沢5覆土中)
4. エゴノキ属(沢5覆土中)
5. 不明(SKT20覆土中)

火山ガラス・種実遺体

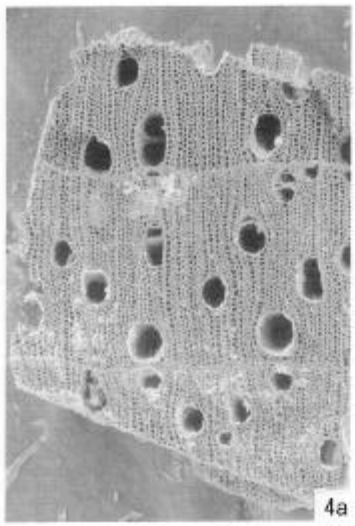
図版36

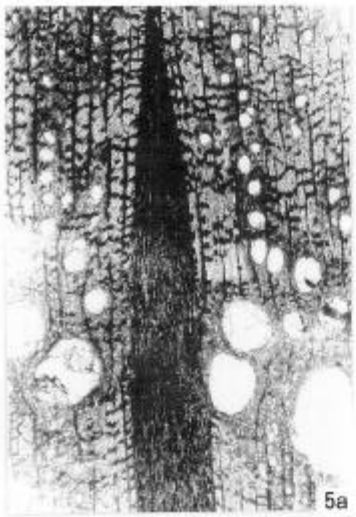


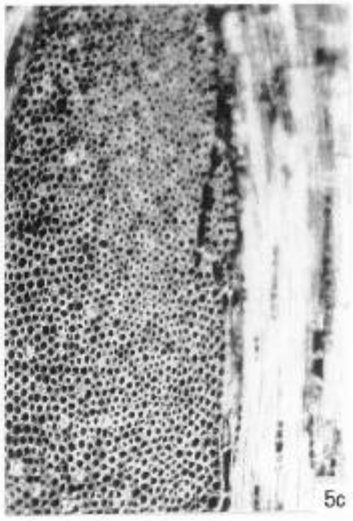
1. カラマツ属またはトウヒ属（試料番号18）
2. アスナロ属（試料番号19）
3. ハンノキ属ハンノキ亜属（試料番号21）
　a：木口，b：柾目，c：板目

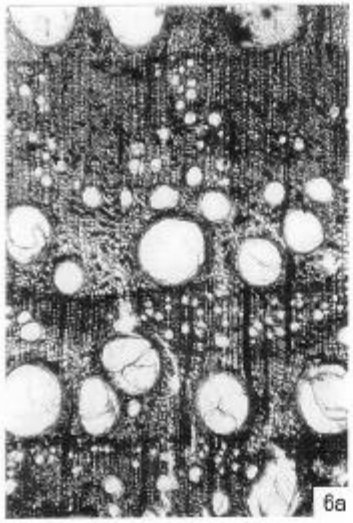
200 μm：a
200 μm：b，c

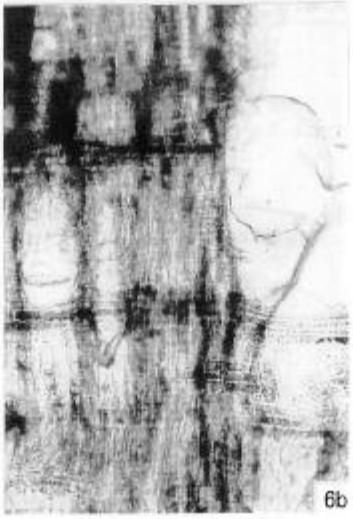
木材・炭化材（1）

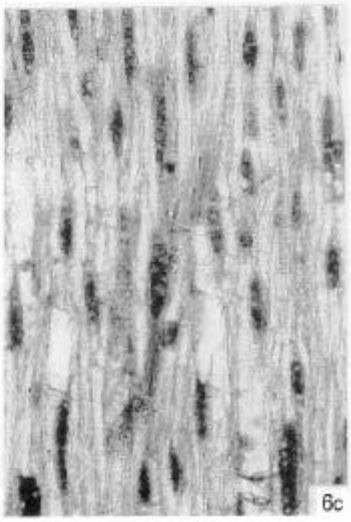








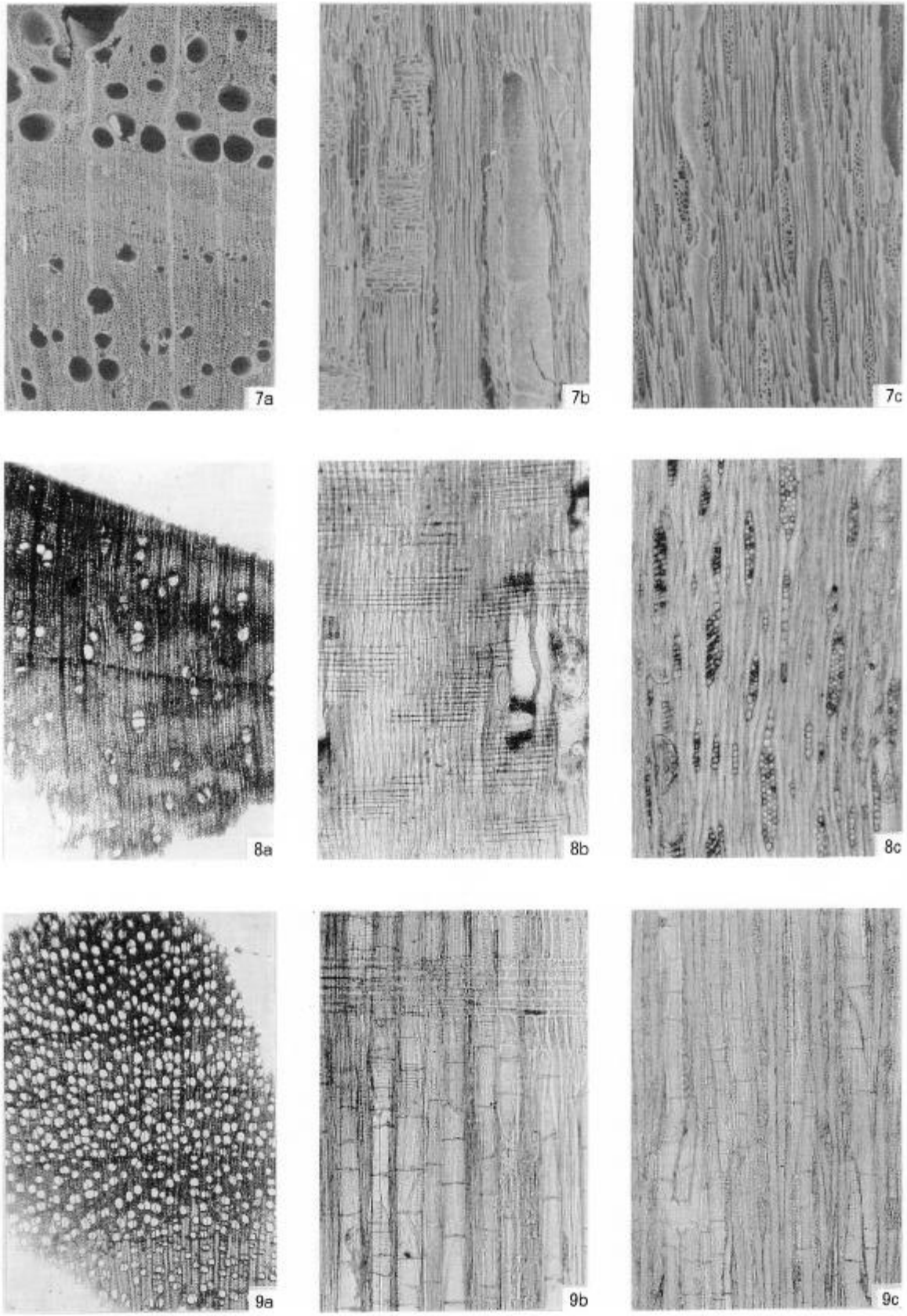




4. カバノキ属（試料番号17）
5. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号26）
6. クリ（試料番号20）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c

図版38



7. キハダ（試料番号16）
8. カエデ属（試料番号25）
9. アジサイ属（試料番号22）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c

木材・炭化材（3）

報告書抄録

ふりがな	ねげどみちしたいせき
書名	根下戸道下遺跡
副書名	大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
巻次	2
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第297集
編著者名	栗澤光男・熊谷　誠
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　　TEL 0187－69－3331
発行年月日	西暦2000年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ねげどみちした 根下戸道下	あきたけんおおだてし 秋田県大館市 ねげどしんまち 根下戸新町 ほか 69－1外	05204	－	40° 16′ 10″	140° 31′ 55″	19970526 ～ 19971106	11,400㎡	大館西道路建設事業に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根下戸道下	集落跡 狩場跡	縄文時代 早期 前期 後期 晩期	竪穴住居跡　4軒 土坑　33軒 陥し穴　10基 柱穴様ピット　111基 溝跡　2条 その他の遺構　4基	貝殻文土器 トランシェ様石器 石錘	県内最古の縄文時代早期の竪穴住居跡を1軒検出した。